農村生活改善協力のあり方に関する研究調査報告書

Ⅱ．調査報告書編（第２分冊）

平成１３年度

目　次

Ⅰ．元生活改良普及員・生活改善活動等に関するインタビュー
１．東京
２．岩手
３．愛媛
４．宮崎
５．山口
６．鹿児島
７．香川

Ⅱ．生活改良普及員研修に関する調査
１．国際協力事業団（ＪＩＣＡ）
２．カラモジア
３．オイスカ
４．ＪＶＣ

Ⅲ．施設見学
１．生活技術研修館
２．昭和館
３．昭和の暮らし博物館

Ⅳ．その他
１．研究会・講習会

Ⅰ．元生活改良普及員・生活改善活動等に関するインタビュー

【東京－１３－１】
場　所：ＪＩＣＡ農業開発部
日　時：平成１３年４月２７日（金）午後６:３０～１０:００
面会者：堀池欣子（社団法人農山漁村女性・生活活動支援協会　参与）
調査者：佐藤（寛）、水野、宗像、池野、矢敷、小林、関
担　当：関なおみ

●講演者のプロフィール
　昭和22年に19歳で教員（15年間　香川大学付属高校→中学校）米国からの視察団が全国を巡回し、香川にも教育学の話をしに来た。この影響で考える生徒を育てるという方法を行っていたが受験教育との整合性が上手くいかなかった（昭和37年からティーチングマシーンが導入され始めた）。昭和35年から普及員を始め、農水省にきたら、文部省が出来なかった「考える農民を育てる」を行っているので面白いなあと思った。

●農水省に入った経緯
　夫が東京出張になり上京。香川大学の先生の声かけと文部省からの情報で、農水省生活改善課で人を募集していると言われ、課長（山本松代）面接ですぐに決まった。
普及のエキスパートを育てるという方針で教え込まれた。「この人を焼き直してくれ」と課長が梅根悟先生、浜田陽一郎先生に頼んでくれたので、東京教育大に通った。水上元子（元農水省生活技術館長、農村生活総合研究センター元研究部長、セイロン、デアフアで日本最初の農村開発を行ったひとり）にグループ育成を学んだ。

●普及員になってからの活動
　役所の人間にはなかなかなじみのない理論だったので、後任が続かなかった。しかし残さなければならないと思い、色々な本を作った（「生活改善普及員の研修のてびき」を専技さんと作った）。
生活を改善するということを考えていない人（他の事は色々考えている）に考えてもらうことが「考える農民」である。61年に退職。

●農水省で生活改善が始まった経緯
　農水省には女の人で英語が分かる課長がいないとGHQに指導された→山本松代（初代生活改善課長）が文部省にいて家政学の担当だったのでGHQは農水省へ引き抜き生活改善課長として普及法の中核とした。
　アメリカへ勉強するように行かされた（若い人をピックアップしてアメリカの農家へ派

遣、水上さん（現杉並在住）も行かされた）。しかしアメリカでは問題解決思考は入っていなかった（講義もなく、活動事例書のみ）。日本の方が緻密だった。手法は現地から日本人が独自に学んだ（ケーススタディーから学ぶ）。
山本課長時代、「よりよい生活の当面目標」を局長通達で出した（そうでないと課長が移動するとともに消えてしまうので推進方策として位置付けた）。
　羽田誠一郎（農水省）が普及員を増やせといったら、鼻の下が長いのではないかと言われた。
農業普及論　アメリカ大使館の前　三会堂ビル（三会堂ビル、大日本農会、大日本林業会、大日本水産会がある）（林業農業漁業）７階に農業普及協会がある

●生活改善運動の歴史
　GHQの指導がある前から、昭和初期の「農村恐慌」などで農村は困っており、心ある人が農村改善活動を始めていた。→下地があった（今和次郎（早稲田大学元教授）　丸岡秀子など→農水では物足りなかった）。
　農地改革で土地なし農民が日本にはいない→だからこそ個人の経営の問題が大きい

●昭和28年出版「考える農民」(以下その内容)
　農業経営が下手な人は回転に負けてしまう　東京の農家は普及員が逃げ出すほど技術も経営能力も高かった（例：千葉県に見学→技術は東京が高いが千葉が出荷したものがどのように東京に流れてくるのかを知りたいからと言った。動線に無駄がないつくり。どのようなものが小料理屋で売れるか、朝取れるものの方が高く売れるなど調査している。天気の情報収集→キティ台風の頃、台風がくるというのをいち早く知ると急いで苗を抜いて生け花にしておいて綺麗なナスやキュウリを売り、抜いた所には他の白菜などを蒔いてこもを被せるなどしておき他の人より早く大きくする）。他の職業で20円ぐらいで暮らせる時代に30万ぐらい稼いでいた。
　これらの知恵はいかに強い農業経営者を育てるかということが昔にも行われていたということがわかる（今の普及員に求められている指導方法を既に知っている）。
　田舎でも同じ。途上国でも同様で、情報や交通網が発達している所の農民と僻地の農民は異なる（貧富の差が激しい）→家庭経営、子育ても同様である。
このような格差をなくすことが普及事業ではないか（お互いに手を繋いでボトムアップしないといい地域いい国にならない）。

●まとまりのある地域へ
　東京の農家は素晴らしいが、集団意識がないのが問題である。
１．個人的には充実した農業経営者として成長しても集団社会的思考が足りない。

２．普及の理念であるボトムアップ（10聞いても１しか分からないような人も一緒に手を繋いで活動を行おう）。

農村は農村外からの悪影響が大きい（農村離脱、兼業など）。

30年間は農地を売らない→その間に別の事業に手を出してしまって失敗した人が売らざるを得なくなってしまう（終戦後からそのような工業化の影響があった）。

東京へ地下鉄を作りに出稼ぎに行ったなどと隣同士で腹を探りあう。大根を作るのが上手い地域から来た人の畑を夜中にこっそり覗きに来るなど（ちゃんと言ってくれれば教えるのに）。

→個人脱出型　自己完結型から近隣社会との協力　悪循環を切り放つ　集落協定など

●健康モデル事業

・岩手県（昭和50年葛巻町　隣の集落に行くまでに谷を一つ超えなければならない）での例

　飲み屋がないからある農家が飲み屋の役をやる。その地域で自分一人だけが飲まないわけにはいかないという悪循環→医者・保健所と組んで健康診断車を入れて行った。経営主は自分が病気のレッテルを張られるのがいやだから健康診断を受けない。普及員が妻を説得してどうにかして経営者に診断を受けさせたが、これが感謝された（健康指導で大豆とマグロだけを調味料を少なくして食べ、運動するようにと指導され、糖尿病と高血圧が改善した）。

　医師の診断をどう実行するのか→健康生活設計書を作る（保健婦、医師とともに町村として健康を守る活動を行う）。

・広島県生産団地(世羅幸水農園)の事例（国営開発事業で幸水なしを初めて作った団地1979年頃の「人間尊重農園」　神田幹夫より）

　農家を訪問したところ、皆顔色が悪かった（自分の健康のことなど考えられないほど忙しかった）→健康調査へ

　何時間寝ているかの調査（８時間以上寝なければならない）。

　休憩時間をとっているかの調査（特に女性が休んでいない。男性の接待を行っているから）。

　農村に売りに来るものしか買えないために蛋白質が不足している。

　農民に「労働生産が一番大切なのに休めとは何だ」と言われたが、ついに２人死亡し24戸中22戸に→普及活動の導入→健康診断の結果一番弱い2人が死んだがそれ以外の人も三角形の原理で体を壊しており、村全体の問題と理解された→継続的な健康診断制度を導入した　生活教室を支援する以外の補助活動はとらなかった。

　矢口光子さん（生活改善課２代目課長、医師、農村生活総合研究センターを設立した。日本の農村計画論をつくりだした先覚者）→権力やお金で誘導するのではなく教育的な、

農家の人が納得して自発的に行われるようにするのが農業生活改善であると言った。
　学校の先生より普及員のほうが難しい。聞く気のある人だけが来るわけではないから。
　畦道が勝負。農家の人に「健康でも金が儲からなければ何にもならない。丈夫で金がないことほどつまらないことはない」と言われた。

Q農村における教育について、その手法はどのように学んだのか？（質問者：佐藤）
教育手法の２種類
１．系統的学習（受験の詰め込み式）
２．問題解決学習　想像力を育てる力（岩波ブックレット）問題解決的思考　デュイ「学校と社会」（例：子どもが頭が良くても父母の仲が悪かったら、それが気になって勉強ができない）
　農水普及部が考える農民を育てるという方法に最も近い教育方法はないかと探して梅根悟(元和光大学学長)さんを引っ張ってきた（どうやったら考えるようになるかという手法が分からなかったから→理念を考える人と手法を考える人は違った）特に大人を変えるのは難しい。
・秩父のイチゴの事例
　秩父イチゴを作りたい→70戸の品質管理→皆がばらばらに出荷していてはいけない。
誰のイチゴが一番うまいかを調査しリーダーにする→70戸の農家中参加したくないと言う農家がある（農協からの肥料は土に合わないと言い出す人など）。栽培体系をあわせるのが大変難しい。
愛知のイチジク（自分たち自身で審査を行う）、京都のサヤインゲン（女性グループ）なども同様→集団社会的思考が大切。

Qどうやって農民の思考を転換させるのか？（質問者：佐藤）
　実際手法がない。７年高校で教鞭(家庭科)をとってから中学校へ行ったら大変叩かれた（中学１年生にどうやってカレーライスを教えるか、指導上の留意点が初めは５行しか書けなかったのが２ページ書けるようになった）ご飯を勝手に炊かせて失敗させてみろといわれた。他の先生が助けてくれた。他の先生が名人芸のように見えた（社会の先生など参加型の授業を行うので見に来るようにと言われた）→その技術と方法論を身に付けてから農水に行った。
　問題解決学習のプロセス　普及方法の原理　生産的思考的　５段階理論　物知り農民ではだめ。自ら実行する農民へ。

Q普及員はどんな人がなっていたか？（質問者：佐藤）
　未亡人、地主の娘、教員など　昭和18～19年未亡人になってしまった人で勉強をしたい

人を募った。お茶大の前身の特設という所で２年間で教員になれる制度があり職業機会があった）補完研修を行ったが、農家の婦人、経営者の身になって考えるということをやらせた（相手に考えさせるということは、自分がその倍考えなければならない）

Q答えがない生活改善をどうしていったらいいか？（質問者：小林）

理論的思考（５段階３層構造思考）が大切である→Q３層５段階が失敗した事例はないのか？

待つことが出来ずに教えてしまう、３層５段階を理解していないなど。

途上国での援助のあり方２タイプ

１．正解がもともとある

２．もともと正解を設定せずに考えさせる　どのような方向に進むのかも分からない　何が正解かも分からない

・インドネシア　小田島専門家（岩手東和町在住）の農業改良普及の事例

英語が出来なかったがいい人だったので農民に好かれていた。

米を自給出来なかった為政府が稲作技術を浸透させるという方針を出した（受験の浸透学習と同じだった）現地で住民に何がしたいのかと尋ねたら、野菜作り、野菜料理をやりたいといっていたのに、役人が来たとたん、口々に稲作をやりたいといった→本音を引き出すのは難しい。

Q考える能力は人によって差がある　考えられない人もいるのではないか（質問者：小林）

考えられない人はいないはず。チンパンジーでも出来る。その人にあった考え方を行う。共同炊事の事例（釜がない、どの釜が使えるか、給食や村の大釜はどうかなど）。受験では時間の制約があるので間に合わないが、農業には受験がないから考える学習ができる。

Q生活改善普及員のできる人とできない人は事前にわかるのか？

現場を見ないとその生改さんが出来るかどうかは分からない。グループの審査をしていたからグループを見ればすぐ分かる。生き生きと口々にいうグループはできている。黙って会長に頼んでしまうグループはだめ。

広島のグループの発表を見たら涙が出てきた（ちゃんと３層５段階ができていた）。長野の発表の時いい発表に投票させたら３層５段階になっているものが１位になった。３層５段階とは問題解決型思考を科学的に分析したらこうなったという分析結果に過ぎない。やたらに生徒に考えさせることばかり考えて、質問法ばかり考えている方法だけをやっていてもだめ。人間の思考方法の流れにぴたっと合っている。指導者がそれを理解しているか否かである。

全国の専技が年に１回研修に集まってくると色々な人が来るあからさまに講義が役に立

たないと言う人もいた（田中さん）。
・京都の田中トモコさんの事例
　未亡人。京都から農家へ嫁に行った。生改になって本を沢山読んで農家の心をとらえるようになった。ジュガクシズコ　(寿岳文章？の妻、彼女の岩波新書がある)
封建的な地方で活動された。姑に反対してはいけない。徹底した問題解決学習だった。
いやなことはいやと言え。でも上手に言わなければだめだと考えさせるのが３層５段階である。
農家の人の発言を大切にする。会合をやっているときは一切メモをとらないが、終わったとたんに手帳に書いてゆく。普及所に入ってからどうしてあの人があのような発言をしたのかを考える。
・愛知県、石川県の事例
　先生になったがすぐに奥様になってしまった人など頭のいい人が多かった。成人だから基礎調理から教えてはいけないと思っていたら怒られた。
①炊き込みご飯の実験
　調味料を醤油のみにした場合と３種類ぐらい入れた場合とでどう違うか実験させる。基本的な量の測定をしなければならない。表面張力のことなども教える。内職の日当をふいにしてしまっても出る価値があるといわれた。その中からグループができる。
②今、村で一番問題になっていることを話し合わせた→嫁と姑の問題
　誰が司会したらいいのか。慣れている年の人がいいという意見と、若い人に考えてもらわなければならない問題だから若い人がいいという意見があり決めるのに40分かかったがそれが大変よかった）→臨月の人が司会者になった（話が上手いうことで　臨月なので周囲がサポートした）これが合意形成である（何の圧力もかけずに行われること）。
嫁と姑は120％話し合ったほうがいいという意見と60％ぐらいでいいという意見で分かれて半日ぐらい話し合った

・生活改善運動と政治
　生活改善の人が政治にタッチするのはタブーであったが、政策立案に女性も参加するのが当然というように転換し、（メキシコ会議）村会議長になっている。長野が最も女性の政治参加率が多い。
　生活改善グループが出来るまで、農家の女性が60人ぐらいの前で発言することができなかった（そのような機会がなかったから）。

・現代の生活改善普及の問題点
普及員と農家の人の差がない（大卒の妻が農家にいっぱいいる）。
だからこそ３層５段階という手の内を見せて教えるべき（家庭生活でも役立つから）。

・国際協力に生活改善技術は役立つのか
日本の生活改善の勉強ばかりしても協力隊の途上国で実際役に立つのかという意見があった。
PCMの研修は納得がいかない。水が無い→水があればよい、という単純なひっくり返しが許せない。その間がいかに難しいかということを分かっていない。単に予算をとる手段でしかないのではないか（例：フィリピン、ボホールの事例　女性グループ育成のための調査に行かされた時、女性の授産所を立てて欲しいと言われたがどうしてその施設を作るのかという考える思考がなかった）。

・生活改善活動への社会学者の参入
　農村は教育学だけではだめ。社会学が重要（福武直／農村社会学の先学、梅根悟先生を入れていた。松原次郎が福武の弟子で大学院の頃からお付き合いがあった。コミュニティーデベロップメントなど)
生活改善コンクール（毎日新聞社）松原次郎が審査員（ＮＨＫなどに出るようになって忙しくなったのではといったら、生活改善ほど面白いものはないと言われた）
生活改善はこれからの事なのに社会学とは過去にあるものを分析するのはなぜかと訊いたら「僕たちには政策要請がないから」と言われた。
コミュニティーオーガニゼイションが流行った（「現代日本の社会」共働きだったから姑の面倒を見るのが大変だし本を読む暇がなかったが松原先生、蓮見音彦（元学芸大学学長）先生のところは読んだ）
社会学者が政策決定にコミットしていたという事実があまり知られていない

・ＫＪ法について
　一人で考えるには３層５段階はいいが、集団思考にのせるためにはKJ法がよい（KJ法は人類学の調査整理方法のひとつ、現在では数量化４類という多変量解析でかなり近似した結果が得られる）
川喜多二郎（東京工業大学人類学元教授。ネパール研究で有名。中公新書「発想法」）の研修を受けないでKJ法を研修に取り入れたら奥さんに怒られた→川喜多二郎に直接話をし研修費は40万しかないのだが、と言ったら話に来いといわれて１時間30分話してきた→日本の農村にとっても重要だからといって、トレーナーを４人連れて来てくれた
50才台のおばちゃんが集まってたくさんの議題が出るというのは素晴らしい
しかしＫＪ法には限界がある→情念でカードとカードをつなげろ、理屈でないと言われた（時間がかかる。１つの問題を崩して解決するのに４日もかかってしまうから、いい所だけをもらってカード法を取り入れた）

Ｑ生活改善初期のラジオ放送講座は全国共通だったのか、地方毎だったのか？（質問者：佐藤）
ＮＨＫ（昭和40年以前）はその地域に生活改善グループがあるかどうか聞いて、あるところに取材に言った（生活改善グループがないと取材できないから）。
農林放送をとおしてＮＨＫに連携を持っていた（普及活動そのものをとった）。12本番組を100本近くとった。ラジオはずっと続いていたはず。週に１回普及部といった程度（内容を課長が決める）。
新潟は先進的な教育活動をしていた。ラジオも県単

●資料の説明
牧町Ｐ８の事例
　濃密指導といってもあまり頻繁に行くと嫌われる。月１回行くときの質問を的確にしなければならない（相手の気持ちにとって的確でなければならない）。

バングラデシュの事例　Ｐ126
　山口県の人が集まって自分たち自身の目標を作らせたものと同じ理念。具体的な目標を立てさせる。例：台所を10分間掃除させる→自分の農業を合理化するというように、小さいテーマから大きいテーマに発展させていくことが大切　（行政の活動と実際目標は異なる）。
協力隊の人にもこのようなものをつくらせるよう指導している。

課題計画の作成　Ｐ42
　農家の主婦が過労気味であり、これを防ぐためにはどうしたらいいのか。どんな実情があるのかをあげてもらう（大きな実情と小さな実情などをあげる）。どういうことをやらせればいいのかなどはこれから先である（例：生活時間を家族で作る→夫姑との時間分担→食事の準備・栄養改善→30分早く帰る運動　例：我が家のもので保存食　コールドチェーンなどの整備　町の冷凍食品が買えるように）。
成人教育は難しい。今日来た人がまた来るとは限らないから、その指導者に惚れた人が集まってくるというのがグループ形成の元である→固定しつつあるグループに問いかけ、課題計画を行う→課題の掘り下げ→小課題は70以上→これを行っておけば他の問題でもひっくり返してどこからでも行ける　ディスカッションの中から次の課題に繋げる為の有効発言を拾い出す。
生活改善グループを流行にしなければならない。ちまちまグループだけでやっていてはいけない。やっていることを村に流して世論を喚起する。講座と会議をやってお祭り騒ぎを

する。しかし大事なのは一人一人がじっくり考えること（濃密指導　足がかり集団の育成）でも1から4まで行かないと成功しない。
例：ボホールは演劇（千葉大学木下勇助教授とフィリピン教育演劇協会PETAが実施）が入って楽しくやった（問題解決手法のひとつである）
しかしフィリピン政府職員はミーティングの転がし方が分かっていない。途上国はレクチャー型が好きだしそれ以外のものが怖い（勉強していないと分からないから）。
生活改善普及員をおいていない国もたくさんある。えらい人にいくらレクチャーしても仕方ない。
フィールドワークのできる職員をおくこと（目的は何でもよい）。

Ｐ３　生活改善普事業の順序
これからは日本がやってきたことを英訳して世界にする時代である。

【東京－１３－２】
場　所：財団法人　日本食生活協会（東京都千代田区有楽町 2―2－1、ﾗｸﾁｮｳﾋﾞﾙ）
日　時：平成１３年５月２日（水）午後３：００～５：００
面会者：松谷満子（財団法人日本食生活協会　会長）
調査者：佐藤（寛）、小林、矢敷、西田、水野
担　当：水野正己

１　雰囲気・注意事項
・全般的に、インタビューは早口で一方的にしゃべりまくられた格好であった。
・数値などは印刷物・刊行資料等により確認した上で、利用する必要がある。また、事実経過についても、当日拝借した同協会の冊子・印刷資料により再吟味することが不可欠である。（水野）

２　松谷氏の略歴
・栄養関係の学校を出て、昭和22（1947）～31（1936）年まで山口県庁に勤務。
・その後、厚生省に引き抜かれた。
・協会に移り、現在は会長。
・協会の設立当初からの人物であることは、間違いないようである。
・現在、同協会の歩みを執筆中である。未完成で、早く仕上げて英語にして外国の要人の目にふれるようするのだということが、何度も口を突いてでた。

２　日本食生活協会の概要
・1955(昭和30)年に、厚生省の外郭団体として設立された。
・協会の設立時には、南喜一（国策パルプ）を会長にいただき、また役員には政界、財界、官界の大物を迎えて、「豪華版」で発足した。（このことを、現会長は誇らしげに語った。
・協会には、製パン業界、食パン協会なども巻きこんであるようだ。
・時の厚生省に、大磯敏雄氏あり。同氏は京大出身で、同省栄養課長として、戦後の栄養行政に携わり、国民栄養調査（第１回は、1947年、昭和22年）を実施、推進した。（同氏の「日本における栄養改善」は入手済み。なお、1985年に『栄養改善の道』（医歯薬出版）もあるが、未入手。厚生労働省図書館に所蔵されていることはわかっている。）

３　キッチンカー構想
・協会の設立当初は、キッチンカーによる食生活、栄養改善の事業に取り組んだ。事業は、アメリカの援助に依存したが、キッチンカーのアイデアそのものは日本側のものという。

・米農務省からの援助資金に基づいて、米国オレゴン州小麦栽培者協会の協力を得て、粉食を普及させ、もって国民の栄養改善を図る。普及のやり方は、食事のメニューとして小麦粉を用いた一品を献立に加えることで、後にＮＨＫの番組で批判されるようになった米消費の低下の責任を負わされるような筋合いはない。ＮＨＫはここへも取材にきたが、筋違いの批判だとした。（的外れの批判であり、極めて心外であるといった感じがありありとしていた。）
・これはPL480号（PL：公法）による余剰穀物の処理の一環としての食料援助であり、確かに粉食を奨励した。
・終戦直後は、食糧難であった。1960（昭和35）年でも、結核、肺炎による死亡率が高く、また乳幼児死亡率も高かった。

4　キッチンカー全国へ

・東京都の都バスの古い車両の払い下げを受けた。この古い都バスを改造してキッチンカーのモデルをつくった。キッチンカーは、赤い色の洒落たボディだった。なお、正式名称は「栄養改善指導車」といった。内装設備が重たく、当時は道路事情も悪かった為、山村地方では移動が大変だった。大型車が通れない道もあり、中型の車両も手当てした。
・最初に8台を調達し、その後にアメリカ大豆協会の援助を得て4台増えて、合計12台で日本全国を回った。キッチンカー1台が1県あたり2ヵ月ずつ巡回する計算で、巡回表も作った。
・これが、昭和31年のことで、日比谷公園で出陣式をやった。その時の写真が協会の冊子の表紙写真だ。
・キッチンカー1台につき、運転手1名と、栄養士2名の割合だった。彼らの人件費、ガソリン代は当協会で賄った。
・当時は、市民が集まる場所として、公民館、集会所、改善センター、コミセン（コミィニティ・センター）などは無く、また人々は集まる場所に着ていく着物も持っていなかったので、こちらからバスを仕立てて出かけて行くことにしたのだった。
・都会でも、田舎でも人がたくさん集まった。
・中日新聞が大きく取り上げてくれた。
・キッチンカーは、賀屋会長時代に補助金で台数を増やし、110台に達した。
・キッチンカーによる事業は4年間実施した。協会では、キッチンカーを4台残して、それ以降の事業に利用した。
・その後、県によっては独自にキッチンカーをやる所もあった。岡山、千葉などが、そうだ。岡山県では、婦人による募金でキッチンカーを手当てしたという。千葉県には、協会から要らなくなったキッチンカーを4台贈呈した。

5　キッチンカーのメニュー

・事業開始当時の日本人の食事は、米中心（偏重）、塩分カットが課題とされていた。
・献立には、ちょっとモダンなものを考えた。煮るか、焼くか、生かといった程度の料理法しか知らない状態だった。
・炒めもの、卵の薄焼き、キンピラゴボウ、うどん（皿に盛って出すもの、焼きうどんか？油の摂取を増やす意図から）、味付けは日本風にした。
・粉食（小麦粉）を必ず一品入れた。また大豆も同様。麺類、蒸しパン、納豆チャーハン、らっきょうのカレー炒めなどを広めた。
・油は、それ以前も使われていたが、摂取量を増やすことや、油は酸化するので古い油を使用しないことなど、油脂の取り扱い方を教えた。
・これと合わせて、料理道具として、フライパンおよび中華鍋、炒める調理法の普及に一役買った。
・鯨肉が勧められていた時代だった。
・キッチンカーでは、調理用燃料はプロパンガスを用いた。家庭では、プロパンガスはまだ普及していなかったが、コンロ（炭、石油）はあり、それで調理をしていたので、問題はなかった（炊飯は薪のカマドであっても）。
・地域にあったメニューになるよう、ひと工夫して普及に努めた。このため、献立に苦労した。地域の栄養士が献立づくりをした。
・教材がなかったので、しおりを配布した。（『栄養改善指導車のしおり』の第１号は、昭和31（1956）年11月30日の刊行となっている。）
・当時の農家には、本といえば『家の光』ぐらいしかなかった。
・キッチンカーで料理講習する時の人集めは、保健所、市町村役場に依頼した。ポスターで事前に知らせた。
・一回に1時間30分ぐらいで、一日に午前と午後に一回ずつ料理講習をした。遠隔地の場合は（移動に時間がかかり）、一日に一回のこともあった。講習では、話しは短くした。出来上がった料理は、集まった人々に少しずつ振舞った。
・当時の田舎の人は、素朴で、新しい食べ物や料理に関心が高く、「あこがれ」を持って集まった。料理を学習する場が無かった。目に見えるものの威力があった。松谷会長自身、かつて秩父の山村で餃子の講習をしたことがあるという。男達が町で餃子という美味なものを食べてきたので、主婦たちは家でも作りたいと思ったが、どうして作ればよいのか分からなかったという。
・講習した献立の食材をその日に皆が買い求めるので、田舎の商店ではその食材がすぐに売り切れになった。だから、商店からは、前もって献立を教えてくれという要望が出てきた。

6　キッチンカーとその他の事業

・キッチンカーには栄養士は乗ったが、生活改良普及員が乗ったという話は聞いたことが無い･･･末端では、どうか不明だが。人集めには、生改の協力があった可能性はある。あの人達の方が、農家に深く入っているから。密着した人間関係に基づいて行われた為、人集めには生改・農改の協力があったろう。

・保健所(地域）の栄養改善（健康）の中での食生活改善をやることになっていたので、農業増産のために農家の家庭生活の改善を担う生活改善とは全く別ものである。（強いタテ割り行政の壁、タテマエを感じさせる発言だった。）

7　交通事故

・県レベルの事業に移行してから、滋賀県で（人身）事故が1件あったが、それ以外はキッチンカーによる交通事故はなかった。

8　日本食生活協会の事業の展開

・栄養改善は、食料不足時代の協会の活動だった。1950年代は低栄養時代で、油脂類の普及、卵・油脂類の摂り方を考え、献立の組み合わせを提案した。

・キッチンカーは歴史的使命を終えた。すなわち、栄養指導や地域の栄養改善の時代は過ぎた。（これには、学校給食の普及も関係しているようだ。）

・昭和36（1961）年から、旧国鉄共済組合（国鉄本社厚生局）との共催で、協会で保持することになったキッチンカー4台を用いて、管理局単位（職員のアパートなど）に栄養指導を行った。

・キッチンカーは、やがて健康推進車へと変身した。そして、さらに推進員へ･･･。

9　食生活改善推進員

・日本の食文化の継承、地域の文化の継承と新しい食文化の創造、減塩と乳製品の普及を目指す。食とは生活そのものであり、現在のものを基盤として、それをさらに改善して行くのが使命だ。

・保健所の栄養士の研修と地域組織化。何となれば、家庭での実践の確認が大切だから。

・まず、昭和34（1959）年に食生活の地区組織の推進に着手。この地域活動は長野、宮城、岡山などで盛んに行われ、昭和42（1967）年に全国組織化が図られた。そして、昭和45（1970）年に全国大会が開かれて、食生活改善推進員の全国組織（全国食生活改善推進員団体連絡協議会、松谷満子理事長）が結成された。

10　スキムミルク普及事業

・牛乳・乳製品の普及事業に着手した。昭和55（1980）年から。雪印乳業の協力を得た。

・これに関連して、栄養新報（日本栄養新報社、恵比寿南2-9-5、荘苑ﾋﾞﾙ、715-3364、

既に廃刊）昭和55年6月5日（木）第380号に、松谷氏のアピール記事あり。この業界新聞の記事の見出しに「住民参加」の言葉有り。
・具体的には、スキムミルクを普及させた。

11　食改の全国展開
・全国に食改さんが23万人いる。本協会は、その全国連絡組織の事務所になっている。協会は、この食改を100万人にする運動に取り組んでいる。各会員が5人の仲間をつくり、食生活改善を実践する仕組みを作る。「健康21」「適性体重の維持」をキャッチフレーズにしている。
・食改は、女だけ。男は運動に巻き込むだけにする。男は、献立を400円で賄うことは考えず、料理講習と勘違いして高価な料理や酒を買いに走るからダメだ。
・食改には、現在、例えば、「ヘルスメイト推進手帳」（神奈川県食生活改善推進団体連絡協議会、平成12年度）なるものが支給されている。

12　海外からの関心
・キッチンカーは、援助を提供したアメリカの当局者からは、最も成功した事業という評価が与えられている。日本にテーマを出させて、それを実行に移し、事業として成功を収めた、という意味で。
・キッチンカーに関して、英、フィリピン、アフリカの国々から賓客の関心高く、問い合わせにきたことがある。しかし、日本の援助がないなら、（実施に移せないので）無理だというので、それっきりになっている。
・日本での経験からすれば、社会の中堅層およびボランティアが不在では、食生活改善の活動はできない。

食生活・栄養改善に関する水野のコメント

(1)大磯敏雄「日本における栄養改善」〔J.S.Ritchia、加唐勝三、長畑寿賀雄訳『食生活改善　その計画と導き方』、高陽書院、昭和29年11月30日発行、176-184ﾍﾟｰｼﾞ〕なる論文がある。同論文の180ﾍﾟｰｼﾞには、「栄養改善指導車」、すなわちキッチンカーによる移動方式の栄養改善が好評であるとする記述がある。同書の発行が昭和29年であること、および、日本食生活協会によるキッチンカー事業が開始されたのが昭和31年であることを考慮すれば、①キッチンカーによる移動式栄養改善は同協会の設立（1955年、昭和30年）以前から日本国内で行われていたことになり、②それが好評なことに勢いを得た厚生省当局が同協会を設立し、事業の全国展開を図ろうとしたのではなかったか、という疑問が湧く。大磯のこの記述が正しいとすれば、③キッチンカーはこの協会の考案によるものではないことになる。これらは、更に資料に基づいて検証すべき点であり、これらの問題に注意して以上の面接記録を読む必要がある。果たして、キッチンカー（栄養改善指導車）は誰のアイデアであったのか、またそのデビューはいつだったのか？

(2)栄養改善と一口に言っても、キッチンカーが担ったのは、社会のどのような部分＝人々であったのか、またその方法は他の部分に対するものとどのように違っていたのか、同じであったのか。明治期に入って、西洋近代の思想や行動が急いで取りいれられようとしたとき、栄養、保健、衛生分野は軍隊、警察、学校など、西洋式の制度と共に日本社会に取りこまれたのではなかったか。この論理に従えば、戦後の栄養改善・食生活改善なるものは、学校給食、病院の給食、軍隊（一時期保安隊なる名前で出ていたが、その後に自衛隊と変名）、刑務所などが対象とされた場合は、制度化された集団、成員の範囲の明確性、強制などにより、比較的速く推進されるように思われ、むしろ問題は予算、すなわちお金の話になる。そこで、安直にも援助物資である脱脂粉乳（現在は家畜飼料として用いられている）などが何のためらいもなく学童にあてがわれることになる。（あれを強制的に飲まされた世代の一人として、ここにはっきり書く。あんなまずいものはこの世にない。）ところが、一般の町内の人々や農民が対象になるや否や、栄養教育の手段的方法論が問題になってくる。かくして、高尚な理論を説明する講演会に動員する方法ではなく、見世物としての要素が強い大衆受けのする普及手段が強く求められたのではなかったか。テレビ放送は1953（昭和28）年からだが、世間一般に普及するのはもっと後のことであり、日本人の娯楽として見世物、芝居が中核をなしていた時代性を考慮すると、キッチンカーとは実に家庭婦人にとって動く紙芝居以上の、物珍しさと実利性（そして、きっとピカピカの台

所道具は羨望の的であったはずだ）を兼ね備えた娯楽教養イベントの配達車であったと言えないか。

(3)今回の聴き取りに関連して集めたり、知ったりした情報

その１：定義

食生活改善：食文化の推進、食習慣の改善

栄養改善：摂取栄養素の量と構成を望ましい状態に変化させること

（注）以上は、学問的に検証されたものではないので、鵜呑みにしないで下さい。差し当たりこういうことではないのか、という程度の定義であることに注意。

その２：英訳

生活改善：Home Improvement

Rural Life Improvementは如何にも農村生活改善の直訳で面白くない。ホームインプルーブメントなら、ジェンダーを考慮すれば、生活改善事業で何ゆえ農家の主婦を捉えようとしたかがより明確に理解できる。

その３：関連資料

アメリカ農務省にかつて栄養・生活改善局が設けられていた。何年から何年まで存在していて、どんな政策をやっていたのかはいまだ未調査の為、不明である。連中が何をやっていたのか、堀家さんが熱っぽく語った問題解決学習をやっていたのでしょうか。初代の農林省生活改善課長山本松代が活躍していた時にはまだこの局は存在していたのでしょうか。少し気になります。誰かアメリカ通のお友達を知りませんか。

そのアメリカには、「都鄙生活パリテー」（トヒ：都会と田舎の意）なる考え方があったとされる。鞍田純『農村生活総論』明文書房、1980（昭和55）年、（著者の当時の肩書きは鯉淵学園名誉園長となっている）によれば、以下のようである。

「前世紀の中頃から本世紀にかけて、アメリカでは「都鄙生活パリテー（均衡）」の考え方と運動が起こっている。アメリカにおける農村社会学の発達や農村生活改良普及事業などは、その運動の一翼を担ったものだと察せられる。」「それは、アメリカが非常に新しい国であって、とくにその農村地域には、来住者たちの生活文化様式らしいものは育っていなかったであろう。（中略）農村よりは早く都市の生活文化が発達した。この都市に発達していた生活文化様式を、一日も早く農村にも普及して、農村の生活文化水準を都市並みに引き上げることが、社会的に大きな関心事だったのであろう。」（同上書、68ﾍﾟｰｼﾞ。）

ユーラシアの旧世界には農業・農村の永い歴史があり、以上のようなわけに

は行かないのであるが、GHQの当局者はひょっとして、以上のような考え方に基づいて日本のファッシズムの温床たる農村社会の近代化（伝統を抹殺しての）を目論んでいたのであろうか。

又、話しは異なりますが、上述の鯉淵学園の大先生には、やはり農本主義的な臭いが強くしますねえ。単純な農村賛美に陥らないように気をつけましょう。この当たりの話になってくると、データに基づいてものを言うことが肝要です。

[東京－１３－３]
場　所：
日　時：平成１３年１１月２３日（金）
面会者：加藤貴志江氏（岐阜県元生活改善普及員、専門技術員）
調査者：兼川、矢敷、服部
担　当：服部朋子

当日は、現在加藤さんが勤める東京都内の養護ホームにてお話を伺った。ご本人のお話を伺うのは２回目である。定年後体調を崩されたが、動かないでいたからだと思ってこのホームで働くようになり、以来調子がよいとのことであった。祭日にも関わらず、仕事終了後の加藤さんを尋ね、長時間お話をすることが出来た。最初に施設の中を案内してくださったが、大変素晴らしい設備の整った所であった。

１．加藤さんのご家族、子どもの頃について

・ 私は好奇心の強い子どもだった。
・ 実家は長野県境で、蚕を飼っており、父は苦労したと思う。水太りにならない栄養のある桑をつくる（菌に弱くならないように）為に、それはそれは手をかけたものである。
・ 父は食事中に自治・政治の話をしてくれた。小学校５，６年の頃からだったが、私は興味があったし、学校では何で皆こんなことを知らないのだろうとよく思った。母はかたづけもしないで話をして･･･とよく怒ったものである。田中真紀子さんは言っていることは正しいが、お嬢様だから失敗した。
・ うちは食べるもの等、皆平等だった。お風呂も都合のよい人からで父が最後のときもあった。その点、私の家は合理的で民主的で進んでいたと今は思う。母は「命令的な言葉使いはいけない」とよく言っていた。それほど勉強のことは言わず、挨拶とかにうるさいだけでよく働いた人である。私は、父親からお金をハイと受け取り（いくら父親がもらっているか、もうかったか知らないままだったので私は悔しかった）その中でやりくりをしていた母親に「奴隷のようだ」と言ったことがあるが、母親はそれをよく覚えており「父親より 20 年も長く生きて、ちっとも奴隷じゃなかった」と後日言われた。
・ 大変だったなと思う。繭の値が暴落したりしたから。しかし、母親は自分の知ったことではないという感じだった。自分がお金に関して関係なかったからである。私はこのような時代を知っているから生活改善普及員に自分がなって中央へ来て初代の課長が色々しゃべって家政学の分野だけで生活改善をやるのはとんでもないと思っている。これをわかっている専門技術員はいなかった。

２．茨城県の国民高等学校について

・ 国民学校は茨城のみ。生徒を大事にする。少年部、男子部、女子部、出入り自由で全寮制
・ 出欠もとらない、成績もつけない変わった学校だった。袂の長い着物を着て半日お茶の授業があったりした。戦争中だったのにお花の授業も周囲の野山から花を取ってきて半日やった。
・ 寝ている人に迷惑をかけなければ消灯はあったが守らなくてもよかったし、自由だった。やりたいことをやれる面白い学校であった。
・ 利休の「三味」という本。弟子宛に伝えることをまとめたもので、すばらしい本である。学校で、この利休の本に出会った。
・ 先生も生徒も同じものを食べていたことはすごいと思う。兵隊の中でも上の者と下の者では食べ物の内容が違っていたのに。
・ 文部省は何もこの学校について把握していなかったのだと思うが、とにかく生徒を大事にすることでは天下一であったと思う。この学校は、当時モンゴルに行くにはこの学校しかないと自分で選んだ。
・ 学校では「人生をどうして生きるか」を教わった。今思うと哲学的教育をされたと思う。「活物活人」といってモノを活かして人も活かすということを徹底的に叩き込まれた。つまりはバランスをとるということだと思う。万我万物悉く私なり
・ 学校でやったことが「人間はこういう生き方をしなくてはならない」「人々はこうしなければならない」ということを自然に考える雰囲気だった。「万が万物ことごとし私なり」これを例に出して教えられた。青年期にはこのような教育が必要だと思う。家庭教育も重要だが、青年期に学校で教えられたことは大きい。
・ 今の学校は強制収容所みたいな所だと思いますよ。
・ 女学校のとき、同窓の半分が結核死しており、これは栄養が悪かったためである。
・ 成す事によって学ぶ。
・ お酒を造らないことには職員会議にはならなかった。酒税法違反をして造った。パンとか麹はすごく大変である。本に書いた麹の一件では、モノがない、何も無い状況だった。あのようなことが出来るのも学校で繰り返しやっていたからである。東大の先生とかいたけれど、とにかく自分でやってみないとわからない。

３．農村について

・ 農村は変わったと言われるが、変わった所と全く変わらない所があると思う。例えば結婚式等は昔のやり方にこだわっている。
・ 農村のいい所悪い所、なぜそのような暮らし方をしていたかをきちんと知っているこ

とが大切である。そこを把握せずに栄養だ機能だと言っても皆ピンとこない。
・ 半分は主婦で農業者でもある。農家を手伝う。年齢層広い。

４．イギリス留学について

・ 60 歳で一人でイギリス留学を思い立った。ＡＢＣもわからずに行ったが、3 ヶ月たつとしゃべれなくても何を言っているかはわかるようになる。大英帝国の終焉がどうなっているか知りたかった。昔、子どもの頃の地図は全部ピンク色で英国の植民地ばかりだった。
・ 女性は「男の人の 10 倍は頑張らないと」という英国の大工の息子さんの言葉が印象に残っている。だからサッチャーもできた。イギリスもそうなのだと思った。
・ 女が意識的に政治をかたるのが普通であるイギリスと日本は全然違う。
・ 子どもの農村の仕事はない（水稲のうちは特に）。デンマークやスイスはあるし、きちんと子どもにさせる。

５．専門技術員について

・ 10 年の経験があれば受験資格があるが、
・ 試験の際は山本課長から面接を受け、「何をしたいか、何をしますか？」と聞かれて「普及員さんと一緒に困ります。」と答えた。また、「農水省がだしている資料、マニュアルは全く役立たない。県の特徴が無くて骨のようなものであり、後で肉付けするのが専技の仕事であると思う。」と答えたところ、山本課長さんは笑っておられた。
・ いざとなれば資格は関係無いと思うが、勉強したということで１つの線を引く意味はあるかもしれない。
・ １つでいいから、これはというものを持つことが大切。
・ 私は恵まれていたと思う。所長さんがよかった。普及員さんがよく動いてくれた
・ 山本松代課長と専門技術員が繋がりすぎであった。特定の人が大変可愛がられ、山本派の筆頭格のようであった。農水省と繋がり過ぎていたということである。お茶大と奈良女を出た人がよく専技になった。当時、高等師範卒の専技が最も多かった。評価課程に沿いやすい人がよかったのである。基礎を教えていた学校教育と生活改善は違う。精神教育は教えてはいけない。今やっていることをどのように分析するかが大切。

６．生改活動（普及手法等全般）について

・ 酪農製品だけはやらなかった。
・ 知らない者の強さというのはあると思う。
・ 皆がやっている（皆が興味があるのだから）。私ができないことを教えてもらう。
・ 地域、慣習が違うのに実施要領を使うのは困難である。
・ 家族関係聞き取りが一番難しい。若い人は老人が大切かを質問したりするが、何も知

らなさ過ぎる。聞き取り、観察、アンケートは別々に考えなければならない。

- どんなに小さいことでもそれを覚えておく、それを誉めることが大事である。
- 押し付けなかったのがベストだった。よかった。その前の世代は、旦那と姑の言うことをきけば安泰だったから。女学校の時の校訓は「音量貞淑」だったが、父親はそのようなことは決して言わなかったし、皆平等なのになぜ女だけなのかと疑問に思った。
- 間食、食生活の改善においてなかなか効果があがらなかったから二人 1 組で教え合う形をとった。料理は恋人に作ってあげる、子どもが生まれて子どものために作るという気持ちの状況と何もない時では全く違う。この方法は、自主的に勉強するきっかけ、元になったと思う。料理講習は、生活改善でも何よりも勝るものだという時代があった。栄養がどうのこうのといっても美味しくないとダメ。色々な流行を女は追うが、料理の流行は「これは美味しい」と思えるものから始めないと続かない。
- 自分でやって自分で努力した場合、自分の判断が誤った場合が多い。相手のやることをじっと見ていて引っ張り出してやる方のやり方の方が成功したと思う。
- 怒られるということは「何かをした」ということで、怒られないというのは「何もしていない」ということだと私は思っている。

7．研修について

- 生改は皆真面目である。研修においては、生改さんはあれもこれもしようという傾向があり、農改の男性達はどれを抜こうかと考える。人によって吸収できる量は決まっていると思う。
- 研修は各現場の用途・必要に合わせればよい。農水省は全て把握したがり、多くのことを課すが、考える余裕が無くなる。
- 現場は現場にしかわからない。立派な研究をしているわけではなくても、現場にいる人が強い。必要なら誰でも講師として呼んでよいのである。
- 専門技術員は専門が１つあり、必要なことでも他のことはやりたくないと思うことがあるようだが、普及員には「やらなくてもいいと思うこと、今必要なもの、嫌でも情勢を考えて教えなければならないこと」がある。
- 例えば、山本課長に何かを教わると影響が大きい。専門技術員や講師の影響が強すぎる場合は癖がつく。１つのことを言われても想像しなくなるのである。鵜呑みでなく、皆でワーワー言い合うことが大切。
- 相手を尊重し、日本を押し付けないということが大切であることに気づかない。オイスカはやや押し付け的な傾向な部分がある。押し付けになると研修生は講師の悪口を言うようになることもある。
- 東チモールの例として、来日した研修生が布団で寝ていた。彼はベットでないことへの不満を持ち、日本人はきっとベットに寝ていて我々は地べたで寝かされている。差

別を受けていると思っていたと言う。これについては説明が必要であろう。日本は畳の上に布団をひいて寝る習慣があり、各個人も好みによって布団だったりベットであったりする。畳は上等のものであり、その上に布団をひいて寝ることは悪いということではない。エライ人でも畳好きの人もそうでない人もいる。それぞれ、選ぶのであって、畳だから布団だから差別を受けているというものではないと説明すると彼はよく理解してくれた。このように、きちんと説明しないとダメで日本人は配慮が足りない。きちんと説明することの重要さがわかっていない。アジアに対し、Look　Down。日本はうぬぼれがある。

・ 成人教育（ここやれ、あれやれと言ってやらせること）は害にこそなれ、いい事はない。自分達がこういう方がいいと考えるまで待つのがベストである。
・ 文化の違いを考えず、日本が一番とし、日本を物差しにしてモノを考えるのはよくない。農家にその傾向が強くあると思う。これは気をつけなければならない。

８．婦人会について

・ 名簿上、婦人会のある所はほとんどない。職業別になっていた。スーパー〇〇へ働きに行っているグループ、炭坑の所で働いているグループという具合。

９．質問

①県や農政、農家との接点について重要だと考えていらっしゃることは何ですか。

→農家は一番大切。そこに住む人が本当にどんな生活を望むのか農家の人を重視すべきである。「例えば、私なんてお茶出す時、農家の人に最初に出す、エライ人達は後･･･」
農改さんは町村職員のようだったが、生改は異なった。女性の使い方を知らなかったのだと思う。生改に緊急を要する仕事なしという感じで、自転車は農改用だったし、農改の方が多忙で生改はヒマだと思っているのかと疑問に思ったこともある。
「相手の仕事を理解すること」が県・国とのかかわりで重要なことである。
男性は農改のことは何も言わないが、生改に対しては色々言われた。
選挙運動に使われる等、町村の普及員か県の普及員かわからないところがあった。
課題を行政の中に具体的に打ち出して位置付けるべき。
生改としては、いい上司に巡り合うことが大切。私の上司は「お互い大人だから良いと思う方向で働いてほしい」と言った。また、この上司は同じことを言うのに話し方が違った。つまり、相手の生活に合わせて話をしており、なるほどと思った。気がきくかどうかも重要な要素である。

②４Ｈクラブとのかかわりはどのような感じでしたか？

→選挙の時、大きなポストになったりする。生改も選挙の時は村の人に何か言うわけでは

ないが、講演会とか立ち会い演説のような時にはかりだされた。「私暇願い」というのを出して手伝いをしなければならなかった。警察に呼ばれて「応援したり、手伝ったりしたでしょう」と言われたこともあった。

③ご著書でパンづくりにあまり力を入れていらっしゃらないようなことが書いてありましたが･･･。
→労多くして効少なしと判断していた。

④「普及員とは一言でいってなんだと思いますか？
→交通整理のおまわりさん。

⑤「皆が迷惑するから、金を出しても口は出させん。口を出すなら金はいらん」と言って、それでも研修が上手くいったというエピソードがありましたが･･･
→酪農婦人部冬期研修会の時のことで、それははっきり言った。そんなに悪い人はいないので何とかなるものである。経験があるということでそれ以上のことは要求しなかった。「こういうことはやれました」ということを明確にすることがポイントである。
メンツをつぶさないことが大切。そんなに悪い人はいないので、小賢しくよりストレートがよい。

⑥なぜ日本が発展したのか、なぜ生活改善運動が上手くいったのだ思いますか？
→日本が発展した Key は格差がなくなったこと。地主がいなくなったこと。マッカーサーさまさまだね、これだけは。小作はいつまでたっても小作だったが、それが変わった。例えば、インドネシアでは町に出てきて働く人達が田舎に土地を持ち、そして偉い小作人とそうでない小作人がいる。偉い小作人は仲介人のようなものである。日本では、世界大恐慌の際は東北では娘を売った。岐阜県の南部では、一村一地主という状況であった。7 分地主へ収め、3 分が小作人のものになる。女性が農村で働けるということや女性が働いても 70、80%は上納しなければならなかったことがなくなったことが大きい（岐阜は地主へ上納 80%）。当時、80%の農家は家の中に労働者が必要だった。その意味で女性は重要であった。今は、畑仕事はちょっとで皆、外へ働きに出掛ける。だいぶ変わった。
第一に地主のこと、第二に民主が低かったこと、第三に食べることに精一杯、第四に目覚めを出す点、目覚めになったということ。何かをしようと思った人達がいた時に生改さん・専技さん達がいたということに意味がある。我々も最初は色々言ったが、最終的には本人達である。女性の働き、農業を男と一緒に勉強しようと言う女性の力は大きい。

⑧JICA の仕事等で海外に行った場合、まずどこを見ますか？

→まず、人を知るにはその人に何かを教えてもらうこと。こちらから、人に教える顔はしないこと。そして、新任してやることは、地図づくり。労働の行動を色わけをして、地図を画いた。この人達はここによく働きに行く、この人達は家の中にいる、特産は何か･･･といったことに関する地図を作成していくうちに問題が出てきたような気がする。だいたい、50 戸から 100 戸まで深くみて、300 戸くらいをなめる感じにして 2 つぐらいに分けてみることをした。

どんどんカードを作った。何かを質問してカードに記入してもらった。海外の場合は字が読めない場合があるから工夫が必要で、○×ですむようにするとか色で判別するとか好きか嫌いか･･･。パっとその時のインスピレーションで答えることの方が確かである。字が読めても何にもならない時もある。

⑨どういうことを求められて仕事に行きますか？

→韓国は農作業環境改善、インドネシアは中堅技術者養成プロジェクトの一部を担当した。ボリビアとホンジュラスでは調査で行った。形式的であまり役立たない調査だと思った。もう少し広さをせばめてもよいと考える。JICA の調査はあまり好きではない。

⑩Key Person がいると上手くいくと NGO が言っていたりするが、どう思いますか？

→後進の所ほど誰かに Key Person がいた方がよい。ただし、害になる場合もある。

【岩手－１３－１】
場　所：ふるさと体験館北上（北上市和賀郡山口２３地割２４－５）
日　時：２００１年7月１４日(土)午後２：００～５：３０
面会者：Ｉ－Ａ氏（元農業改良普及員、元 JICA インドネシア農業専門家）
同席者：Ｉ－Ｂ氏（岩手県農政部農業普及技術課農村生活主査）
　　Ｉ－Ｃ氏（岩手県農林水産部　農林水産企画室）
調査者：佐藤（寛）、水野、関、佐藤（仁）、池野、渡邉（菜）、小笠原、山崎、渡辺（雅）、
　　矢敷、小國　(全体インタビュー形式)
担　当：小國和子
テーマ：日本での農業改良普及事業経験と、海外での農業技術協力の試み

１．　面会者プロフィール

＊一般

大正 11 年　北上市岩崎村に生まれる。
昭和 4 年　山口尋常小学校入学。その後、同高等科 2 年卒業。
昭和 19 年　学徒動員で北海道へ。9 月に盛岡高等農林学校卒業。農林省就職。農林省農事試験場化学部勤務。その後兵役。10 月より仙台陸軍予備士官学校。
昭和 20 年　研修に関わっていた弘前で終戦を迎える。盛岡農業試験場勤務。
　　農業会専門技術員。農地委員会書記。
昭和 24 年　普及員資格取得。普及担当。
昭和 33 年　普及方法の専門技術委員(7 人目)となる（昭和 30 年から普及方法の専技できた）。

その後、普及所長、農業大学校非常勤講師など、農業改良普及事業分野で数々の経験を積む。現在数え年で80歳。

＊ 国際協力プロフィール

昭和54年　農林省推薦でインドネシア長期専門家派遣。中堅技術者養成計画プロジェクト「初めての農業普及プロジェクト」。普及指導専門。（定年58歳の3年程前）。
昭和56年　短期専門家派遣で台湾へ（2ヶ月）。普及事業実施方法について技術指導、建議書（提言）を残す。
昭和57年　調査団員（プロジェクト継続支援可能性についての評価）としてネパールへ。普及・水稲専門。「普及は最後まで後始末をするものだ」ということで、調査団の提言として中心となった灌漑分野と共に、普及専門家派遣へ。
昭和58年　短期専門家派遣でタイへ(2ヶ月)。カセサート大学への研究・普及・農業機械・無償資金協力。普及員の研修カリキュラム作成指導。

昭和60年　　長期専門家派遣でビルマへ。無償資金協力（19億）で建設された中央農業開発訓練センターを中心としたプロジェクト方式技術協力。農業普及技術指導。（リーダーは、日本で初めて普及方法の専技になった人だった。）

その後、インドネシア短期派遣。帰国後日本では岩手-インドネシア友好協会（地元NGO）へのかかわり（今年は南スラウェシ州ウジュンパンダンに耕耘機15台の供与等）。

２．　日本での農業改良普及事業へのかかわり

2-1　戦前の農業普及

・明治時代：地主主導で農談会。
・明治30年代　伝達普及。
「言うことときかないとぶんなぐる」「やらんとしょうがないからやる」「バックに警察」
・　農会：岩崎村には農学校卒の農会技術員が2人居た。
・補助奨励事業（大正期とおっしゃったが実際はいつ頃？）
・昭和18年　農業会　戦争に向けて、それ以前の専門団体（農会、産業組合等）の統合。
・Ｉ－Ａ氏は農業会末期の技術委員としてかかわる。

2-2　戦後の農業改良普及事業

(1)GHQ主導による農業普及事業の展開
・戦後、GHQによる農業会の解散。
・　昭和20年（終戦前）試験場では、技術成果を農民に浸透させるべく、5か町村に1ヶ所ずつ指導農場を設け(耕地面積約2ha)、試験場の成果を実習する場としたが、昭和23年6月　GHQにより試験農場廃止。
・　昭和23年　Agricultural ExtensionがGHQによって導入される。同年8月、農業改良助長法公布。逼迫している食料事情改善に向けて食糧増産技術員。昭和24年から新たな資格として農業改良普及員の資格試験が導入され、これまでの技術員も受験しないと資格が得られなくなった。しかし、試験作成は勤務先の試験場が行い、出題する形だった。
・進駐軍→軍政部による農地改革実施状況への監視。農民祭におけるキャツコ大尉とのエピソード。ビールの確保と洋式トイレ。

(2)当時の農業事情
・　農業の民主化。
・　オオノウエ（？）農法：宗教的な農法（!?）。やましい肥料。→肥料検査官をおいて対処。
・　農地委員会：農地改革問題に携わる。小作地解放。Ｉ－Ａ氏は書記として関わる。
・当時の諸問題：農地改革にかかり「地主小作、本家分家等様々な問題があった」

→実地から農民心理を学んだ。
-分家に分けてあるが、登記できていない。
-収穫物の半分を地主に物納するなど、農家のやる気をそぐ状況の改善。
-農林省支援による客土の注入施策→役場留りで農家まで届かない。田植してしまうと確認できない。
→農地改革実施2年後、優秀地の委員会が表彰され、岩崎村も対象となった。「事件をおこさないで、うまくやってきた地域」。表彰後、委員会の会長だった人は村長に。
・普及員の権限についての論議：「人間の接触で、理解、納得して、やる気をおこさせて、自主・自立農民の育成」普及→自作農創立資金（昭和30年か31年）に対して普及員の意見書をつける。多少の権限の付与。←「行政の中に入り込んだ普及事業だからゆえ起こった議論」。

2-3　戦前・戦後の岩手県農業改良普及において重要なポイント

普及事業の根本を作った時代：戦前の農業会時代から、戦後の農業改良普及へ。
明治30年代（農会時代）の普及は、地主を通して行なわれた。
伝達普及「教えて、その通りやれば成功する」「理屈はどうあれとにかくやる」。
→それだけの新しい技術というのはいつでも出てくるわけではない→展示圃。
「飴玉、小遣い銭」何かおいしいことがなければやらない。何か利益があれば、やる。「もうかる」こと。
→普及事業後：理解、納得。自主的農民、自立的農民。考える農民を育成するのが普及。自分の意志で判断し、決定していく。科学的な判断。必要な部分を支援していく、という姿勢。

(1)「普及ルートにのっていた」新しい技術：

「農民はやり方を知らない。普及員が率先して実際にやってみせた。」「今までの役人にはなかった、自らやってみせる姿勢」（≠明治期：地主を通した技術指導）
「普及員の言うことをそのとおりやれば増収という安心があった」「篤農家が自分で応用したら、失敗したという事例もある。」「おれは何十年もやってきたから、という篤農家も最初の1年くらいはいた。」

例）
・保温折衷苗代：米の良い苗作り。長野県高冷地での試みより。
・除草剤の導入→更に、液剤から粉剤へ。
・農機具（テーラー）等を普及所に配置。
・早植え早作の実行
・　人力から機械へ。

(2)やる気をいかに起こせるか。

・やればやるほど収入が増える状況の実現：ヤミ米の高値販売等を背景として「働けば甲斐が出てくる」状況へ。

・面接指導が基本。

→昭和24年には米を他県から入れないと県民の需要に満たない移入県であったのが、自給県、更に他県へ米を出す移出県へと変化。米の安定化・増収。

「もうからねばだめ」「やる力がなければだめ」

→力をつける→普及員が「正しい技術」を教えた。

Q正しい技術とは？

A明治30年代：最初は法律・規則に基づいてやる。「富国強兵策」。伝達普及。5項目の必行事項を県の条例に。「やらないと罰金」。（例：麦の黒穂病に対する風呂湯浸法についての指導）→補助奨励事業：農会技術員。実行すると補助金が出る（1円切手等）。農民を加え、農家に調査させ、どこか1つの立場だけでは解決できない、複合的な問題解決へ。→普及事業後：理解し、納得する「考える農民」育成。自分の意志で判断、決定していく。

2-4　生活改善とのかかわり

・除草剤の導入：女性にとって重労働であった草取り労働が軽減→余暇が創出。但し、昭和24-25年当時、生活改良普及員(生改)はまだいなかったので、農業普及所にいた3-4名でやっていた。昭和26-27年になると、生改が巡回指導、リーダー育成等を行なうようになっていった。

・生活改善：農村婦人の解放

３．　国際協力へのかかわり

3-1　参加にいたるまで

・当初の戸惑い・問題

言葉の問題／任国事情がわからない。

「国際協力は東京の人、あるいは農林省がやるもの。岩手県の職員は岩手県の農政を、農業を考えればよい」という昭和54年頃の雰囲気。

一箇所にとどまらず、様々な地域に行く。

・戦没者への思い

自分は長生きをしてきた。同輩の多くが戦争で命を失った（小学校同輩男性33名のうち、11名が戦没者）。戦死した同輩、戦没者への巡礼に向けてという思いもあって、国際協力への参加を踏み切った。フィリピン(ルソン、レイテ)、パプアニューギニア(ガダルカ

ナル)等含め、任地でも戦没者についての調査を行い、弔意を示してきた。遺族会の中でも、夫がどのような状況で亡くなったか知りたいと言う望みがある人に対して情報提供を個人的にやった。

3-2　スライド'Agricultural Extension Activity'上映。

（インドネシアAgency for Agricultural Education, Training and Extension とJICAの協力により作成。昭和57年。）

(Ｉ－Ａ氏は療養のため日本におり、後方支援に関与)。

(日本語版、英語版日本にあり。オリジナルはインドネシア語版)。

内容：

・　農業改良普及員の仕事とは：①キーファーマーとのコンタクト。②「足で歩く」踏査。③資料を検討。→問題への対策

・　５W1Hを明確に。

・　何が効果的か。しゃべるだけか。資料が有効か。

・　稲作作集団への指導：在来種から優良品種へ。施肥。浅植えと深植え。色々な見方「立って見る、座って見る、(手にもって)抜いてみる。」

・　展示圃づくり：具体的な見本によるテーマの明確化。とことん比較する。

・　ポスター、紙芝居等、教材の作り方、集会の組み方など「普及技術」指導。

・　フォローすべき範囲の広さ：農畜産・果樹等各種活動、農業機械の基礎知識、写真の写し方、協同組合との関係等。

・　具体的な手順マニュアル：問題のありかを掴み、柔軟に対応していく手段を学ぶ。

・　「日本でも、戦後このようなスライドを用いた。県単位。どこにあるかはわからない。」

3-3　その他：海外での普及について(下線は議事録担当者による)

インドネシアでの経験（西ジャワCianjur派遣）より

・BIMAS-INMAS政策下での技術協力：米増産、自給達成目的→全国的な上位下達式の稲作指導。

農家「米だけやっていても儲からない。野菜、果樹もやらないと」という希望あった。←適地適作の考え。だまっていず、救い上げていく方向に。農家の意識改革のための知恵は本来普及員が出すべき。展示圃等の手法の活用。<u>高い技術能力の必要性</u>。→普及員の資質向上＝技術協力プロジェクトの大目的。

・　<u>農業サイクル・習慣の違い考慮</u>：（インドネシアの事例）稲の穂刈り→現場で籾にする。頼まれなくても土地無し農民が収穫労働に参加し、現物支給をもらう（十対一）。

収穫物運搬の問題等。→品種改良を一側面だけみていては普及しない。現場状況の把握が需要。→ポストハーベスト（収穫後処理）という課題の設定。

- 「現象の裏には何があるか」を議論していく。「現象の裏を探るのが普及員の役目」→実態把握。
- 自分は、キーファーマーに生活全般に渡る色々な話を聞いた。訓練センターはそのような広がりが無い。農家との接触術が良くない。
- 縦割り行政の問題。食用作物総局下にあり、普及員の所管ではない。自分たちがどの機関で技術協力を行なうにせよ、「普及員の首根っこをもっている機関」を押さえること。
- フィールドラボラトリー。実践の重視。
- 途上国の農業政策・理論は欧米諸国からきている。日本の場合は、アメリカから教わったこともあれば、日本ナイズして今日の普及事業の形にした部分もある。大きな違い。アメリカの普及事業：研究・教育・普及の三位一体で行政が入らない。「考える農民」という考え方が出やすい。日本の普及事業は行政システムの中に入っている。「教育的普及活動」「考える農民」という言葉が出ても、「教育のプロがいるのか？」という議論になった。→下の方で、現場で理解、納得して、その人たちに合う様な方法を考えてやっていけば、相手のものになっていくと。号令だけではうまくいかない、ということ。
- 「農民に接触して普及するというのが普及員。遠くで文書を流したり通達をしたりするのではない。接触し、顔を見ながら意見する中で科学的に物事を考え、農民のやる気がでるように仕向けていくのが普及」
- インドネシアの接触術：「接触はしている」。YAKU方式：1人の普及員が16戸の農家(キーファーマー)を巡回指導する（組織図、資料(5)にあり）。しかし「機械的」。

3-3　今後途上国で生活改善／農村開発に関わる人へのメッセージ

- 資料(1)参照。現地の可能性、技術力がわからないのだから、まず「教える」「専門家」という気持ちを頭から捨てた方がよい。むしろ、相手の個人なり地域なりの状態、様子を把握するところからはじめる方がよいのでは。「解らないところは聞く。意見があったら言う」という姿勢。
- 行ってからの「分かり方」(時間の使い方)：資料(1)にあるようなポイントを意識して、意識的に大雑把に押さえていく。
- 実態把握の重要性→教育プロジェクトとしての重点設定→フォーカスポイントを決めて掘り下げていく。
- 資料(1)に記載されていることは、日本の普及員が農家に入るときにやる手順と同じ。

４．　質疑応答より

Q. 現在の途上国の状況はどうか。

A. どこももめている。インドネシアの場合、中国との関係が悪い。現地で経済の中心を握る華人との関係。華人に対してはその上に立てる役人か軍人かということになる。但し、日本でも明治時代はそれでよかったが、段々変化してきた。それだけではうまくいかない。

Q.農地改革に際した地主と小作の関係：登記されていない土地の問題について当時の日本はどのくらい明確だったか。

A.役場、登記所双方にある地図の照合。比較的明確になっていた。土地台帳は戦前からあった。問題解決方法：「出すところまで出して」話し合い。県の小作官(県職員)が調停役に立つ。

Q. 現在の途上国での普及活動は、例えば農民の知識がなく、伝達普及的な方法が適当であるという状況がありえるのではないか。

A.もしも農民に知識がなく、伝達普及的な方法が有効だとすれば、それは普及員の義務で、その技術が必要となる。しかし例えばインドネシアの場合、普及員は、農業学校を出ていても実習、実技の時間が少ない。センターの職員も、座学は学んでいるが、実技が無い。それらを圃場の中で課題をもってやらせる。技能を身に付けて、普及員が力をつけるということをやった。普及員が力をつけないと、農民の指導はできない。本来は、訓練センターの枠ではなくて、実際の農村に入って問題発見、課題設定をして、計画を立てて実行していける普及員の力量がなければ、農民の力がついてこない。

Q.農民間の格差をどうしたのか。先進的な農家を先に育てるのか。他の農民がついて来られるような対処をどうするのか。

A.展示圃を中心に、話し合いをさせ、問題を掘り下げ、何が問題で、なぜよくなったか、ということを伝えていく。これは日本の単一技術の展示圃での普及の考え方に基づいている。話だけではだめ。最初にアプローチするのは先進的な農家。インドネシアにおけるキーファーマーのように、普遍的な技術を取り入れる受け皿的な役割の農家がいる（≠日本の篤農家（自分自身の経験の中から技術を編み出していく「篤農技術」経験技術をもつ人）とは異なる）。

Q.アメリカからやれと指導されて、やらなかったことはあるか。

A.ないのではないか。アメリカとは違う。行政の中でやるのだから、同じものにはならない。昭和37年に米国アーカンソー州からコンサルタント（バインズ氏）が視察に訪日し、北海道、岩手、栃木等6県を回り、最終的に県の農業専門技術員が東京に集められ、結果として9つの提言を行なった。例：普及員の待遇改善→普及職種をつくる→普及手当ての整備など。農林省経営局には報告書が残っているのではないか。

日米の普及員の差：米国の普及員は身分が高い。助普及員、普及員補等、普及員になるにも段階を踏んでいる。

→日本の対応：大学留学6ヶ月。1年ごとに2回の普及実習実施（毒物劇物取扱）等。岩手では、農業講習所に生活課（生活改良普及員育成）を設けた（全国3箇所）→出身者の評判がよく、東北圏のみならず関東でも活躍。

Q.接触してやるというのも日本的なやり方か？

A.そうです。

頂いた資料：

1)「開発途上国の実情に即した普及活動の手法」小田嶋正雄

2)「専門家業務状況報告　昭和54年10月分」一部コピー　同上

3)「活動経過と問題及びその対策　昭和55年3月」一部コピー　同上

4)「山口小学校瀬畑校舎(昭和4－9年度)思い出の記」同上

5)「中堅技術者養成計画プロジェクト概要」、「中堅農業技術者訓練計画と協力内容」一部コピー　同上

【岩手－１３－２】
場　所：沢内バーデン　和室
日　時：２００１年7月１５日(日)午前１０：００～１２：００（昼食含む）
　　及び午後２：００～３：００（生活改善グループと合同）
面会者：Ｉ－Ｄ氏（元沢内村担当保健婦）
担　当：関　なおみ

【経歴】
北上出身
看護婦をやっていた。助産婦の学校にいっていたが、戦争になって中断していた。
嫁に行けといわれたので、沢内にいた叔母のところへ行き、そこから盛岡の学校に通う予定だったが、沢内の病院に勤めた（昭和 22 年 22 歳のとき）。そこでだんなさんとめぐり合って結婚した。当時は病院に慶応大学の先生が２人きていた。冬の往診が大変だった（１日１件ぐらいしかいけなかった）。夏は自転車で訪問した。
村の奨学金で（なってくれと頼まれた）1 年間盛岡での研修に行き、保健婦になった。

昭和 32 年から保健婦として健康管理課に所属していた（栄養士も健康管理課所属だった。保健婦数３名。人口 2100 人に 1 人の割合だったから恵まれていた→訪問ができた。　保健婦活動の資料は母子保健センターにある　現在一時閉鎖中）
昭和 40 年に孫が生まれ、その面倒を見るために保健婦を辞めた（孫の母親にあたる娘が保健婦の後を継いだ。現在も現役）。その後婦人会連絡事務局長を務めた→各部落ごとの婦人会の取りまとめをするところ（20 年間）。

【キーパーソン】
深沢村長：太田出身　医者になるように奨学金をもらって大学にいったが、医者になるのがいやで、法学部へ行った。それをすまなかったと思い、お返しに昭和 32 年から村長になった。
加藤院長：東北大学出身　昭和 36 年から 46 年まで勤めた。西和賀調査会メンバーで健康改善のためにいろいろな発言をした。仙台に帰って衛生部長になったらしい。

【保健活動と生活改善活動の関連】
保健婦の仕事の 50%が家庭訪問であると叩き込まれた。
その他蚊ハエの駆除、巡回診療（血圧測定、検尿、採血など）にて健康指導をした（医学生、看護学生も一緒）→高血圧、胃腸病、肺炎、ガンなどが多かった。
栄養不足が深刻　夏になるとやせてしまう（カロリーが足りない）→油を 15ｇとる運動・

鶏の飼育などを進めた。

昭和 32 年から：乳児死亡率半減運動を本格的にはじめた（厚生省としても、岩手県が 2 番目に高く、その中でも沢内が一番高いということではっぱをかけられていた）。
色々な所へ行って PR した。緊急時の乳児の搬送については岩手医大、県立中央病院、日赤と連携していた。

昭和 32 年ごろから：32 人で保健連絡委員会を作った。
村の女性が中心、男性は 2 名ぐらいだった。
連絡員は日誌をつけているので、それを見て、問題があると訪問した。連絡員は報告と問題発掘しかできないから（指導は保健婦）。

昭和 37 年：乳児死亡率 0 を達成
大小様々な病院の人、厚生省の人、学生などが見学にきた（NHK の取材の写真あり）。達成した後は毎日赤ちゃんに何か起きないか気が気でなかった(赤ちゃんが生まれたという話があるとすぐ見に行った)。村長が気を使って「赤ちゃんはどうですか？」などと声をかけてくれた。次の年は 2 人死んでしまった。

昭和 38 年頃～46 年頃　西和賀調査会の設置：保健所所長、栄養士、保健婦、普及員様々な人が入っている
テーマを出し合う（大きい）：母子センターの建設、成人病予防、病院対策（病院のあり方について）等。
往診で訪問している加藤院長が、家の中を見て色々なことを提唱した（住宅の改善など→今まで保健婦が言っても男達が動かなかったが、加藤先生が言うことで、動くようになった、お金のかかることでも）

昭和 38 年：高齢者と乳児の医療費 10 割給付（65 歳以上）翌年 60 歳以上へ
家の中が明るくなったのは、誰にも遠慮せずに受診できるようになったから。
嫁：子供が病気になって病院に連れて行くときも、舅にいちいちお伺いを立てなくてよい。
老人：家族に迷惑をかけるのではという遠慮がなくなった。
（受診した方がよいかどうかを家族が判断しなくて済むようになった事が大きいのでは？）

【保健婦と普及員の関係】

境界ははっきりしていなかったが、連携していた。
保健婦のほうが地域に密着している。地元の人であるから入り込みやすい。地元で保健婦を知らない人はいない。女性を動かすのは出来たが男性を動かすのは難しかった（医者の役目→加藤院長が発言することで動いた）。結核の話や家族計画の話の時に旦那をつれてくるように言ってもなかなか集まらなかった。
生改の役割は行政につなげること、資料にまとめること、その気にさせること。村で普及計画を立てると婦人会と若妻会も巻き込んで一緒にやっていた。

【その他の組織との連携】
貧困対策→相談を受けたり問題を発見したら民生委員に伝えて、会議にかけてもらう（役割分担している）

【具体的な課題についての活動】
・　トラコーマ（目の病気）
学校で患者を並べていっせいに手術をした。タオル１本運動（家族で１枚ではなく、一人一人自分のタオルを使う→接触感染するから）→タオルを配ったわけではない（購入できなかった家はあったかも？）

・　寄生虫（主に回虫）
駆虫剤を村購入して学校などを通して配った。部落へは保健婦が配布。
多い理由を調査したところ、「マツ舟」というシステムがあり、田んぼのあぜ道の水を家の中に通していた（この水が汚物などで汚染されていた）。
盲腸の中に山ほどいた、駆虫剤を学校で飲ませたら、廊下にもいたなど
→井戸水を処理して使うこと、上水道が完備してから激減した。

・　栄養問題
学童の栄養不足が栄養調査と体格調査の結果からわかった（特にカルシウム不足）。
婦人会を通じて煮干粉の共同購入
脱脂粉乳から生牛乳への変更
パン食の変更
玉ネギ・ニンジンの栽培

・　台所改善
糠釜（糠＝籾殻のこと）：お米が一度に１升ぐらいたけた。業者が売り込んだ（生改ではないらしいが、新潟の話をしたら、山を越えて伝わってきたのかもといっていた）。

その後石油コンロが一時あったが、昭和 40 年以降はプロパンガスになった。薪は冬のストーブ用に使う（今では贅沢になってしまった）。薪を切ってくる、くべるのは男の役割（自分の山から取ってくる）。薪の時代は、冬に備えて８月ごろから薪をためていた。

・　住宅改善

住宅について：加藤院長から西和賀調査会で提案（昭和 40 年頃）そもそも病院の看護婦寮の建設時に雪下ろしや日当たりを考えた建物を作った。
昭和 41 年Ｙ－Ｄさんの家が火事で焼けてしまったので、その立替をどうせならモデル住宅にしようということになった。実際建設後はいろいろな人が見学に来た。自然に集落に広まっていった（ちょうどそのころ屋根の吹き替えの時期であり、また高度成長でお金が入り、家を建替えようとしている人が多かった）。
住宅補助はなかった。→実際はあったらしい。
雪が前に落ちると部屋が真っ暗になってしまう→南北に雪が落ちないよう設計する。
個室とドアを提案されたが、田舎は集まれる部屋がないとだめだと反対した。
実際モデル住宅をたくさんの人が実に来たときに、中心に集まれる部屋がなければ困るということを加藤院長も納得した。
どのような家がよいのかを、加藤院長自らコンパネ板（合板板）に書いて大工さんに説明した。

・　嫁姑問題

子供の面倒を見るのはおばあちゃんだった。「おばあちゃんの努力賞」といっておばあちゃんの育児を表彰する賞を作った。
おばあちゃんに育児のことを言ってもお嫁さんに伝わらないこともあった。
昭和 35～36 年「財布の紐」という 16 ミリ映画を上映し、お嫁さんにも自由に使えるお金を与えるよう啓発した（社会福祉協議会のもの）。
（その後、姑の方からいつまで縮こまっていればいいのかと苦情がきた）

・　その他の生活改善運動

キッチンカー：昭和 40 年ごろ（43 年には確実にあった）になってきていた。

Ｙ－Ｂさんからの話（沢内村以外も含まれる可能性あり）
動線調査：台所の色々なものの距離を測った。
味噌：麹の使用（藁を使ったもの）を普及した。
母乳が足りない人：やぎを飼う事を奨励　鶏の奨励
作業着コンテスト：

食品加工：焼肉のたれ（評判がよい）、瓶詰め、缶詰
（それまでは保存方法が塩漬けしかなかった）

【組織について】
村内に行政区は 15 あり、その行政区ごとに婦人会がある。
若妻会：35 歳まで
婦人会：約 500 人ぐらいが加盟。現在 300 名ぐらい。役員会もある
保健所：北上にある（県型保健所）保健婦３名　月１回会合があった（北上に行ったり、こちらまで来てもらったりもする）。精神と結核は把握していたが、訪問まではしない）。
保健婦同士の連絡会：湯田町の３人の保健婦とは月１回連絡会を開いていた。

【その他】
電気は昭和 32 年頃からあった。
テレビの導入　昭和 34 年ごろから　農協技術指導員がメディアを利用していた。
ラジオ生活改善講座は聞いている人は少なかった。
もともと出稼ぎが多い村である。
風呂のない家が多かった。

【岩手－１３－３】
場　所：沢内バーデン　和室
日　時：平成１３年7月１５日（日）午前１１：３０～午後３：３０
面会者：Ｉ－Ｅ氏（元生活改良普及員）
調査者：佐藤（寛）、水野、小國、関、佐藤（仁）、池野、渡邉（菜）、小笠原、山崎、渡辺（雅）、矢敷
担　当：矢敷　裕子　(調査団員全体による全体インタビューの後、個人聞き取り)

【Ｉ－Ｅ氏略歴】
- 昭和 12 年（1937）年か 13（1938）年生れ。現在 63 歳。
- 現住所：岩手県岩手郡雫石町
- 岩手県稗貫郡、オオハザマ町出身。
- 昭和 34 年 3 月　岩手県農業講習所生活科（現岩手農業短期大学）卒。
- 昭和 34 年 5 月～昭和 38 年 3 月まで、生活改良普及員として沢内村及び湯田町を担当
  （千葉トモ子（現照井洸氏婦人）さんに次いで同地域担当生改さんとしては 2 代目）。
- 昭和 38 年 4 月より 6 年間雫石町を担当。
  （同町で“役場の人”と結婚し、現在も雫石町住まい。）
- 住環境の専門技術員、農業短期大学講師を務め、平成 10 年（1998）年、盛岡の普及所を最後に県を退職。
- 現在は雫石町農業指導センター嘱託として第 3 セクター（道の駅運営組織）のアドバイスにあたっている。

【岩手県農業講習所生活科】
- 生改（生活改良普及員）になりたかったわけではないが、地元（オオハザマ町）の生改さんを見た（Ｉ－Ｅさんの）父の勧めで生活科への進学した。
- 生活科では、一般的な家政学の講義が中心で、生改の仕事には、就職後の実地での経験の方が役立った。
- 以下の 2 点を生改業務の基本として教わった。
  1. 農家の考えを変える。
     技術革新（生活技術講習会）を通して、「考える人」をつくる。
  2. 農家の仲間を作る。
     一人ではできないことでも仲間でなら出来るので、農家の仲間をつくる。

  この 2 点の基本の目標、「自分たちの問題を把握でき、次の展開のできるグループを育てる」を達成するには、普通、10 年間かかる。目標達成のためには、「ときには、女性たちの足を抱え、手を引いていくことも必要」。

- 「生活改善のうた」は西条八十作詞で、生改グループの集まりでは必ず歌ったが、昭和 40 年代にできたので、講習所では習わなかった。

【沢内村】

- 沢内は、雪が多く、歩いていると足が冷たくなって大変だった。
- 秋田県横手に近く（電車で 2 時間。買い物は横手へ行くのが普通だった。）、言葉に秋田訛が混じっていて（赴任した）最初は分らない言葉もあった。
- 雫石に行ってから沢内を振り返ると、沢内の人たちは「素直な人が多かった」と思った。
- 沢内には国有林が多かったので、大地主がおらず、県北ほどの貧富の差は見られなかった。
- 当時は、米だけを作っていて、今のようにいろんな作物のできる土地だとは思わなかった。
- 初代の千葉氏が組織化の下地造り（引継ぎ時に具体的にどういう状況だったのかは不明だが、グループはまだ活発な活動をしていなかったと言う。）をした後に入ったので、入りやすかったのでは、と思っている。
- グループ作りのとき、農協婦人部との軋轢が問題になることがあったが、沢内ではそれがなく、婦人会の活動が活発だったので組織化を進めやすかった。基本的には長瀬野のように婦人会が母体となったグループだったが、婦人会が頼りないときは、自発的な生改グループができてくる。
- 約 4 年間の間に幾つのグループができたのかは分らないが、各グループとの活動は次の生改さんに口頭と文章で引き継いだ。当時対応したグループで途中で潰れたグループもあるが、自分達からグループを作りたいと言ったところ、リーダーがいいところが伸びた。長瀬野のグループは後に表彰された。
- グループ名は各グループが決めたが、長瀬野、シキナイ等地名を付けていた。
- 沢内には、湯田地区普及センターのある川尻からバスを乗り継いで（湯元温泉乗り換え）通った。冬場は 1 週間ぐらいの泊り込みで巡回し、夏場はできるだけ日帰りした。独身の女性が、家々を泊まり歩きながら活動していたことが、周囲からどう見られていたかは分らない。
- 沢内村内の移動は、テクシー（徒歩）だったが、講習会などのときは、大きな道路まで女性たちが迎えに来てくれていた。
- 全部落は歩けないので「グループになりたいから来て欲しい」というグループからの要請に応えて婦人会を訪ねた。冬場は、（電話や役場を介して事前調整をして）グループのリーダー等の家に泊めてもらった。
- 昔は公民館などはなかったので、集落のリーダーの家で講習会などを実施した。集落

のリーダーの奥さんが婦人会のリーダーだった。部落のリーダーは、当時は今のように頻繁に交替しなかった。

- 疲労度調査はごく最近のもので、沢内ではやっていない。動線調査も沢内ではしなかった。共同炊事も村内で一箇所くらいはやっていたかもしれないが、特に進めなかった。
- 深沢行政の時代に沢内に入っていたわけだが、特に深沢行政を意識したことはなかった。新任だったので会えるのは課長さんレベルの人で、村長さんと会ったこともなかった。
- 女性達からは“ 先生 ”と呼ばれていたが、それがイヤだった。先生の資格はないので、苗字で呼んで欲しいと思っていた。
- 後に、沢内は水道から住宅改善に取り組むことになった。しかし、沢内と言えば、「豪雪対策住宅改善」で有名。藁葺きをスレートの雪下ろししなくていい角度の屋根に替えた。
- （菊地武雄著『自分たちで生命を守った村』では沢内村内の政治的な対立について書かれていたが、どんな感じだったのか、という調査団の質問に）特に政治的対立は無かったし、中傷もなかった。

《活動内容》

１．栄養・料理指導

沢内村での活動は、食べ物（栄養・料理指導）から入った。理由は、沢内で１．（特に学童の）カルシウム不足、２．蛋白質不足、３．カロリー不足が指摘されていたからである。

１）　カルシウム不足対策

千葉氏から引き継いで、婦人会で煮干粉の共同購入を進めた。

２）　蛋白質不足対策

特に動物性蛋白質の不足が言われていたが、魚、肉はご馳走で基本的に“ 買ってくるもの ”だった（行商もあったかも）。狩猟で獲れるものはほとんどなかった。

秋になると、沢内ではどこの家でも秋田からハタハタを箱でまとめ買いし、“ イズシ ”にして正月から春まで食べていた。オオハザマでは見られなかった習慣だったので最初は驚いた。

沢内で進めたのは以下の２対策。

① 大豆料理講習

どこの家でも大豆を栽培していたので、グループのリーダーの家で大豆料理の講習会をした。みんな炭焼き作業をやっていたので、調理燃料（七

厘に入れる木炭）に困ることはなかった。

② 秋刀魚、鰯の保存

価格の安い時期に秋刀魚、鰯を共同購入して瓶詰めにし、農繁期に食べられるようにした。

３）　カロリー不足対策

油の摂取を勧めたこともあるが、油そのものの流通量が少なかったので、あまり普及していかなかった。

野菜の保存も勧めた。沢内では、冬に備えて畑に穴を掘って杉の葉を入れ、そこで野菜を保存する習慣があったが、雪が降ると畑そのものに行けず、結局、野菜が食べられなかった。そこで、台所の中にムロを作っていつでも簡単に野菜を出せるようにすることを勧めた。

学校給食の栄養検査の結果、脱脂粉乳を生牛乳に替え、パン食も変えた。

味噌作りを沢内でやったかどうかはっきり覚えていないが、やったとすれば、ワラで麹を作る初歩的なものだったと思う。

家族の食事で父親だけいいものを食べる傾向があったが、イザコザになるので特別に何も言わなかった。

２．台所改善

つば釜ののせられるカマド、台のついた流しを造った。

また、トラコーマの原因として煙が充満し、太陽光線が入らない台所が問題とされ、窓を造って明るい台所にした。明るくなったことで、汚れもよく見えるようになった。

最初は、婦人会会長やリーダーの家の台所をモデルとして改築した。（Ｉ－Ｅさんの）指導の下、男性も女性もコンクリートを捏ねて手造りしたので、資金はあまりかからなかった。

３．　トイレ・風呂の移動

トイレと風呂はそれまで外の別棟にあったが、冬場に困るので家屋内に設けるようにした。

４．文章作り

湯田町で指導。当時、女性はほとんど発言しなかったので文章作りを進め、後に文章作りに参加した女性たちは表彰を受けた。（指導しても）なかなか書けないものだが、少しでも書いたものをガリ版をきって印刷することで励ました。

５．　　先進地の見学

農閑期に、北上のオカノ町のタキザワ（農業短大農業試験場近く）を一泊で見学しに行った。「百聞は一見に如かず」で大きな成果を挙げた活動だった。

「来られる人が参加する」という条件で 100％の参加は得られなかったが、皆楽しみにしていた。（Ｉ－Ｅさんから参加希望の女性の）家族などへの説得はしなかった。

参加者はグループごとに卵貯金等で交通費を調達した。

　もう“一押し”でひっついてグループになりそうな女性達を一緒に連れて行って、グループ化を促進した。

６．　　啓蒙映画

映画にはよく人が集まった。北上の社会教育委員会事務所から映画を借りてきて、個人の家に集まってもらって上映した（電気は活動開始当初から村にあった）。スクリーンは、毛布やシーツを掛けて作った。

【保健所、保健婦との関係】

- 保健所は北上で遠くて、連携はなかった。保健婦さんとは会議や講習会で一緒になることがあった。情報交換や連絡、活動の調整などをしたと思う。時折、村にも一緒に出かけた。
- 家族計画は保健婦の仕事だった。
- キッチンカーは、沢内では見なかったが、雫石では見かけた。キッチンカーには乗らなかった。

【研修】

- 六本木の生活技術研修館で昭和 41 年に生改としての研修を受けた。専技になってからは年に２，３回六本木の研修館に行った。有名な、大学の先生のご指導をもらえたのが特に良かったと思っている。
- 専技さんからはモノの見方や調査手法を教わった。集落生活環境点検の手法はためになった。例えば、栄養調査では各家庭で食べたものを全て女性が記録し、その記録を基に生改がカロリー計算をしてフィードバックしていた。しかし、記録の自己申告だけでは実態が把握しきれない（正直に記録しているか分らない）ので、訪問聞き取り調査も同時に実施した。その際、家の周囲に植えられている野菜の種類等を把握しておくことが大切だと教わった。
- （途上国では、研修がないことに対する不満が聞かれるが、日本ではどうだったのか、

という調査団の質問に関して）訓練は自分でするもので、待っていたのではダメ。私も人前で話すのが嫌いだったが、仕事に育てられてきた。

【緑の自転車、スクーター】

- 最初は緑の自転車だったが、昭和 37 年に緑のスクーターに替わった。湯田地区普及センターのある川尻の周辺を、自転車やスクーターで移動した。普及センターにはスキーも置かれていた。
- （途上国では、スクーターなどを私用に使う普及員もいるがという調査団の質問に）衆人環視の中で乗っているわけだから、私用は出来ない。

【生活改良普及員】

- 生改としての初任給は月 7,000 円だった。（「それなら、担当地域に行かない方が出費がなくてトクですよね。」という調査団の質問に）バス賃ぐらいは別途出ていたかもしれない。倫理観で、ちゃんと行っていた。
- グループの活動を支える時は、他の“助っ人”ともリンケージをとった。野菜に関しては農改（農業改良普及員）と、啓蒙映画は社会教育委員会理事とリンケージをとった。女性達をその気にさせる、ムードを作ると同時に、農家の要請を行政に繋ぐと言うのも生改の重要な役割。
- グループがその先どうなっていくかは分からないけれど、今まとまろうとしているときは分かる。
- 普及員とグループは相乗効果をもたらす関係にある。
- 新しい活動をやりたがらない人には無理には勧めない。自分がイイと思えばやるので無理強いはしない。
- 普及員をして良かったのは、昔、何らかの関わりを持った人が今でも声を掛けてくれること。
- 普及員は人との繋がりで仕事ができる。単純に長く勤めればいいというものではないが、長く勤めれば（人との繋がりも増えるので）仕事がしやすくなる。
- 特に、昭和 39 年に地域濃密指導が始まったが、この体制はよかった。
- 昭和 54、55 年ごろを最後に岩手県の生改採用は無くなったので、昭和 32 年生れの人が最も若い生改である。生改の仕事と家庭の両立が難しくて、途中で辞めていった人もいるが、今は生改の数が少ないので辞めづらくなっている（Ｉ－Ｅさんの一期上は 8 名採用され、Ｉ－Ｅさんの採用の年、昭和 34 年は就職難でＩ－Ｅさんを含めて 2 名が採用された。昭和 43 年には岩手県に合計 73 人いたが、在は 21 人）。

  ＊　Ｉ－Ｅさんの場合は、ご主人の両親とは別居の核家族（ご主人と息子さん二人。）だったこと、ご主人が協力して家のことをしてくれたことで続けやすかったという。

当時は産後 8 週間で職場復帰しなければならなかったので、ご主人が子ども達を保育園に連れて行ってくれた。

【派遣の為のカリキュラムへのサジェスチョン】
（もし、Ｉ－Ｅさんが途上国に生活改善で派遣されるとしたら、事前に何を学んでいきたいかという調査団の質問に）まず、言葉。それと、相手の国の人の普段の暮らしを知る為、生活習慣について。生改は相手あっての仕事なので、最初から何かやろうと思わずに、一緒に暮らしているうちにニーズを見つける。日本で農村に入る時も同じ。いきなりは何も言わずに様子を見る。実際に“ やる ”のは現地の人達なので、受け入れられなきゃ実現しない。

【岩手県の海外研修員の受け入れ実績】
平成 5、6 年に岩手はアジアの農林水産のリーダーを研修員として受け入れ、生活改善分野では女性がやってきた。現地研修の 1 週間は、幹線道路沿線でアクセスの良い、シガに 3 日間、水沢に 3 日間、ホームステイしてもらったが、特に問題はなかった。その後の交流も続いていて、岩手からその研修員を訪ねて相手の国へ行ってきたという報告も聞いている。

【岩手－１３－４】
場　所：岩手県沢内村　沢内バーデン
日　時：平成１３年７月１５日（日）午後
面会者：Ｉ－Ｆ氏（65 歳・長男）
調査者：池野雅文（議事録担当）

1.　面会者属性
1.1 略歴：
- 花巻にて酪農を学び、昭和 32 年帰郷後（当時 21 歳）、牛飼いになる。
- 部落の振興（含む生活改善）の牽引役として度々登場
- 生活改善活動にも積極的に関与（活動内容を知らせるガリ版刷を配布：小学校を利用）
- 長瀬野新集落和衷会初代会長（部落会長）（昭和 47 年 4 月）

1.2 家族構成：
(1) 父：沢内村元村長（深沢元村長の一代前村長）
(2) 母：沢内村前婦人会長、長瀬野生改グループ初代リーダー、現 90 歳、同居
(3) 長男・姉 3 人：県内村外婚出 1 人、村内婚出 1 人、部落内婚出 1 人（Ｉ－Ｇ、現 71 歳、元生改グループリーダー：小國氏取纏資料を参照）
(4) 妻：初代生活改良普及員（沢内村担当）現 66 歳

2. 「長瀬野」における生活改善関連略史（下記収集資料参照）
昭和 02 年 愛国婦人会発足
昭和 12 年 国防婦人会発足
昭和 22 年 青年会運動活発化
昭和 26 年 PTA 婦人部発足、長瀬野部落公民館設置
昭和 27 年 季節保育所始まる
昭和 29 年 長瀬野婦人部結成
昭和 31 年 生活改善グループ結成、食品共同購入始まる
昭和 32 年 典型部落指定
昭和 33 年 新生活運動育成地区の県指定（県より集中支援）
昭和 35 年 全国新生活運動優良地区表彰にて大蔵大臣賞
昭和 39 年 県低開発地域農業格差是正パイロット地区指定
昭和 40 年 生活改善パイロット地区指定
昭和 44 年 長瀬野地区開発研究会結成（45 年、新集落建設協議会に改組）
昭和 45 年 集落再編成モデル事業地区として経済企画庁の指定
昭和 46 年 集落再編成事業開始（35 戸新集落に移転、その後昭和 54 年までに 17 戸移転）

昭和 47 年 県生活改善優良グループ賞
昭和 56 年 県生活会議（町村づくり推進地域指定）
昭和 59 年 活力ある村づくり指定

3.「長瀬野」行政区
3.1 他部落民からみた「長瀬野」の印象：
「べごのくそと長瀬野の衆はゆだんならねぇ。」
「かすみを食って生きている（相談ばかりしている）。」
3.2 「長瀬野」と「両沢」
昭和 46 年に現在の「長瀬野」に集落移転（集落移転事業は他に山形県小国町、北海道で実施）。移転しなかった地区は両沢部落と呼ばれる（約 3 割残る。比較的大規模な稲作農家およびその分家が残った）。行政の末端組織としての行政区としては「長瀬野」と「両沢」を一つとして「長瀬野」としている。適宜、「長瀬野」と「両沢」を区別している。
(1) センサスにおける農業集落：長瀬野、両沢に区別
(2) 自治会（振興会）：長瀬野、両沢で一組織
(3) 農家組合（農協）：長瀬野、両沢それぞれに存在
(4) 水利組合：長瀬野、両沢で一組織
(5) 集落公民館：長瀬野、両沢それぞれに存在
(6) 小学校区：長瀬野、両沢双方とも猿橋学区
(7) 農振区分：長瀬野、両沢双方とも中部地区
(8) 婦人会、生活改善グループ、農協婦人部：長瀬野、両沢で一組織
(9) 老人クラブ：長瀬野、両沢で一組織
(10）青年会：以前は存在したが、消滅した。
3.3 「長瀬野」部落組織（長瀬野和衷会）
(1) 昭和 47 年 4 月創立総会（総会年 1 回春彼岸の頃）
(2) この会は、新集落誕生を契機として、住民の連帯感と相互扶助を基本とする共同意識にめざめ、快適な生活環境をつくるとともに所得水準の向上につとめ、明るいうるおいのある近隣社会を創ることを目的とする。
(3) 事業
- 生活の改善向上に役立つこと
- 生活環境改善に役立つこと
- 新集落内の会館、広場、排水施設等の管理運営
- 行政機関及び各種団体との連絡協調をはかること
- 生産所得の向上に関すること
- そのほか目的達成に必要なこと

(4) 役員

会長（1 人）、副会長（1 人）、委員（8 人）、監事（2 人）

部落役員任期 3 年（再任可）

3.4 婦人活動組織

部落の課題の中でも、女性に任せたほうが良いことは婦人会にまわすこととしてきた。男女共同作業が必要な場合には協同で実施してきた。

(1) 婦人会、生活改善グループ、農協婦人部：長瀬野、両沢で一組織
(2) 各組織はほぼ一体であり、リーダーは兼任していた。基本的に全戸参加であった。その後の農村生活の変容、非農家の出現、組織機能分化にともないメンバーは一致しなくなってきた。リーダーも各組織ごとに任命されるようになった（いつ頃からかは不明）。
(3) 元保健婦によると、沢内村のある部落には婦人会（35-40 歳以上）と若妻会（35-40 歳以下）が存在していた（長瀬野に両会が存在していたかどうかは不明）。
(4) 部落の一組織として認められているので、少人数であっても婦人会として部落公民館（調理場も敷設）の利用が可能である。
(5) 農協から農協婦人部資金の支援有り
(6) ４H クラブ（女子）：昭和 27 年から公民館にて季節保育所開設（昭和 46 年村の保育所に統合）

3.5 その他

(1) 毎月初日、ゴミさらい（全戸 1 人：男女共に 1 人前として認められる。但し、出不足金はなし。）
(2) 部落流入者に対しては、部落規約が記された契約書に署名する。
(3) 宮参り：生活改善の一環として、農休日として公的な休みとした（集落移転以前から）
(4) 農業委員会、土地改良区の委員は、部落推薦する。
(5) 昭和 31 年に長瀬野小学校に電話設置（沢内村で 2 番目に設置）
(6) 旧長瀬野まで村の除雪ブルドーザーは来なかった。オラたちも雪のない道を歩きてぇ、と県道に近いところへ移転。

4. 長瀬野の対行政戦略

4.1 長瀬野会館（部落公民館）

（長瀬野）集落移転条件として公民館設置（部落共有の座敷として立派な館）を国へ要請

（経企庁）35 件程度ならばそれ程大きくなくてもよいだろうと却下

（住宅金融公庫）当時公庫の融資条件として、36 建坪を最大規模として設定

（長瀬野）建築利用後、部落総出の行事を行うにはより広くなくては機能しないと再認識

（長瀬野）沢内村に拡張の要請

（沢内村）拡張助成

* 会館は盛大な冠婚葬祭等の簡素化（生活改善の一環）を主目的として設置。結婚式 2 次会、法事の他にもさまざまな部落行事・活動に利用されている。

4.2 上下水道整備

（長瀬野）集落移転時に上下水道も整備することを要請

（大蔵省）認められないと回答

（長瀬野）下水道が整備されないならば、集落移転事業を中止するという殺し文句

（岩手県）結局、県が国と部落の間に入って、下水道を整備することになった。

* 沢内村としては、数年前にようやく整備できた。

5. 部落の祭事（公民館行事）

(1) 新年講和会（1 月 1 日）

(2) 年祝い（以前は小正月 1 月 15 日、現在は新年講和会と併せて開催）

(3) さなぶり（田植え後）

(4) 盆踊り（8 月 15 日、沢内村全体から集まる）

(5) 敬老会（敬老の日）

6. 収集資料

(1)しんしゅうらく 新集落移転 10 周年記念誌、昭和 56 年

(2)しんしゅうらく 新集落移転 20 周年記念誌、平成 3 年

(3) 集落再編成をめざして、照井洸、昭和 49 年 2 月、生活研究第 8 号

* しんしゅうらく 新集落移転 30 周年記念誌は、平成 13 年 12 月 1 日発行予定

【岩手－１３－５】
場　所：岩手県和賀郡沢内村バーデン
日　時：平成１３年7月１５日(日)午後２：００～３：００
面会者：Ｉ－Ｇ氏（元生活改善グループ・婦人会リーダー）
同席者：Ｉ－Ｃ氏（岩手県農林水産部　農林水産企画室）
　　Ｉ－Ｂ氏（岩手県農政部農業普及技術課農村生活主査）
　　Ｉ－Ｈ氏（北上農業改良普及センター）
調査者：(調査団員全体による全体インタビューの後、個人聞き取り)
担　当：小國和子（個別聞き取り分のみ）
テーマ：生活改善活動とのかかわり

４．　面会者プロフィール

昭和５年、長瀬野生まれ。父は村長。母は婦人会長。一男三女の長女で、Ｉ－Ｆ氏は３番目に生まれた長男。尋常小学校卒業。妹達はそれぞれ北上、沢内村に在住。昭和 22 年、両親の紹介で結婚。嫁ぎ先もＩ姓。現在 72 歳。
「生家は地主で、昔（父の代）から、小作の世話をしてきた。布団、食器、米等、「本家で」面倒を見て、貸し与えてきた。」

５．　婦人会活動

2-1 婦人会への参加とリーダーとしての母の役割

- 結婚後、婦人会に参加。当時のリーダーは母。お姑さんが良い人で、理解があって、自分を婦人会に参加させてくれた。
- 婦人会への参加も、その後、自分がリーダーとなって世話をするのも、特別なことではなく、自然なことだった。昔から家に人が集まるのは当たり前だった。
- やる気の無い人に対しては、母が説得していた。その人の長所を見つけて、いい所を見つけ出して声をかけていた。例）人のところに集まるのは苦手だが料理が好きな人に対して、「美味しく作れるよう、あんたに来て欲しい」といったようなこと。
- 貧しい家庭もあったが、そういう人にも、母が、例えば裁縫をやる時に、縫う布地がなければ自分の服の悪くなったのをほぐして材料を用意して与えて教える、といったような配慮をしていた。
- 母は、「人には優しく、自分に厳しく」「わが身をつねり、人の痛みを知れ」といい、ある意味臆病で、人を傷つけないよう、一歩ひいて考えるようなところがあった。今でも、「あんたのばあさんに言われたお陰でこんなことをした（出来た）」と人に言われる。

３．生活改善運動

3-1　生活改善活動と婦人会

・　①婦人会、②農協婦人部、③生活改善グループは、実質的には同じで、自分の代まではリーダーも 1 人三役をしていた。自分の次の代からそれぞれ別のリーダーとなった。理由は「手分けしてやったほうが良い」「1 人では大変」「その方が楽」といったこと。「意識の変化。」

・　実際、（中心となって活動するためには）すごく家族の協力が必要であった。

3-2　活動内容

・　共同購入：煮干、油など、小売店に集団で頼んだ。個別に買うより単価が安くなった。旗振り役は母と、普及所からきた生活改善普及員さん。栄養改善が目的だった。「村(村政全体)の動きはまだわからなかった」。

・　料理：油を使った料理、秋刀魚のフライなど。

・　カマド改善。

・　「いろいろな改善」：蒔からストーブへ（灰が飛ばない）。水屋、台所、お風呂。→住宅改善へ：住宅改善は、部落全体の構想だった。

・　文集作り（母の時代）。

3-3　生活改善グループで新しく始めた事

・　色々な工夫。自分の考えでは出来ないこと。料理・生活の工夫。献立。家を綺麗にする。環境を良くする。家の中の灰を無くす。

・　具体的な活動は覚えていないが、３つ（農協婦人部、婦人会、生活改善グループ）の中で、一番楽しい活動だった。一番自分の暮らしと密着していた。農協も大事だが…。

3-4　リーダーに選ばれた理由

・　当時リーダーだったＩ－Ｋさんから、「次はＩ－Ｇだ」と言われた。

3-5　最も印象的だった事

・　村外への研修：他生活改善グループ活動の様子を見に行った。普及員さんが情報を持ってきて段取りしてくれた。例）漬物。住宅改善。畜舎内の休憩場所、着替える場所づくり。グループのメンバーには自分が声をかけた。「人様のものを見に行く」、出かけることを皆喜んでいた。実際に見ることは随分とよかった。楽しみながらやった。

3-6　その他・特筆点

・　長瀬野部落の団結力「相談ばっかりしている」「他部落から、霞を食って生きている」とまで言われては、「脱落できない」と言い合ってきた。全体のまとまり。

・　集会場：学校、そして公民館。

・　部落移転：猿橋への移転前の自宅は大抵の家が農作業所として維持している。（Ｉ－Ｇ氏自宅訪問の際には、住宅改善で行なったという水屋、流し、風呂等が今も残さ

れていた)。

＊調査者所感

・長瀬野部落では、生活改善を個別の事業として認識するよりも、部落全体のコミュニティー開発の一部として部落の歴史の中に埋め込まれているようである。部落の特徴は、地主のリーダーシップ、地理的な不便さ、雪害他の問題共有などを基盤とする内側にむけた人々のまとまりに代表されるように思われる。特に後者の「日常的な問題の共有」を基盤とする相互扶助の動き（結に代表されるようなもの）は、同地の生活改善活動を地域開発の視点から考える上で重要な要素であると考えられる。

【岩手－１３－６】
場　所：沢内バーデン
日　時：平成１３年７月１５日（日）午後１２：００～午後３：３０
面会者：Ｉ－Ｉ氏（生活改善グループ・婦人会リーダー）
同席者：Ｉ－H氏
調査者：山崎、渡辺
担　当：渡辺雅夫

【Ｉ－Ｉさん略歴】
・ 高等小学校卒業後青年学校に３年間通う（戦時中のため１週間に２～３回）
・ 大工の棟梁と結婚。夫は長男ではなく姑との同居はなかった。
・ 昭和 30 年に家屋を新築する。（このため移住はしなかった。）
・ 昭和 33 年、教育委員会の婦人学級や保健婦さんからの働きかけがあり、照井愛さんの声掛けで生改グループを開始。当初の参加者は 40～50 名。
・ 昭和 45 年西和賀生改グループの初代会長になる。
・ 昭和 47 年～48 年、第二次先進地研修に参加
・ 今も現役で生改グループの活動を行っている。メンバーは 27 名で漬物などの加工を行っている。年齢に合った仕事を割り当ててもらっている。

【活動内容】
・ 昭和 20 年代「炊事場の改善」「風呂場の改善」「設備の改善」の３点が強化された。
・ 水屋といわれる台所と風呂場にしきりをつけた。（以前はしきりがなかった。）
・ 昭和 27 年、女子青年（４H クラブ）を中心に季節保育所を設置した。
・ 昭和 33 年、学校児童の体位の低さを知り、普及員の指導のもと三色の栄養素の学習を行った。児童の一週間分の食事内容を調べ、栄養面を考え煮干・食用油・肉などの食材の共同購入に踏み切った。それらのお金はスイカや花の種を売って作った。野菜は自給自足できるよう計画的に作った。
→これらの活動が発展して学校給食となった。
・ 昭和３４年、蚊・ハエの駆除。「ウジ殺し」を使い共同で駆除。布団干し。家計簿記入。牛乳飲用奨励。
・ 昭和４１年、文集「りんどう」第一号発行。
・ 昭和４３年、婦人のための音楽教室を開いた。初めは 10 人程度のメンバーで、小学校にあったピアニカやアコーディオン等を使って演奏。指導は元小学校の先生から受けた。鍵盤にドレミを書いて練習し、各地で発表を行い、後に県大会にも出た。

【不人気だった活動内容】
・　家計簿記入
・　食事調査

【Ｉ－Ｉさんの生改グループの運営体制】
・　集会は毎月一回行った。夏は夜８：００～10：００、冬は農閑期に当たるため昼間に行った。
・　活動内容の決定は、４月に行う年間の行動計画の策定時に行った。活動内容のアイデアはＩ‐Ｇ氏の母、生活改善普及員から得た。
・　生改グループのメンバーのマジョリティは農家の長男の嫁であった。
・　連絡は各部落の班長を通じて行われ、班長から一戸一戸の家に伝えられる。この連絡体制に問題はなかった。

【生改グループ活動が始まった頃言われていた改善すべき課題】
・　自給自足のバランス
・　主婦の過重労働
・　子供の栄養不良と病気
・　農村婦人の地位の低さ
　（この「農村婦人の地位の低さ」について、「そのように実感していましたか？」との調査者の問いに対して、Ｉ－Ｉさんは「そう言われていたものなあ。私はそうとも思わなかったけど」とコメントしていた。）

【人間関係】
・　生改でやろうと言ったことは皆大きな抵抗もなく守ってくれた。皆協力的だったと思う。舅も夫もうるさいことは言わなかった。
・　「皆がやるのにやらないなんて…」という集団の暗黙の圧力のようなものもあったと思う。
・　Ｉ－Ｋさんのグループにはあまりいなかったが、時々足を引っ張る人もいた。例えば会議で決まったことに対して色々言う人がいた。これは特に会議に欠席して誘っても出ない人に多い。
・　集まるときは自発的に集まった。
　（これに対し、同席していたＩ－Ｊさんは「男の場合は行政サイドから集まれといって集まるが、女性や青少年は自発的に集まった」と語っていた。）

【Ｉ－Ｉさんのリーダーとしての体験談】

- 農家ではなく大工の家に嫁いだので、農作業は比較的にきつくなく、時間もわりと自由であった。（「こういう人もいないと生改は盛り上がらない」と同席者Ｉ－Ｊ氏の弁）
- 「会長なんかして忙しいわねえ」と冷やかされた事もある。
- 一生懸命に働き、家族や農家の理解を深めようと心がけた。
- 時間はきちんと守り、人に迷惑をかけないよう心がけた。

【岩手－１３－７】
場　所：岩手県和賀郡沢内村　沢内バーデン
日　時：平成１３年7月１５日（日）午後２：００～５：３０
面会者：Ｉ－Ｊ氏（７７歳）
調査者：佐藤（寛）、水野、小國、関、佐藤（仁）、池野、小笠原、矢敷、渡辺（雅）、
　　山崎、渡邉（菜）
担　当：渡邉菜穂子

対象者について

大正 13 年生まれ（1924）。両沢生まれ両沢育ち。（？）小学校高等科を卒業しそのまま両沢地域の家へ嫁ぐ。現在長瀬の老人クラブで活動中。

生活改善運動

昭和 39 年（1943）七内川地区の理事を務める。農協婦人部とは異なり、生活改善運動は自己資金で活動をしていたので、「自分達のもの」という意識であった。また、生活に密着していて結果がすぐ見えるため、やりがいを感じていた。とにかく楽しかった。

乳牛

昭和 32 年もしくは 33 年（？）、村に乳牛が数頭はいり、Ｉ－Ｊさん宅も１頭飼育するようになる。乳は農協がまとめて買い取ることになっており、毎日６㎞以上離れる農協まで売りに行った。乳絞りは一日２回。近所からほしいといわれれば学校へ行く子どもに持たせ、子どもを介して譲っていた。（売っていたのか、あげていたのか不明）

大変良く乳が出る牛だった為、乳代による収入はかなりになった。帳面に毎日の売った量と料金をつけて管理をしていた。長男の盛岡の農学校の学資は乳代でまかなえた。（長男の受験では、工業高校に行ったら村には戻ってこないので、不合格を前提に農学校を受験させたが、予想がはずれ合格してしまった。長男は公務員となり水利組合に 10 年ほど勤めた後、村に戻ってきた。その子ども（孫）は大学を出て現在長野に暮している。）乳牛は大体７～８年もち、乳牛をやっている間に一度若い牛と取り替えたことがある。夫が病気にかかったのがきっかけで手間のかかる乳牛は止めた。その後昭和 48 年に夫は死亡する。

食生活改善運動

生改さんの開催する料理講習で習ったものは家でよく実践した。自分の子どもを育てた時は忙しく手料理はあまりしなかったが、孫（３人）の為には良く作った。（生活改善運動が盛んだった頃は？）姑と孫の世話で大変忙しかった。

講習のメニューは寒天を使ったデザート、正月料理など。今では肉のたれなどをやって

いるらしいが、自分は活動に参加していないので良くは分からない。クリスマスケーキを習ったのを今でも良く覚えている。（資料によると昭和40年12月20日の講習のメニュー。北上農業改良普及センター保存の資料によると、「家族の話し合いが楽しくできるようになる」という目標の元にクリスマスケーキをメニューとした事が分かる。「参加者は単にケーキの作り方を覚えたと思っているかもしれないけど、本当に意図していた事は別にあったのよね。」と生活改良普及員のＩ－Ｊさん。）

現在の生活改善運動

今はほとんど活動に参加していないので良く分からない。ただ、長瀬野グループでは「漬物研究会」というものをやっているらしい。人参、昆布、カタウリを漬けた「金コン漬け」は売れなかった為、今年から「福神漬け」「蕗漬物」「山独活味噌漬け」を始めた。主に商工会、その他には農協を介して販売している。

リーダー

今では沢山の活動があるので、お父さんたちは誰でも何かしらのリーダーを引受けている。リーダーとは押し付けられるもの、順番で回ってくるものが多い。

移転

夫は移転してもしなくてもどちらでも良いという考えをもっていた。しかし、自分は①農業をしていて広い土地を所有している事②牛を飼っていたことを理由に大反対をした。他の人にも移転反対を呼びかけた。本家（ただし更に本家がある）である自分の家が移転しないので、分家も「本家がしないのなら分家も動くべきではない」と移転しなかった。

両沢部落

長瀬野地区の一部であり、現在 16 戸。「私は長瀬野の人間ではない。両沢の人間である。」という意識が強い。生活改善は長瀬野地区の運動として一括りにされているが、今までもまじめで優秀なリーダーは両沢出身であった。また、両沢は流行ものに敏感であった。ズボンを履き始めたのも両沢から。「おめぇ、男になったか」と近所の人に言われたりした。その他にも、両沢の蕨は地区の中でも最も美味しいと思っている。最近土地の人でない人が部落に住み始めているが、両沢を選んだのも両沢の人の良さが気に入ったからだと思う。

【岩手－１３－８】
場　所：岩手県庁４階特別会議室
日　時：平成１３年7月１６日（月）午後２：３０～４：３０
面会者：Ｉ－Ｋ氏（元専門技術員　岩手県生活改善係長）
調査者：佐藤（寛）、水野、小國、関、佐藤（仁）、池野、渡邉（菜）、小笠原、山崎、
　　渡辺（雅）、矢敷
担　当：山崎照美

【Ｉ－Ｋ氏紹介（高橋さんより）】
・2 代目の生活改善係長
・専門技術員（普及活動、住宅）
・国連婦人の十年の時には、県の男女共同参画の企画調整部
・農業大学校の教授
・婦人・高齢者再就職のための就業支援センター
・日本初の長寿社会進行財団　課長
・現在 77 歳

【Ｉ－Ｋ氏が生改になるまで】
・北上出身。農家の生まれ。
・3 歳で母親が死亡。姉が勉強をしに行っていて、結核を患い帰郷。それを看病していた母も感染。2 人とも失う。農村女性の生活が大変だということは身にしみていた。それにも増して、苦労した母の怨念を払いたいという気持ちをずっと持っていた。
・高等学校を卒業後、ラジオで、講習所に生活科ができて、生活改善普及員になる人材を募集していると言うことを知る。
・「詳しいことは県の農政部へ」というラジオの言葉を頼りに、実際に農政部を訪れ、講習所入学の詳細を聞く。
・昭和 26 年当時、教員にならないかという話も多かったが、自分は苦労して自分を育ててくれた父に報いる為にも、脱落せず、初志貫徹することを決める。
・桑原さんは、生改の採用試験と、県職員の採用試験の両方を受けた。講習所卒業生で、生改の第 1 号。短大を出た生改さんは、Ｉ－Ｋさんの前に 10 人程いたが、途中で止めていく人が多かった。

【研修生の受け入れ】
・去年ラオスの人を受け入れた。その時に、彼らに話をする機会があった。その後「ラオスの青年に学ぶ」という文章をどこかに寄稿している。ラオスの青年の目に、30 年代の

岩手農民の目と同じ輝きを見た。日本人は今は失ってしまったものだと思う。
・中国へ行く機会もあったが、その時も同様のことを感じ、中国は日本を追い越すであろう、という脅威を感じた。
・ラオス（公務員がきた）、中国は、岩手県の国際交流の関係で来た。（国際交流基金のことか？）毎年、よその国からきている。
・途上国は、日本の二の舞になってほしくない。
「生活」というのは、生きる事全て。そして生産は生活の為のもので、生活は生産の為の道具ではない。どういう「くらし」をしたいのか、ということを常に基礎とし、その後、その為にお金はどうするか、仕事はどうするか、という物の考え方が必要だ。

【岩手生活改善の特徴】
・岩手は人材をまず育てた。
岩手、長野、香川では、講習所で生改の育成を行っていた。

【Ｉ－Ｋ氏の生改人生】
・生改になった後、県庁に勤めるという話になっていたが、その時は生改の労働運動などで県庁がゆれていた時期であり、また現場での経験を積むことが大事だという理由から、遠野に派遣された。当時、Ｉ－Ｋさんは、東京に行ったことはあっても、遠野には行ったこともなかった。
・遠野での経験は、本にまとめられている。（入手済み）
・現場での経験は 3 年のみ。その後はずっと県庁で県政にかかわってきた。
・専技を 2 つ取っている（普及方法、住宅）
住宅は一世一代のこと。当時住宅は、「人寄せのため」建てられた。つまり、玄関や座敷は素晴らしいが、台所やトイレなどは、ほとんど手をかけなかった。この実体を見て、意識改革をしなければ、という思いから、住宅の専技も取った。

【農水の素晴らしいところ】
・「課題は現場から拾い上げていた」
他の省庁での経験から比較してもそれは言える。例えば労働省の男女参画に関しては、法律などの施策を上から下に流すだけ。現場の声を聞いていない。現場から課題を発見し、課題解決の為の計画をし、普及し、そしてまたそこで課題を発見していくという流れはどこにいっても基礎になるものだと思う。
・これは、初代の生活改善課長で、戦後の家庭科教育の基礎を作った山本松代の考えに基づいている。

【Ｉ－Ｋ氏の現場活動の歴史】

・Ｓ30－35 年

乳児死亡率が高い。お産を産婆さんにかからず、自分でする。また子供はもう要らないと家族に言われ、中絶をせざるを得ないという実態。

・「皆本当に真剣だった」

その背景として①敗戦から立ちあがるため、②農地法、農協法、普及事業の 3 大改革があると思う。

・女性達も稲作を皆学んだ。

当時は夜に集まった。その為に女性は昼に「かせぎだし」をした。かせぎだしとは、夜外出する時間を作るため、昼になるべく多く仕事をしたり、夜の分の仕事を済ませるようにすること。その為、休憩の時間を削ることになる。

・　**Ｓ23 年**

生活改善推進員（女性）を 13 人、郡に一人の割合で、配置する。

生改さんの前に配置されていた。

農家に嘱託していた。

これは生改さんが出るようになると、なくなった。

・S24 年

農業推進員（男）は 54 名。生活改善推進員が 13 名。

「生産と生活は両輪だ」と言いながらも、実体として、そのようなことは見られなかったことがわかる。いつも生産が有利だった。

・S28―29 年

当時県のレベルで、生産改善指定部落というものがあったが、Ｉ－Ｋさんはそれをヒントに、自分の持ち場に生活改善指定部落を決め、活動を展開。

・カマド改善をしようと思っても、嫁はサイフを握っていないので、改善できない。

↓　そこで・・・

まずは、生改がカマドの作り方をマスターする

グループの中では、夫婦で参加するものもあった。そこでは、男女が協議をして「愛妻貯金」というものを始めた。

「愛妻貯金」とは…毎日米一握りを取り置き、それを集めて、毎月の会議で「無尽」として提供する。そしてどうしてもカマドの改善が必要なところから順番に改善をしていった。ちなみに当時、カマドの改善には 3,000 円かかった。

・岩手で初めて料理コンクールを行った。

当時、労働は苛酷で、1 日 5 合は食べないと、体がもたなかった。しかし、米だけでは体に負担がかかるので、油を取る、また食事のバランスを良くすることで改善をしようとした。
会場など無いので、寺の境内にリンゴ台を置き、その上にまな板やコンロを置いた。また七輪なども利用した。決められた時間の中で、どういうものを作るかを競った。

・Ｓ28
冷害の年。
保健婦と生改を集めて、冷害食講習会を行った。
Ｓ30 年に、岩手は初めて米の自給を達成。それまで、「カミヘイ」「シモヘイ」などでは、ヒエが主食だった。
「ミヤモリ」、「釜石」、「遠野（ここに住んでいたようだ）」を一人でカバーしていた。
緑の自転車。1 ヶ月に 200 時間以上の労働。当時はＴＶがなく、ラジオのみ。機材はスライドを使用（幻燈＝フィルムを巻くタイプ）。母親と一緒に来る子ども達がスライドを楽しみにしていた。県が配布し、普及所においていた。内容は、カマドの改善や、食事改善。現在残っているかはわからない。Ｉ－Ｋさんの家に一つあるかもしれない。
「皆熱心だった」
まずはモデル部落で開始。それを周りの人が見に来て、拡大していった。
電気はあった。
その他にも、生改は、衣食住、家庭生活。とにかく生活の全ての領域に及んだ。作業着の改良（直線断ちではなく、体の動かしやすい服を）もやった。

【働きかける対象は？Ｉ－Ｋさんが働きかけてグループを作ったのか？】
いきなりはだめ。また婦人会はかなり規模が大きく、難しい。
Ｓ26 年　岩手の普及指定部落を例に、自分で拠点集落を選んだ。
そこのオピニオンリーダー、婦人会の活動をやっている人、頑張っている人などに働きかけた。
このような人達だけではなく、当時は皆真剣だった。男性、女性を問わず、どこに行っても会場は一杯だった。場所は本家、旧家で大きな家の座敷などを借りた。
例えば、「ツキモウシ」という所はそうだった。ツキモウシは、遠野から自転車で 1 時間。遅くなると農家に泊めてもらった。しかし、風呂は皆から丸見えという所にあり、困った。

【嫁が参加するまで】
・「カミモウ」「アヤオリ」など、地域によっては、おしどり会（男女ともに参加するグル

ープ）があった。
皆で話し合い、無尽をすることにした。
なぜなら、嫁は何事も「ころどにできない（自由にできない)」。いしめびつ（こめびつ）を嫁が自分で開けて、米をはかることさえ出来なかった。
旦那が家族を説得した。
物事が上手くいくと、嫁を外に出してもいいという話になった。
例えば、冷害食で、ひえの五目飯を作った時などは、「同じ材料でこんなにうまくできるもんだ！」と大好評だった。
嫁さんは、姑に許可をもらって、活動に出かけた。また出かける時間を作るために、工夫をした。また活動で使うような食材なども姑に「頂戴します」と許可をもらってから持ち出しをしていた。
そのようなことだから、料理講習で料理を作っても、試食をしない。もし試食をしてもほんの少しだけ。そして、料理をすべて家に持ちかえり、姑たちに食べさせる。「嫁は大したもんだ」と好評。

【活動の糸口をつかむ】
・ 女性一人一人を囲む、家族、地域を見て、どこをつつくか、誰を泣き落とせばいいかを見る。しかし、どこをつつくかということは、すぐにはわからない。時間がかかる。

【働きかけるのは当時のＩ－Ｋさんと同年代の 20 代の嫁が多かったのか？】
そんなことはない。姑さんに働き変える事が多かった。また嫁さんといっても、20 代後半以上で、当時のＩ－Ｋさんよりも年上だった。

【岩手の特徴は？】
・東京に近い宮城などには馬鹿にされていた。「農林省のめんこ（？）になりたくて頑張っている」と。
・旅費が出ないから、農村に出かけて行けないといった保健婦に、「農家はそんなものではない、自転車があるのだから、それで行けばいい」と叱りつけた。そう言う気概のあるところが特徴だと思う。来て欲しいと言われれば、1 日 3 回でも講習をした。

【県庁に来てからしたこと】
・S33 年から 34 年　味噌の実体調査
悪い米（くず米）での麹の作り方を調査研究。1 年かからずに出来る味噌を開発し、それを普及させた。この調査研究、普及は特に国から言われたわけではなく、自分達でやった。

当時、県南 1 人に豆 5 升（7.5 トン）必要。県北では豆 1 トンが必要だということがわかった。2 月の馬の日に豆を煮る。そしてつまごをはいて潰し、ためにする。それを 6 月までおいておき、潰して、味噌作りに使った。しかしその頃になると、玉はカビがはえ、固くなっていた。これは、色がつく、そしてこじがなくても出来るということから、農民は実施していた。また、だいたいは、うわずみの部分は、食べることが出来ず、牛や馬などの家畜に食べさせていた。
そこで、実験をしてみると、1 日置いて味噌を作っても、色が出ることがわかったので、麹を少し足すことになっても、そちらの方がいいということを伝えた。
味噌作りは、おこ（どぶろく。袋の名前から由来している？）作りにも応用できたため、男達に大変喜ばれ、嫁が学ぶことがよいことであるという気持ちにさせた。

【県庁へ来てからの方針】
・Ｓ29 年　実績発表が始まる。
生改グループ、４Ｈクラブ、皆発表した。皆進んでやりたいといった。ものすごいエネルギーだった。当時活躍していた人達は、現在は、ＪＡの組合長になったり、生改グループのリーダーをやっていることもある。まだその中には、託老所をやる人もいる。

	生改さんの数	グループ数
S28 年	21 人	
S29 年	31 人	207

・Ｓ29 年　第 2 回実績発表で、遠野の昇光会（おしどり会）が 1 位に入賞した。

・Ｓ31 年　阿部知事の時
もっと農村に活力を！を目標とし、農業家振興対策が取られた。
典型部落を指定した。指定の際には、町や部落に（典型部落を）推薦してもらった。
活動としては、五課合同であたった。五課とは、農政、農産普及、保健、社会教育、漁政である。それぞれがそれぞれの対応策を実行した。
農政は、簿記の指導。農産普及は生活改善、生産対策。保健は家族計画と健康管理、社会教育は生涯学習、公民館の建設助成などである。
村に入る前に、村人と共に、どういう課題があるのかを検討する。そして入ったあとは、それぞれの課が出来ることをするというような体制であった。
「ヤハバ」という所へは、知事も行ったことがある。その時は集落全員が集まった。そして、嫁さん、年寄り、子どもなどというように、それぞれわかれて、集落の問題を徹底的に話し合った。これを「農家を明るくする相談会」という。Ｓ31 年から 41 年くらいまで続いた。課題解決は生改だけではなく、どの課も取り組んだ。資料がどこかにあ

るはずだ。
社会教育課が、頑張っている集落に公民館を建てた。保健は家族計画を推進。これはよめだけではだめだというので、夫婦合同で参加することを呼びかけた。
・岩手県で東大を出ている女性が生活改善にきた。その人が、５課合同での活動をやった。
・活動は、典型部落、新生活運動、健康問題、集落再編へと変わっていった。集落編成については、それまでの土台があって、そういう方向に向かったものだと理解している。
集落再編をしたことで、よその人が移って来る、そして新しい血が入ることで活性するという面もあると思う。
・このような展開のなかで、共同炊事、共同保育も行った。
・Ｓ31 年から１市町村に生改が 1 人という体制になった。
カマド、台所改善など目に見えるように、展示をする。つまり指定部落の活動によって、どんどんグループが増加した。

【普及方法専技の研修とその後の活動】
・Ｓ33 年
初めての普及方法の専技の養成研修。
参加したのは全国から 30 人。期間は 3 ヶ月。
各自が、父や母、子供といった役割を演じるロールプレイをし、生活実習をする。それぞれの役割のなかで、プロジェクトを考えるというもの。いろいろな技術が身についた。
梅根悟（教育大：現筑波大）、浜田陽太郎（立教大）、松原（東大）など、教授陣が講師を務めた。

・　Ｓ35 年から普及方法の専門技術員。3 つの指導。
①　地域濃密指導（S33 年頃から。六本木でも初めてのことだった。Ｉ－Ｋさんをはじめとする生活改善普及員の人達と、教授陣が、一緒になって考えた。）―300 人位を対象とする。伝播を狙う。
旧村単位、学区単位、共通の生産と生活基盤を持つ地域を一つの対象と設定し、調査し、課題設定、計画、評価を行った。
②　単独濃密指導―10―30 人くらいを対象とする。グループが対象。
③　一般指導―個人
農家生活白書を作りたいとのことで、農家生活の実態調査（非農家と農家の生活の変化）。同じ集落を 5 年おきに、5 回調査を行った。これも県庁に残っているはずだが…。

Ｓ35 年
食の実体調査を行う…相手の実態を知り、こっちを知ってもらうことが活動にとって重要

だった。
指導をしている所と、指導をしていない所を比較。
やはり指導をしている所の方が、味噌など、新しいことをやっていた。
現場の問題が国に反映され、政策が現場に返り、それを現場で実施してまた国に返る。これが農林省の生活改善だった。

・Ｓ36 年
生改係長誕生。
大橋さん（旧性いずみさん）が初代の係長になる。

・Ｓ37 年
農業の曲がり角。
全国で 2 箇所が選ばれ、3 ちゃん農業（女が主体の農業）で色々問題。これを生活改善だけではなく、生産の立場から考え直すＰＲ会議をする所を選ぶにあたり、岩手はどうか、と山本さんから言われ、それを受けることにした。会議には北海道、新潟、東北 6 県が集まった。
学校の先生、保健婦さん、生改さん、一般の人、多くの人が集まった。子育てか？野菜作りどちらが大事か？というような議論が行われた。
そこに、岩手出身のノハラマサカツ、高知出身のコウロミツ教授が来て、聞いて行った。
農林省 150 人の生活改善普及員増員をやめようという決定が既になされていたのだが、その会合の結果、増員計画が復活し、岩手にも五人の枠がもらえた。

・Ｓ38 年
主婦労働合理化施設、生活共同センターの建設（国の事業）。
イサワ町ハシズカ。
共同炊事が行われた。（食事をするよりも、農作業。農繁休業あるような時代だった。）
現在この村は、国土庁のアメニティーコンクールを受賞。

・Ｓ38 年
農業者健康生活管理特別事業（国の事業）
岩手県下では、沢内で初めて行った。
農林省だけではない、県の保健行政にも取り込みたい。だからあえて、「合煮」にした。「出てきたデータを共有しましょう。活用してください。人力を貸してくださいとは言いません。」他の課に行ってまわった。
　　ところが厚生省の人がきて、「なぜ逸脱したことをするのか、そんなことをしても

らっては困る」と言われた。厚生省の人は、生活改善がそんなことをやっているとは、知らなかったのだろう。

・Ｓ44 年？
　Ｉ－Ｋさん係長になる。

・その他にも岩手独自のこととして、農産漁家住宅対策協議会。
　500 円から 1,000 円で、住宅のデザインを買えるようにした。デザインは、生活や、生業形態の実体を調べ、たくさんのパターンを作った。

＜質疑応答＞
佐藤寛質問
Ｉ－Ｋさんは県政の中に、生活改善をどう位置付けるかという努力をなさったんですね？岩手には、受け入れる素地があったのでしょうか。それとも、力を尽くして努力した結果なのでしょうか？
・農業県だった。
・戦後という時代性もあった。農業を発展させなければ、発展しない。戦後の 3 大改革がタイミングよく。皆真剣で熱意が溢れていた。
・お上からではなく、同じ目線で考えることをした。
・嫁が大変。愚痴が言えない。ノートに嫁の悩みを書いて、それを皆でまわしあうということもした。そうすると、「辛いのは私だけではない」ということがわかって、励まされる人が多かった。皆でやれば出来る。
・また月 1 回の集まりが、嫁にとって人間開放であり、自分の能力を向上する場、楽しみであり、また憩いの場であったということが言える。

これからのＩ－Ｋさんの課題
・結いの精神を活かそう。
・トウワ町に来た、よそから来たお嫁さんの本に感銘をうけた。岩手の「結いの心」を掴んでいる。
・人間は人と人とのコミュニケーションで生きている。
　家族と、コミュニティーが基盤。
　受容し共感することが大事。互いに助け合うこととで人は生きる事ができる。
・老後を助け合って生きるための家を沢内に建てているが、理想はいいけど、難しいことも多い。
　沢内はいいというが、どろどろしている部分もある。

村長の行ったことは素晴らしかったが、そこで止まっていてはいけないと思う。
時代に心は活かしつつ、どう合わせて、現状の実体にせまるかを常に考えていかねばならん。

佐藤仁質問
本に、生きがいと幸福感の違いを書いているが、どのような体験から区別をすることが大事だという考えに至ったのか？
Ｉ－Ｋさん回答
Ｓ47 年　高齢者対策開始。調査。
リタイアしても、生きるはりが必要。「することが無い」ことが問題。
それは生きる望みにかかわる問題だ。幸福感は一人一人違う。
生きがいは、他者とのかかわりの中で。誰の為でもない自分のために。家族の為に、地域・他者の為に。

佐藤寛質問
Ｉ－Ｋさんの発想はどこから来ていると思うか？
・生改としてやってこられたのは、基本的な「生きる力」を持っていたから。そして学んだから、認められてきたと思う。
・やはり「育ち」だと思う。母がいないこと。父の頑張り。ハングリー精神。
死んだ母がどこかで見ているのではないか、と常に母に恥ずかしくないように行動した。
ご飯の前に仏に物を供え、そして感謝すること。
物は、仏に備え、祖父祖母に食べさせてから、次は一番下の子から順番に食べるということ。
民話。岩手では、「まめ」には２つの意味がある。それは「誠実」と「健康」。「まめに暮らせ」。
・父の苦労、そして父の教え。
全てのものは生きていて、自分は沢山のものに生かされているということ（例えば、まだ小さい蕨は取らない。また大きくなったら、自分達を生かしてくれるから）。
・おてんとう様に恥ずかしいことをするな。
・「親の意見となすびの花は、千に一つの無駄はない」親の意見は、なすの花のようにみんな咲いて、みんな実になる。

【「結いの精神」の経験】
・皆の乳をもらって育った。
・自分の家では、味噌つくり機（豆を潰す機械）を村で一番最初に買ったが、肺病のでた

家だからということで、最初は誰も借りにこなかった。しかし、後から、皆わかって、借りに来てくれるようになった。

・昔、川の対岸であった火事の火が自分の家に移った。建ててまだ 3 年しか経っていなかった。

結いの心で、村の皆がそれぞれ少しずついろんなものを助けてくれた。食べ物、家を建てる為の材料などなど。それらを全て書きとめた「お手伝い帳」が今でも残っている。

・ 結いの心＝そうしなければ生きて行けなかった。そういう貧しさがあったということも現実。

以　上

【岩手－１３－９】
テーマ：岩手調査総括コメント
担　当：佐藤仁

★　印象に残ったこと（ここは「はじめて」この問題について調査した人間の印象です）

・ Personal Motivation の強さ：Ｉ－Ａ氏も、桑原氏も若いころの個人的な体験を原動力にして生活改善に力を尽くしてきた。これは、今日、途上国で農村開発に携る人々の動機付けとは異なっている。動機付けの相違は、日本の教訓を普遍化しようとするときの一つのキー・ファクターであると考えられる。

・ 生活改善と地位向上：農村における生活水準の問題は、女性（とくにヨメ）の社会的地位の低さの問題に密接に絡み合うもので、単なる衛生・保健問題ではない。ヨメが取り仕切る領域（台所）の問題が長い間改善されずに放置されたのは、経済的な理由もさることながら姑との関係や村の中での社会的条件に規定されている。

・ 「予防」という革新：直接的な欲望に訴えかけるのではなく、衛生や予防といった成果の顕在化に時間のかかるタイプの活動が制度的に確立し、普及した意義は大きい。「エントリーポイント」的活動の存在は定かではないが、それが全くなくても人々が新しい試みを受け入れていった背景は、今後、掘り下げられるべきものだろう。

・ 「生きがい」と「幸福感」の違い：福祉(well-being)についてのセンの議論をフォローしてきたものとして、「生きがい」の概念は新鮮なものであった。つまり、個人の快楽を中心とする「幸福感」が経済学でいう「効用」にあたるとすると、「生きがい」というのは、使命感や未来志向に引っ張られる他者的な充実感であり、人間「関係」を重んじるところから生じている。センのいうケイパビリティ（潜在能力）は、あくまで個人をベースに生活の質を自由の観点から捉えようとしたものであるが、桑原の「生きがい」の概念は、その更に一歩先をゆく考え方ではないか。換言すれば、集合的なコミュニティがそれだけ個々人の生活の質に決定的な影響を及ぼしていたということであろう。

★　全体を束ねうるテーマ、理屈

・ <u>協業が成功する条件</u>：今回の岩手調査で浮かんできた漠然とした仮説は、比較的平等な土地配分（大きな地主はいなかった）、親族構造とその拮抗（高橋家、照井家、

新田家など少数の本家)、政府の継続的支援の好循環、リーダーシップの４要素の並存である。それぞれの地域で調査をしたときに、成功や失敗を説明できる要因を少数に限定してみて、それを他の地域に当てはめてみたりすることで、地域性や普遍性の一端が見えるのではないか。

・ 協業の伝統と「新しい」協業：生活環境の劣悪な山村で、結をはじめとする協業の習慣が根付いたのは、仲が良かったというよりも、それがなくては生活できったからであろう。ところが、市場経済の浸透にともなって、人々は回りの資源に頼らなくてもよい環境におかれるようになり、伝統的な協業には徐々に亀裂が入ったのではないかと想像される。この亀裂は、市場経済化だけでなく、国による合理化・規格化（例えば、インフラに照らした宅地集団化など）によっても進められたと考えられる。そこで興味深いのは、こうした亀裂が生じたときの対応として、過去の協業の経験が再び活かされることである。会館における大広間の共同利用や子供館の設営は、新しい形の協業であるといえるだろう。このように「結」の精神が、その時代にあわせた姿になって現れるという連続性の中に、コミュニティーのまとまりを左右する鍵を読み取れるのかもしれない。

★ 今度の課題

・ 事前学習の改善：　今回、課題文献として示された書物は、いずれもそれ自体として価値の高いもので、勉強になったことは間違いないが、具体的な調査を進めるうえでの有用性は高いとはいえなかった。現場に行かなくては手に入らない情報も多いが、どの程度までの情報ならば事前に入手可能であるかを調べる必要はあると思われる。年号や組織名に関するファクトについては、こうした事前調査を充実させることで現地調査の時間を節約することができるだろう（例えば、桑原さんの著書の存在を事前に知っていたらどうだろうか？）

・ リターンマッチ方式の導入：　調査案件については、比較的広い視野を持っている人とそうではないローカルな視野をもっている人々がいる。インタビューの順序を考えれば、まずは広い視野をもつ人から導入的な話を聞き、そこから、個別事例についての聞き取りに移っていくのがよいだろう。また、最後には、累積した個別事例をつなげてくれるような人にインタビューするのがよい。その意味で、今回の調査は理想に近い形で運営されたものと思うが、例えば、最後の桑原さんにも最初に話を聞き、数日あけて、最後にもう一度話しを聞いていたらどうだっただろうか。思い出してもらう、考え直す時間をとってもらう、ギャップを埋めてもらう、など

の観点から、視野の広い人物にもう一度時間をあけてからインタビューをする試みを提案したい。ただし、時間の制約を考えても、同じ人に 2 度インタビューすべきかどうかは議論がわかれるところだろう。あまり時間を空けずに、補足調査をするのが妥協策になるのかもしれない。

- 背景的条件の特定：　生活改善運動の実態と、途上国援助への示唆を考察するうえで欠くことのできない考察対象は、「仕掛ける側」と「仕掛けられる側」だけでなく、その両者のやり取りが行われる文脈である。特に、今日の途上国の農村開発を考察するうえで、急速な市場経済化という背景的条件を抜きにすることはできない。その意味で、将来的に日本の教訓を普遍化していくときに、それが機能した土壌を明確に認識することは、「教訓」の効力を高める。市場経済化と、それへの対応力の多様性は今日の途上国農村を見るうえで欠かせない視点であるが、それ以外にも背景的条件として明示的にしておくことが必要な項目を考えておく必要がある。

- 普遍化の方向性：今回のインタビューで、「どのような教訓が途上国支援に役立つと考えるか」という質問が多くあり、それに対しては、「相手の状況をまずは把握し、教えてやるという態度を捨てていること」という答えが聞かれた。この答えは、重要ではあるが、しかし、生活改善調査の結果を普遍化する上で十分強い論点ではない。途上国の農村開発の世界では常識になりつつあることである。むしろ、途上国の農村開発で典型的に問題になることをリストアップし、それらに対する具体的な対処の事例が過去の日本に見られたかどうか、そこに焦点を絞った方がよいのではないか。例えば、世帯内資源配分の問題、市場経済への対応力格差の問題、開発資源の中間搾取の問題、などである。

以　上

【愛媛－１３－１】
場　所：岡成集会所（愛媛県野村町岡成）
日　時：平成１３年９月１４日（金）午後２時半
面会者：岡成生活改善活動初期の関係者（Ｅ－Ａ、Ｅ－Ｂ、Ｅ－Ｃ、Ｅ－Ｄ、Ｅ－Ｅ、Ｅ－Ｆ、Ｅ－Ｇ）
普及所ＯＢ（Ｅ－Ｈ、Ｅ－Ｉ）
普及センター（Ｅ－Ｊ：課長、Ｅ－Ｋ：係長、Ｅ－Ｌ）
＊下表参照のこと。
調査者：水野、滝村、高岡、矢敷、山崎
担　当：山崎照美、水野正己

【調査対象詳細】

肩書き	対象者	備考（本人の自己紹介より）
５人組メンバー　５人組の代表	Ｅ－Ａ	77 歳。栄養科の先生。昭和 54 農林大臣賞受賞の時には高岡さんにお世話になりました。
岡成生改グループメンバー	Ｅ－Ｂ	谷筋の松谷部落出身。41 年くらい前に岡成に嫁いできた。当時は 20 歳でお見合い結婚。Ｅ－Ｉさんが生改として普及所に赴任する前に、東宇和生改グループに参加。お豆腐、パン釜でのパン作りなどをしていた。それらの試食会などをした。
同上	Ｅ－Ｃ	Ｅ－Ｂさんと同じ時期に改善グループに参加。柿内さんにも長い間世話になった。
5 人組のメンバー	Ｅ－Ｄ	Ｅ－Ａさんよりも１級若い。終戦後、Ｅ－Ａさんと力を合わせて文化振興会で活動。岡山のほうに受賞、発表にもいった。広場に植えてあるモチノキをもらって帰ったおぼえがある。80 歳近い。去年も招待されたが、運動会の選手として活動していたので、来られなかった。
釜川農産加工グループメンバー（椎の実）	Ｅ－Ｅ	農産加工。生活改善グループは 24・5 年前からやっている。
同上	Ｅ－Ｆ	44 歳ごろ改善グループで活動していた写真を持っている。Ｅ－Ｉさんにはお世話になった。農産加工に取り組む。
同上	Ｅ－Ｇ	去年、少し遅れてきた。Ｅ－Ａさんが全盛期の時、年下だったので、子分として

		やってきた。「この地域に住んでよかった、と思う」
農業改良普及員 OB	Ｅ－Ｈ	70 歳代。
生改 OG	Ｅ－Ｉ	26・7 年前くらいに、ここで活動。だんだんグループ形成関与。
現役生改さん	Ｅ－Ｋ	生改係長。ここの担当ではなかった。Ｅ－Ｉさんにここの活動のことに関しては聞いたことがある。
同上	Ｅ－Ｌ	東宇和担当。４月に転勤してきたばかり。

＊初代生改さん＝別所さん

１．項目別質問

＜30 年計画をどうしてたてたのか？＞

Ｅ－Ａ：自分が 22 か 23 の時発想した。30 年計画だと、自分が 52、3 歳の時に終わることになる。大変だと思った。

終局的目的は、「笑いながら、一生を楽しく暮らす」。平均寿命 80 歳を想定した。（当時平均寿命は 60 歳くらい）。その為に、食生活、衛生、医療、環境、経済、ストレスなど色々しないといけないということがあった。当時（昭和 22・3 年）、人間だか動物だかわからないような生活をしていた現状から脱却していくという発想の為には前述のような問題を解決しなければいけないと思った。その為には 30 年必要だろうと。毎年、毎月と計画をたてるのは大変なので、30 年を 3 つに分けて、それぞれを 10 年計画とし、3 段階にした。

第３次 10 ヵ年計画（昭和 53 年）が終わったその時に農林水産大臣省を受賞。

＜活動のきっかけである水道設置に関して＞

Ｅ－Ａ：この地域は、地下水がなく、飲み水がない。村から下りていった所に 5 箇所ほどある地下水がでる場所まで水を汲みに行かなければならなかった。バケツで担いで、くみ上げるという生活だった。大変水が不便でそれが一番の問題だった。それを一つ解決したら、次のことにいけるだろうと考えていた。

一番骨を折っていた水問題から、簡易水道を竹でつくることを思いつく。竹のふしを抜き、簡単にできる「とい」を作った。ここ（公民館）の前まで１キロくらい遠くから水をひいて、皆に見せた。皆びっくり（国際ビルーNY の WTCーがやられたのと同じ程の驚きだった）。水がきたことに対する喜び。「若いもんはなかなかやるのう」という評判になった。それから仕事を始めていった。

＜活動計画は誰が決めたのか？どういう人が初期にかかわったのか？＞

何をやるかは皆と相談した。特に第１次 10 ヵ年計画に重点をおき、当時の普及所所長水野

さん、生改の別所さん、菊池タイゾウさんという熱心な（農業改良）普及員さんに骨折りを願った。
前の集会所で別所さんとか、県試験場の立花さんという加工の専門技師が泊まりながら、あるいはＥ－Ａさんの家で泊まって、地域の中に溶け込んだ普及員さんの活動をお願いして、最初の 10 ヵ年計画の中のさらに最初の５ヵ年は特にエネルギーを集中した。当時主となっていたのは５人。１人はパラグアイに移住し、亡くなった（亡くなった方の長男が日本に研修に来ていたと言う－高岡情報）。一人は大阪へ行っている。ここに残っているのは３人。

＜当時の生活改善運動と、岡成の生活改善運動の違い＞
Ｅ－Ａ：当時、生活改善運動が全国であった。料理の研究とか、台所の改善とか色々あったが、私の所は、もちろん名前は生活改善運動ということであったが、私達の場合は普通の生活改善運動ではなかった。岡成の生改は他と違う。30 ヵ年計画というもので、部落の構造を変えていくという、構造を変えなければどうにもならんということがあった。今の小泉内閣と似ている。
普通の打ち上げ花火のような生活改善運動ではなくて、根本からものを推進する為に、不必要なものを除いて、新しいものをそこに定着させていくという、構造改革、部落改造計画、そういうものとしてやってきた。

＜心残りは？＞
Ｅ－Ａ：当時のことを思いながら、今の若い人の考え方を嘆いている。後継者を作ることが出来なかったな、と残念に思っている。

＜文化振興会について＞
Ｅ－Ａ：岡成文化振興会というのは部落の構造改革を推進するための母体であり、グループだった。５人が軸になる人達だったが、その他に若い人が 14、5 名いて全員入って、皆参加した。グループで相談をしながら計画を実行に移した。

＜具体的な事業＞
Ｅ－Ａ：
①まず、水。
農作業で疲れても、谷間へ水汲み。それは１年間、部落全体で 8,000 時間。その労働の難儀さを解消するため、水問題に取り組んだ（明るい集落にしたかった）。
まずは竹で水道を作り（竹はただで、労力は若者から老人までの手伝い）、皆に見せたら、それはいいなということで、次は町にお願いして簡易水道を作ってもらった。その後桂川

からひいた町の上水道に切り替わるという三段階で今日の水道になった。
水が無い為に井戸が方々にあった。使い水、つまり、足を洗ったり、そういう簡単なことをする為に雨水を溜めた小さい井戸があった。そこから、ハエ、蚊が発生する。「岡成（おかなる）・・蚊がなる」というくらい蚊が沢山いた。もちろん、家畜にも蚊がたかった。乳牛でも乳の出が悪い状況だった。家畜用の水や農号増産も思うに任せないことからも水の問題に取り組む必要があった。当時は最も水の不便な所と言われたが、今は上水・下水ある。下水は野村で一番最初だった。
②食生活改善
食生活改善では、当時は麦飯だったので（今は麦飯はいいと言われているが、当時は食べなきゃしょうがない状況だった）、また、安いキビや売れない米を主食にしていた。
糞を３分の１にしようという運動を始めた。蛋白質、脂肪源をもっととろう。畑の肉と言われる大豆等をもっととり、パン食に、ゴマを植えてゴマ油をとる。脂肪と蛋白質をとろうという運動をした。
③台所改善
食生活運動を始めると、その食物を煮たり炊いたりする台所が非常に不潔だということになり、台所改善をしていこうということになった。5 人組の 1 人マサさん（パラグアイに移住した。非常に器用な人だった。）が中心になって、希望者に台所改善をしていった。タイル張りにしていった。
④経済的問題、精神的な問題
経済的なことでストレスがないよう、くよくよしないようにということで、経済的な基礎も大事だということになった。つまり「金儲け」をすることを考えた。農業の確立。ばらばらだったものをまとめて、村全体でやっていく必要があるということで、酪農とタバコを集中的に導入。また開墾をし、「一人１町 3 反の経営規模にしよう」ということを目的にした（当時は５反百姓が多かった）。
⑤結論
つまり、総合的にやることが「文化振興」の本来の意味。

＜最初に水道を引くときの資金はどうしたのか？水道設置にまつわる話＞
Ｅ－Ａ：１キロ向こうから、竹といをひいて、皆に見せてみる。喜ぶかどうかやってみた。若いもんはやるなあということになった。竹はどこにでもあるので、お金がかからない。労力はボランティア。年寄りも少しは参加したが、ほとんどが若い衆でやった。簡易水道は町の補助があった。
喜ばすことで、次の運動に好影響を与えることを経験した。そして順番に次の事業に進んでいった。

Ｅ－Ｂ：「岡成は水がないから不便をする。水がないから嫁にいけない」と言われていた。当時風呂は溜水だった。貯め水を入れる壷があったのでそこから水をくんだ。
最初（簡易）水道ができたときは、１戸に２つくらいの蛇口しかなかった。
風呂場も暗く、風呂の水も毎日水を替えなかった。（出生地である）谷筋は、地下水があったので、ポンプで汲み上げて、毎日きれいな水が使えたのに、こちらでは水がなく一日おきに風呂の水を替えていた。それだけではなく、夏は断水が続いた。一時間に何時間かしか使えなかった。簡易水道では水が十分ではなかったので、水を汲みにいっては溜めていたと思う。自分が嫁いできた時は水を汲みにいくことはなかったと思う。

Ｅ－Ｇ：当時、集落で水道係がいた。断水があると大変だった。水を汲むためにあがったり降りたりしなければいけなかった。交代は年に一回。その役をすることで、米一斗をもらった。夏、水が無いと工面をしなきゃいけない。村共同のタンクに水を運んだ。水源もポンプアップしなきゃいけない、というような状態だった。町の水道がきたら、楽になった。

Ｅ－Ｂ：「岡成は嫁がくる所じゃない。」というふうに回りの村からも言われていた。自分はその時年頃だったので、水の事業には一生懸命協力した。（Ｅ－Ａさん：昭和 22 年に結婚。結婚してから文化振興会事業開始。）嫁さんが欲しい為に一生懸命やった。スライドには「水汲みで難儀をする母親の苦労を見て」となっているが、当時は自分も水汲みをした（水汲みは子供、女性の仕事だったから）。今、若嫁が水を無駄に使うともったいないと思う。

＜文化振興会の活動をまわりはどうみていたか？＞
Ｅ－Ｃ：私は別の所出身だから、ここでの水の苦労はわからないが、自分の出生地でも、学校の帰りに水汲みをしたことがあり、水汲みが楽な仕事でないことはわかっている。昔はどこもそういう生活だった。
50 年間ここに住んでいるが、すごく明るい村だ。ここより明るい村はなく、人との触れ合いが出来てありがたいと思う。
一生懸命な文化振興会の人が話しかけてくれれば、出来るだけのことを、先になり先になり、やらせてもらった。おかげで今があると思う。
＜農繁期の豆腐づくり、パン釜でのビスケットづくりについて＞
高岡：当時生改になった時からモデルにと言われていた村だった。
パン釜があり、農繁期にはビスケットを焼く。また同じく農繁期には豆腐作り（皆の為に共同製作）。それは他には無い活動だった。私が見に来た時は、最初の機械が壊れて、２台か３台目だと聞いた。

Ｅ－Ｂ：大豆、小麦は自給していた。婦人会から２人づつ交換で。大豆を前の日につけておいて、朝４時くらいから、大豆を２釜くらいわかす。６時くらいには出来あがり、「取りに来てください」という放送をかけた。Ｅ－Ｂさんが嫁に来た時には既にあった。

Ｅ－Ａ：
この集会所に加工所があった。立花先生に教えてもらって「愛媛１号」というパン釜を手に入れた。松山の業者から取り寄せて豆腐の機械を手に入れた。婦人会の当番でやった。毎日ではなく、農繁期だけだった。これで栄養源を補おうという取り組みだった。かなり長くやった。集会所を立て替えるまではやっていた。

Ｅ－Ｃ、Ｅ－Ｄ：
よその村からもパン焼きに来ていた。豆腐は農繁期だけ。にがりは購入した。

＜農業改良普及員から見た岡成生活改善運動。成功の秘訣は？＞
Ｅ－Ｈ：自分が農業改良普及員としてかけだしの頃から、岡成の生活改善は郡内でも有名だった。5 人が軸だったから生活改善の計画は具体的になったのではないか。野村町は山村部落だから、ここのような所はいたる所にあるが、ここほど徹底して生活改善の取り組みをした所はなかったと思う。
生活用水、農業用水の問題と両方あった。生活改善の水に関しては、先ほど説明があったようなことだったが、農業用水については、下の川から水利権で加工されて、上までポンプアップされて、ここに運ばれ、７～５町歩の田んぼができた。第１次農業改善事業でやったのかと思ったら、それまでに（その事業が始まる前に）すでに取り組んでいたということだった。生活改善だけではなく、農業の改善にも取り組んでいたように思う。
当時、先輩の水野かおるさん生活改善活動に非常に理解があった。彼の指導がかなり影響を与えたのかもしれない。地元で軸になる人が年次的に計画をたてていって、それに傍のものが協力をしていって、生活改善が進んでいったのだろうと思う。
海外移民の問題があった。昭和 34 年ころ国策として野村長が海外移民の推進をしたことがあった。ここからは３戸海外移民した。出る人の土地を残った人がかなりの資金で買った。その結果出て行く人も助かったし、残った村人の平均土地規模が多くなった。構造改善事業があって、基盤整理、開拓もしたので、平均土地規模が拡大し、生活が安定したので、平行して生活改善に進む力になったと思う。

＜釜川（かまがわ）からみた岡成の活動＞
Ｅ－Ｅ：岡成は随分前からやっていた。釜川は遅かった。 釜川の生活改善グループは昭和

59 年に発足し、名前は「椎の実」グループ。農業振興会の会長さんから話があり、４部落で何かやってみないかということを言われて、活動を始めた。
最初は味噌だった。自分達が食べる分の味噌も買っていたので、自分達で食べる分だけでも作ろうということになった。自分達で麦も大豆も作っているが、（精米してみると）麦はあまり質がよくなく、麦は買って作る。大豆は自分達の所のものをわけてもらって作る。味噌だけでなく、お菓子も作っていて、ペリカンなどいろんな所に出してもらっている。製品は、今では「どんぶり館」に出荷している。
野菜づくりコンクールもしたことがあり、これは岡成の野菜作りコンクールが周辺に波及したもの。

Ｅ－Ｆ：ここはずっと前からやっている。岡成は遠い存在で野村町でも先進地区で近寄れない感じだった。少し習うことはあったが、まったくスケールが違った。また私達の地区にはＥ－Ａさんのような人はいなかったので部落ごとひっぱっていってもらえなかった。
岡成は貧富の差がない所だった。やろうと思っても、あまり差があると上手くいかないのではないかと思う。ここは昔から何があっても、一番最初にやるような所だったので岡成は真似が出来ない所だった。
自分達の所は生活改善の始まりは遅かった。ここがやめたくらいから始めた感じだ。

＜30 年計画以後、新しい事業はどうやって生まれたのか？リーダー論＞
高岡：野菜を買う時代になって、野菜を作ろうという計画はなかったが、野菜を作ってコンクールをしようということになった。だんだんグループ、だんだん公園ができた。花とり踊りなどは、30 年計画にはなかった。時代が進むに従って新しい計画を作ったが、それはどうやって加えたのか？

Ｅ－Ａ：だんだん（ありがとうの意味のほかに順を追ってだんだんと活動を活発にしていくの意）公園と称する公園を部落内に作った。公園は都会にしかない。でも草取りなど部落の人が皆参加してやること、コミュニケーション、そのことが花を見ることよりも大事だと。コミュニケーションの為に一つの事業をして、公園を作って、花を眺める。田舎でも必要だろうということになった。
健康をテーマに集落集会所向かいの側の谷を建築廃土で埋めて運動場を作り、平成 7 年には古い集会所を立て替えて現在の集会所を作った。集落排水も終えた。一つの事業をやっていると、次のやらなければいけないことが自然と出てくる。最初の計画になかったものでも、途中で必要になることがわかれば、皆の意見を取り入れながら、追加して事業をしていった。事業をやるのは必要があるからだった。

矢敷：新しいアイディアは文化振興会の中から意見がでたのか？それとも、村民が日常の生活の中でＥ－Ａさん達メンバーに直接要望を言って、それが文化振興会の中で議論されているのか、どっちが多かったのか？

Ｅ－Ｇ：地域は立派な先導者があってこそ上手くいく。部落がよくなる為にはリーダーが必要。地域の問題でも、誰がやるというのではなく、グループの中で検討してものを進める。それに皆ついてくる、そういうことが大事。強要するのではなく、昔はリーダーの人柄に惹かれてついていくということが多かった。花とり踊りというのは何百年という伝統で、ずっとあったのだ。昔はお宮でやっていたが、現在は運動場で行っている。残っているのはここくらいしかない。

Ｅ－Ｄ：どんどん、若い人がリーダーになってきている。花とり踊りにしても、戦時中は苦労した時もあったが、次から次と青年になったものがリーダーになって、やってくれている。

＜村のまとまり＞
Ｅ－Ｃ：「農閑期にはどこどこへ視察へ行きましょう」というと、行って見て、見てきたことはすぐにやる。そういう所だった。今は後継者もいてその嫁もいるから、新しいアイディアが出てくるのではないか？
またここは皆素直についていく。リーダーもよかったが、村の人達の心が一致しやすいところだったのではないか？

Ｅ－Ａ（Ｅ‐Ｇ？）：この集会所の前にあった、曲がりくねった道路の整備。６年かかってやった。毎月全戸が 5,000 円積み立てて、道路が出来た。集会所も積み立てで建てた。積み立ては、今は終わった。積み立てに関しては、全戸に説得することは得にしなかった。出来上がった時に現金で出してもらうよりは積み立ての方が楽だというので、皆積み立てをした。楽に物事が進んできた。

Ｅ－Ｅ：女だけでは出来ない。人材があって、男の人が引っ張っていってくれる。そういう人がいるからよかったのだと思う。
＜簿記があったから、経済のことに敏感だったのか？＞
Ｅ－Ａ：簿記はなかった。几帳面に簿記などつけるとダメ。思いついたことをああじゃ、こうじゃと話し合って部落の人々に広まっていく。

Ｅ－Ｈ：簿記の指導には来なかった。昔は遠いから、ここにあまり来ることはなかった。

昔はオートバイが関の山だったから、ちょっと遠いと行けなかった。

＜高岡まとめ＞
高岡：進取の気概がある村。Ｅ－Ａさんの知恵袋に頼っていたのではこうは続かないでしょう。私が聞きに来たときは、「裸馬や、鞍がない」そういう村から出発したといっていた。女を大事にする。それで水を引いたんだと。協働の精神を重視したから、こういう村になったんだと説明された。言われたこと 12 項目書いた。今見ると一つ一つ、時代をおうて先取りしている。リーダーもよかったけど、皆でディスカッションして進めてきたことがいい。

＜部落の役回り＞
組長：岡成部落の代表、取りまとめ役
会計：部落会計を担当。翌年に組長を務める。
文化事業：公民館活動の管理運営。
伍長：岡成部落を構成する三つの小部落（小組）ごとに１名。小組を代表。
営農：農協関係の窓口を担当
任期は１ヵ年。各戸持ち回り。

２．個人別のお話
Ｅ－Ａさん
＜生活改善グループ参加のきかっけ＞
・昭和３年生まれ。昭和 25 年に嫁にきた。Ｅ－Ｂさんも同時期に嫁いてきている。
・嫁いで来た時は、恥ずかしいので、文化振興会の活動にはよう参加しなかった。
・40 年くらいから婦人会に参加していた。農協婦人部にも参加していた。その農協婦人部の希望者を募って、生改グループが出来た。その時にＥ－Ｂさんも一緒に参加した。
・昭和 40 年から 45 年ころは文化振興会の活動が下火になった時代だった。そこで、「何とかしてもらえないか」と普及課の竹田さん（本当は池田さんという人だったということが後で、Ｅ－Ｂさんと話していてわかる）に声をかけられた。昭和 45 年くらいに生活改善グループで活動を始めた。
・グループとして活動し始めた時には、既に豆腐やパンはやっていた（つまり文化振興会がもう始めていたということだろう）。しかし、その時はそれから始めた。来客がある時、子どものおやつを作った。３、４人が順番に当番になった。

＜台所改善＞
20 年・30 年代は、くどだった。

昭和 40 年くらいに本格的に台所の改善があったと思う。Ｅ－Ａさん達が始めた頃は台所はタイルで、カマドを改善した（マサさんが中心になって）。それを 40 年代にはステンレスに変えた。20 万円くらいかかった。
台所改善には生活改善資金を使用。改善グループに申請すると貸してもらえた。女性は自分でお金を持っていなかったので、何回かで返済した。順番に借りた。（これは村独自の資金ではなく、後に出てくるように、どこかから借りていたと思う。改善グループで貸してもらえたんじゃないかと思う、とＥ－Ｃさん。）

＜生活改善資金以外にもあった、農業振興のための貸付＞
昭和 35 年
農業改善事業（県）で、新田を作る。畑だった所を、川から水を上げ、田んぼにした。20 年払い。３年据え置き。17 年払い。年 2 回の支払い。作ったお米で支払った。
その頃酪農をやっていた。牛の導入資金というのもあって、牛の子ができたら支払った。

＜資金の出所、誰が情報をもたらしたか？＞
農協が資金のもと締めだった。そういう資金を器用に使う人がいた。それがＥ－Ａさんだった。Ｅ－Ａさんは町議もしていたので情報があり、Ｅ－Ａさんから情報をもらうことが多かった。村では月 1 回の常会があり、情報は皆に公開された。いっぺんに全員出来ないが、順番にやった。
農業に関する情報だけではなく、生活改善に関する情報もＥ－Ａさん達からもらうことが多かった。
ただし、生活改善資金に関しては、宇和の普及所に行った時に、そういう資金の貸付があるという話を聞いた記憶がある。トイレの改善や台所の改善には資金を貸してもらえた。女性だけでは、その当時お金を生み出すことができなかったし、そういう資金があるんだよ、あそこの家はこういう改善をしたらしいよ、と家で話して家族の理解を取り付けた。誰かが先にやってくれないと。特に大きなことは男性がやってくれないと。

＜パン、豆腐の機械のメンテナンス資金の出所＞
パン焼釜はメリケン 1 キロを使うにつき、箱に 5 円か 10 円を入れ、機械の修理などに使っていた。豆腐もそういうふうにしていた。どういう時にでも自分の現金を一度に沢山だすということがなかったので発展したのではないか、と思う。

＜トイレの改善＞
昭和 45 年に家の建て替えをした。その時は農協からお金を借りた。昭和 40 年頃はどこの家も建て替えの時期だった。（田中角栄のころ）お金を借りやすかった。お陰で貧乏人も電

気釜を買うことができ、洗濯機も買える、お風呂場も改善できるということがあった。その波に乗った。
トイレの改善に関しては、生活改善グループが活動したということもあったが、前述のような時代の波に乗ったということの方が大きかった。

＜生活改善グループのそのほかの活動＞
野村町で初めて無人市を始めた。週 2 回。それが発展して、青空市場になった。百姓百品が合言葉。

＜生活改善との出会いの意味＞
女は家ではお金を生み出すことが出来ない。結いはやったが、お金のやりとりはなかった。
生改さんとの出会い、生活改善グループでの活動で、女でも家で稼ぐことができるかもしれないと思うようになった。
昔からある結いによって協働精神ができたと思う。今はそういうものがない。

＜生活改善との出会い＞
昭和 40 年くらい。ちょうど婦人会の役員になった。その時に生活改善グループをやり始めた。
最初に来たのは渡辺さんという生改さん？または、池田さんだった。

＜水道に関しての記憶＞
昭和 35 年には簡易水道があった。山水をとって、ポンプで小さいものだった。蛇口は２つしかなった。日照りがあると断水した。
昭和 40 年くらいに本当の水道がきた。

＜台所に関しての記憶＞
台所は昭和 35 年にはタイルばりだった。

＜風呂の改善＞
結婚した当初は、風呂は水瓶に水を溜めてはいっていた。五右衛門風呂。風呂はトイレの横にあったのでいやだった。
28 年前（昭和 47 年？）風呂を立て替えた。生改からの資金を借りた。無利子だった。ステンレスではなくホーローの風呂にした。20 万円くらいかかった。（Ｅ－Ｃさんの所は当時、下半分がおかまで上がタイルのお風呂だった。）５年払い。
お金は、生改グループから農協に申請した。メンバーが借りることが出来た。

＜栄養改善について＞
豆腐づくりの為の施設はあったので、それを普及することを生活改善グループの活動とした。豆腐、栄養関係のアイディアはＥ－Ａさんから。

＜生改さんの役回り＞
新しいこと教えてくれたり、視察に誘ってくれたりした。県は視察のお金を出した。郡は訓練のお金を出した。

＜生活改善グループとしての活動資金はどこから？＞
婦人会で生活改善グループの活動資金を集めていた。共同加工の材料や、研修の費用などを工面しなければいけなかったから。
生活改善資金は国の資金。

Ｅ－Ｉさん
Ｅ－Ｉさんは、東予のサキイシ出身。53 年くらいにここに来た。当時、岡成生改グループからだんだんグループに変わった頃であった。Ｅ－Ｂさんが最初の会長だった。何回かのグループでの話し合いの中で、どういうことをするかを決めていった。Ｅ－Ａさんだけが独断で決めたわけではなかった。
栄養調査をしてみると、野菜のとり方が少ない。貧血があったので、1288 運動を小学校で行った。（１杯の牛乳。午前と午後に２回の休み。８種類の野菜。８時間寝ましょう）特に野菜を取りましょうと力を入れた。家庭菜園の互評会をしたりした。おかげで貧血も１，２年でなくなった。
それだけではなく、視察をして、野菜の話を聞いた。野菜なら女も家で働けるし、お金儲けが出来るということで、導入していった。
最初はタイルの台所。Ｅ－Ｂさんが嫁に来た頃、それを生活改善資金でステンレスの台所にした。20 万くらいかかった。

【みなさんが帰った後、Ｅ－Ａさんのお話】
婦人会、青年団だけではなく、松葉会というのがあった。夫婦同伴で、24 人くらい参加していた。相互理解が目的だった。松葉会は 1 年に 80 回も会議を行った。文化振興会には女性もいた（民主主義）。
Ｅ－Ａさんは 19 歳から農業会の技術員をしていた。その時、生改の知識や技術をマスターした。組織とのコネもあった。
別に男女の問題、嫁姑の問題はなかった。

老人の中には反対した人もいた。そういう時は夜、酒を持って話にいった。
Ｅ－Ａさんの父も町議をしていた。経済的に力があったわけではないが、家系としてリーダー的な存在だったのかもしれない。（誰がリーダーになるかは、重要なことなのかもしれない）

【愛媛－１３－２】
場　所：愛媛県宇和町岩木河谷　河内谷公会堂
日　時：平成１３年９月１５日（土）午前１０：４０～１２：００
面会者：Ｅ－Ｍ（74 歳、元会長、レンゲ草グループ、吉田の第一高女卒
（高岡さんは、明浜出身で、三瓶の第一高女卒で、学年が同じ。）
Ｅ－Ｎ（現会長。会長は輪番制で 1 年交替でまわしている。）
Ｅ－Ｏ（レンゲ草の加工工場勤務）
Ｅ－Ｐ（昭和 42 年に嫁いできた。まだ 20 代で、モンペをはいていた。姑に連れられて千歳会に入る。姑と交替した。どんどんせんといけん、と言われた。現在は、会計担当。実家は専門技術員をしていた。）
Ｅ－Ｑ（姉二人が普及員をしていた。レンゲ草の加工工場に勤務）
Ｅ－Ｒ（元生活改良普及員、昭和 39 年退職、独身の普及員として昭和 34 年から食生活改善の活動で千歳会の創立期に参画・指導する。現在、社会福祉協議会に日々雇用で勤務）
Ｅ－Ｓ（ 東宇和地域農業改良普及センター生活改善係、千歳会関係資料３点を持参し、配布してくれた。）
調査者：佐藤（寛）、滝村、高岡、矢敷、山崎、水野、服部
担　当：水野正己、服部朋子

(1)基礎的情報
①千歳会とレンゲ草グループ
千歳会は、河内谷集落の生活改善グループで、2001 年に創立後 42 年目に入った。部落の全戸加入の婦人組織。現在、27 人で構成。生改グループとしては、老舗でかつ長寿組織である。レンゲ草グループは、岩木地区の生活改善グループ。
千歳会の名称のゆかりは、千手観音をお祀りしていること、歳は長続きするようにという願いが込められている。
このほか、岩木地区の生活改善グループには、「パンジー」「常盤」「むつみ会」がある。

②岩城農産加工組合
岩木地区の５部落から 10 人の有志が集まって結成したのが岩城農産加工組合である。河内谷の千歳会からは４人（Ｅ－Ｓさんから配布された資料によると３人となっている）がこれに参加している。ＪＲ岩城駅に隣接した農産加工場を経営し、味噌、漬物を生産・出荷している。味噌は、レンゲ味噌と称するなめ味噌が主力製品となっている。販売は、どんぶり館に出品するほか、お歳暮の時期には宅配便も扱う。
水田転作に関連して、野菜作が増えたが、豊作貧乏に悩まされ、何とかしなければなら

ないというので、西園寺さんという普及員さんに相談した。地元の産物に付加価値をつけて販売することにしてきた。身土不二だ。

昭和 59 年、農協が経営していた縫製工場が閉鎖になったのを機に、交渉して農産加工場として借りうけた。現在は、2000 年 4 月 25 日に開設された「どんぶり館」に出品している。このどんぶり館は、東宇和４町（宇和町、野村町、城川町、肱川町）の地元産物を扱う、道の駅のような施設。農産物、海産物まで扱うので、地元住民からも重宝がられている。

加工所には、若い女性たちの研修や視察の目的で人が訪れる。

インタビュー終了後、加工所を見学した。場所はＪＲ予讃線「伊予岩城」駅のそば。休耕中の水田の横手。Ｅ－Ｑさんは、加工所の裏手の空き地にコスモスを植えている。この景観が好きという。加工所は中央に作業場（大釜、蒸し器、餅つき機、作業台などが置かれている）、手前に麹味噌の醗酵室、左奥手に漬物の樽を奥部屋がひとつ。加工所でＥ－Ｑさんたちから話を聞いている間も、二人の老女は麹味噌を醗酵室に移しかえる作業に忙しい。ブドウを振舞われる。

③河内谷公会堂

インタビュー会場になった場所。公民館とか、集会所と名乗らず、公会堂という。こじんまりとした建物。台所に改良カマドが据えられている。現在はこれらのカマドはもう使われていない。普請は、木材を多用してあり、落ち着いた感じがする。建築資材は部落の持ち山から共有林を利用して調達した。設計に際して、女性の声をあれこれ反映させて台所が作られた。

④河内谷部落

小さくて、まとまりのよい部落であるという。Ｅ－Ｍさんは、部落の語を用いず、代わりに「種（たね）」と言っていた。部落財産が多く、持ち山のほか、株券も保有している。千手観音もまつっている。部落の裏山にお堂がある。8 月 10 日が縁日。

⑤浜の気質について

三瓶や明浜から、この地区に嫁いできた人は活発である。地元出身の女性はおとなしい。「浜」の人情、人間類型のなせるわざか？

(2)共同炊事から始まった

この種（たね、部落）の地区は、一戸当たりの水田耕作面積が大きく、かつては農繁期に人手が不足していた。若者は町へ出ていない。肱川の上流域にあたり、農業用の水が足らず、ため池が多いところ（ため池は岩木地区に 30 以上、河内谷に７つを数える）。6 月

20 日の田植を申し合わせて、ため池の栓を抜き、一斉に田植に取りかかる。このため、作業が一時期に集中し、田植労働者を雇うのに苦労していた。野村町や旧谷筋村、旧中筋村、城川町から、中学出の若い人達が稼ぎに来ていた。一週間住みこみで、塩をこいだ（労働がきついこと）。

この田植労働者の賄い（食事）やおやつの準備にも手間取った。そこで、河内谷の女達が寄って、共同炊事を考えようやということになった。生改のＥ－Ｒさんの指導で、赤馬、キヨサトなどの先発地の視察を行った。田植え労働者は野村町など、周辺の町村から来ていたが、部落で雇う家ごとに賄いの内容（献立）異なっていたので、田植労働者の出身村であそこの家はどうこうという噂がたった。部落や区で献立を統一すれば、家同士の差をなくすことができる。

昭和 40 年頃には、部落で田植の賃金も同一賃金にした。

昭和 50 年、機械化が始まる。この結果、共同炊事は中止された。田植えは早植えも導入され、米作りが多様化し、また米作りが変わった。

観音様の参道にともす提灯張りは、子供と共同で行っている。

かあちゃん太鼓にも取り組んだ。始めは、鍋を叩くことから開始。おいね太鼓と称するようになった。岩木地区の公会堂の落成式でも披露した。ドイツ公演にも参加した（県から 100 名派遣する事業に代表が参加）。ドイツ使節団の来訪時に、太鼓の公演。マレーシアの人が来た時にも、同様に太鼓演舞を披露。すなわち、宇和町だけにとどまっていないグループになった。

(3)婦人会との関係

元々婦人会はあった。その活動の一環として、この共同炊事に取り組んだ。始めは希望者だけの活動だったが、結局、部落ぐるみの全戸加入になった。共同炊事では、部落の各家で作った野菜（ジャガイモ、ニンジン、キャベツ）を持ち寄って食材にした。調理は、Ｅ－Ｎさんを始め、３人に頼んでやってもらった。後に、近隣の人を雇うことになった。昼食、おやつ、夕食で、食費は一食 21 円、おやつは一回 2〜4 円程度だった。100 食近く作った。

(4)卵貯金など、色々なことをやった。

ヒナを共同購入して、飼育し、余った卵を販売した残金を卵貯金にした。昭和 36 年のこと。女性の小遣いになった。公会堂前に各戸で余った卵を持ってきて、売上を貯金箱に入れた。貯金箱は、各自の分がしきられたもので、そこへお金を入れて順番に回した。貯金箱開けの寄り合いの時に、貯金箱を開け、各自、餌代金を差し引いた残りが指し引いた残りが手許に残った。そのお金で買ったバッグを今でも持っている。貯金箱開けは夜に集ま

ることもあった。卵貯金は 2〜3 年は行った。

家計簿もつけた。『家の光』の読書会もやった。月に 1〜2 回、女が家の外へ出る口実になった。集まっておしゃべりするのが楽しかった。見舞い返しも廃止した。花いっぱい運動にも取り組んだ。

集まることが楽しかった。皆でやるから、長続きする。かつては、田植えの時に、自分の家の田植えが早く終わったら、隣家の田植えを手伝いに行ったものだった。しかし、千歳会に参加する方が楽しかった。

生活改善グループでの活動がなかったら、今日の自分はない。E－Mさんはこのように、自分の活動を振り返った。少々のこと投げたら、いけん。根性は、生改で培われた。生改グループは年齢は違うが、名前で呼び合う仲。困ったことが生じれば、皆で寄って、話し合って解決してきた。例えば、母親がパートにでている間に子供が家の金を持ち出して買い食いする問題が起こった。この時、皆で話し合って問題解決に取り組んだ。しかし、時代とともに働くお母さんが多くなり、集まりがしにくくなった。

(5)部落の役と部落慣行

年行事：部落の代表

組：30 戸程度を単位とする。千歳会は、この例。この組レベルの役員には女性も就く。
岩木地区は 180 戸ある。7 つの組に分かれている。この中で、河内谷は一番まとまりがよい。

会計：1500 円／戸が部落会費。
岩木地区を明るくする会も創設されている。

おこもり：部落の決まり事を決める場で、各家から男性が出席する。こうした部落行事の時の料理は婦人会がまかなった。

年度は１〜12 月。

１月：念仏講の口開け。葬式組の当番の家でご馳走を作って食べる。ここらは、皿鉢料理をつくる。一年の計画を諮る。

３月：？？

３月：花見、女性も子供も参加する。

５月：田植え

７月：天満宮

８月：観音様のお祭り、午前中は境内の下草刈り

さしよせ米：葬式の時に、死者を出した家に対して各戸が持参する米で、きっちり一升。
しかし、現在は現金化しつつある。ほかに、ゴボウ、ニンジンなどの野菜を持っていく。

ほかに、慶弔時にも米一升を持っていく。お見舞いなど。
一升袋：慶弔時の米一升を入れていく時のふくろ。お金だけにすると、いかん。

(6)栄養改善ほか
栄養改善推進委員には、千歳会の会員の全員がなっている。
生活学校：県、保健所、普及所の３者の主催で食生活改善をやった。
県のキッチンカーも来た。

(7)加工所
昭和」58 年、町と県から大豆の貯蔵庫に 100 万円ずつ補助。農協からも 100 万円補助。自分の家の不要品を持ち寄って加工所を建設した。ボイラーは町から 80 万円補助をもらった。
味噌、レンゲ味噌（なめ味噌）、もろみ、漬け物（白瓜とキュウリの粕漬け、日野のカブラ漬け）契約栽培で、加工用の野菜を確保した（５年位）。
ほかに、大根のべったら漬け、ニンジンの漬け物、キャラふきなど。地域の人びとの関係を大切にするため、蕗などの素材は地元のものを用いている。
漬け物以外には、落雁、醤油餅、れんげ餅、ゆず餅、ミカン餅、うるち団子、ゆねり（ゆずの佃煮）、餅（年間 200 俵）、れんげ饅頭、芝餅、おはぎ、桜餅、コンニャク（１トン）。

伊予の赤カブはお城の見える所でしか作れない（藩政期は許可されなかった。地味、気候風土条件も関係しているとされる。）と言われてきた。しかし、大洲でも作っている。

こうして年間就労の機会をつくり、高齢者の活躍の場を設けている。年金の関係もあって 60 歳までは勤める。その後の、60 歳以上の人の働く場を確保することへ繋がっている。アイデアで勝負している。独自の商品の開発を心がけている。健康管理の観点から、添加物は使っていない。主婦の生きがいになっている。
昔はよく集まったものだが、今は勤めに出るので、（生活改善グループは）集まりにくい。情報化で物珍しいものを提供しないと集められない。
おまけ
高岡さん曰く、生活改善の格言ひとつ。「普及員は地域に育てられる。」

以上

【愛媛－１３－3】
場　所：愛媛県野村町釜川
日　時：平成１３年9月１５日（土）９：３０～１０：３０
面会者：Ｅ－
調査者：滝村卓司（兼議事録担当）

（背景）
　愛媛県東宇和郡野村町岡成集落に対する調査の一環として、周辺村落への聞き取り調査を行うこととなった。釜川集落は野村町生活改善グループとしては比較的新しいが、加工食品（味噌）で長い経験を有する。現在では３人程度が集まって活動を続けている。

　釜川地区には、植木（茶道グループ：８人、味噌、タマネギ栽培)、朝日（えびね：５～６人、苗立て販売)、宮本（しいのみ：インタビュー実施グループ)、上組（たけのこ：５～６人、食品加工）の４集落に生改グループがある。

しいのみグループ：
（１）昭和 59 年暮れに組織。釜川総会（振興協議会）出席がきっかけで結成。協議会会長さんと生改さんから勧められる。皆にはかる。声をかけたら５人集まった。若葉会とはちょっと違う。若い人は子どもの世話などがあり、参加出来にくい。皆が皆参加するというわけではなかった。勤めている人もいた。そんな人達は今は家にこもりっきりになっているようだ。忙しかったけれど、楽しかった。家ばかりにいたから、加工所でしゃべるのが楽しかった。
（２）自給用に食品加工を始める。親戚などから評判がたった。昭和 63 年から本格的活動。一番盛んだった。はじめは販路がないので、車で野村町へ売りに。大変だった。
味噌造り。大変。３，４日かかる。温度が上がりすぎたら麹にならないので、ここで寝泊まり。最近は慣れた。夜中に来て確認すれば良くなった。昔は山から薪をとってきておくどさんで炊いた（古いおくどさんを見せる)。
（３）最初から男性の生改さんから教えてもらった。麹は女先生から。施設の設計や改良資金の相談などは男先生。施設は改良資金で建てた。27 万５千円づつ。100 万くらいかかった。
どんぶり館などが出来て、楽になった。最初は売って回らなければなかったので、ほとんどボランティア。
家業との両立が大変だった。昼間タバコ、夕方味噌。暇がなかった。若かったので、なんとかできた。当時は 40 代前半から半ば。青年団、婦人部があった。改善グループは後。
（４）活動はやっていてよかった。男性から助けてもらった。活動は歳をとってから生き

甲斐になっている。後継者がいない。若い人達は街に働きに出ている。やれることはたくさんある。袋詰めとか。活動は楽になる。このまま終わってしまうのはもったいない。後継者 40 才くらい。
生き甲斐になっている。家でぐずぐずしているだけだと思う。足腰が痛くても、ここに出てくると楽しい。
参加することの難しさ。５人くらいはまとめやすかった。姑や主人に気兼ねがあった。帰れない時は特に。でも、家族の者が協力してくれた。男性の協力がなければ出来なかった。
（５）当時は簡易水道が出来ていた。その前は正月でも水汲みを。日照りが続くと大変苦労した。岡成が水で苦労していたと聞いたが、この辺りも同じ。水道は昭和 45 年頃整った。その前までは水汲み。結婚の時、水を汲まないことを条件にしてもらった。（２人は昭和 31 年頃、脇（野村、城川）から入った。）壺で水汲みをした。
（６）岡成はなんでも先。貧富の差がない集落。話も良くまとまる。率先して皆の為になる人がいたんじゃないか。リーダー格の人が多くいたのではないか。
生活改良普及員は最初よくわからなかった。グループ活動をするようになって、見えるようになった。タケノコの瓶詰めをやっていた時、生改さんが来るようになってはいた。
（７）共同作業は？水汲み。屋根葺き、井戸の清掃（井戸替え）、水源地の掃除、水路の掃除、昔は道普請もあった。←いいれ（金ではなく、身体で）かなり昔。嫁に来た当時はやっていた。豆腐づくり。羊羹（タルトのような）をふるまった。ここ 14，５年くらいでなくなった。今は個人。機械が入っている。機械は共同購入。若い人（40 代）は「いいれ」という言葉はしらない。グループを作るときにいいれのメンツを誘った。
（８）講：里村には無尽はあるが、釜川にはない。卵貯金はあった。

【愛媛－１３－４】
場　所：愛媛県野村町岡成　岡成集会所
日　時：平成１３年９月１５日（土）午後２：３０～
面会者：Ｅ－Ｂ、Ｅ－Ｔ、Ｅ－Ｕ、Ｅ－Ｖ
調査者：高岡、水野、山崎、服部、滝村（途中合流）
担　当：山崎、水野、服部

Ｅ－Ｃ

【岡成周辺情報】
若い人は、嫁を外からもらっている人が多い。でもお嫁さんも地域に溶け込んでいる。
たばこで 1,000 万の収入がある農家もある。野菜は 500－600 万の収入がある。
若い人は、農業の収入は波があるというということで、嫌がる。
孫は役場で働いている。
役場以外での働き先としては、建設業もある。
もうすぐお箸の工場ができるし、ファンケルの青汁工場もできる予定。
一時期出稼ぎがはやったが、現在はそうでもない。
農業の出荷は少ないが、家から通える所に仕事場があるのはよい。
さんちゃん農業は 30 年前に終わった。

【氏神様の由来】
300 年前１戸で家事があった。当時から水がなかったこの村では、火を消すことができず、全部焼けてしまったことがあった。そこで、そんなことがないようにと氏神様にお願いし、皆を元気づける祭りをするようになった。
１月から 12 月までのそれぞれの踊りがある。祭り自体は、本当は 12 月にやるのだが（昔は 10 月にやった）、今は９月の第一土曜日にやることになっている。それは、子供を動員するため。
踊りの責任役は１戸１戸まわることになっている。そういう役は男性がなることになっている（婦人会以外の役は男性がある）。責任者（正・副共に）は部落持ち回り。
踊り（お祭り）は、部落全体の祭りという感じになっている。
踊りの構成は、こだちが 12 人、おおだちが 12 人。こだちは小学生がやることが多い。
去年は初めて女の子が踊りに参加した。踊り手の男の子が足りなかったからだが、しきたりとして本来は男子のみ。
踊りはしんどく、雨乞いの踊りと似ている。太鼓もあり、これは 50 歳前後。

【そのほかの年中行事】
１月か２月：野菜組合（学校給食の）での研修（視察旅行、日帰り・泊まりもあり）をする。今年は中山町（松山の手前)、去年は鳥取。その前は徳島、兵庫等。
３月：敬老会。
９月：運動会（小学校の運動会が午前中なのでそれに合わせて地区同志のを当日の午後に行う。)。
12 月：部落総会（会計報告、役員改選)。
部落費はかつては、３段階くらいに別れており、それぞれの家の状態によって金額が異なっていた。病人があるうちや少ないところには配慮があった。
今は皆同じ金額で 12 月に集金される。
月の 25 日に常会。男の人が参加する。お母さんは代理として参加することもできる。
年４、５回はみんなで草刈。
だんだん公園の花上（今はない)。草刈は３月頃していた。

【おこもり】
４月（煙草植えの前）に集まって弁当を持ち寄ってご飯を食べる。小さい子も集まる。
ここは中筋地区だが、カイフク地区（？）もやっている。

Ｅ－？
若葉会、野村町全体で中年女性の会。
婦人会の一部が集まって、生活改善のいろんなことをやろうということになった。
最初はＥ－Ａさんたち５人組が､公民館の前の納屋でパンを焼いた｡何をやっていたのか。
地の小麦でも上手くパンが焼けるか試していたのかもしれない。
男のみで、女は参加させてもらえなかった（パン釜は女に使わせなかった)。自分もパン焼きをしてみたかった（子供にも食べさせたい)。出来たパンを女性も分けてもらった。
最初はこのように、焼いてもらったのを食べただけだった。
公民館（稚蚕飼育場としても使用。加工場と飼育場有り）が出来てから変わった。積極的に女性も参加（パン釜が据えられると、そこでパンを焼いたり、栗饅頭（ここが発祥の地だと思う）を焼いたりした。釜の使用はくじ引きで決めていた）出来るようになった。しかし、男と姑は強かったので、女性が外に出て、活動に参加できるかどうかは、彼らの意思次第だった。
パン釜が使えるようになってから、「しばもち」に代わって、ビスケットを花取り踊りのお土産にした。この方が日持ちがするのでよかった（しばもちは３日しかもたない。）
結婚した昭和 25 年から 10 年間ぐらいは水汲みをしたことを覚えている。夏は水が不足。
パンの作り方は、誰かから教えてもらったわけではなく（つまり生改さんに教えてもらっ

たわけではない）自然に覚えた。パン、クッキーと同じく、作る人によって味が違っていた。何かを作る時（豆腐やパン）に話し合いながら出来るというのが楽しかった。通常５kg 焼いていた。
公民館を建て替える時（平成 7 年）に、パンも豆腐もやめてしまった（パン釜撤去）が、機械はまだある（パン釜は部落の人の納屋に残してある）。

皆さん
「仕事をしなくちゃいけん」という気持ちが強い。
35 年に簡易水道ができた。
婦人会は当時、現在 80 歳くらいの人たちが中心になって活動をしていた。
婦人会は、文化振興会が始まるずっと前からあった。豆腐、パンなんかは婦人会でやっていた。
活動はとにかくＥ－Ａさんが中心だった。
下の道端の花畑は７、８年前にやったものだ。
何をするにも水が大事だということは皆の共通の思いだった。だからこそ文化振興会が水道を作って見せたことは、大きなインパクトだった。食べ物を作るにも水が必要なのだから。
上で決まったことに関しては、婦人会が連絡をまわす役割を担っていた。
酪農を始めたことで、牛乳を飲むようになり、血色がよくなった。
ここでは無尽は行われなかった。

【周辺の生活状況】
25 年には乳牛が１頭いたのを覚えている。乳牛に関しては、皆（絞った人がそれぞれ順番に）で簿記をつけた。Ｅ－Ｃさんは１人で８年間絞ったことを覚えている。
男女共に乳絞りをしたが、女性の方が多かった。

【部落改造】
Ｅ－Ａさん達による最初の思いつきと、それを後押しするおなご（女子）がいて、そこへ生活改良普及員がついて改善をやってきた。
水道をひき、開田もした。最初は上の方の出水から水をひいたが、町の水道に替わり、野村町で一番早く水がきた部落になった。お茶も 7～8 年作った。道路工事にも何年もかけた。
水道がきたら、炊事場の改善に進んだ。視察にきた。篠籐マサシさんが器用で、パン焼き釜を築いて回った。

【出稼ぎ時代】

岡成では、一時期、出稼ぎ盛んだった。主人は大阪へ８年ほど出稼ぎに行っていた時期がある。
昔は、隣近所同士の助け合いがあった。
池田さんの指導で、生活改善グループの再興。婦人部の役員をしていた。勉強会を続け、やがてだんだんグループを形成。学校給食の費用を賄う為（毎月現金が必要になった)、主婦が日稼ぎ、農農閑期の出稼ぎ（広島や大阪）が盛んになった。

【かつての暮らし】
結いはあったが、農作業の機械化の結果、しなくなった。屋根の萱葺きの組合もあり、結いを組んだ。
イモを作っていたので、そのイモを焼酎工場へ運んで売りさばいたこともあった。

【豆腐作りに関して】
当番の時は、自分の家の大豆を提供した。豆腐が出来たら、放送をして取りに来てもらった。豆腐は希望者のみだったので、毎回だいたい作る量は決まっていた。作る人によって、味が違うので、評判が悪くならないように、女性はみな競い合って作った。ものすごく朝早く作り上げてしまう人もいた。

【水について】
水は、一日に１かんくらい必要で運ぶのには１回につき 30 分くらいかかった。
冬は雪で道がすべり、大変だった。
「１日 8,000 時間の水くみ」という数字を出す為に、生改さんが調査をしていたという記憶はない。
水汲みは普段は女の仕事とされていたが、冠婚葬祭の時は、水がたくさん必要になるので、男が水汲みを 1 日がかかりで行った。昔は雪も多く、水汲みの坂道が滑って歩きにくく、子供が水汲みに行くと、帰りに水をこぼしてバケツに３分の１ぐらいになった。
水道工事をやったお蔭で、乳牛が導入できるようになった。（牛飲馬食と言うがごとく）牛を飼うのには水が多く要る。

【共同炊事に関して】
皆の気持ちが一致し、部落の常会で何回か相談して決めた。
栄養改善の人に来てもらって、泊りがけで指導を受けたことがある。
昼と夜のおかずのみで田植えをする農繁期の 10 日間（田植え時）くらい行った。
１人１食いくらという計算でお金を支払い、２、３人で作った。
しかし、共同炊事は、Ｅ－Ｃさんが嫁いできてから、しばらくの間しか続かなかった。長

くは続かず、昭和 30 年代の間しかしなかったと思う。
豆腐は、希望者を募って、農繁期には毎日二人ずつ交替で作った。大豆は自家産のものを用いた。出来あがったら放送して、取りに来てもらった。
Ｅ－Ａさんの前に、共同炊事をやっている人がいた（生改さん？）。Ｅ－Ｂさんの所に泊まっていた。青年団活動の一部だったのか？八郎さんという人が中心だった。この方はすでに亡くなっている。

【その他の活動について】
瓶詰めはやったような気がするけれど、覚えていない。
味噌は作った記憶がない。

【Ｅ－Ｂさん、Ｅ－Ｃさんが「生活改善グループ」を始めた頃】
Ｅ－Ｃさんが、生改の池田さんに勧められてグループに参加したころは、生改さんが女性達（婦人会）に声をかけ、Ｅ－Ａさんに声をかけていた。Ｅ－Ａさんが「やってみたら」というので、やってみることになった。当時Ｅ－Ｃさんと、Ｅ－Ｂさんは婦人会で役員をしていたようだ。
二人とも「アゲ」というところから嫁いできた。
当時は、土地があり、山がある裕福な所だった。日本一の村だと思っていた。ところが今は、過疎でさびれてしまった。今はここに嫁いできてよかったと思う。
今は、都会へ就職し、好きな人が出来て帰ってくる（外：茨城、長野、愛知、兵庫等から嫁を連れてくる）場合が多い。

【Ｅ－Ｂさんの結婚秘話】
昭和 35 年に結婚した時、ミシンを嫁入り道具に持ってきた。Ｅ－Ｂさんはその 10 年後の昭和 35 年に嫁いできたが、そのとき嫁入り道具に持ってきた電気洗濯機は部落で最初の電気洗濯機だった。
この昭和 35 年の輿入れのとき、生活簡素化が盛んに謳われ、公民館の分館の主事をしていた（岡成の集会所の係）マサシさんが実家に結婚式の簡素化（髪結い・派手な衣装も辞めてくれ、引き出物もだめだといわれた）を頼みに来た。しかし、知り合いが呉服屋に勤めていたので、着物は着た。素直に従ったのは私だけだった。
結婚式は簡素にしたが、結局私の時だけで終わり、次の人からはまた元通りにやるようになった。

【Ｅ－Ｕさん】
大正琴を教えて約 20 年。

周りの人：「彼女は夫に理解があるから、続けられたんだ」「彼女は婿取り娘だから」

【松葉会の存在について】
若葉会というのもあった。若妻会に入るには年をとっていて、婦人会の幹部クラスになるには若い人達（姑が入っている為）の集まりだった（「中ばあさんの会」として発足）。これは野村町全体の組織だった。
文化振興会の活動内容が、元々松葉会に関連しているのかについては、わからない。
(Ｅ－Ａさんは、ハイカラな人で、戦時中は、中筋村の農協へ行きよった。（お父さんは村会議員を勤めたことがある。Ｅ－Ａさん自身も、昭和 35 年から 3 期町会議員を務めたことがある（岡成は、合併後の野村町議会に議員を出せる実力を有していたことを示している。きっと、周辺の部落を巻き込んで、選出母体を形成していたことであろう。）
松葉会は、（Ｅ－Ａさんは、部落改造 30 年計画の時代の５人組に賛同して夫婦で参加した者を指していっていたが）３軒で始めた会のことかもしれない。

【文化振興会の活動と婦人会とのつながり】
食生活改善の為に、なたねをつくった。
計画書のミシンの項目については、昭和 25 年から 35 年くらいの頃は、結婚の時に嫁入り道具として持ってくることが多かったことから、ミシンの数については男性にもわかったと思う。
婦人会には、家から一人必ず出ていた。嫁は姑が辞めるころに本格的に活動に参加していたようだ。
婦人会の活動として、味噌作りの講習会を開いたことがある。婦人会の活動と生活改善グループの活動と両方やるのは無理があり、活動のために宇和町まで出かけるのは大変で、家の仕事ができなくなる。また、農協婦人部はがっちりした活動があったが、いまでは８人に減ってしまった。繭の華を教えてもらう話しもあったが、立ち消えになってしまった。

【生活改善グループのその後】
生活改善グループは解散してしまった。
若い人たちが、生活改善グループと婦人会両方参加はできないと言ったので。
農協婦人部も弱くなってしまった。
今の 50 代くらいから活動をやめ始めてしまった。

【高岡の発言】
東京で、池田さんとマサさんの奥さんが発表をした頃やね。
最初は「岡成生活改善グループ」という名前だったが、「岡成」と名前がつくほど立派な活

動はしていないと自分たちでは思っていたので、いつも肩身の狭い思いをしていた。そこで、後にだんだんグループと改名した。

【岡成農業】
酪農は今は２戸だけになった。ケイジさんとコウイチロウさん。
苺２戸（露地イチゴ）、タバコ５戸（Ｅ－Ａさんの所は、タバコで、粗収益 1000 万円、タバコ作は養蚕が下火になって昭和 35 年頃から伸びてきた。）、養豚４戸（Ｅ－Ｄさんの息子夫婦は養豚　農家）、酪農２戸、他に最近ケール（緑色キャベツ、健康飲料の原料になる）。野菜ではキュウリ、ピーマンが盛ん。

【実家のある部落は過疎に悩む】
Ｅ－Ｄさんの奥さんの実家のある部落は大和田小学校の向こう側だが、過疎に悩んでいる。小学生がいない。30 軒のうち後継者がいるのが 5 軒。田や山があって、分限者だった。それと比べて、岡成は後継者いるから幸せだ。犬も人が来るのを喜ぶ。（だから、番犬にならない。）

【若い人】
 今の若い人は草刈を嫌がり、だんだん公園も草が大きくなったままになっている。汗掻くことをいやがる。息子には苦労をさせたくない。親がある子は草刈をしない。

【質問「いいだし/いいもどしはあったのか？」
あった。かやの吹き替えをする組があった。田植えなどの助け合いもあった。

【質問「どうして５人組みの意見に素直に従ったのか？」】
Ｅ－Ｃさん：少しでも楽になるようなことなら、賛成をした。葬式結婚式がある時は、一日中男性が水汲みをしなければいけないような所だった。水道は大きなインパクトだったと思う。

【感想と疑問点】
女性の意見はわざわざＥ－Ａさんに伝えたのではなく、常会や家で男性が女性の意見を組み込んでいったのだろう。
生改さんがいたという記憶はあるが、生改さんがやろうと言ったから始めた事業というのは、初期には無いようだ。
Ｅ－Ａさんたちと生改さんと関係をもう一度見直す必要がある。しかし、つまりはＥ－Ａさんが、生改の活動を担っていたのだろう。農改にいたことで、生改の知識と技術、知識

とコネを同時に持っていたのだろう。
当時婦人会活動がどのような位置をしめていたのかわかるようなインタビューや資料があればいいと思う。

【繭華（面接の終了後、Ｅ－Ｄさんの家を訪ね、お嫁さんに会って話しを聞いた。)】
繭の花は、Ｅ－Ｄさんの息子の嫁に当たる人が、自分で創作したアート・フラワーで、高島屋でも高く評価されたもの（平成５年国際伝統芸術協会手芸コンクール文部大臣賞受賞）。
この繭からフラワーを作る人は他にいないようであり、日本で第一人者と推測される。
夫は養豚農家のため、午前中は養豚業に従事し、午後は自分のアトリエで繭華の制作に取り組んでいる。アトリエは、農業機械の倉庫の一角に夫の大工仕事で拵えられており、中は養豚経営の事務所（パソコン一式あり）兼アートフラワーのアトリエになっている。
繭は、シルク博物館から調達している。糸を取る前の蚕の繭をカットし、自分で染料で染めて、花などに加工。壁掛けのイヌタデの花の一粒一粒も創作である。
色々大変だが、好きなことが出来て幸せ、周囲の協力が助かったと言う。シルク館にも販売用に出しているが、ここに来てくれた人にしか作品はおわけしません、とのこと。この姿勢が大切と思われた。岡成の新しい産業になるか？

以上

【愛媛－１２－５】
場　　所：愛媛県東宇和郡野村町喫茶店道草屋
日　　時：平成１３年９月１５日（土）　午後３時～午後５時１０分
面 会 者：Ｅ－Ｉ（元岡成集落及び千歳会担当生活改良普及員）
調 査 者：矢敷
担　　当：矢敷裕子

【生活改良普及員としての担当地域】

昭和４７～５５年	野村（岡成）
その後、８～９年間（昭和５５～平成元、２年）	宇和
６年間（平成元、２～７、８年）	八幡浜
４年間（平成７、８～１１、１２年？）	大津
３年間	宇和（２回目）
３年間	宇和島
２年間	御荘（みしょう）

家庭の事情で退職、現在に至る。

＊勤務年数は再確認の必要がある。

【岡成での活動】

- 生活改良普及員（以下、生改）として就職した初任地が野村（岡成）だった。昭和 47 年から昭和 55 年まで岡成を担当した。最初で、何も知らず、怖いものもなかったからできた。岡成は素直で協力的な集落で、足繁く通った。
- 無利子の生活改善資金で、野村はまず、トイレや台所（タイルをステンレスへ）、風呂場を改築した。その後、余裕ができてくると、子ども部屋や居間を増改築する人も現れた。時期的に生活が変わる頃だったのかもしれない。
- 健康の為の竹下駄や焼却炉も普及した。
- 昭和 49 年から国の生活水準診断調査を実施した。“ 本当のことを答える年齢の ” 小学校３、４年生を調査対象とした。その結果、野村では野菜の、特に緑黄色野菜の摂取量が少ないことが判明したため、ブロッコリーの普及に努めた。そのため、今でも野村の人に「柿内さんを見るとブロッコリーを思い出す」と言われる。野菜栽培には市町村にも協力してもらい、成績のよいところには資金補助を出してもらった。
- 保健所の栄養士をはじめ、関係機関も活動を後押ししてくれた。今でも、農協とは連携がとれている。
- Ｅ－Ａさんは、当時、郡の役員をされていたが、女性たちとの話し合いに同席しても

らうなどお世話になり、いろいろと教えていただいた。（Ｅ－Ｉさんが）岡成を離れるときは、わざわざ会いに来てくださった。

- Ｅ－Ａさんの所は、農業が基盤にあって、経済的な安定があったから余剰を加工にまわせた。（東予の）みかん農家では、豊作貧乏で景気の悪いときは、生活改善どころではないという空気があった。

【生活改良普及員という仕事】

- いいことも悪いことも、色々あった。
- 当初の移動手段はカブかバス＋徒歩で、泊りがけでなくてはいけない地域もあった。
- 生改という仕事は、一人ではできない仕事だと思う。他の人の協力がいる（関係諸機関）。
- 一人で行き詰まってしまった時に、相談出来ることが大切。日頃から、誰でもいいから一人、話を聞いてもらえる人、アドバイスをもらえる人を探しておく。
- 生改によって、仕事のやり方は違う。先輩生改に付いて歩いたこともあったが、とれるところ（自分の活動に取り込めるやり方）と、とらないところ（自分の活動に取り込まないやり方）があった。
- 行事などで、夜や日曜も村へ行くことがあった。酪農総会等の後の夜の飲み会には呼んでもらえなかったが、男性の農改の運転手として車で迎えにいった。これが実はよく、迎えに行く頃には、皆、お酒を飲んでいて「まぁ、そんなにすぐに帰るな。ちょっと上がっていけ。」と声をかけてくれた。そうすると、良いことも悪いことも含め、普段は言ってくれないような本音を語ってくれることが多く、参考になった。

【生活改良普及員の研修】

- 生改は何回も研修を受けさせて貰えたのがよかった。生改の研修（東京）では、生改同士で意見交換でき、他の生改の報告した事例に“足し”たり“引い”たりして、自分の担当地域の実情にあった活動を考え出した。研修でであった生改さんとの横の仲間意識が、その後の仕事の支えになった。
- 今から思えば、農家の人に育てられたかもしれない。

【生活改善グループ】

- 生改グループ（形成）は、まず、リーダー探しから始まる。これが１年目の目標である。市町村や前任者など、周辺の人達に聞いて適切な人を紹介してもらい、リーダー発掘の参考にした。特に地元出身の普及員（農業改良普及員：農改、生改）の情報は役立った。地元の様子がおおよそわかっているため、ケースごとに誰にどのように話をもっていけばよいか教えてもらった。

- 伸びる集落は、すぐ分かる。伸びる集落では、一言何か言うと、次の（Ｅ－Ｉさんの訪問の）ときまでに、もう自分たちで工夫してやっている。
- グループの役員は、ほとんどのグループが１年交替だが、役員の顔ぶれによってグループが動く年と動かない年ができる。できることなら、（Ｅ－Ｉさん自らが）役員と代わりたくなることもあった。また、発掘したリーダーでも、グループが動かないこともあった。
- あるグループで、リーダーが廻ってきた女性が言った言葉、「イヤイヤやっても一年、楽しくやっても一年。どうせやるなら、思い出に残る一年を。」が、代々のリーダーに引き継がれ、活発になったグループもある。

【キッチンカー】

- キッチンカーにも乗った。キッチンカーの献立は月単位で変わり、（最近はスーパー等においてある輪でとめられる料理カードのような）パンフレットを献立ごとに作った。キッチンカーには地域の農協、保健所、町の栄養士、生改等、関連機関の担当者が交代で乗務した。（Ｅ－Ｉさんは）ひと月に３日ぐらい乗った。一日２ヶ所（午前と午後）で、一箇所２時間であった。訪問スケジュールは市町村に予め連絡し、放送で案内しておいてもらった。
- “最後の方”はキッチンカーはリビングカーと名前を変え、料理だけでなく、暮らし方全体を扱うようになった。リビングカーの時代は短かった。

【女性達の起業】

- 女性達は活動を始めた頃は、労働力を計上せずに加工品販売を行うが、徐々に経営に慣れてくる。
- 女性達が活動できるのは、メンバーそれぞれのご主人のお陰である。お味噌（作り）の時期は泊り込みだし、お弁当販売をするときは朝早くから出なくてはならないから。
- 女性達の加工品製作販売には、市町村も協力的で、注文してくれる。
- どんぶり館会館前は、ＪＡのＡコープやイベント時に女性たちは製品を販売していた。郵便局でもお中元やお歳暮の時期に製品を出していた。
- どんぶり館では、週末に加工実演販売がある。４町の女性たちが交替でそれにあたる。中筋の女性たちも加工場を持っており、さんきらもち、蓬蒸パン、お味噌などを作っている。遠くのイベントへも積極的に出向いて販売している。南予の御荘は、山間地帯なので、持っている技術を活かして、余剰生産物の加工をしている。

【海外からの研修員の受け入れ】

- 海外からの研修員を受け入れるとなると、農林水産省が県（愛媛の場合は経営課）に、

県が普及所に打診することになる。各普及所では、他県からの（日本人）研修生を受け入れるために、毎年、年始に研修生受け入れ農家を選定し、その農家との交渉に入る。

- 愛媛の農家は、他県からの研修生や農業高校、農業大学校の実習生の農業経験ホームステイを受け入れている実績がある。寝食を共にすることが大事で、体で身につけてもらうことができる。
- 共同炊事は、昔は稲作、養蚕、ミカン農家で行われたが、稲作、養蚕農家では止めてしまった。稲作農家で共同炊事がなくなったのは、兼業農家が増え、田植などの作業が機械化されたことにある。兼業農家は時間がないので作業の機械化を図ったが、機械は一件では持てないので、何件かで共有している。その為、田植の日が家によって異なってきてしまい、共同炊事の必要性がなくなってしまった。ミカン農家では今でも、収穫時期（11 月半ば～12 月半ば）の共同炊事が見られる。海外からの研修員が共同炊事を学びたいなら、この時期にミカン農家に入れればよいだろう。
- 海外からの研修員は、生改の（若い人では当時の生活改善の様子を知らないので）年配の人に付くのがいいだろう。愛媛には、高岡さんが中心になっている普及員ＯＢ会がある。このような組織はどこの県にもあるのかどうかは判らない。最近の生改には、就職後１年目と２年目の２年間、1 年に２週間の農家体験実習制度があり、農作業や家事を体験する。

【国際協力への(元)生改参加のための研修カリキュラム】

- 生改が途上国で働く為には、まず語学、そして一通りの生活習慣や風習を学ぶことが大事。でも、何と言っても語学だろう。しかし、（研修ばかりを）あまり長期間は続けられないので、（期間は）１ヶ月間が精一杯ではないか。任期が２年間あるのなら、１年目はとにかく何でも一生懸命やって、２年目に本領を発揮するということになるだろう。

【愛媛１３－６】
場　所：愛媛県西宇和郡瀬戸町大江集落。Ｅ－Wさん宅他。
日　時：平成１３年９月１５日（土）～１６日（日）
面会者：大江集落、志津集落の生改グループ活動関係者
Ｅ－Ｘさん（大江の婦人会リーダー）
調査者：佐藤寛（議事担当）

［大江婦人会活動記録については安藤・佐藤編『戦後日本の生活改善運動と途上国の農村開発・資料集（１）』pp.192－218 参照 ］

【聞き取り対象】
●9/15　Ｅ－Wさん（Ｅ－毛利直子さんの長男)、Ｅ－Ｙさん（Ｅ－Ｘさんの娘・昭和３年生まれ）
●9/16　志津、大江婦人会の元メンバー
①Ｅ－Ｚさん（大江・大正 13 年１月９日生まれ・77 歳）
　昭和 19 年に大連から帰ってきた。
　昭和 28 年（29 年？）に近田貞子、山口ワサさんと松山に行った。
②Ｅ－ａさん（大江・大正 13 年６月 16 日生まれ・77 歳）
③Ｅ－ｂさん（志津・大正６年生まれ・84 歳）
④Ｅ－ｃさん（志津・昭和２年５月５日生まれ・74 歳）
⑤Ｅ－ｄさん（志津・昭和４年１月 14 日生まれ・72 歳）
・志津は大江から海沿いに歩いて三十分の距離

【主な聞き取り内容／二日分を合体】
●Ｅ－Ｘさんについて
　明治 38 年生まれ。Ｅ－ｅ／Ｅ－ｆ　の二男三女の長女
　Ｅ－ｅさんは塩成小学校の初代校長・・・串小学校の校長　絵も毛筆も上手だった
　Ｅ－Ｘさんは父が串小学校の校長をしているとき与侈（よぼこり)、正野（しょうのう）分校の先生をしていた。
・Ｅ－ｇさんは大江の人で、繭を手がけた。ろうそくのためのハゼを買い集めて歩いたりと、事業家で有名な人（八幡浜商業卒)。開けた人だったので子供の教育にも熱心だった。
　長男のＥ‐ｈさんは戦前、北京で酒造工場を経営していた。月に５円づつ送金してきていた。現地召集で少し兵隊に行ったが昭和 21 年に引き揚げ船で戻ってきた。二男Ｅ－ｉさん、三男Ｅ－ｊさん、四男Ｅ－ｋさん（のちの衆議院議員・自民党。Ｅ－ｋさんは大正２年生まれ（1912)。大津中学に進学。帰省時は歩いて行き来した)。

・Ｅ－ｇ氏が長男Ｅ－ｈさんの嫁にと、三机の西谷氏を介してＥ－Ｘさんを指名した。
・川之浜から山を越えて大江に嫁いできた。
・長男のＥ－Wさんが昭和 30 年に愛媛大学を卒業して与侈に赴任したとき、「Ｅ－Ｘさんの子かい」「音楽教わった」と地元の人に言われた。「ハイカラ先生」であったのだろう。
・当時は 120 人の生徒。１～３年生はおなご先生。４～６年生は男先生。
●大江の改善グループについて
・現在では途絶えてしまったが、かつては大江、志津（大江と「三机第二小学校」を共有する隣の集落）にグループがあった。
・大江のグループは 60-70 人ほどいて、活発であった。
・台所改善に金を貸した事がある。（大江、志津の人々には「台所改善」が生活改善の代表的活動として挙げられることが多いようだ）
・料理講習　キッチンカーあった
●当時の生活
　主食はイモ・麦（農協）。現金収入源は①タバコ、②牛の収入（毎年一頭ずつ仔出ししていた／大江、志津、小島集落）、③蚕、④網（あみ／地引き網）綱長（つなおさ）は三つ。⑤柑橘。柑橘出荷組合（農協とは別）。夏ミカンの出荷。自由市場。60 件中 10 件の任意団体。毛利波一氏がやっていた？買い付けには広島の糸崎から直接商人が船で来る。（経済統制下では、ダイダイの売り上げはリュックサックにいっぱい。自由市場で売れて儲かった。昭和 16～20 年は食糧不足で、夏ミカン掘ってイモ植えた。売る果物は夏みかんのみ。
　昭和 30 年代Ｅ－W氏が教員をしていたときは、与侈では庭先のもらい風呂だった。
●（戦前の冬の出稼ぎ）
　冬は九州の造り酒屋に出稼ぎに行くことが、よく行われていた。河本満吉が「おやじ」（頭首）で、大分の直入郡宮砥村へ（志津からは川之浜まで出て大分行きの船に乗る。大江からは塩成に出て船に乗る）。出稼ぎの帰りには酒一樽と酒粕もらって帰る。塩成までい歩いていくと、「おいこかるて迎えに行く」。
●水道
　大江～戦前にアメリカ帰りの人が作った　　湧き水～泉（消毒なしで）
　志津～昭和８年。タンクを使って川から引いた。
●生活改善グループ
　「婦人会の中に希望者グループがあった＝生活改善グループ。ほとんどの人が入っていた。」「Ｅ－Ｘさんを中心にまとまりが良かった」「婦人会も生改グループも一緒。」
●台所改善
　「動線調査していた」（Ｅ－Wさん）。計算すると女性の動く距離が一日２～３キロであることがわかった。→台所改善（改善資金などを使ったようである）】
　→奥さんが死んで生活改善グループの会員でない人も紹介して改善（20～30 万円・無利

子）
●改良釜
　商売人が志津に釜を売りに来た（改良釜）（Ｅ－ｄさんの所に現存・商品名キッチンペット）。移動のできる密閉式のもの。「炭一つで豆が炊ける」（七輪に覆いが被さったようなもの）。取り付けのくどは、「枝こしらえて、「枝山」ないといけん」ので、面倒。
●キッチンカー＝トラックの後ろに幌がけしたもの
・大江では「音楽が聞こえると畑仕事の手を休めて集まった」「鍋も材料も持ってくるので、見るだけ」（烏内）。第２校の道上すみ子先生。
・キッチンカー＝三机の野村てる子先生（教員上がり）、三机の近田貞子さん。
・集会所での料理講習は持ち寄りがあった。生改の役員さんが手はず。
・Ｅ－ｂさんが志津の改善グループの（最初の？）会長。二年勤めた
　そのころ「パンもこしらえた」。
　Ｅ－ｂさんのあとの志津のリーダーは水野みやこさん～大江のＥ－Ｘさんとコンビでやった。水野さんは「養子娘なのでヒマ」。京都から婿養子をとって、社交ダンスもしていた。
●被服の改善
　年寄りの絣や□□を作業着、もんぺに作り替える。
　型紙作ったり、「家の光」「主婦の友」から型紙をとったり。
　肩のギャザーや後ろのヨークが流行だった
　ミシンは各戸に一台ずつあった（たいていは）。シンガーが良かった。
●家計簿
「家計簿はしません」「子は泣くし」（Ｅ－ａさん）
●産児制限
・「生む能力はたくさんあったのに、産児制限の嵐だった」（Ｅ－Ｙさん）
　「生改の会合で保健所の先生が来ていた」「終戦から昭和３０年頃まで」産児制限の教育をたたき込まれた。
・家族計画
　志津の婦人会はＥ－ｃさんの家でやった。（大江は公民館）
　ペッサリーの挿入　コンドーム、ペッサリーの講習で大洲（の保健所から？）
　実地に一人一人サイズを測って。全員一斉に装着した。
　ペッサリーは買ったが安かった（ただだったかもしれん）。Ｅ－ｃさん、Ｅ－ｄさんが一番若かった頃。
　Ｅ－ｂさんはすでに子どもが大きかったのでしてない。Ｅ－ｃさんは子供がなかったので装着していない。
　婦人科医の寄り合いには全員行った（姑も？）。
●頼母子／お講

・（Ｅ－ａさん）「頼母子で落として、台所改善のカマド、流しをなおした」
・Ｅ－ｄさんの兄が頼母子していた。部落で 12 人。「男がやること」「たのもし入ってるのはええのじゃないのじゃ」と姑に言われた。（Ｅ－ｄさん）。塩成では盛んであった。
・月に一回そら豆焚いて 20 人の女性が集まる。お念仏を唱える。「なんみょうほうれんげきょう」。おせいしょう様＝加藤清正
　お講は三つほどあった。「おせいしょう様」（Ｅ－Ｙさんがやっていた）、「ムネタダ様」のお講（Ｅ－Ｚさん）、「せいしょこ様」のお講（Ｅ－ａさんがやっていた）。
　Ｅ－Ｘさんが当たって、卵酒を振る舞ってくれた事がある。
　志津には弘法様のお講（Ｅ－ｂさん）今もある。年に三回する。
●リーダーとしてのＥ－Ｘさん
・Ｅ－Ｘさんは「胸の広い人でみんなに慕われていた」
・料理講習などはＥ－Ｘさんが受け皿になっていた
・「人の言うことを気にしていたら出来ない」「理に通ったことを言う」（大江、志津の人たちのＥ－Ｘさん評）
・Ｅ－Ｘさんの言うことは「ぴりぴりしていた。仕切っていた」
・「学もあり、知識もあり、店もやっている」
　専売品（米、酒、タバコ）すべてを握っている、大江に一つだけの店（大正末には浜にも一軒あったらしい）。村の萬屋で全て扱っているのは珍しい。
・村の萬屋を切り盛りしていた。いつも店にいた　「小銭を貸していた」。葬式に香典を持っていく時など、当座に金が必要なときに（無利子？）
・「つけ売りしていた（年二回の払い）」<現金の少ない集落で手元流動性があることはひとつの社会的機能であったのだろう>　いまだに米を借りっぱなしの人もいる（Ｅ－Ｙさん）
・「Ｅ－Ｘさんは誰にでも頭が低い」
　店でたむろしている子供には「はよ買わんか」と言っていた。
・家で留守番しており、あまり山には行かなかった。
　畑は人を雇ってやっていた。終戦直後は店に売るものもないので山に行った。麦とイモ。
・部落電話
　戦前は大江に一台のみ。店をしていたので昭和 10（12～13）年頃「置かせてくれ」と言われた。当時は電報が主だった。電話がかかってくるのに三時間かかった。電話番は大変だった。取り次いで、走って知らせに行くのが大変。Ｅ－Ｘさんは電話には悩んでいた。昭和 23 年に農会→農協となり農協（大江農協の支所）に部落電話を取られて嘆き悲しんだ。
・三机郵便局の立川（たつかわ）は士族で、しずえ先生（先生をしていた）は人から好かれる人だった。これに対してＥ－Ｘ子さんは「女傑で、押しまくってついてこさせた」

●大江の女性のリーダー
・歴代婦人会長
①Ｅ－Ｚさん　昭和１９年に大連から帰ってきた。「やりぬかん」
②Ｅ－ｌさん　教員上がりの指導者
　・この人の感化で大江では「おれ→僕」へ言葉が良くなった。
　「Ｅ－ｌ先生がおったけ、大江は志津より開けた」（志津の人）
　Ｅ－ｌ先生は農業が好きではなかった。人雇いでだいだい山していた。大江の人を賃金安く雇う。指導する、店をする。生活に一生賢明で人を雇える。大江は一歩早かった。
③ Ｅ－Ｘさん　ずっと会長を続けていた「学がない人はできんと思われていた」
　Ｅ－ｌさん、Ｅ－Ｘさん二人会わせて 30 年くらい
　昭和 37～38 年までは基本的にＥ－Ｘさんが婦人会などのリーダー
④Ｅ－ｍさん（昭和 25／26 年会長・朝鮮からの引き上げ）
・三机郵便局の立川（たつかわ）は士族で、しずえ先生（先生をしていた）は人から好かれる人だった。これに対してＥ－Ｘさんは「女傑で、押しまくってついてこらした」
・婦人会の主な活動
昭和 30 年　会長　Ｅ－Ｘさん
昭和 32 年　家族計画
昭和 33 年　Ｅ－ｋさん当選祈願
昭和 28 年松山へ　近田貞子（三机の人）　Ｅ－ｌさん（昭和 29 年）
昭和 29 年　ミカンで　Ｅ－ｍさん、Ｅ－Ｘさん、Ｅ－ａさんで大洲に行った。
・婦人会長は昭和 47～48 年頃までは地元の「名士」がやっていた（金がある。貧乏人はしなかった）→その後選挙になった（10 年間くらい）
　その後は年の順（大江）。ただし字が書けない人は飛ばす。Ｅ－ｎさん（Ｅ－Ｗさんの妻）の頃は年の順。選挙はしたことない。

●【Ｅ－ｋさんの選挙】
・四男のＥ－ｋさんが国会議員を目指す。長男の嫁としてＥ－Ｘさんの働きは大きかった。
　Ｅ－ｋさんは三回落選して、４回目に通った。その後９期連続当選。
　Ｅ－Ｘさんが八幡浜市、佐田岬半島を松平の地盤にした。
　婦人会員を選挙員に動員して、分担して佐田岬中を回らせた。行く方も、外出する機会は珍しいので喜んで出かけていった。これで家の金を使い果たした。
　Ｅ－ｋさんが来ると、店の品物を人々に配っていた。酒のもませていた。
・Ｅ－ｈさんは町議を三期勤めた→選挙には苦労した。
　自分の票を票の足りない人にも回した。→恩を売ってＥ‐ｋさんに投票してもらうため。
・車で走って「お願いします」といって回った。宮内（半島の付け根）にも行った（烏内）。

・昔強かった高橋エイキチ（川の浜・息子が八幡浜市長）派のＥ－ｏさんと鉢合わせしたこともあった（Ｅ－Ｚさん)。

【宮崎－１３－１】
場　所：宮崎県庁、がまごう庵
日　時：平成１３年１１月１６日
面会者：Ｍ－Ａ（県庁農政水産部営農指導課　主任専門技術員）
　　Ｍ－Ｂ（県庁農政水産部営農指導課　営農指導課長）
　　Ｍ－Ｃ（元生改、がまごう庵経営）
　　Ｍ－Ｄ（元農改、がまごう庵経営）
調査者：水野、服部、小笠原
担　当：水野正己

●県庁挨拶：県庁の本館は、旧式欧風の荘重な建物であり、権威、権勢を誇る。
　　県庁農政水産部営農指導課　主任専門技術員（Ｍ－Ａ氏）
　　県庁農政水産部営農指導課　　営農指導課長（Ｍ－Ｂ氏）
・挨拶、お礼、日程を確認する。
・農業改良普及事業 50 周年記念誌をもらう。

●Ｍ－Ａさんとの雑談から
・生活改善と SAP（注）とは関連がある。
・綾町や児湯郡の農業大学校では、新規就農者の研修を行っている。
・Ｍ－Ａさんは、「夫と、M－C さんの旦那さんとは友人」と言っていた。同じ、農業改良普及員仲間ということらしい。

（注）SAP（Study for Agricultural Prosperity）は、「日本の食糧基地」を自負する宮崎県が農村青年に生きがいと生活の場を用意するため昭和 37 年から始めた県民運動で、作物別に機能集団を組織し、自主的な学習活動や研修活動を推進するもの。現在も引き継がれている。詳しくは、生改ライブラリーの、山本陽三『宮崎県「SAP」運動－緑の繁栄を担って 15 年－』（日本の農業－あすへの歩み－111 号、農政調査委員会、1977 年）を参照。

●M－C さんの生改体験
・県庁出発　→　都城市　→　がまこう庵（16:40 着）
・M－C、M－D 夫妻を訪問した。（M－C さんは、M－D さんを「マスター」とか「彼」と呼んでいた。）
・主人は都城の出身で、私は佐土原の農家の出身。母親が生活改善グループの代表をしていた。福祉の仕事がしたくて、家庭教育の勉強をしていた。鯉渕学園を２年行った後、JOCV に応募して外国へ行きたかった。しかし、（母親が手を回したのだろうが）生改さんの阪衛

さんが説得にきて、JOCV は引き止められ、生改の道を歩むことになった。
・生改になって、椎葉村に生改として赴任したことがある（昭和 45 年頃）。椎葉にはちょっとしかいなかった。（生改もその後に止めたので、生改の仕事も数年しか経験していない。）椎葉村で、農業改良普及員をしていたＭ－Ｄ氏と出会い、結婚。主人は果樹（栗）が専門だった。椎葉の駐在所時代に結婚した例は多い。役場の一角に机を借りて事務所にしているから、自然と・・・。
・（椎葉村の生改グループの面接予定者を見て）、椎葉の中瀬ヒロミツ君（SAP の青年）の所へ行くのではないか。電話してみようかということで電話したが、どうやら人違いのようだった。
・生改の活動としては、味噌作りもした。その頃、桑の実会やまるみ会という生改グループがあった。
・当時、SAP の青年達に働きかけて、椎葉村をまるごと売り出す提案をしかけた。農業は「自然供給産業」をコンセプトにした。椎葉の文化祭を利用して、各集落から産物を持ちよって、取り組むことを考えた。その背景には、大分県の大山町の「梅栗植えて、ハワイへ行こう」という取り組みで、ヤハタさんの考えに感動したからである。
・「自然供給産業」として売り出さないとダメだと考えた。住んでいる人が商売人にならなきゃいかん。そこで、文化祭の機会に、椎葉の地図作りをした。（集落点検地図のようなものと考えてよい。）その時、生改をやっていた私は、椎葉のお土産を作ることを考えていた。旅館で販売出来るものがなかったからだ。農家が持ちよった野菜の味噌漬けを試みた。味の統一が問題だった。
・椎葉の普及所の駐在所長に叱られた。毎日、遊んでいると。しかし、NHK が取材に来た。
・飲み会の場で、生改普及員は土地の人じゃないから、風だから、椎葉の人にはなれないと言われた（ショックを受けた）。普及員をやっているだけでは、商売人にはなれない。地域の人と一緒にやることが出来ない。地元の農家はリスクの為、提案は結局受け入れられなかった。普及員さんは「結局、地元の人じゃないからね。」と言う言葉に、限界を感じた。そして、これは自分から実践する他に道はないと考えるようになった。

●脱生改の道を歩み出す
・主人の姉が大阪で喫茶店をやっていた。この喫茶店がつぶれて空いていた。それを借りて、喫茶店稼業に乗り出すことにした。
・県をやめた（生改を辞職した）。夫も農改をやめた。主人は農業改良普及員を７年、私は生活改良普及員を４年勤めた。二人で広島県へ行き、帝釈峡で結婚式を挙げた。そして、大阪の天神橋五丁目の喫茶店へ。喫茶店では、田舎のものを田舎のもてなしとして提供した。温かみがあると評判になり、僅か２～２年半で資金の回収が出来た。

●故郷に拠点を求めた
・コーラなどは食品ではない。薬品だ。椎葉のイメージ、田舎の暮らし、そのものを求めた。
・主人の田舎が都城の為、椎葉の姿にも近い所だし、古い農家が２軒あって、そこを手に入れて移り住んだ。27 年前のことだった。
・当初は、この地域では、蕎麦や団子は家で食べるものであり、さっぱり売れなかった。そこで、都城で食べて行くための努力が始まった。自然に活かされる「がまこう庵」を目指した。
・その時、サツマイモ・コロッケ事件が起きる。都城市のバックアップを得て食品加工場を始めた。一発に賭けたのだった。家の裏に 2,500 万円を投じて工場を建て、自然食品の加工場にした。地元産のカライモ（ここでは、サツマイモのことをこう呼ぶ）を加工し、添加物を使わずに冷凍のコロッケを作った。ところが、冷凍コロッケには必ず添加物を入れないと、コロッケらしくカラッと揚がらないことがわかった。そんならと、（そんな添加物入りの食べ物を作るわけにいかないので）ひと思いに、工場を僅か 3 日間で止めた。借金だけが残った。都城市のほうも、申し訳ない気持ちだった。
・田んぼと畑があったから、自然生活で食の問題をもう一度やり直すことにした。水田は、合鴨農法を取り入れた。福岡のフルノについで１年後くらいに始めた（から、もう 11 年ぐらいになる）。
・都城市の施設の「XX の緑の村」で、遊びながら親子が食の伝承を楽しめる場として、蕎麦、うどん、どんぶりものをやってみた。また、雑穀パンを始めた。私は、1 日 1 食パンがないとダメな人間なの。主人は５歳年上で、ご飯、味噌汁派。
・ここの土地（ナツオという）にあるものを求めた。そしたら、ここが、宮崎の地蕎麦の種の産地であることに気づいた。

●ほんものの食べ物から、環境学習へ
・ピアニストのコウノさんが、大淀川の浄化を呼びかけていた。
・７年前に宮崎産業大学の横山先生がビオトープを取上げられた。これだと思い、小遣いを 60 万円はたいて、自費でドイツ、スイスへ視察に行った。バイエルン州に学ぶべしと思った。帰国して、環境学習のための実習の場がほしくなった。そこで、学校ビオトープを考え、その見本を作ることにした。空き地を借りてビオトープの建設をしており、そこでは、がまこう庵の雑排水を竹炭で浄化し、利用している。
・自然と共生する場を目指している。次世代にどのように繋ぐか。ふるさとの食を美味しいと言う子どもを育てる必要がある。「センス・オブ・ワンダー（感じる心）」（レイチェル・カーソン）が大切だ。がまの穂の散る姿（白い）を 50 ウン才で始めて知った。それが、今（幼い頃の体験）蘇ってきた。

・吉之村小学校の生徒はいま 16 人で、蕎麦の栽培をやっている。
・コンニャク、甘酒つくり。
・（小笠原）「おばあちゃんの家と同じ臭い」と言った。
・（M－C さんは、すかさず）「天然酵母」を使ってパンを焼いているから。小麦は川辺さんの所で作っているの北海道のハルユタカ。雑穀も。
・食べ物へのこだわりがある。

●蕎麦のこと
・焼畑の蕎麦はおいしい。
・神楽があれば、振る舞いの蕎麦がある。出汁は、イノシシやハト。
・蕎麦はみんな天狗ばかり。ここでも、毎月１回蕎麦打ちの会をやっている。

●ミツバチと蜂蜜
・椎葉村では昭和 40～45 年頃、日本ミツバチの蜂蜜が 1 升 7～８万円、一瓶 4、5 千円で売れ、それで高校の学費を賄っていた。こう言って、日本ミツバチの蜂蜜を舐めさせてくれた。（実に美味しいものだった。）
・日本ミツバチはアジア系で、森林系である。山があって、木の花の蜜を集める。プロポリスが含まれている。日本ミツバチの会もできている。西洋ミツバチはリンゴなど。今では、ミツバチに餌を与えて蜜を取っている。砂糖を与えて、蜜を出させていることになる。
・広葉樹林、雑木、多様性への配慮が必要だ。その時、その時の、恵みを大切にする共存が重要だ。
・盛岡に藤原養蜂があり。

●真剣に遊びながら楽しく暮らす
・田園空間整備事業あり（県が都城で行っている）。
・足許で考え、足許で行動する必要がある。環境学習プログラムでは宮崎大学の小林先生と一緒に検討を進めている。
・菜種については、イエロープロジェクトに取り組んでいる。失ったものが多く、日本ミツバチもその例。実を取る畑を増やして、エネルギー問題に（一石を投じたい）。輸入飼料依存型の畜産を再考すべきである。昔の農村の暮らし、少しずつ楽しくやっていく。
・『現代農業』別冊（1999 年）に、M－A さんの帰農の時代特集あり。
・今は、商売人になれと言わない。遊び人になれといっている。この蕎麦屋は、日曜日は行列ができる。皆、真剣に遊んでいない。蕎麦屋のオバサンで、MRT の朝８時のお助けラジオ塾に出演している。（11 月 18 日放送予定）

●結論

・生改は、途上国にも、今の日本の生活の見直しにも必要。

以上、蕎麦（かけ、もり）、ビール（当然ヱビス）、山芋、その他、土地のご馳走で歓待されながらの、実に楽しい、美味しい、思い出深い、聞き取りでありました。霧島温泉にも近いので泊りがけで再来するように勧められた。鹿児島空港からの方が近い。

【宮崎－１３－２】
場　所：宮崎県庁、レストラン
日　時：平成１３年１１月１７日(土)
面会者：M－E（元生活改良普及員・専門技術員（住居））
　　M－F（元生活改良普及員）
同席者：県庁の M－A 氏（昭和４６年に普及員として採用された）
調査者：服部、小笠原、水野、矢敷
担　当：水野正己、矢敷裕子

宮崎県庁にて
①M－E：78 歳。51 歳で退職し、すでに 27 年になる。川南町の教育委員を歴任。
　青年学校の教員をし、後に保母をしていた。この保育所が普及所の向かいにあり、男の普及員の人に勧められた。生改普及員の資格を取って、昭和 28 年 12 月 16 日に採用になった。川南町の生れた在所と隣町とに合計７年半勤めた。住居の専門技術員の資格を取るように課長から言われた。普及員として赴任した場所は、３大開拓地だった。開拓地の子どもは行動が粗野だったが、それは親の方に問題があった。開拓地の入植者には、軍人上がりの人が多かった。飯盒で飯を炊く生活から始まった。トイレは、むしろが掛けてあるだけのものだった。
　黒木知事（宮崎県に SAP を導入した。）の時代に、普及の専門技術員を兼務して県庁に勤務していたとき、『生活改善の手引き』を印刷したら、表紙の色が悪いと怒られたことがある。

②M－F：69 歳。県庁退職後、現在に至る。県教育委員会の委員、調停委員。2001 年から南九州大学評議員。
・父はみかん農家で、農協にも勤めていた。土日は農業の手伝いをしていた。昭和 26 年高校卒。その後、2 年間鯉渕学園へ。鯉渕学園に農村生活科ができ、女性２名が入学した。茨城と宮崎から各１人。小出先生に感化を受ける。同学園卒。茨城県で生改の資格試験を通る。昭和 28 年 6 月 1 日宮崎県で採用。延岡の農業改良普及所へ赴任した。
・九州沖縄地区の専門技術員のＯＢ会組織ができている。第 1 回の集まりは、鹿児島県で開かれた。（この組織は、鹿児島県の古賀佐智さんらが呼びかけて発足させた。）

M－F さんの日南時代
・延岡に１年８ヶ月いた後、日南市へ転勤になった。出身地が南郷町なので、近くなった。新しい勤務地で、藁布団を作った。稲藁はあった。今のマットレスにあたる。病人が出たら、昔は藁布団に寝かせた。

・日南地区では、生改普及員同士が、生活技術の相互研鑽をした。料理、カマド、藁加工、作業着。作業着は、機能的で、冬暖かいものに工夫した。型紙から作った。

結論

・ 女性の途をきりひらいたのは生活改良普及員である。

【Ｍ－Ｆさんのお話】

・ 南郷町のミカン農家の一人娘。ミカンは祖父母が栽培しており、農協勤めの父が週末に手伝っていた。高卒後、鯉渕学園に進学（18 歳）。学園の女子学生第一期二人の内の一人であった。女子学生が入学したことで学園に農村生活科ができ、もう一人の女子学生とともに、学園内の藁葺きの家で本に埋もれて住んでいた先生の所へ通い、先生の奥様に紅茶を入れてもらって、みっちり指導を受けた。当時の学長はコイデマンジ氏。
・ 先生方は皆えらい人達だった。Ｍ－Ｆさんは 8 期だったが、４～6 期までは、学費を納めなくてよく、お小遣いももらえた。町の子も来られたが、農家の子が多かった。鯉渕は元々（農業）自営者の学校。生徒達にも何がしかの役割が与えられており、自分達の食べる野菜は自給していたし、料理当番も交代で務めた。
・ 昭和 28 年 3 月に学園を卒業（20 歳）。茨城で生活改良普及員採用試験を受験し、合格。同年 6 月 1 日付けで採用となったが、Ｍ－Ｆさんを含めて当時の宮崎県に生改は 8 名いた（阪衛さんのときは、1 名だけ採用）。その後、8 名の増員となったが（Ｍ－Ｅさんも含まれる）、採用されたのは学校の先生が多く、“ 生活のベテラン “ だった。
・ 宮崎で 1 週間ぐらいの研修を受けたあと、初任地延岡（北川町担当）へ赴任した。当時の延岡の様子も、Ｍ－Ｅさんの担当した川南と同じようなものだった。まず、食生活改善からと、油や蛋白質の摂取量を増やすことを目的とする料理講習に取り組んだ。また、カライモ（サツマイモ）やナスの「ばっかり食」をなくす為、いろんな作物を栽培するよう、農業改良普及員（以下、農改）と連携して指導した。
・ お母さん達は、Ｍ－Ｆさんの話を熱心に聞いてくれ、Ｍ－Ｆさんはかわいがられ、大事にされたという。「私達は、よき時代の普及員だった。」とＭ－Ｆさんは言う。
・ お母さん達は科学的味噌造りを知らなかったので、生改が、お母さん達の目を科学に向けさせた。当時、農家は古い麹を使っているので、試験場の足利先生に教えを乞うた。科学的な基礎なしに生活改良普及員は活動していた。
・ カマドは煤だらけだった。カマドの改良として、煙突をつけた。県で行う研修に参加して、土こねを覚えた。農業改良研修館に泊りがけで研修に行ったものだ。昭和 29～30 年頃は、台所改善の花盛りだった。県内には、郡ごとに農林事務所が置かれていた。この郡単位に、台所改善コンクールが行われた。一席の賞金は５万円だった。ちなみ

に、昭和 28 年当時の生改の月給は 8,000 円ほどだった。

- 昭和 28 年６月に生改は１名だったが、次第に増員され、同年末には８名になっていた。
- 婦人実践部落指定もあった。
- 台所改善から出発して、新しい調理道具の普及、新しい料理の講習へと４～５年かけて進んだ。家計簿つけ、家庭菜園、花植えも行った。
- 種もみのウスプルン消毒など、普及所全体で取り組まなければならないことには、生改・農改全員で取り組んだ。カマド改善の時も、農改達も研修所に泊りがけで研修を受け、生改を手伝って広めた。
- 青年団男女の合宿では、料理講習会（地区公民館）が実施され、そこに生改は呼ばれた。料理講習会は講話と実習で、椎葉にも一泊二日で行った。料理講習会では、手間ひまかけずにパッと食べられ、身の回りの材料で作れる保存食を主に作った。例えば、味噌、油、砂糖、いりこで作れる油味噌など。干しブドウや、ニンンク、蜂蜜を加えることもあった。鯉渕学園では、パン作りなどは習ったが、この油味噌は習わなかった。
- 延岡の後（1 年 8 ヶ月後）は、県南端の串間に転勤になった。ここでは、藁布団の普及に努めた。最初は生改の一人が、藁布団の話をどこからか聞きつけてきた。そこで、何人かで藁布団作りをしている人の所へ行き、作り方を習得。その後、Ｍ－Ｆさんの家に皆で集まってミシンで作成した。藁布団の特長は水分が溜まらないことで、子どもがおねしょをしても、病人が使っても大丈夫だった。串間では、カマド改善や作業衣作りにも取り組んだ。作業衣作りの時は、公民館にミシンを運んだ。
- （「時代とともに指導内容も変わられたのではないか？」（水野）の質問に対し、）濃密指導に切り替わった昭和 34、5 年頃から変わった。
- （「農家のお嫁さん達は、集まりに出て来にくかったのではないか？東北では出て来にくいこともあったようだが？」（水野）の質問に対し、）確かに農家の嫁の立場は悪かったが、出て来にくいなど、（東北とは違って）ここでは陰湿なものはなかった。
- 男性の集会へも農協の集会へも生改は呼ばれ、30～40 分時間をもらって講習会をしていた。このように、男性も活動の対象にしていたからやってこられた。女性だけを対象にしていたら続いてこなかったかもしれない。
- バイクをもらったが、砂利道では乗れなかった。倒れると、重くて、立て直すのが大変だった。足はいつも青あざだらけになった。バイクに乗る女性が珍しい頃だったので、皆に見られた。
- （「時代とともに、農家の生活改善の意識も変わったのではないか？」（水野）の問いに対し、）昭和 30 年代の間は、農家にはそんなに変化はなかった。施設園芸（単種栽培）が入ってから、農改と生改の間で大論争があった（昭和 35～40 年）。農改が「農家の家庭菜園はいらない、その土地で収入につながる作物を作るべきだ。」と言うのに

対し、生改は「農家はつましいから、買ってまで野菜を食べない。軒先で自分達の食べる分だけは野菜を作ることが大事」と主張した。宮崎県の農業が施設園芸に傾斜し、大型化、専作化が進んだ頃である。これは、県レベルでも問題になった。

- （「間違ったことを教えてしまったというようなことはなかったか」（水野）の質問に対し、）醤油の量を間違えたとかはあっても、大きな間違いはなかった。
- （「SAP（Study for Agriculture Prosperity。農村の若者の学修の為の組織。宮崎県独自のシステム。）の生活改善コースのテキスト作成や、SAP への指導に生改や専技は関わらなかったのか？」（矢敷）の問いに対し、）専技がテキストを作り、指導もした。各普及所には青少年担当の専技がいた。大きな大会の時には生活の専技が出向いていた。M－Ｆさんは（M－Ｅさんも）SAP には関わっていないが、４H クラブにはよく指導に行った。普及の教科書は川俣茂の「増補　普及指導活動論」（全国農業改良普及協会）である。
- M－Ｆさんは、生改（22 年間）→女性青少年課→消費者生活センター（4 年間、消費担当。普及関係者が４名配置）→営農指導課→女性青少年課に勤められ、最後は次長になられた。県庁には通算 28 年。M－Ｅさん曰く、「県庁には、役付きになった女性が今まで 3 人いるが皆、もと生改。女性の県庁での昇進の道を開いたのは生改。」
- M－Ｆさん、M－Ｅさんの知る限り、県には海外からの研修員はあまり来ていない。
- 九州専門技術員（以下、専技）OB 会がある。年に一回開催され、開催地は毎年各県を巡回する。一巡目は終わり、二巡目からは沖縄県も会に参加することになった。宮崎県の事務局は営農指導課で、担当の課員がいる。OB、OG の中には海外に指導に行った人もいる（ヨシハラ主任）。
- 鯉渕学園の同窓会は 2 年に一度集まっている。農業会議関係で海外へ出た同期もいる。
- 野崎さんは、現職中の昭和 30 年代後半にフィリピンへ行った。向こうで着物を着たと言っていた。
- シンハラ副所長の頃、協力隊志願者がいたが、怒られて認めてもらえなかった。

【M－Ｅさんのお話】

- 川南は落下傘部隊の降下地で、その後開拓地となった。戦後の開拓地に住む人の生活は当時でも大変なものだった。鍋、釜もなく、飯盒でご飯を炊いて蓋を器にして食べていた。古川さんは、学校の先生として勤められたあと、川南で保育所の保母として 1 年 8 ヶ月間勤められた。保母時代、M－Ｅさんは子ども達がとても粗野であることに心を痛めたが、これは、生活に忙しくて子ども達を構っている暇がない親の側に問題があると思っていた。ちょうど保育所の前に普及所があり、あるとき普及員さん（農改？）から「M－Ｅさん、あんた資格あるんなら、受けてみんね。」と生改受験を誘われた。生改なら、親の側にもアプローチできると考え、受験することにした。

- 2 週間の講習を受けたあと採用試験を受け、合格。当時、宮崎には住居の専技がいなかったことから、住居の専技（の資格）をとることが条件とされた。昭和 28 年 12 月 16 日に採用となり、川南とその隣町ザイショの担当となった。（前日の 15 日まで保母をしていた。）
- 川南では、社会教育課と連携して活動を進めた。着任時、都農町の社会教育課の主事に挨拶しに行ったところ、「やぁ、よく来てくれた。待ってた。」と言われ、この主事がＭ－Ｅさんを管内集落の集会巡りに連れて行き、集まった人達に「先生が来たから、何でも先生に相談すればいい。」と紹介してくれた。
- 当時、社会教育課は青年団の育成に取り組んでおり、Ｍ－Ｅさんの仕事も、それら青年団への料理講習で始まった。女子青年団へ料理講習会を実施したところ、参加者の女子メンバーが試食に男子メンバーを呼び、それら男子の方がまとまっていった。その為、Ｍ－Ｅさんにとっての最初の生活改善グループは、この時の男子青年団のメンバーが作ったものであった。この時の男子メンバーの絆は強く、いまだに彼ら同士の交流がある。女子青年団に対しては、料理を教えに行った。男子青年団を料理の試食に呼んだ。川南で採れたカライモを使ったいろいろな料理で、目先を変えたり、栄養素を考えたりした。女子青年団には、年に２～３回家庭管理の講習会を続けた。
- 都農（普及所が置かれていた）は古い町で保守的であったが、川南は開拓地で、日本全国から入植者がやって来ていた為「日本の合衆国」と呼ばれ、入植者は開拓精神に溢れ、進取性に富んでいた。また、軍の管理職だったというリーダーは、いいリーダーだった。その為、川南の方が 10 年ぐらい進んでいるかのようだった。Ｍ－Ｅさんが、そのことを都農の生改グループ（男性 10 人程度。青年団育成をやり、グループ活動に励んだ）に話してハッパをかけたところ、彼らから「先生、みとらんね。もう少し力をつけたら、川南を追い越してみせる。」という答えが帰ってきた。そして、実際、その後、彼らの活躍は目覚しかったという。その当時の生改グループメンバーは、町議になるなど、皆地域のリーダーとして現在も活躍している。今でもＭ－Ｅさんを見かけると、黒塗りの車を止めて送ってくれる。
- 生改は、”お呼ばれ芸者“ と呼ばれるくらい引っ張りだこで、ありがたがられた。当時は、戦後の混乱期で（農地改革も行われ）、地についた農民の指導者が農村にはいなかったので、大事にされた。
- 参加者が集まれるように講習会（秋口には味噌。麹造りなど）が夜になることも多く、帰れないときはお寺などに泊まった。昼も、夜も、農村を廻った。ズック靴をはくので、足に水虫ができた。舗装道路もなく、ジャリ道を自転車に乗って移動した。
- それまでは、味噌の作り方にしても、伝統の（伝達された）作り方だった。作っている段階で雑菌が混入して麹が腐ることもあった。しかし、当時は麹占いが行われており、麹が腐ると「今年は何か悪いことが起こる。」と言われるだけで、雑菌のせいだと

は考えられていなかった。

- 県の出先の郡の農林事務所ごとに、婦人実践部落の台所改善に懸賞金を出した。生改の月給が 8,000 円だった当時、一等をとると 5 万円もらえた。一等の地区には、多くの視察がやってきた。
- 家計簿のつけ方も教えた。
- そのうち（昭和 34、5 年頃）県でも、濃密指導を推奨するようになった。16 箇所濃密指導地域を持っていた（担当していた）。各地へ月に一度は必ず技術指導に行き、管内の詳細な地図を作成して廻っていた。グループごとに活動カルテを作ったが、これはＭ－Ｅさんのオリジナルの考えだったかもしれない。このカルテとは別に覚え帳をつくり、こちらにはグループの性格などを書き込んだ（この各グループの性格を掴むことが大切）。カルテ、覚え帳ともに後任の生改に渡した。濃密指導地域は、Ｍ－Ｅさんなど生改側が選定したのではなく、自然発生的にできた。まず、Ｍ－Ｅさんのことを理解し、協力してくれるお母さんを、同じ地域に 3 人以上つくる（２人ではだめ）。そうすると、この 3 人のお母さん達が、その地域にＭ－Ｅさんの活動の意義を広めてくれ（強力な推進役になり、婦人会等に普及していく）、地域として体制が整ってくる。体制が整った地域をＭ－Ｅさんが認定し、役場に濃密指導対象地域として報告する。このように、普及員を理解してくれる人達を庭先で話し合って親しくなっておくことが大切であり、親密な関係の上に私の濃密指導地区を育てていった。
- 男性も講演の対象にしていた。男の会議に呼ばれて、講演しに行ったこともあった。
- 活講習会へは、女性が人前で話すのが珍しかったからか、多くの人が集まった。ファッションショーも含む作業衣講習会を開催したところ、公民館に 1,000 人以上の人が集まった。野崎さん（生改）が来た時は、川南の劇場に人が入りきらなかった。その頃、まだ保母だったＭ－Ｅさんも、劇場の隣にあった保育所を抜け出して話を聞きに行った。
- （「集会の住民への周知はどのように行ったのか？」（小笠原）の質問に対して、）町村の社会教育課の先生達が、地域住民への広報はしておいてくれた。
- 婦人会の指導に各地を回ったが、当時の婦人会組織はがっちりしていた。講習会の時は、婦人会の役員が、参加者の子守をした。また、冬場の講習会のために、婦人会はストーブを体育館に集めた。この時、体育館までストーブを運ぶのが大変だった、と女性達は後に語った。
- 当時は普及センターの施設はまだ無く、市庁舎の一角（軒先）を借りていた。雨漏りが凄かった。雨になると、自転車で村まで行くのに肩から油紙を羽織って行くのだが、「危ないから」と男性がついて来てくれることもあった。ある雨の日に出かけて普及センターに戻ってくると、所長が火鉢でカライモを炊きながら待っていてくれた。いい所長だった。このような様子を書いて、昭和 32 年に生改発表会で「がんたれ（オン

ボロ）普及所」と題して発表した。入賞したので、九段会館でも、県大会でも発表した。県大会の時は、川南出身のコモリ農政部長が聴きに来ており、その後予算がつくようになって、昭和 30 年代に徐々に県内に普及所が建ち始めた。

- 嬉しかったのはバイクをもらった時。それまで、自転車だったので免許をとった。車体は、小豆色で、150cc のラビットだった。川南町には当時、バイクは 2 台しかなかった（もう 1 台は社会教育主事）。霜解けの時期に滑って、溝にバイクごと落っこちたことがあったが、上の原（うえのはる）までその音が聞こえたそうで、そこの人たちが助けに来てくれた。Ｍ－Ｅさんは、その前を通るときに挨拶をしておいたので、音が聞こえたとき、その人達には、すぐにＭ－Ｅさんに何かあったと分かったようだと言う。
- 保健婦さん、栄養士さんとはよく一緒に村へ行った。キッチンカーのときは、栄養士さんから乗車の依頼があった。（「厚生省と農水省の中央レベルでの連携は取れていなかったようだが？」（水野）の質問に対し）末端レベルでは、連携していた。保健婦さんとの人間関係の問題で、お互い声を掛け合って活動していた。例えば、料理講習会の時に保健婦さんを呼んできて、家族計画や病気対策の話をしてもらうこともあった。
- 生改は、当時、婦人会に呼ばれて市街地にも行っていた。それは、農村部にも都市部にも共通する問題があったから。市街地の人に農村の現状を解説した。
- とにかく、お声はいっぱいかかった。新聞やラジオで話すこともあった。NHK ラジオでは、一ヶ月に一回 30 分、専技が持ち回りで話した。（Ｍ－Ｅさんは住居の専技だったので、）ゴミの焼却施設や住宅に関する人間関係の話をした。生改の時も、一度、渉りをつけると、ラジオから人が来るようになった。ラジオの人が対談を企ててきたので、よく出た。農家も、知っている人がラジオに出たので喜んでくれた。農家は、聞いていないようで、聞いている。宣伝効果は大きい。
- 以前、『生活改良普及員の手引き』をＭ－Ｅさんがまとめ役になって県の専技が作成した。主として普及方法について記したもので、内容はよくまとまっていた。当時の黒木知事に、「内容はいいが表紙の色が悪い。」と怒られ、悲しかったという。（ちなみに、表紙の色はオレンジ色。この手引きは、Ｍ－Ｅさんも持っておられず、営農指導課にもない。）
- （「スライドなど映像資料を講習会などで使用したか？」（水野）の質問に対して、）幻灯やスライドは、もっと後世になってから。Ｍ－Ｅさんの生改時代の初期は、自分で白い紙にマジックで書いた資料を参加者に見せた。Ｍ－Ｅさんはこの当時の資料をお持ちではなく、営農指導課でも保存されていないが、普及センターには何か残っているかもしれない。
- 27 年前 51 歳のときに、専技を辞めた。要職に就いていたご主人を支える為だったが、実際、“ 中ダレ ” にもなっていた。生活設計を一生懸命指導していたので、自分が実践

しなければ、と思った。その後地元の川南市で教育委員、教育委員長を歴任した。

- 県には海外からの研修員はあまり来ていないが、中国、アジアからの農業実習生に対し、農業大学校での講義を頼まれたことがある。これら実習生は、農家に泊まりこんでいた。
- 綾町には有機農業センターがある。これは、農業専技の第 2 の職場になっている。M－Eさんは昭和 31，2 年の頃、当時の綾町のアイダ町長と対談したことがある。濃密指導地域を作りたい旨を町長に告げると、「へぇー、それはいいこっちゃなぁ。僕もそういうの、やりたいと思う。」と賛同してくれた。すごい構想をもっておられた人で、先見の明があり、綾町の名前を広めた源となった人だった。九州専技の OB 会が綾町に視察に行ったことがあり、その後、専技の OB の道（第 2 の職場としての）が開けた。

【宮崎１３－３】
場　所：桑の木原多目的集会センター（宮崎県東臼杵郡椎葉村）
日　時：平成１３年１１月１８日（日）
面会者：Ｍ－Ｇさん（椎葉村駐在所　主任）
Ｍ－Ｈさん（椎葉村　桑の実グループ　加工所代表）
Ｍ－Ｉさん（まるみ会）
調査者：水野、服部、矢敷、小笠原
担　当：小笠原道明、服部朋子

椎葉村は宮崎県の西、熊本県との県境に位置する四方を九州山脈の山々で囲まれた自然豊かな村である。また、柳田国男を開祖とする民俗学発祥の地としても有名である。今回、我々は、日向市から国道 327 号線を経由して椎葉村へ入村した。途中、対向車とすれ違うのも困難な山道を通り、およそ 2 時間かかって、目的地「桑の木原多目的集会センター」に到着した。

今回お話を聞かせて頂いたＭ－Ｈさん、Ｍ－Ｉさん両氏は、椎葉村で普及員の指導のもと様々な活動を展開していった。両氏は、それぞれ異なる婦人会に属しており、Ｍ－Ｈさんは桑の実会に、Ｍ－Ｉさんはまるみ会に所属している。椎葉村でのグループ分けは、小学校の学区ごとに区分されている。現在、椎葉村には小学校が９校あり、婦人会が発足した昭和 29 年には、小学校が 10 校存在していた。

昭和 29 年頃は、水は山水、火は囲炉裏、簡易水道はなかった（昔はよく水遣りに行った。竹で水を流したりしたが、後にホースに変わった）。今でも自然の水を利用する。水道水は洗濯用、自然の水（本物の水）は食物用と分けているそうである。

現在の活動グループは４つ（桑の実、まるみ、臼杵、下松尾）。

面会者情報
Ｍ－Ｈさん：昭和２年生まれ、福岡女学校卒、椎葉に嫁にきて 50 年。
Ｍ－Ｉさん：椎葉生まれ、椎葉ダムができた時は、その為に引っ越した。

桑の実会での活動

昭和 29 年に桑の実原集落で発足。昭和 34 年頃、役場から「2 年間やって下さい」と、生活改善実践集落に指定（椎葉とトネ川集落で 20 戸ずつ）される。当時は 20 戸ぐらいが存在していた。普及所（以前はモロヅカにあった）からは、黒木チカコさん（現在 90 歳以上）が椎葉へ通い指導をしていた。その当時、普及所からは、「生改グループを作りませんか」という呼びかけはなかった。黒木さんが２年分のスケジュールを作成し、その通りやってくれと言われたのでそのようにした（生改が根付いた）。生活改善グループが発足したのは、

昭和 52 年からである。
　桑の実会代表は持ち回りでやっており、生改の会長は別にいる。

まるみ会での活動

　嶽之枝日当集落の婦人会を‘まるみ会’と呼ぶ。まるみと言う名前の由来は、地域が丸い山の中に入っていてそれが実を結ぶようにという意をこめて付けられたものである。この集落全 13 戸が活動に参加している。昔は婦人会などもなかったが、集落で活動（お祭りの時に人をもてなそう、バザーのように何かしよう、独自のお土産を作ろう等）はしていた。
　まるみ会では、台所改善・野菜作り・家族計画の 3 点が重点的に行なわれていった。
　県の野崎さん（現在 90 歳位）から「モデル的な集落を作ろう」と持ちかけられて、台所改善がスタートした。当時は、どの家庭も囲炉裏で大概のものを炊いている状況であった。家の屋根は茅葺であった為、まずはこの屋根をトタンへ変える作業が行なわれた。トタンに変えた家から順に、カマド改善が行なわれていった。当時、椎葉村にはガスが未だ整備されていなかった為、レンガ運びを皆で行い、2 年間かけて全 13 戸のカマドを整備した。
　料理講習が行なわれ、その時に普及員から「塩辛い」と言われたことから「野菜を食べよう」ということになった。当時、手加減で味付けをしており、キャベツ・玉ネギ・トマトなどを口にする事はなかった。それから、家庭菜園（春菊やキャベツを作りなさいと言われた）を始めることとなった。
　家族計画の指導においては、昭和 32 年ごろ産児制限が行なわれた。その為、コンドームを集落全体で注文を行なうなどしていた。
　道路がなくて皆で協力して整備したりした。

家計簿

　普及員の働きかけにより、各家庭で家計簿を詳細につけていた。例えば、ただ使用したお金だけでなく、食生活の記録において何ｇ使ったかを書き留め、それに応じた金額を家計簿につけていたという。椎葉村の普及員である川崎さんから「家計簿コンクールに出しましょう」と持ちかけられ、Ｍ－Ｉさんは発表を行なった。その発表の内容は次のようなものであった。
　20 年間家計簿を詳細につけていた為、物価の変遷がよく分かっていた。例えば、交通費などの全体的な物価は、この 20 年間で 20 倍に上がった。それに対し、椎葉村で生産している椎茸の値段は 3～4 倍しか上昇しておらず、作物の種は 7 倍に上がっている。その為に、昔は 200ｋｇの椎茸が収穫出来れば生活が出来たのに対し、500～600 kg収穫をしないといけなくなった。自分達の生活が忙しくなったのは、この為かもしれない。
　この発表は、20 年間綿密に家計簿をつけることで分かったユニークなものであり、優秀

賞に選ばれることとなった。

特産品生産

現在、椎葉村では、物産センターで様々な特産品を売っている。これら特産品は、婦人会を通して生産されてきた。M－Hさんが所属する桑の実会は、農林水産大臣賞を受賞するなど、特産品生産は現在も盛んに行なわれている。

特産品生産の始まりは、旅行に行った人がその土地のお土産を買ってきていたので、椎葉にも何か地元のお土産を作ろうと言う運びとなった。特に村長さんや役場の人達がどこかへ出掛けるとお土産を買ってきてくれて必ずしも美味しいいわけではなかったが、特色があった。我々も何かあった方がよい、収入の方法を模索しようということになった。何を特産品にするか考えた結果、昭和 10 何年かに知事が、椎葉村を訪れた時に出した味噌漬（知事が大変喜ばれた）を特産品にしようと言うことになった。しかし、実際に作ってみると塩辛く、味の改善・統一が必要だと感じ、講習会を開くようになった（M－Hさんによると椎葉の集落は、勉強することに関してしっかりしている）。役場の方も熱を入れてくれ、県の指導課の研究会もあった。24、5 歳の頃だったが、1 週間泊まりこみで研修をしたことは今でも忘れられない。

桑の実会では、発足当初 17 人が参加していた。昭和 54 年には 14 人と減員する。桑の実原集落には 20 戸あるのだが、体が悪い等で参加出来ない人もいる。一方、まるみ会では全 13 戸が、発足当初から参加している。現在、その内 6 戸が加工に携わっている。生産を始めた頃は、現在のように勤めに出ている嫁さんはいなかった。庄屋さんの家で、毎月定例集会を開き、講習を受け、スケジュール・目標を決め、農村加工所において加工を行なっていた。

講習の内容は、特産品である味噌漬・味噌つき等漬物の指導の他に、硫黄でいぶる干し柿の作り方や、藁布団の作り方、家計簿のつけ方、人形の作り方といった、生活改善の指導も受けた。昭和 30 年には、1 日 10 円の貯金を貯める内容の「ジュッパヨウケイ（10 羽養鶏？：自家製卵がとれる。）」の指導を受けた。普及員には「収入の 1 割を貯金しなさい」と指導を受け、貯めたお金は定例会の時に持って行き、その度農協へ貯金をしていった。

味噌漬の方は、昭和 45，6 年に塩加減を統一した。そのお陰で、特産品は安定したものを作れるようになった。昭和 50 年代には、県の代表やホテルから味噌漬を樽ごと欲しいと注文されるようになった（登録商標がついた）。しかし、大量生産で味が落ちることもあったという。加工所の代表である役員は、毎年変わるようになっている。今は嫁を集会に出しているが、色々と任せられていることこともあり、生産活動に携わっている。

講習会のほかに、県内から九州各地へと研修（別府等に視察旅行。初めて県外に出たと言う人もいた）にも出かけた。昭和 30 年代には、県の指導者研修会が行なわれ、一週間泊り込みで研修を行なった。そこでは、水筒の作り方、農薬の使い方、用水路や測量、柿・

栗・梨のせんてい方法、杏や梅作り、新しい種の導入、健康管理等を学んでいった。

農薬の作り方や用い方は男性ばかりがやっていて、女は全く知らない。測量をして地図を作成したが、田んぼの大きさがわからず、どのくらい薬をまいたらよいかわからなかったりした。

視察先で大変参考になったのは、5、6 年前に出かけた大分のとある村であった。そこでは 4、5 人のおばあちゃんが団子を売り出したのだが、今では雇用したパートの人が生産を行なっており（全て機械)、何もしなくても 200 何万かの収入があると言う。それを見て「いいなあ」と感じた。

視察先では必ず、売店に行き、どのようなものを売っているのか見てくるという。視察に行っては、「視察されるのが目的だなあ」と話していたが、7、8 年前に長崎・鹿児島の方から視察に来るようになった。今では、年に 4、5 グループが視察に訪れる。また、朝日新聞の味自慢に載ったり、宮崎市に呼ばれてＴＶ（ＮＨＫ）に出演（「山野と婦人会」というタイトル）するなど、椎葉村の特産品生産は軌道に乗っていった。

現在、村内に加工所は 18 ヶ所で補助金が少し出ている。４つのグループ活動に対しても村から補助金があるが、或る程度は各公民館負担であり、運用は結構難しい。

椎葉村は、中心地から遠いこともあり高い利益が得られるというわけでもないので、生産活動に関わっている人の中には、意欲的でない人もいると言う。また、特産品生産は、ボランティアでは始まらず、時間給を出さなければならない。椎葉でも色々なものが作れるが、なかなか売れない、人が集まらない（地形的に）と思う。売れないと意欲がわかない。しかし、今までの活動を振り返ってみて失敗がなかったことはとても嬉しく思う。皆の知恵だと思う。失敗をしなかったのは、毎年記録をしっかり残しておいた為だと思う。また、商品登録などの資格を取ることで刺激を受け、やらなきゃいけないと思ったことも励みになった。企業的にならず、味さえよければお客は買ってくれるという思いで、続けたのが良かった。加工活動がスムーズに出来たのは、基礎をしっかり行なってきた為だと思う。

現在の状況

現在、各家庭では、ホウレンソウ・トルコキキョウ・ミニトマト・椎茸・シシトウを生産している。林業においては、杉・ヒノキにおいて全国１位の生産高だが、実際はお金にならず後継者がいないというより、後継者に勧められない状況である。木材が安くなっており、椎茸も４、５年前の半分から４分の３の値段に落ちている。県からの補助金で下草刈り・増林・植林を行なっている（人に頼んでいる)。

若いお嫁さん達のグループ「野いちご会」があるが、勤める人が増えてパワーダウンしている。子どもの教育費捻出の為である。中学までは椎葉にいるが、高校からは宮崎へ行くのに下宿しなければならず、現金収入が求められている。

物産センターが出来たことは大きく、自立ができたと思っている。5 年ほど前に椎葉に講演に来た人が「農業では潰れる」と言ったが、椎葉の人は生きる術を知っていると思う。

現在、椎葉は駐在があるだけで生改はない。西郷村には大きな普及所があるが、各地の普及所はどんどん統合されたりしている。行政に窓口もなかったので、M－Hさんは村長・農業振興課に陳情に行った。平成２年に連絡協議会（17、18 人）ができ、県→役場→生改…というように繋がりを作った。連絡や場所の問題など、役場抜きではやりにくいのが実際である。

今、役場の企画課内には、男性の村興しグループ（２、３年前に統一）などがある。

椎葉村村史が 100 年を記念して出来たおり、M－Hさんは椎葉村の民族部門を担当し、食事や行事についてまとめた。方言、諺、比喩表現などの部門も整理したが（全部載りきらなかった)、この部分は３、４人集まって東京の先生と一緒にまとめて別に出版され、成人式等で配られている。

【宮崎－１３－４】
場　所：宮崎県椎葉村向山日添
日　時：平成１３年１１月１９日（月）
面会者：Ｍ－Ｊ氏
調査者：水野、小笠原、服部
担　当：服部朋子

　宮崎に来てからインタビューをした際、又は宿泊先の従業員の方々から「Ｍ－Ｊさんに会いましたか」と度々聞かれたため、急遽訪ねて短時間であったが、お話を伺うことが出来た。

●椎葉村
・ 人口は約 5,000 人で 99%が山林を占める村。民族学者柳田国男も訪れて民族学誕生の地を呼ばれ、平家落人伝説、民謡、夜神樂、焼畑等で知られている。
・ 椎葉には那須姓と椎葉姓が非常に多く、人々は下の名前で呼び合っている。地名をつけて区別をする場合もある。

●Ｍ－Ｊ氏について
・ **旧称大字向山日添（おおあざむかいやまひぞえ）の今村で大正13（1924）年に生まれ、尋常小学校卒業後、約1年間名古屋の紡績工場で働いた。その後、家事を手伝った。父親は大工の家の出身で焼畑の一方で牛馬による運送業をしていた。**
・ **23歳で同じ日添に住む夫と結婚、畑を水田にしたり、山でシイタケ、ゼンマイ、コンニャク、梅、茶などを作り、一生懸命働いた。**
・ **夫と共に伝統的な焼畑を営む一方、民宿「焼畑」をしている。幼少の頃より焼畑の除草の手伝いや薬草取りに行き、父親から食用の草や木の実、薬草、有害な植物等を教わり、身の回りにある植物のほとんどを識別することが出来る。**
・ **「生活改善グループより前から一人で昔のやり方で頑張っていた人」というのが、周囲の人達の声である。勉強会など全て一人で個人的に活動している。薬草や郷土色に詳しく、宮崎新聞での連載をはじめ、著書2冊（「おばあさんの山里日記」「おばあさんの植物図鑑」）も出版されている。**

●お話
・ 子どもの頃から好奇心が強いとのこと。
・ 日当（ひあて）、日添（ひぞえ）、オッテ　の 3 ヶ所で向山、標高 900m。コンニャクが特産。この 3 ヶ所はそれぞれに特徴がある。日当ては日照時間が長い為に経済状態

がよく、元気があって自己主張がある。

- 平家カブは春に太って花になるので実になる前に摘み取る。根がネバネバしており、雪汁が入らない。粘りがある。
- 蕎麦。蕎麦の形が三角形だが、少し粘りがあり、塩だけで食べられる。虫や炭石が入っているのでそれを除く。実になってから選別。
- 焼畑農業を継承しているが、昔ながらの農耕儀礼、食習慣、道具はそのままである。焼畑は「コバ」とか「ヤボ」という。7 月下旬から 8 月にかけて焼畑を焼く。ヒエ、アワ、ソバ、ダイズ、サトウキビなどがとれる。きつい労働に為、昔は３食以外に数回の食事をとって作業をした。火を入れる時は、お祈りをする。
- どこでも 100 点満点はなく、東京も椎葉も一緒。ここは、不便だが空気や水が綺麗。東京は便利だが自然環境がよくない。

約束なしの突然の訪問のため、短時間であったが、実に精力的に働かれているＭ－Ｊさんには圧倒された。民宿には勉強をしに全国から人が集まり、泊りがけでＭ－Ｊさんのお話を聞く人やＴＶなどの取材も多いらしい。民宿内には、多くの賞状や取材の際の写真等が沢山はってあった。我々にもあらためて、泊りがけで話を聴きに来るようすすめられた。

【山口１３－１】
場　所：岩国健康福祉センター　所長室
日　時：平成１３年１２月３日（月）
面会者：Ｙ－Ｂ氏(岩国健康福祉センター保健環境部調査監)
同　席：Ｙ－Ａ氏（岩国健康福祉センター保健環境部長）、Ｙ－Ｃ（山口県農林部元参事　元農村女性・村おこし推進室室長　元生改）
調査者：水野、佐藤（寛）、関、平田、吉中、服部
担　当：水野正己、服部朋子

●面会者属性
・ 昭和 40 年（1965 年）養護教諭（4 年間）。家庭の事情でやめたが、昭和 49 年（31 歳）に保健婦として再就職。

●活動状況
・ 家族計画、コンドーム配布等。寄生虫駆除は既にやっていなかった。
・ 4 年間、大島町担当。柳井市（の島）を 1 年。移動交通手段は、船と自動車を利用した。
・ 担当する少し前までは、寄生虫の問題があった。結核がまだあったので、防止に努め、ポータブルのレントゲン（胸部だけとれるもの）を持って技師と一緒に各家庭に行った。
・ アルコールの患者は、当時は保健婦担当、精神障害者の家族の会を立ち上げたりした（全国的な動き）。
・ 家族計画（低所得者向けにコンドームを配布）、生活保護世帯への粉ミルクの配布（部落に１つ）、母子の問題（1 歳半・3 歳検診、当時は 3 歳児のみ）、伝染病はなかったが今また感染症の問題が出ている。
・ 当時は低所得者（非課税だったりした）に粉ミルクを配布した。低所得者とは、役場に自己申請する人達だが、調査をして該当する場合に配布（部落に一人位の割合）。
・ そのほか、家庭訪問をしたりした。
・ 成人保健（成人病問題）ポリオ、害虫駆除、昭和 57 年からは老人保健を手がけてきた。
・ 大島という日本で一番高齢者比率の高い所（現在約 60%）で活動した。大島保健所があって、ガンの集団検診等で行った。
・ 離島へは、船で通った。橋のかかって無い時代は 50 分でこの山口から 1 時間半かかった。シケの場合は行けなくなるので、事前宿泊をしたり、帰りには帰れない場合もあった。
・ 大島からさらに小さな島へ行き（さらに 10～15 分）、月に 1、2 回くらいは巡回した（Ｙ－Ｂさんは 2 箇所巡回）。岩国の鶴という所から行く。橘町のヒクマに保健所があった。

島全体は、128㌔平方㍍で錦町の広瀬と青島郡の面積は同じ。

- スタッフ３人と係長１人の４人体制で対応。４島（大島、イワ町、東和町、橘町）を担当で、Ｙ－Ｂさんは４年いた。
- 島の中の移動は車で保健婦の必須条件（昭和 40 年代）で、以前はバイクや自転車だった。牛に追いかけられたりしてのどかだった。
- 島担当後柳井に２年、その後県庁に２年半勤めた。柳井では単独勤務で、最初の半年は常駐、残りは通った。
- 保健婦さんの同窓会があり、75 歳の人が会長。75 歳くらいの人達が一番元気でよく知っている。山口県の「和みの家」は高齢者の憩いの場で、島根県などはこの高齢者施設を見学に来ると言っている。
- 保健婦かどうかはわからないが保健医療関係で、中国から研修生が来ていたことがある。田舎の町村で一緒に業務をやっていくというのは未だ無いが、見学のみの人や 1 年間いる人もいる。
- 保健婦は新しいことがあるから、常に研修が必要である。県などから国の研修へ代表としていくが、戻ってから仲間に伝えることが重要であった。
- 保健婦が足りずに村民のボランティア（ある程度、読み書きが出来る人を対象）を選び、このヘルスボランティアがある程度のことが出来るようにしておくというものもあった。しかし、ボランティアはボランティアであり、そうでない組織を作る、きちんとした体制をつくることが大切で核になる人をつくることが必要である。
- 地域住民との間にまとめ役（保健婦達との橋渡し役）として、食生活推進員（当時は栄養改善推進員）、母子保健推進員、今の天皇陛下が誕生した時に出来た母子愛育会（厚生省がつくるように指示）の愛育員が大きな役割を果たした。
- 母子保健推進員は最初は個人であったが、それを組織だてた。何かあるときは、ここに声をかけて協力してもらったりしていた。
- 市町村の保健婦は充実してよく整備されていた。53 年までは国保で雇っていた。
- 順次、保健婦拡充段階を経てきた。今は市町村が主で県が従、かつては逆だった。きちんとした体制ができた。最初は県に保健所がある一方、市町村には衛生部が設置されていた。この衛生部が保健所に、つまり保健所が市町村におりてきた。
- 食生活に関しては、栄養士とともに（栄養士、保健婦、市町村が乗車）進め、キッチンカーもやった。市町村の広報を使い、愛育会グループには地域への声かけをしてもらい、自治会長、婦人会へ働きかけて人を集めた。地域の奥さん方（男性は集まらない）が集まった。
- 愛育会は生改の活動と重なる部分は多かった。一緒に作り上げていく、専門をそれぞれ尊重し、集まった時は共によい仕事をするというようにしたいと思っている。
- 昭和 20 年代は、生活改良普及員は県の保健婦さんと一緒に廻っていた。担当する個々

人の性格により、やり方は異なる。しかし、熱意がないとダメだ。重なり合う部分を譲り合いながらやっていかないと上手くいかない。地域全体を眺めてみて、町全体をどうするのかという哲学が必要だ。その中で、専門を大切にすれば、両方がよい仕事ができる。小さい町なら同じ人を対象にすることになるし、地域ごとに、生改と保健婦のウエイトが違う。

- 自治会、婦人会などが末端関係者（団体）だが、全体をみて、地域の中で自分をどこに置くかを考えて動く必要がある。
- 性病予防も実施。基地のあった所だからとのこと。当時は米軍がお金を出したりするという協力があった。
- 日本はいつまでたっても豊ではない。途上国の子供の目の輝きが、日本の子ども達にはない。

【山口１３－２】
場　所：山口県錦町向峠（むかたお）生活改善センター
日　時：平成１３年１２月３日（月）午前１１：００～午後１：００
面会者：錦町向峠生活改善普及員ひまわりグループ（元弥生グループ）
　　Ｙ－Ｅ氏・Ｙ－Ｆ氏・Ｙ－Ｇ氏
同席者：Ｙ－Ｃさん、Ｙ－Ｄさん（生改）
調査者：水野、佐藤（寛）、関、服部、平田、吉中
担　当：平田慈花、水野正己

個人情報

- Ｙ－Ｅ（**S5.05.08**）：夫は保育園長、一町二反の稲田をもつ。
- Ｙ－Ｆ（**S3.03.03**）：広島出身で、公務員の夫のところへ嫁に来た。弥生グループ結成には携わったが、２４～５年にわたってグループを離れていた。息子が二人。現在夫は向峠唯一の雑貨店代表者。農協から **400** 万で下取り、**1**：**30-17**：**00** まで開店。日用雑貨と食料品を売る。会計の計算は農協に依頼している。
- Ｙ－Ｇ（**T14**）

グループ結成の経緯

弥生グループは S29 年に結成された。これは浴中（えきなか：浴中地域は道上と道下に分けられる。）にある７つのグループの一つである。元々三島さん（存命／**T14** 生まれ）というお寺（浄土真宗本願寺派）の娘さんが、若い女性を対象に花、編み物、裁縫、料理作り、ろうけつ染め等を教えるインフォーマルなグループが出来ていた。そこに、三島さんと懇意にしていたタケサダさんという農業普及員が、グループの女性に対してカマド改善を提案したのをきっかけに、生活改善弥生グループが発足した。カマド改善一号は昭和 **32**、**3** 年頃三島さんの家。

婦人会に三島さんというリーダーがいた。84 歳。お茶、お花を教えるほか、司法書士、小学校の先生も勤めた。この人のご主人は、満州で警官をやっていた。終戦後は、村の助役を勤めた。タケサダさんと三島さんとが協力。カマド改善をしてみた。金をだいぶ使った。土間まで下駄をはいて歩いていき、使用する。親子カマドが一番良かった。このカマドは、2、3 年前まで、竹の子を茹でるのに使っていた。お嫁さんの年が揃っていたので（弥生グループ員が現役の頃は）、作業奉仕ができた。今の若い人は、1 分過ぎたら、何円という時代になっている。

今は嫁世代に弥生グループを引継、姑世代はひまわりグループに改名している。ちなみに、嫁グループのさらに下の世代はスミレグループと名乗っている。

尚、集会所は当初安村宅を中心に、個人宅を順番に利用していたが、村役場に農村推進事業として申請し、S52 年に県から車両一台と集会所を建ててもらった。

グループの活動の様子

弥生グループは、S33 年に全国大会に出てわさびの保存加工の仕方（王冠締め）を発表し、S44 年には恵本フジノさん（平成 12 年物故）が中四国の弁論大会へ弥生グループ代表で出かけ、「僻地の生活改善に取り組んだ弥生グループのあゆみ」を発表した。

一方で、日曜青空市、宇佐郷の朝市、錦町駅、羅漢高原のスキー場売店で、味噌、わさび、コンニャク、漬物（べったら漬け等）、かくずし、餡子寿司、お餅を売りに出て、現金収入を得た。

S30 年代には、嫁に来ると必ず一家に一人は婦人会に入ることが義務であった（向峠は 74 戸）。一方で生活改善グループは婦人会の一部の人が関わっていたが、生活改善グループ活動が活発化する中で、婦人会リーダーの三島さんと生活改善グループリーダーの恵本さんとの間には、当初かなりの緊張感があった。

カマドの次ぎは、漬物と野菜づくりだった。四季の野菜をつくった。春は青もの（葉菜）。

10 羽養鶏もやった。

野菜を背負って、7 時前のバスに乗り、ウサゴウで振り売りした。儲けは農協貯金した。自分の小遣いにし、自分の名義の通帳を持った。その時のお金で買ったスプリングコートは今でも残してある。

毎月、グループの集まりを持った。お金を集める場合は、集金集会。グループの会費もあり、三浦さんの旦那さんが会計をやっている。グループの会費は、最初は毎月 100 円貯金だったが、300 円になり、500 円になって、今だにやっている。

料理は女の普及員が教えてくれた。昭和 29 年、ムネマサさんと言った。三角巾、エプロン（自分で縫いよった）、古着の作り変え、帽子、作業着も作った。

キッチンカーも来た。2、3 回来た。道路わきに車をとめて、卵料理を教えてくれた。

共同購入もやった。当時、電話は安村さんの家にしかなかった。荷が入る日には、旗を立てて知らせ、木の半鐘をたたいて（人を）集めた。共同購入したものは、冷凍の鯨肉、赤魚（アカウオ）、イワシ、白大豆など。リンゴ、ミカン、砂糖も共同購入した。（当時は冷蔵庫がないため、Ｙ－Ｆさん宅では公務員の夫が町に降りる時に氷を買ってきていた。）

祭りの時の献立を同じにして、なるべく安く済ませた。氏神さんのお祭りの当番が 7 年に 1 回めぐってくる。当番に当たると、ご馳走を振舞わなければならないが、その為に 5 万円かかったとか、3 万円だったとか、とにかくものいりだったのを、簡素化した。

農業普及員と生活改善グループとの関係

タケサダさんは広瀬から30分以上かけて通ってきては、野菜畑に肥料を蒔いてくれたり、

夜も泊まりこみで指導してくれるなど、非常に協力的だった。

栄養講習には、保健所の栄養士と生活改良普及員が一緒にキッチンカーに乗って指導に来た。特に女性普及員のムネマキさんからは、加工食品の作り方（鰯、鯖、鯨、赤魚等）、三角巾・作業衣の作り方等を教わった。祭り（昔は、農業祭と氏子祭りが別の日程で行われており、一晩寝ないでご馳走を食べたりした）に出すご馳走を用意する為に、普及員に新しい料理方法を習うのが楽しみだったし、真剣に勉強した。（→普及員は on demand で来ていた。）

普及員さんを呼んで、変わった料理の作り方を習った。野菜を作ったら、普及員を呼んで、教えてくれと、料理の仕方を教わった。今は、年寄りと生活しないから、若い者は習うことがない。

昭和 48 年に、Ｙ－Ｃ先生に味噌づくりを教えてもらう。広瀬の町で朝市も（Ｙ－Ｃ先生の頃に始まる）。

共同炊事もやったが、長続きしなかった。田植時に、おかずを一品作って配って歩いた。調理場が無かったので、神社の社務所を借りて、調理した。

向峠に集会所が必要だということになり、昭和 52 年に山林事業（の補助金）で集会所を建てた。弥生会の活動が長続きしていることから、補助金で軽トラックも購入し、朝市へ野菜を運んだ。

生改のグループを作らなかったら、普及員さんも来ない。Ｙ－Ｃさんも、オイオイと気やすくやってもらった。夜でも、度々こちらへ来てくれた。他の生改さんも長かった。グループ員は、打てば響くような皆会長の気分だ。グループ員が年をとってきたので、夜に集まることは止めた。

料理の他には、家計簿記帳（オオツキ式経営分析）やカロリー計算も実施した。

衛生面では、DDT 予防でハエや蚊を撲滅するために、お宮・お墓の掃除を７つの班の間で当番制で実施しており、無縁仏は老人会が世話している。

復伝：生改グループの代表が研修に参加した場合、その結果を他の生改グループ員に報告し、習ってきたことを教えることを「復伝」と呼んでいる。この時は、普及員は呼ばずに、内輪だけで集まり、飲んで、心が通じた。ひまわりグループの集まりでは、お菓子を用意するほか、参加者が何か一品下げてくる。

<u>グループ活動成功の要因</u>

上記のようにグループ活動が活発だった理由としては、嫁同士の年齢が揃っていたこと、戦時中被服廠で奉仕する間に培われた「勤労・奉仕の精神」がグループメンバー全員にあったことが挙げられる。そして、グループメンバーが全員、「打てば響く」性格の持ち主で、やる気に満ちていた。

また、女性の地位が比較的高く、夫がワンマンで意思決定権を握っているような家庭は

なかったことも、カマド改善を始めとするグループの生活改善事業がスムーズに進んだ要因の一つであると言える。（通常は男性が家計を握っているが、女性が野菜を宇佐郷まで売りに降りる際、現金収入をそのまま農協に自分名義で貯金して自己資金を作っていた。その時のお金で買ったスプリングコートはまだ持っている。）

さらに、向峠地域は西本願寺系浄土真宗の信仰篤い土地柄であることも、要因の一つである。仏教婦人会が結成されており、斉藤校長先生（1998 没、享年 82）の呼びかけで「お実り会」が開かれて、仏間の飾り方、お供えのあげ方、お焼香の仕方等を教わった。

村の過疎状況

浴中地区では、過疎でお嫁のきてがない、という問題がないのは、一軒に一人は必ず跡取りを残すという方針を地区全体で徹底させたからである。また、比較的地形が良いため、現金収入源となる野菜加工等ができ、生活にゆとり（酪農家もかつて 10 軒以上あった。現在は２軒のみ）があったことも、過疎化を助長しなかったといえる。今でも、郵便配達のない日曜日には、村の若衆が新聞配達をしてくれている。

村の交通は、S35 年にバスが広島のバスセンターまで開通した。当時広瀬までのバス料金は 75 円。それが昭和の終わり頃町営バスに代わり、不便になった。

氏子祭りと農業祭りを一緒にした。10 月の最後の土日と決まっている。氏子祭りでは、土曜日の晩から翌朝 4 時まで神楽が続けられる。神楽団を作って復活させ、舞を伝承している。すでに、14、5 県に出かけて行って神楽を披露している。岩国の川下へも、ミワ町へも行ったことがある。

子供が舞う蛇舞には生徒 12 人が必要。だが、子供の数が減ってしまい、踊り手に先生を 3 人動員している。子供の神楽団は小学生 9 人に減っている。

小学校の統合が進んでいる。町中の小学校は、7 校から、5 校になり、2002 年 3 月から 2 校になる。オオハラ集落の村上さんは子供が 9 人あり。

【山口－１３－３】
場　所：Ｙ－Ｈさん自宅（錦町・須万地（スマジ）集落）
日　時：平成１３年１２月３日（月）
面会者：Ｙ－Ｈさん
同席者：Ｙ－Ｃさん（生改ＯＧ）、Ｙ－Ｄさん（錦町担当現役生改）
調査者：水野、関、平田、服部、吉仲、佐藤（寛）
担　当：佐藤寛

【Ｙ－Ｈさん】（「生活技術が生きている人」という紹介）
・ 生改グループ「山彦」グループ（３人グループメンバー／Ｙ－Ｈさんが中心的）
・ 県林業婦人部長／県境フェスタ（山口、島根、広島）の会長
・ その他、農家改善士（グループの優秀なリーダーを県知事が任命）、指導林業（Ｙ－Ｈさんは女性第１号）、ルーラルガイド（山口県の制度/2000 年４月～）になってもらっている。

【インタビューの状況】
・ Ｙ－Ｈさんが、我々の分も含めた鍋料理を用意してくださり、「食べなさい」という状況。バリアフリーに改築された家の広いリビングルームでインタビューより
も食事に中心が移ってしまったが、Ｙ－Ｈさんのパワーは着実に感じ取ることができた。部屋の中には様々なＹ－Ｈさんの手作りの作品が飾られている。

【地域情報】
・ 錦町の人口　現在 4,200 人。かつては一万人いた。広瀬、高根など 128 集落
・ Ｙ－Ｈさんは、昭和 48 年に向畑（ここから南方向の山の中）からこの場所に集落移転してきた。向畑（昔は上と下で 60 軒あった／分校は六年生まで）には平家の落人の武具あるお宮（300 年の桜の木がある）があり、ヒロダネ左近の守をまつる。七年祭りは、紋付き袴でおみやげ持っていく盛大な祭り
・ 地域性
「玖北（くほく）地域」４ヶ町村（美川、錦、本郷、美和）。山間部である。
昭和５年の大恐慌で村をあげて借金して、山を取られたところが多い。大山林地主（岩国の吉川氏など）の山の中の村となり、山林地主の下請け林業をし、土地を借りてわさびなどを栽培しながら生計を立てている。
・ 平場に比べて現金所得がなかった。女が働かないと現金が入らない。→生改さんの位置づけが高い＝やりがいがあった（生改にとって）。また、ルーラルガイドなどになる人材が豊富。玖北地区の生改は以前は三人いたが、平成 10 年から減員となって今

は一人。

【Ｙ－Ｈさんの生い立ち】

- 昭和５年（1930 年）生まれ
- 「いくら忙しくても学校へ行け」という母だった。学校まで８キロの道を５年間通った。藁草履で歩いて通った。毎日新しい草鞋を父が作ってくれるが姉は一日半、自分は一日で草鞋をつぶす（それほど活動的だった）。冬は提灯を下げて父親が迎えに来る。
- 13 人の家族で、一日五升の米を毎日水車でついていた。
- 家は 50ｈａの小山持ちで、わさびを植えて儲かった。Ｙ－Ｈさんが子供の時は３、５、７、10 が市日で、出していた。「お金のない人がおるじゃろか」と思うくらい金が儲かった。３日で 17 万円。
- （高等科）農村学校－二年間「仕方なしに」通った。補習科に一年。裁縫のみだが身に付かない。
- 広瀬高校女子部の一期生（その三年前に男子が出来た）　18 歳で卒業。
- 昭和 24 年（？）。19 歳で結婚＝遠縁の人、親が決めた。

●生活改善グループ

- この地域の生改グループは昭和 31 年からある（最初にはじめたのは山田さん。27 戸でわさび漬け作った）が、Ｙ－Ｈさんが入ったのは昭和 44 年から。Ｙ－Ｈさんが柚子味噌造りを始めた。
- 昭和 48 年に、向畑の木谷の集落（平家の落人部落・集落内婚だった）から移転してきた（須万地集落は 220 戸あり大きい）
- Ｙ－Ｈさんは昭和 52 年から錦町生改グループ連絡協議会（生改連）の会長（～昭和 58 年３月）。傘下 25 グループ。すでにカマド、トイレの改善が済んでいた。課題は減塩など。
- 県下で長門の次に朝市を始めた。県の農業振興賞もらって、活動が盛り上がったところで会長をやめた。次の人にバトンタッチ。翌年全国大会。高齢化が進んでいるが、当時の人がまだ残って活動している。
- 加工に重点を置いて９年やった。竹中さんとＹ－Ｈさん。
- 県の農村祭りのコンクールに出した。付加価値をつけて売る方法の研究。コンニャク、わさびの漬け物（わさびの醤油漬けは山口のみ）。コンニャクは県の農業祭りで３枚百円で売ったところ一万枚を売り上げ。
- 市町村がこうした活動に十万円の補助をつけてくれた。技術確立のために試験場と普及所が連携。（こうした行政の資金・技術面の適切な支援も有効であったということだろう）

- 平成９年（？）ヨーロッパ視察　（①錦町、②石川、③新潟、④盛岡、⑤青森から代表）Ｙ－Ｈさんも行った。
- 平成 11 年の三県の朝市サミット開催時に 300 枚の草木染めハンカチを作って配り、盛り上がらない参加者に「ハンカチふれ」という演出をして、心をつかんだ（Ｙ－Ｄ生改さん）。
- 山口きらら博（2001/7/14-9/30）での「みのり工房」でもＹ－Ｈさんは講師として活躍
- 命がけでやっているので「ひっぱられる」（担当のＹ－Ｄ生改さん）
- 帰りがけに道の駅「ピュアライン錦」に立ち寄り「Ｙ－Ｈさんミソ」を購入

【山口－１３－５】
場　所：Ｙ－Ｉ氏宅２階（山口県萩市）
日　時：平成１３年１２月４日（火）雨のち曇り　午前１０：００～１２：００
面会者：Ｙ－Ｉ（元生活改良普及員　昭和元年生まれ　現在 75 歳）
同席者：Ｙ－Ｊ（元漁家担当生活改良普及員、たまたま遊びにきていた）
調査者：佐藤（寛）、平田、服部、関
担　当：関なおみ

【家族歴・生育歴】
父は佐渡出身　母が地元の人
父は逓信省海底通信船小笠原丸に乗っていた（調理士）。海員組合で闘っていたので昭和９年に年金が支払われる前に退職してしまった。このためお金をあてにしていた家族は迷惑した。夏ミカン畑が３段あり、当時夏ミカンが１籠 3,000 円で売れたので大もうけした。その後鰯網をやったが大失敗した。アルコールなどの問題があり、母と娘は困っていた。

【経歴】
昭和 18 年　　萩高女卒業
昭和 27 年　　生活改良普及員の採用試験受け合格したが（地区の割合があって受けさせられた）、家庭を持って妊娠したばかりだったので断った。
昭和 30 年　　人が足りないのでなってくれと言われ、阿武かほく地区担当になった。
昭和 30～35 年　田万川地区（江崎）担当
昭和 35 年～　　萩と愛島６島村担当
　　広域担当対象へ　萩・阿武地区担当
昭和 52 年～57 年（高度成長期）　県庁へ
昭和 57 年　　萩次長
昭和 60 年　　退職
昭和 62 年～　　夫が体調をこわしたため、入れ替わりで町議となり 16 年間目
　　（議員便りなどを作っていた）
平成 4 年～10 年 婦人会長

【他の県の普及員との関係】
・ 山口県では普及員は一番多い時に 67 名いた
・ 東京の堀家さんと「互談会」をつくっていた　死んだり体調を壊したりする人がいて休んでいた。茨城のかさまで久しぶりに会を開いたときにアジアの仕事をしていることを聞いた。

・　専門技術員研修の時に愛媛の高岡さんと一緒だった。

【主な活動内容（アルバムを見ながら)】
・　田万川市江崎エホク事務所　ヒラタジタロウ所長の時代の写真（職員は６人）
１代目生改松永ゆきえさん（大正６年生まれ。調布にいる）が一緒に写っている
事務所は民家の間借りで（２階には警察官の夫婦が間借り）暖房は炭だった（普及所の自転車で運んでいる写真あり)。最初自転車が支給されていたが、その後スクーターへ（ラビット号　重たい）になり、坂をスクーターで上がっていたら男の人に驚かれた。

・４Ｈクラブの活動
萩地区４Ｈクラブスサノでキャンプ（写真）
４Ｈクラブのメンバーと生活改善実行グループとは別
４Ｈクラブの女性指導は生改の仕事の一つ（食事など関係することを指導する）
男性指導は農改がやる（薪集めなど）（他の県でも同じかどうかは不明　４Ｈクラブの全国大会は農林省が主催）
学校の先生は来ない。普及所総出でキャンプへ行った。キャンプファイヤー川のそばや山の中で火の神様に所長が祈りを捧げ、その後フォークダンスをした
阿武郡阿武町フクガでやったキャンプは大雨でいろんなものが流された（写真あり）

・内容調理実習
パン作り：サラダなど野菜を一緒に食べるようにパンを作りを指導した（米だけだと栄養が取れないと考えていたので)。研修所の前で写真を撮っている
軟質小麦なのでグルテンが少なく、パン作りには工夫が必要だった。フランスパン式がよいことがわかったのでこれを指導した。パン焼きの指導は携帯用のパン釜と白板、鞄に７つ道具を入れて農家を回った。
保存食作り：農繁期用　ふきのすずけ　あちゃらづけ（酢づけのニンジンなど　瓶詰めにする）
※実習では台所改善のため大工もやった（カンナのかけ方など）写真あり

・愛島での活動
愛島を越えると波が高い。農村圏と漁村圏は通婚圏でなかった。本村（漁家）とウズ（兼業。うにが自慢　夜 20 時から）を行き来していた。ウズでの活動が終わったら本村に戻る（夜中 12 時頃になってしまう)。地元に農改さんがいたので協力関係にあった。農改さんの運転するトヨモーターの後ろに乗せてもらったりした。風呂が塩水でぬるぬるしていた。愛島の人々の日ごろ使う食器は非常につましかった。茶腕、汁腕、てしお（小さいお皿）

などのみ。洋食器も持っているのに出してこない。
味噌のコンクールをやったら　グリーン色(緑青色)だったので味噌じゃないといったら、次の年に麹の作り方を教えてくれと言われた（味噌は豆を使うことが多く、大豆などを使っていたが無いときはソラマメで作る為)。台風の被害が大きい地区で９月には刈り取りをしてしまわなければならない為、８月下旬に麦麹の作り方の指導に行ったら湿度もないしうまく作れなかった（結果まで見届けられなかった)。米麹はうまく作れたがどぶろく作りになってしまった。後で本土の人に愛島の味噌は美味しいのでわざわざ取り寄せていると言われショックだった。
映画「生活改善普及員の仕事」萩を舞台で映画を撮った。PR 用に山口県が作ったらしい？没になった？（15～30 分　Ｋ－Ｊさんは研修で見たらしい）

・　床並（とこなみ）三見（さんみ）地区（濃密指導地区）での話
浄土真宗の信仰が厚い地区だった（公会堂に大きな仏壇がある）
嫁と姑を仲良くさせる話し合い（嫁と姑「おかさま」「ねえさま」を１・２階毎に集める）を開催した。「ここで言ったことは誰にも言ってはいけない」と指導したが、結局皆が互いの家庭のことを話してしまい後で大変なことになったが仲良くなった家庭もあった。当時農家の主婦は財布がなく（夫が握っている）その切り口が生活改善だった。
濃密指導地域を作って主婦が主体的に出来ることから取り組んだ（例：油を一日 10 グラムとるなど)。自分の家で菜種をとって作るよう指導した。じいさんから油食べたら腹下すと言われたり、食器洗いが大変になると言われ、なかなか進まなかったが、それでも多少づつ使うようになった（フライパンで油いためなど　野菜も利用できるから)。
・ある年の 11 月３日､暇だったので自分の畑で直播の菜種を作ったらかなり油が取れた(一斗ぐらい)。農改さんを怒らせた（移植法でやっていたから)。農改が「どちらが正しいか比較する」と言ったが、長雨が続いて結局不作だったので結果が出なかったのでほっとした。

・高度成長の波
昭和 42 年ごろから兼業が始まった。床並（三見地区）から土方に出始めた。床並地区の血液検査をしたら比重が重かった。小遣いがあったから魚肉ソーセージ・パンなどを食べていたからではないか。「堅実な暮らし・豊かさとは」という指導をはじめた。
農林水産省から選択的拡大地区制が奨励され、県毎にミカン・卵・豚肉など区分けした指導が始まったがこれは失敗だったと思う（安易に米価に走ってしまったためその後の打撃が大きかったから)。そのうち農家の収入が平均国民並になって農村でも 3 種の神器が揃うようになった。一番に入ったのは洗濯機（共同ではなかった)。愛島を訪問したとき冷蔵庫にカバーがかかっていた（沢庵とご飯が入っていた)。

電気：島は自家発電（ガソリン）だった。
水道：島は天水だった。ボウフラをよけて水を飲んでいた。
島の分校では可哀相なので、島の子供を萩の明和寮へ入れていた（大阪へ修学旅行へ行かせていたが、それを農業大学校の見学に変えたら、入学率が増えて感謝された）。高度成長とともに子供が島へ帰らなくなった。収穫期はとても忙しく（草取りは目についた時にどんどん行なわなければならない）、家事、子守りなどは子供の仕事だったので、帰ってこなくなったのは大変なことだった。そのため労働力としての里子がよくあった。どこから来たかわからないが昭和 40 年ごろまで続いた（学校などへは通わせていたようだが）。草一つ生えていないぐらいの所。
愛島のかすりの前掛けは 3 つの切れ目があり、水色の縁取りは既婚者、赤の縁取りは未婚者と分かれていた。
作業着の改善は島ではやらなかった（本土ではやった）。島は食がメインだった。共同炊事をやるよう指導したがやれなかった。単車で子供が遊んでいる風景などを見かけ、親が買ってやるんだなあと思った。

・コマでの活動（萩の僻地）
今までコマの人は発言しなかったのが変わった。Ｙ－Ｉさんのおかげで日の目を見たと言われた。

・研修などの話
クボタケコ（現在 96 歳　被服の専技）戦後Ｓ24，5 年ごろ研修講師として来た（炒り子のぱりぱりあげなどを習った）。
係長が稲田ジュンコさんとウチダフミコさんだったときに、研修に県から 2 名行くように本省から指導があり、東西から 1 名ずつ選出されたうちに伊藤つゆこさんとともに選ばれた。行くことになったと言ったら、先輩の生改から文句を言われた（県からいくようにと言われたから行くのだ、と言ったら、断ればよかったのにと言われた）。夜行列車で行った。57 日間技術館（松下幸之助の援助で出来た）で専門技術員研修を受けた。その内容はベットメーキング、シャワーなどだった（アメリカ式の生活様式を叩き込まれた）。6 人家族の役割りで家族管理を勉強した。研修の半分はレポート（3 層 5 段階）だった。梅根先生などに習った。

【山口－１３－５】
場　所：山口県庁、ルーラル・ウェルカム・センター
日　時：平成 13 年 12 月 4 日（火）
面会者：Ｙ－Ｋ（ルーラル・ウェルカム・センター　コーディネーター）
　　Ｙ－Ｌ（山口県農林部農村女性・村おこし推進室室長）
同席者：Ｙ－Ｃさん
調査者：佐藤（寛）、関、平田、吉中、服部
担　当：服部朋子

●ルーラルウェルカムセンター概略
・ 山口県が平成 12 年 4 月に設置。
・ 県内の豊山漁村でとれた様々な食材や地域に伝承されている郷土料理・食文化等を都市の生活者や子ども達に紹介し、「健康で豊かな食生活の実践」に向けて取組みを支援することを目的としている。
・ ルーラルガイド（むらの案内人）は生産されたものを暮らしに活かす知恵・技を持っている人。要件は、農山漁村に住み、農林漁業の経験があり、技術指導がでていること及び営利を目的としないもの。
　例）山口県豊山漁村女性連携会議厚生団体会員、豊山漁村高齢者の方々、山口県生活改善実行グループ連絡協議会、山口県農家生活改善士、山口県漁村生活改善士　等
・ ルーラル探検隊は、農山漁村に関心があり、情報や体験交流を求める個人又はグループ。入会登録は無料で実費のみ必要。
　例）消費者、団体、子ども達　等
・ ルーラルガイド探検交流会の例：柏餅づくり、豆腐づくり、ソバ打ち、ジャガイモ堀　やまももジャムづくり、薬草健康管理と足圧健康法
・ ルーラルガイドの技の例：つる細工、南条踊人形、草バッタ、竹炭ペンダント

●インタビュー内容
・ 農山漁村で農林水産業を担う生産者と都市生活者である消費者を結ぶ窓口として県庁内に設置して、１年半たつ。
・ 農山漁村の人々の持つ技を都市の人々に知ってもらいたい、地産地立、県も自給率をあげたいと考えている。
・ 農林水産業に従事する県域の女性組織の代表者で構成されている「山口県農山漁村女性連携会議」の交流の想いが実現したもの。当該会議は、生産や加工活動を活発に行ってきており、朝市の開催（ルーラルフェスタ）の中心的役割を果たしてきている。このフェスタは販売だけではなく、草木染めや郷土色づくり等の体験が出来る内容で

都市生活者に喜ばれて人気のあったものである。

・ ルーラルガイドが 450 人いる。
　例）漬物、籠・藁細工の出来る人を登録するのである。
・ 県内中心に消費者を考えており、先生や子ども達などは特に活用される。
・ 一緒に山口県の農林水産を支えていきたいと考えている。
・ 探検隊を募集しており、今 400 人登録。口コミで友人を皆連れてくる。
　センターからガイドさんにお願いしても探検隊が来ないと成立しない。10 人くらいは来て欲しいが、最初はわからずに困った。現在、10～20 人は来ている。
足の確保が難しいので近隣で出来る体制がよい。近隣探検隊が近くにいるとよい。
・ 「きらら博」でもルーラルセンターは紹介され、好評であった。
・ 公民館活動で教えたり、近くの学校などで実施している。
・ 他県からの視察も有り、特に都市の人が見に来る。
・ ルーラルガイドの技は、自分の暮らしの中で役に立つもので売るものは少しである。
ガイドさんの技は見に行かないとダメ。

●研修生について

・ 山口県では 2 週間分担という具合に各県で振り分けて考えた方がよい。財政難と人材不足（県も４名減、7 名退職）の為、ここ２、３年は難しいと思う。
・ 国際交流室が金目のものを取ってきてというのであれば、いいかもしれない。1 週間程度なら可能。その人だけのために講義をするとか面倒をみることはできない。
・ 以前、タイ人ウィモンさん（現地の山口県出身協力隊員のカウンターパートだった人）が日本に一年間滞在。荒瀬さんという方が面倒をみており、エリートの方だったが、日本語がわからないことが問題。生改、農林水産関係を学んでいたと思う。
・ 生活改良普及員も最初の１年間は研修。採用され配属先も決まっているが、農業研修所に泊まりこんだりしながら研修を実施し、給料も出す。そう言う時を利用して２、３ヶ月は受け入れ可能ではないか（Ｙ－Ｃさん発言）。JICA とかルートを通してきちんと話がくれば、決して無理ではないと思う。
・ 農改で協力隊はいるが、生改はいない。3 年勤務したら休職できることにはなってる。

●Ｙ－Ｋ氏情報

・ 40 年前、昭和 35 年に生改になる。山口市と防府市担当。
・ キッチンカーは栄養士でないと乗れない。
　　→Ｙ－Ｃさんは熊毛・錦でキッチンカーに乗った。
・ 専門技術員は普及方法。生改としては全部。講義は講義。なかなかその通りいかない

ので自分で考えで、自分の体験でやる。このルーラルガイドはその時の人脈でできたもの。

- 北浦方面は本間、岡村さんは山口・防府というようにそれぞれのエリア。キクツ、エタ町は最初の頃にいた。
- 東京は「あぐりウエルカムセンター」　（社）農山漁村女性生活活動支援協会
  あぐり・ウェルカムセンター

[山口－１３－６]
場　所：車中、レストラン、訪問先等
日　時：平成 13 年 12 月３日（月）～5 日（火）
面会者：Ｙ－Ｃ氏
調査者：佐藤（寛）、水野、関、平田、吉仲、服部
担　当：佐藤寛、平田慈花、服部朋子

●属性：
・ 昭和 28 年より活動している。Ｙ－Ｃさんは 4 代目。
・ 元「農村女性・村おこし推進室長」で前任者は本間さん、内田さん。
・ 矢内市（海岸べり）で生まれて結婚して周東町にきた。熊毛町に 12 年、錦町に 9 年、徳山 2 年、田布施 2 年に赴任し、県庁に 12 年で退職（通算 26 年間とおっしゃった？）。
・ 山口県の女性ドライバー第一号。昭和 33 年、学生時代に取得。
・ 近所の人（矢内市）で現場の普及員の人に「生改にならんかね」といわれたのがきっかけである。家政学専攻の大卒だが、学校の先生がキライでなりたくなかった。
・ 現在は、町内の仕事や教育委員会関係に従事しているが、専業主婦。この主婦業が面白くて現在楽しんでいる。退職後にくも膜下で倒れ、現在は元気だが、活動を自粛している。
・ 子供は 3 人いるが、両親が全て面倒をみてくれたので恵まれたと思う。
・ 「婦人の 10 年」で県代表としてノルウエーに行った。婦人の船で中国に行き、イタリアにも行ったことがある。協力隊の視察としてトンガ、ネパールに行った。

●山口県について
・ 山口県は製造業では全国トップだが、農業生産は最下位のレベル（下から 2 番目）。レンコンが全国で第 4 位だが、大規模な農業がないため下から 2 番目。兼業農家がほとんどである。
・ 米、牛、ミカンとどれをとっても特化できない。これを逆手にとって山口の農業政策は生産中心から村づくり、人づくり、地域づくりに転換した（千葉と山口）。
・ 今は山口県は様々な面を持っている。朝市を始め、味噌ならここというように特産物が豊富である。女性は土日に買物のはしごをし、男性は絶好のドライブとなる。兼業収入が少なく、現金所得が欲しいので不可価値をつけて売ろうという発想が背景にある。
・ 平場の農村は交通の便もいいので二種兼業。
・ 山口の国会議席は４つ、自民党の議席３つと創価学会１つ。林国会議員が山口県の有力者で航空、ガス、などの会社を持っている。

●生改について

- 昭和 53 年から生改で群馬の田部さん（JICA のボホールプロジェクトリーダー）と友人。本性の齋藤京子課長は中国・四国農政局の係長だった。「生粋の生改」
- 昭和 48 年に毎日コンクール栄誉賞受賞。全国表彰は普及員が次の段階を考える為の契機になる。
- 山口県は家政学専攻学生の普及員希望者が多い
- とにかく生改さんは高齢化が進んでいて皆なくなっているし、リーダーも死去している。73 歳と 90 歳ぐらいの普及員がまだ生きていると思う。
- 山口県は生活改善グループが多く、全国で 2 番目くらい。今年は、生改さんを 3 人採用し、来年も採用する予定である。他県は採用していない。支所もある。
- 山口県では協力隊が帰国して山口へ戻る。県庁、普及員、学校の先生等現職へ復帰する。山口はそういう道を開いている。今年は協力隊に 4 名。
- 漁家担当者がいるが、皆兼任である（10 人）。漁連と信漁連とわかれている。
- 生改になる人は皆個性の強い人である。
- 農業改良普及員と林業普及員とは一緒のポストになった。

●各グループ・地域・生改活動について

- ひまわりグループも最初は 14 人だったが、現在は 4 人で一番若い人でも 70 歳。専業農家ばかりの地域である。若い人達はわかれて別グループを作っている。若い人は歳をとったら、その大元のグループへ入ることになっている。若妻会（すみれグループ）は別にある。
- 錦町には 9 年いた。風景がいいし、川べりは綺麗で行きが降ってそこに汽車が通るというように四季の変化を堪能した。「転勤せい」と言われたが、イヤですっとそこにいた。昔は人口が１万５千～２万人いたが、現在は４千人。山口は、東京へ行く人がほとんどで大阪に行くはいない。歴代の総理７人もだしているから、皆東京しかみていない。
- 錦町は二級河川の錦川があり、昔は水害が大変だった。錦橋があって、川ではキャンプが可能。畜産（乳牛）、葉煙草、稲作中心だが、田んぼは少ない。
- 錦町は朝市が多く、商品は野菜中心である。
- やまびこグループ（10 名、昭和 30 年～）は林業をしている。杉の木、雑木が多い。草木染め（工房あり）、ツタ・カヅラ細工。朝 10 時にならないと日があたらず、15 時には日がかげる。ムカデが多く家中ジメジメ。後ろからは川がはう。イノシシ、ヘビ、キツネがいるが、サルも多く、悪さをする。
- 縁側に戸がなくて、すぐに障子、中はコタツ（炭）があって凄く暑い。
- やよいグループは一番最初にカマド改善を行った。水事情のため、山から水を引いた。

今でもその水は大量である。山肌にパイプをとおしており、一日中出しっぱなしである。私が行く頃はきちんとしていたが、その前はトイレ改善に取り組むことが多かった（水洗にする）。

- 11 個の集落があり、日本で一番最初に「集落排水」を私がやった。個人で水洗便所にする人が出てきてその排水が川へ流れることとなり、家庭で使うのは危険ということで集落排水をする。
- 黒沢は水が綺麗で沢があり、そこの人達（本郷村）によってワサビが作られているという。このワサビは京阪神へ出荷されている。向かい側は大小丸（おおごまる）といってコンニャクの産地。両方とも日当たりのよい所で「TV でこんにちは」という企画で NHK の番組として放送された。大小丸と本郷村が谷を隔てて対面式にちょうど高度が同じくらいの山間部に位置しており、この２つの村人が交流する様を画いたものである。このあたりは、吉川という大きな地主がいた。山林は農地改革ができない。林だけでくらしていけるのは 5 件だけだった。大山町へ皆働きに出てお金を得た。皆、50ha 以下の土地も無く、宅地があるのみで畑もないという家ばかりだった。ワサビ漬は特産で特にこのワサビの葉を食べるのは山口県だけである。
- 熊毛町小松原での活動は、腰までつかる湿田における農地改良・農業基盤整備。昭和 39～43 年にかけて機械化（共同で機械購入）をし、自分達で免許を取得し運転した。兼業地（光製鉄、日新製鋼、武田製薬等）なので女性だけで 33（？）の生産法人を作った（昭和 53 年まで）。
- 食材料 40 万円自給運動もあった。これから「朝市」が発展した。朝市は野菜中心で綿町はとても盛んである。
- 加工して売ることを考えて成功している。コンニャクとかが、お祭りで売れ、郵便局のふるさと小包による販売も始める等活発である。
- 最初は、とにかく嫁達にとってのはじめてのお小遣いということで皆の励みになった。
- 道の駅は国土交通省の受け持ちで、生活改良普及員は地元受け入れ協議会とこの国土交通省を繋ぐ役目を果たす。道の駅にどれだけ女性が関わっているかを知ることは重要。
- 現在は「農業生活改善士」というのがあり、生活改善グループのリーダー達がなっている。
- 現金収入を求めて夫が勤めにでている間の防災に対する心配があって、婦人の消防隊が結成された（コミュニティの組織としてはもはや機能していない消防団の代わり）。しっかり訓練をして、自分達で守るという気持ちがあった。誰かが働きかけたもので自治体の管轄。独居老人にとっては重要な存在。
- 若い人達が喜んで住むまちづくりをめざし、「一軒に一人残そう」という方針をたて、それは成功した。

・ 集落点検活動を実施した（女性が決定権を持っている）。地域住民、特に女性達が中心で地域の状況を把握し、地域計画をたてるということを手作りでやった。通常わからない、それぞれの家庭の事情まで皆精通しており、活用の幅がひろい。
→集落環境点検地図とか別の地域でも聞いたことがありますが・・・
　　従来の生活改善で取り組まれていたものと違う面がある。生活改善グループが持っている情報を利活用するので、詳細な実態（一人暮らしか否か等）がわかる点がよい。
・ トンガへ調整員として 1 ヶ月くらい行った。海外協力隊プロジェクトで激励と仕事内容調査を実施した。トンガは親日派だが、ネパールは少し難しい。

●研修等について
・ 農村婦人の農家へのホームステイの引き受けもしている。タイや韓国からだが、日本の女子高校生も。韓国人の場合その後国公立の大学に入るケースが多い。食事やホームステイは無料である。
・ JICA 実施の研修で山口県は「生活改善コース」を引き受けたことがある。
・ 農村婦人の家建設では、小額項目であるにもかかわらず、知事が直接要請に行ったのはすごいことである。農村の家の必要性が認められたことと、最初につくられた婦人の家が好評だったためである。
・ 外国人研修生は多い。生改さんは「コンゴ学校」を開催したりしている。ボランティアである。
・ 廃校になった小学校の校舎を利用して日本語学校「三瀬川学園」を開校している（平成 4 年）。すみれ生活改善グループ員と村おこしをする人達がやっている。

●保健婦について
・ 保健所との交流はあまりないが、保健婦さんと栄養士さんと生改さんはいつも一緒だった。しかし、見方は違った。部別にやることは実情が許さない。
・ 熊毛の担当時期は玖珂保健所の小川ミチコ所長（一人）とウマがあった。住民健康診断の際には、いつもＹ－Ｃさんを入れる（「いついつやるから空けておけ」という具合）。「生活面、生活状況はあなたが把握しなさい」と言われ、健康診断の中に生活状況調査を入れた。保健所の業務内容検討会に呼んでもらったり（普及所長も承諾）した。
・ 乳幼児検診は保健婦と行った。保健婦が説明しても農村の女性はわからない。
・ 会合に集まれないお母さんがいるので「お母ちゃんを束ねて」赤ん坊を守る生活学校（ここに山本洋三先生に来て貰った）を実施。子どもの面倒をみられる時間が無い→どうしたら農作業を変えて時間を作り出せるか？→生活時間調査を実施→共同作業・共同田植えの工夫→時間が浮いた→さらに暮らし、料理の勉強時間が欲しい→どうし

たら農作業を変えられるか･･･。

●嫁と農作業

- 山口県では女性は結婚するまで農作業に手を染めない。
- 家事を全て嫁に任せてあげて（自分は農作業もやらされて大変だったので）自分は農作業を分担してあげれば幸せだろうと思う。だから、農作業から戻れば全ての準備が整って待っているはず、と思うことが嫁には不満。自分の時間がないからである。
- 従来は結婚して初めて農作業に触れ、徐々に慣れていき、40～60 代で主要な担い手として働き、その後「補助労働力」になっていくサイクル。
- 「私は農作業を一切しなくていいと言われて嫁に来た」と言って普及所に来るのを拒否した嫁がいた。とにかく普及所に来させて生活の話などから入り、徐々に農業の話をしていったら、花を始めた。
- 「お母さん」は軽トラで集まる。嫁は 33 ナンバー（大型乗用車）で集まる。
- 若妻の実態調査を社会学の先生を使ってやった（自給 4300 円）。平成７～12 年の間、若妻の組織化に取り組んだ。

●その他のお話（政策、普及方法、農村状況等）

- 「村と人とくらし」を参考にしながら政策を考えた。
- 男性が勤めに出て女性が農業をするのがほとんどだから、問題が多いのである。
- 村づくりは女性にやらせる。女性対策は女性生改。山口県は未だに農改とは採用窓口が異なる。
- 農山村の女性対策は、集落の維持官営問題を抱えている。
- 生改は生産の視点から農業に接近したわけではなく、生活の視点からだったが、農家の主婦は十分農業経営者。
- 「むらびとの　むらびとのための　むらびとによる、むらづくり」
- 「生きがい」になっていると言えるが、例えば荒れ果てる家をボランティアで管理している（磯村？）。
- 段々畑も一軒が作らないと上としたの人が迷惑するので儲からなくても作らなくてはならない。
- 父ちゃんは集落のことは考えないし、水管理も女性がやっている。
- 市町村にいる人口の 8 割は女性である。村にいる成人女性の 9 割は外から嫁いできており、1 割は養子をとっている。
- 市町村単位で見ると 20～30 代の時に女性人口の大半が入れ替わる。
- よそ者が来て若い妻や嫁達が違和感（御飯の炊き方、味噌汁の味が違う）を感じたのが生活改善グループの始まりである。

- 嫁には友達がいないので若妻の□□というようにネットワークを作ってあげる。
- 生活改善グループ活動をした姑は「生改の芯の通った姑」。
- 山口県では社会学を学んでいないとなれない。山口は理論的サポートが根付いている。人文分野及び農村社会学等、山口は理論的である。
- 九州大学の小川全男（おがわたけお：人文農村社会学）先生、熊本大学（鹿児島大？）の徳野貞雄先生（農村社会学)、山口大の山本洋三にお世話になった。教育学、カリキュラム、コミュニティ論等を個人的に講義を受けた。個人的に担当地域に来てもらったが、現在死去。山本先生は専門技術員を上手く使い、まさに山口の生改の道筋を作った人である。
- 小川先生は、県境ルーラルフェスタでも生改が朝市を担当することに流通関係者から根強い抵抗があったことに対し、生改を応援してくれた。小川先生・山本先生は他県では生産・経済の側面からしか見られていなかったか活動を生活の視点から見直そうとする人だった。例えば、生改、朝市、林業、加工、の分野はオーバーラップしており、これらを多角的に見ることで分業をせず村づくりを地位金全体で盛り上げるという思考。
- 漁村社会学の専門を持つ鹿児島大（旧水産学校）の島先生、岩本先生に漁村の生改のあり方を考える時にアドバイスを求めた。
- 山口県の生改リクルートは社会学を勉強していることが必須であり、昭和 35 年に大学の農村社会学の先生（山本先生を筆頭にお弟子さんの徳野先生、木下賢治先生：福岡大学、小川先生）に学生の中からめぼしい候補者を推薦してくれとお願いした。又、生改なりたての頃、生活改善とは何をすればよいかわからず、個人的にこれらの先生から教えを受けた。
- 人文系の社会学 VS 農学という対立構造があったが、県レベルでは生改制度の確立というバックアップがあり、現場レベルで生改が精力的に理論に裏打ちされた技術を教えることで生活改善運動が盛り上がった。
- 昭和 35 年頃、月 1 回の勉強会として山口県社会教育研究会を公民館で行った。山本先生が講師であり、そのメンバーの生徒がＹ－Ｃさんである。そこでは生産農業論、生活農業論を教わった。
- 農村調査を 3 年に一度実施（県庁に有り）し、国の事業は県がつくり、加工して県版にしていた。
- 農業講習所（県の農業試験場の中）があった。
- 立っている視点が違う。手法だけ持ちこんでもダメであり、精神的なものも徹底する。言葉で明確化することも大切。
- 連絡と連携は重要。
- 先生方は１．研究者：研究対象でしかない。

２．普及者：一緒にやっていく。必ずお土産なり、解決をしていく。

- 生産優位→農業は生活があってはじめて成り立つ。
- 山口の生改は人文学、人類学、哲学、宗教観を 1 年間研修する。2 年目から村へ赴任。「人を見る目を養う」ことと総合経営・企画を学ぶ。現在は生改と農改の区別は消滅。
- 同和問題よりも女性の人権の問題である。
- 漁業婦人部は信用組合の中にある。信用漁業組合に管轄されており、貯金は漁協でという具合である。よって、家計簿をつけることからスタートしている。100 円貯金。
- 女性と生活に対する理論はなかった。農業の基本は生活であり、生活の上に農業があるのに下に見られる。
- 山口県知事は女性の為の企業興しのお金(3000 万)の申請をしにわざわざ本省へ行く。女性の雇用に関して知事は力を入れており、何億という申請があるにもかかわらず、この 3000 万円の案件の方に頭を下げに行ってくれたのである（課長や次長も)。
- 女性が農業をする場合、自分のライフスタイル（子供がいる等）に合わせて、農業の規模を決定する。自分に合った作物、自分の好きな作物、自分に適性なものを作るのが女性であり、通常は農業経営は規模があって、目一杯やる形式。よって、女性は、品質のよいものを作ることも出来れば、生産をただ拡大するのではなく、集落全体の中で自分の農業形態、規模を考えることが出来る。
- 数十戸で作る小さい面積だが、品質のよいものを心がけ、栽培は増加し、大分の一村一品運動の人達が山口の女性と交流したいと言ってきたほどになっている。
- 大分県では、企画をして販売が全国規模だが、山口は集落でラベル等全て自分達の手作りである。
- 自治公民館活動（７つの各地に公民館）では、公民館閉鎖や指導主事がいなくなるという例も多いが、頑張っている。

【鹿児島－１３－１】
場　所：鹿児島県農村婦人の家
日　時：平成１３年１２月７日（金）午後１時１０分～１８時
面接者：Ｋ－Ａ、Ｋ－Ｂ、Ｋ－Ｃ、Ｋ－Ｄ、Ｋ－Ｅ、Ｋ－Ｆ、Ｋ－Ｇ
同席者：Ｋ－Ｈ（婦人の家職員）
調査者：宗像朗、小國和子、小笠原道明、服部朋子、池野雅文、山崎照美
担　当：水野正己
次第：開会（Ｋ－Ａ）
挨拶・趣旨説明（水野）
全体面接
ビデオ映写
小グループ面接

各人で自己紹介
①Ｋ－Ａ（大正 15 年生れ）
・鹿児島県の生活改良普及員の第１回生。定年まで 37 年間勤めた。県は 58 歳で管理職停年のため、その後が議会図書館に勤めた。OB 会の世話をしている。
・最初１年は県でお勉強し、（その後は）手探りでやってきた。皆の知恵のお蔭だ。技術の勉強を通じてやってきた。
・枕崎で３年、姶良郡で７年、それぞれ生改の現場で勤務した。専技に合格の後、県に呼ばれて係員を１年し、係長を 15 年勤めた。係長と兼務で専技もやり、農村婦人の家の所長（県の課長待遇）をしてから、退職した。この仕事のお蔭で、県下に沢山知り合いが出来た。（Ｋ－Ｂさんは、生改と生改行政に身を捧げ、独身を通されたという。）

②Ｋ－Ｂ
・普及所は５ヵ所勤務した。県庁のほか、農業大学校に４年、そして農村婦人の家で定年（来年）を迎える。

③Ｋ－Ｃ（元山）
・昭和 24 年 9 月普及員になった。１年間は、県庁に勤務。出水の米ノ津に５年８ヶ月いて、その後、県庁に戻って、係長、専門技術員をやる。
・昭和 49 年消費者行政に仕事の分野が変わった。昭和 50 年から消費生活センターへ。同 55 年に普及部門に戻る。生活近代化センターで、住宅づくりを担当し、６年後に退職。その後、２年間は議会図書館に勤めた。消費生活相談員を２年、同調査員を３年やった。現在、退職して 13 年たち、元気にやっている。

④Ｋ－Ｄ（児玉）
・昭和 26 年から普及員。昭和 59 年に退職。
・川内市で 10 年勤務した。姶良には２年。退職まで、専技として、普及指導活動に 15 年携わった。
・当初は、「生活改善」が何かわからなかった。農家の人とともに切り開いてきた。農家と共に、自分も育ってきた。
・今は、土に帰る、ささやかな農業をして暮らしている。

⑤Ｋ－Ｅ（岩下）
・今日は、93 歳の父親の介護で、遅れて来た。
・30 数年間、普及事業に携わった。
・阿久根に居た頃は、右も左もわからず、誠心誠意、無我夢中でやった。綺麗な心で働いてきた。そんなに苦労することないと、何度も言われたことがある。
・この年になって、若い時の体験の有難さを身にしみて感じている。

⑥Ｋ－Ｆ（加藤）
・昭和 34 年に生改。平成５年当時はまだ現役だった。大隈地区、佐多岬灯台の地区の担当だった。生改普及員を 16 年やり、専門技術員を 17 年やった。専門分野は食生活。農村婦人の家を最後に退職。
・今や、「地産地消」の時代で、自分達がかつて最初にやっていたことが問われる時代になってきた。普及は、底力を持っていたことを感じている。
・東南アジアから年間２～３人が来所し、料理を一緒に作ったりしている。農家の近代的なモデル住宅の設計図が欲しいと言う者もいた。
・『燎原の灯は消えず』は生改の記録で、３年程かかって自費出版した。沢山の人に読んでもらったと思う。各地で新しいアイデアを出して仕事をしてきた。現在を問い、昔を聞いて、そのプロセスを伝達すれば良いのではないか、と思う。

⑦Ｋ－Ｇ（日置農業改良普及センター勤務）
・昭和５０年から生改。大隈地区を担当してきた。今日は、勉強に来た。

⑧Ｋ－Ｈさん（婦人の家の職員）

ビデオ上映
・明日は明るく（昭和 28 年）

・いるいるヤル気のおかあさん団
他に、用意されていたものに、
・県グ連（昭和 45 年設立）の 30 周年記念
・めざめる男性

初期の生活改良普及
・農談会という会合が行われていて、農業技術の普及・講習は行われていた。これは、夜間に行われていた。
・昼間に会合は出来なかった。（それ程、農家は働くに忙しかった。）
・夜の会合には、酒がつきものだが、そこへ入って行った。

戦後の世の中
・「下から自主的に」何かやろうとすることが押さえられていたのが、無くなった。
・自主的な人を育成することが課題だった。
・婦人も何かやりたいという気持ちはあった。
・農村を変えたい人がいた。こういう人を力づけるのが普及の仕事だ。

普及のコツ
・婦人会に入って行かないと（婦人会を無視しては)、やっていけなかった。
・グループ作りは、画一的ではない。それぞれの地域で違う。阿久根でも、婦人会へ啓蒙し、料理講習会をやり、その集まりの中から、自主的な人を探していった。地域のリーダーがいて、それをどう掴むかが鍵だ。
・町立の学校へ、週１回通った。家庭訪問をやり、実情を把握し、何が問題なのかを探り出し、ホントだホントだという声を出していくようにした。
・各地域で何を取上げるか、効果のありそうなものを一つ一つ作り上げて行った。集落ごとに、状況や問題が違う。だから、普及の仕事は現場にある。
・夜の会合から、昼の会合へとどうもって行くかが大きな課題だった。
・野菜、魚とりからその料理法へ進んで行った。
・農家への入り方としては、土地の言葉を使うこと。若い人は標準語になっている。

青年に働きかけた
・青少年育成のため、青年団や婦人会に働きかけた。
・青年に呼びかけて、４Ｈクラブの育成をした。そして、生活の問題を青年に投げかけた。青年活動をきっかけに、保母や栄養士の資格を取る。
・町村にはレベルの高いところがある。例えば、青年団で共同炊事をしたり、保育所を開

いたり、生活改善に取り組んだりした、その体験を町内で発表し合う。婦人会と青年会と一緒に、共通の話合いをやった。

国、県、市町村
・町村（役場）の人にも分かってもうことが必要。農村の貧しいところを掘り起こしてもらう。
・市、郡、県レベルで体験発表会をやり、それを国の発表会につなげていく。発表会に行くと、自信がついた。発表に行く所（のグループのやり方）を真似るようにした。
・国と県の普及員の研修は、参加して学んだことを実行に移す。一緒に研修を受けたもの同士が友達になり、やがて手紙のやり取りなどに進む。（経験交流か？）

ものをいう生活技術
・Ｋ－Ｅさんは当時 21 歳でだった。農村には、何かやりたいという人はいるものだ。農村のお金のかからない「こんなことをしたらどうですか」という働きかけをした。お金のかからない保存食づくりなど。技術で納得させる。色々な改善へ動く気を起こして行くように仕向けた。今の時代とは違って、やりやすかった。若い時から、「盲蛇におじず」でやってきた。生改の方が年が若くとも、「あの先生のいうことはイイヨネ」というようなことをした。
・生活技術を通じて、自立する人を育てて行く。まさに、人づくりだ。他には生活技術を学ぶチャンスが無く、何をしても喜ばれた。
・技術を武器にして、人を育てる。技術を通して、人づくり、グループ作りしていく。それを、点から、面、線に広げていく活動方式でやってきた。
・人を掘り起こした。
・意欲のある人（でも、戦争中はあきらめていた。）
・味噌づくり、甘酒、漬物にも、新しい観点、科学的観点を取り入れた。

時代背景も重要
・(主婦には)お金はなかった。財布はお父さんが握っていた。
・お金の価値も変わった。農業の生産性の上昇と、農地改革が基盤で自作農化したことがこの背景にある。
・普及が、農業と生活と青少年育成の３本柱が農村を支えてきた。生活の問題を農業（技術改良）と一緒にやるようになったのが特徴。
・内面にうずうずしていた人が、乗ってきた。
・生活と農業と一緒にやることが、物珍しくみられた。
・何よりも喜びが先にたった。いい料理を習って、嬉しいし、それを家族に食べさせる

隠居制
・嫁と姑の関係が良くなる。
・隠居制の場合、生改は両方に働きかける。

農村婦人の家
・ 国の費用（に県が上積みして）で建てた施設に、県の職員を置いたのは、鹿児島県だけ。
・ 若妻は婦人の家で勉強している。１泊２日の研修制度が出来ている。

農改と生改
・かつては、技師と呼ばれた普及員がいた。昭和 23 以降は、農改と生改とになった。前者はお金を掛けられるが、後者はお金が掛けられなかった。
・最初はどうしても農改が先になるが、生改が生活の話をすると、ああいう先生もいたのか、と珍しがられた。男が財布を握っているので、そこに矢を向けて、生活の問題を男に理解してもらうことに努力した。
・農改が、まずお金を掛けて、農業指導を行い、その過程で、ああいう台所は疲れるよ、と言ってもらい、助言、サポートしてもらった。農家に入る時は、農改と一緒に入る。農談会に参加する。
・農改は協力的だった。次の手を打っておいた方が良いよと、助言してくれた。例えば、川内市では大根作りが行われ、沢山大根が出来ているから、なんとかしようというので、漬物作りに展開して行った。鹿児島では、漬物は自家で漬けずに購入していた。そこで、これを家計簿つけと結び付け、自給化を進めた。
・農改と生改とは車の両輪である。農家は生活はなく、働きづめだった。タバコ農家は、当時、働くだけで、生活がなかった。
・（Ｋ－Ａさん）５べる運動を紹介した。調べる、比べる、しゃべる、食べる、手を差し伸べる。

幸せな人生を送ってきた生改さん
・ グループ活動の基礎の上に、今日の活動がある。最後は人。自然と地域も変わっていく。
・ 年を取っても、生活改善をやっていく。一生の活動、生きがいだ。

Ｋ－Ｐさんのこと
・川内市の、のぞみ会。朝市を昭和 40 年からやってきた。世話好き。昭和 55 年からは県

グ連研の会長、昭和 61 年に全国グ連研の会長に就任。

Ｋ－ｃさんのこと
・４Ｈクラブの活動から吹上町の果樹農家へ。お嫁さんのグループで活動。

おまけ情報
『やまびこ』：生活改善グループ連絡研究会機関誌（平 12 年に 30 周年記念誌刊行）
つたの会：生活改善グループの代表者の会
グラフかごしま（アジアとの交流の記事あり）
県下に、女性の農業委員 82，3 人いる。

【鹿児島－１３－２】
場　所：鹿児島県農村婦人の家
日　時：平成１３年１２月７日（金）
面会者：個別聞き取り（Ｋ－Ａ氏、Ｋ－Ｂ氏）
調査者：服部、小笠原、宗像
担　当：宗像朗

全体会の後（議事録鹿児島１３－１）、調査員も元生活改良普及員の方々も２人づつぐらいに分かれて、個別にお話を伺う時間を設けて頂いた。Ｋ－Ｂさんは他のグループと掛け持ちであり、資料配布等で出たり入ったりの対応となった。

１．生活改良普及員の採用・研修について
・Ｋ－Ａさんは、昭和 23 年から 24 年にかけて採用された鹿児島での生活改良普及員第一期５名のうちの一人である。皆お嬢さんであったとの認識をもっている。当時はまだ試験制度は無く、採用基準は短大家政科卒以上であった。その後の資格試験では教育、家政、衣食住についての基本的な知識が問われるようになった。
・採用後、最初の 1 年は、県の指導課、普及課？で、書類の仕分け、宛名書き等の三等郵便局のような仕事を中心にＯＪＴをして過ごした。このような地道な仕事を通して、全県の農業改良普及員、生活改良普及員の名前、地名等を覚えることが出来た。また、この間、上司の指示を受けて、または自主的に研修の機会を探して参加した。例えば地域毎に実施される農業祭に参加し、生活改善に関するポスターの展示を試みることなどであった。
・Ｍ－Ａさんが最初に赴任したのは枕崎町であった。一緒に赴任した農業改良普及員が地元枕崎の人だったので地域の情報が得られたし、色々な面で助けられた。その後も同様であったが、最初に村に入る場合は、農談会、夜学会（夜間学校）等への出席というパターンが多かった。農談会の場合は農業改良普及員と、夜学会の場合は社会教育主事と一緒に行った。このようにして、徐々に地域の情報を得ながら地域に入っていった。
・生活改善普及制度が確立してからは、生活改良普及員、専門技術員が月一回集まって、勉強会を行なった。生活改良の考え方そのものの他に事業案・教案の作成（年間計画、目標、達成指標等）、デモカードの作り方など普及技法の習得等が主な研修テーマだった。
・このような研修は非常に有効であった。特にデモカードに答を書いておき、それを議論しながら確認していくことによって皆で考えながら話を進める手法や、様々なテーマについて自分達で演じてみるロールプレイ（寸劇）といった普及手法は印象に残っており非常に有効だった。当時、こういった普及制度に関しては生活改善事業が最も進んでいたと自負している。
・中央での研修会、九州地区での大会、県の勉強会と重層的な研修制度も徐々に確立され

ていった。最初は農林水産省が主導で研修を行なったが、徐々に専門技術員、生活改良普及員代表が中央から地方までの研修内容を決めるようになっていった。
・生活改良事業に関連した鹿児島の地域特殊性として離島問題がある。生活改良普及員として長期（平均 3 年）を離島で過ごすのは、女性にとっては非常に困難である。実際に生活改良普及員として本当に意味がある仕事をするためには 5 年程度必要かと思われるが、離島赴任の場合、3 年をそこで過ごすこと自体が困難である（少なくともそのように認識されていた）。過去には離島に赴任する生活改良普及員を確保するため生活改良普及員候補者に他県の農業大学校への進学の奨学金を給付し、その代わりに卒業後に離島に赴任して貰ったこともある。現在は大部分の離島を広域化で対応している。

２．地域濃密指導
・地域濃密指導が導入されるまでは、担当地区内の町村に散らばった個別グループを対象とした点の活動が中心であった。この個別グループを結んで面の活動にして、地域全体への働き掛けを強めていったのが地域濃密指導である。
・地域濃密指導が軌道に乗ってからは、徐々にグループ活動を主とするソフト事業と国のハード事業を結び付けるように工夫するようになった。また、逆にハード事業が先にきてしまった場合は、事業後に何らかの形でグループが残るように務めた。これは、国の補助事業を単なる外から資源が舞い降りてきて何かものを作って終わりというような「棚ボタ」に留めるのではなく、事業を通じた人間の成長、グループ結成による地域の組織力の強化・活性化を考えていたからである。

３．事業・普及計画
・普及指導計画は、各普及センターが作成して、これに専門技術員（専技）がアドバイスを与える形で詰められていく。毎月、普及センターで進捗検討会があり、専技が実施についてもアドバイスを与える。年央には中間検討会があり、それまでの事業成果の評価も含めた協議が行われる。
・昭和 40 年に健康改善事業を開始した。それ以前から農村の健康問題は指摘されていたが、農村の健康問題を云々することで農業／農村のネガティブ・イメージが助長され農家の嫁不足問題が益々深刻になるのではないかという懸念があり、なかなか制度として導入できなかった。この懸念は、特に行政の側に強かったように思う。実際には、農家の健康問題は明らかに農村生活改善の中心的な課題であり、地域住民を含め皆やらなければいけないと考えていた。この農家の健康問題に象徴的なように農村生活改良事業の導入には長い時間がかかり、農家が必要性、可能性を十分に認識し、そこに興味を見出して始めて導入が可能になる。
・現在の生活改善事業の中心課題は、健康、女性の参画、農家契約等々であり、これらは

時代の先端を行く課題であると自負している。また、次の課題としては女性起業家の育成、アグリ・ビジネス等がある。このために農村女性も名刺を作って自己ＰＲをしようといった運動も進めている。

４．生活改良協力員制度について

・ 生活改良普及員制度は、県の単独事業として昭和 35 年に導入された。協力員制度導入のきっかけは、年の終わりにその年の問題点を話し合った席で生活改良普及員の側から提案され、県側もこれに理解を示し、比較的スムーズに実現した。制度導入の主な目的は、１）生活改善事業には地域に詳しい人が必要であること（地域の問題は地域の人が一番良く知っている）、２）広域をカバーする生活改良普及員の負担軽減（生活改良普及員は、農業改良普及員に比べ配置人数が少なく、一人当りの業務負担が大きい）の 2 点であった。導入時は、若い生活改良普及員が地域のまとめ役である協力員に煽られて、かえって普及事業がやりにくくなるのではないかという懸念があった。しかし実際には、地域のリーダーで人格者でもある協力員は、若い生活改良普及員でも上手に引き立ててくれたので問題が起こったケースはない。当初、採用された 50 名の協力員の月給は 500 円であった。現在は協力員も県の非常勤職員の身分であり、月給９千円で 96 名になっている。協力員は月 4 回普及センターに報告義務がある。ほとんど地元の女性だが、一人村興しに詳しい男性が委嘱されているケースがある。協力員の選抜は、生活改良普及センターと当該市町村が話し合って決めている。この協力員制度は、全国でも鹿児島県だけの制度だと認識している。

５．Ｋ－Ｂ氏（鹿児島県農村婦人の家所長（普及所の所長と同格））

～12/8,12/9 の案内移動の車中でのお話を中心として（議事録担当・佐藤）～

・生改さんとしてのキャリア（来年三月定年）　短大卒。昭和 38 年に就職。専技（普及方法？）になる時に東京での長期研修は受けていない。大卒レベルの知識を得るために一般教養で二年の通信教育を受ける。（現在の研修は２週間くらいになっている）。専技の新任研修は一週間程度。２年目、３年目にもある。

・最初に川内普及所で大重Ｋ－Ｌさんと一緒だった（最初の子を川内で出産した。子供は男、女、女の３人）

・「生活は個人のことではないか」という批判。「どこまで、個人の生活に国が踏み込むのか」。「お節介」と言われる。

・個々の技術は新聞・テレビなどのメディアがあるからいらない（と言われる）。しかし実際に求められているのはそうした個々の技術。

・生改が活躍できるのは、生改以外にチョイスがないとき。来週Ｋ－Ｂさんは呼ばれて徳之島に行く。

・最近は兼業になり、外に働きに行く。現金の為に働くのに精一杯。集会は、夜・土日はしない（生改も）。
・男女共同参画法などは追い風になる。・キッチンカー（県衛生部が主導）にも一緒に乗った。
・栄養士会の「立川さん」（ご健在）は全国会長もした。栄養士会には栄養の施設もある。事務局長がいる（Ｋ－Ｂさんはこの人と一緒にキッチンカーにも乗った･昭和 40 年頃）。
・農村医学会
生改、保健婦、公衆衛生の医師などがメンバー。鹿大（鹿児島大）の先生などが中心。Ｋ－Ｂさんも入っている。松下先生（公衆衛生）も草野ケンジ名誉教授（コウセイ会病院）。　初代の会長は斉藤ハチロウ（鹿児島大学）　純心短大の栄養の先生。
鹿児島大学技術短大の先生
・普及法については鹿児島大（鹿大）よりも東京の研修館から。
九州農政局（熊本）で専技協議会（研修会）、プロジェクト発表会
鹿大の先生は山口の藤井チエ子さんから紹介された。

【鹿児島－１３－３】
場　所：鹿児島県農村婦人の家
日　時：平成１３年１２月７日（金）
面会者：Ｋ－Ｆ氏（鹿児島県元生活改善普及員、元栄養専技）
調査者：水野、小國
担　当：小國和子

１．プロフィール

昭和 34 年に鹿児島県立短大（前身：女子専門学校）の栄養学専攻卒業。中学家庭科教師免許及び生活改善普及員受験資格を得て、県庁に就職。本庁生活改善課に 1 年。その後、当時は「陸の孤島」といわれた、南隅地域、根占地区（根占、大根占、田代、佐多の四か町村）を 3 年 8 ヶ月に渡って担当したのを皮切りに、16 年間生活改良普及員として勤務。食生活の専門技術員として 17 年勤務。最後は婦人の家に勤務。ドイツ研修引率経験あり（Ｋ－Ｏさん参加の回）。

２．生活改善について

- 中央レベルで出される政策（農水省生活改善課）が常に先見の明があり、その時代に応じた、タイムリーな課題を取り上げてきた事が功を奏している。
- 草創期との比較：「昭和二桁は、なんといっても昭和一桁には勝てない」。
- 最初はやはり啓蒙活動だった。そして、グループ育成。栄養知識普及、日常食改善。家庭菜園、計画栽培。カルシウム強化剤を混ぜたお味噌作り。蛋白質不足解消の為に、卵を産まなくなった卵用鶏を調理に利用。
- 体験研修の効果がすごかった。
- ロールプレイは最近までやっていた。男性のお母さん役など、インパクトが強かった。

３．鹿児島県の生活改善について

- 離島を抱えているため、リーダー育成など、研修の交通費だけでも費用がかさみ、ほぼ半分が（？）離島関係の予算。全体的な予算も他県より多い。離島での生活改善グループも多い。「離島では、情報に飢えている」。
- 鹿児島は、静岡に続くお茶産地。有名なのはイエイ町だが、昔から畑作地帯で、お米を買わねばいけないなど、余裕がなく、生活は生産活動が中心となり、生活改善グループも生まれ難かった。昭和 60 年に婦人の家が設立された。
- 県独自の制度として、昭和 35 年に協力員制度が出来た。アメリカの普及制度から導入した制度で、当時の松本課長、Ｋ－Ａ氏等が関わっている。県職員扱いで、月々1 万円程度（現在は 9 千円）が支払われる。市町村一人のみで、市町村長から推薦される。

地元の人から情報を得て、「朝晩の農家の声を普及員につなぐ」役割。現在まである制度だが、現在では、予算削減との関係で、困難であり、様々な資格のあるような人を推薦したりしている。元々は、地元で人望のある、その人が言えば周囲の人が耳を傾けるような、そういう人が推薦されていた。京都から嫁入りしてきた野方さんという人など。

・ 元気な地区について：根占町丸峯集落。モデル地区。まとまりが一番良い。ミカンやタバコの産地。現在では施設園芸をやっている。日本で初めての小組合の発祥地と言われている。戦前から結びつきのよさで有名。大政翼賛会下の地域の婦人会→生活改善グループ。他方で、「閉鎖的」という特徴もある。現在では、Ｉターンの推進なども積極的に行っている。「根占はカラモジアの関係もあって、色々な外国人が来ている。(by Ｋ－Ｃさん)」。

４．グループづくりと維持について

① なぜグループ指導なのか。どうしてグループが必要か

・ 三人寄れば文殊の知恵。情報が集まる。人は人の中で育つ。
・ 施設利用が出来る：例）生活改善研究会に入っている人だけが加工所を使えるなど。
・ 集団思考←一人では挫折感を味わう。

② 一旦グループが出来ると、一人歩きできるのか。

・ グループも成長していく。
・ だから、働きかける側の生活改良普及員に求められるレベルもどんどん高くなっていく。

③ 生活改善グループの独自性（それ以前の地域の婦人会と比べて）

・ 地域の婦人が全員無条件で参加する婦人会と異なり、生活改善グループは「入りたい人が入る」。自主的なグループである。
・ リーダーが持ち回りである。
・ 常に研修などで、時代時代に応じた課題が伝わり、磨かれていく。

④ グループに入らない人、入っていない人をどうするのか。

・ 課題によっては、グループに入っていると入っていないに拘わらず、関係してくるものがある。例えば村づくりなど、村全体に結びつくような共通課題を提示して、かかわらせる。
・ 「入りたくない人」については、無理に追求しない。無理にグループ化しない。どうしても残って欲しい場合は、個別対応をする。個別プロジェクト（活動）を持っても

らい、集落よりもより広域な規模で人を紹介し、ネットワーキングを考える。（集落内では上手くいかなくても、違う地域同士なら上手くいくかもしれない）。

⑤ 指導のコツ

・ 目的がどれだけメンバー間で共通しているか、そしてフォーカスされているかによって、アプローチが変わって来る。
・ 集団思考を促す。
・ グループから地域へ。そして広域へ。
・ 町（行政）の役割：普及員は数年で交代するが、町行政の職員は交代しない→替わらない人達からの理解がどれだけ高く得られているかが、安定した資金、物資の継続的支援へと繋がる。

⑥ 長く続いているところの特徴

・ リーダーの存在が大きい。
・ 長く続くところのリーダーの特徴：好奇心が強い。「何か得よう」というチャレンジ精神が旺盛。学校の先生などの経験者で、他メンバーから尊敬される。そして周囲がついていく。リーダーは持ち回り制なので、引っ込み思案の人にも回ってくる。その時に後ろに立ってサポートするようなリーダーがいること。
・ リーダーの持ち回り制の意義：「あなたも私も平等」という認識に変わって行く。
・ 力を持った一人のリーダーシップではグループは続かない。
・ メンバーの負担にならない、それぞれの多忙時期に基づいた年間計画を立てること。
・ 親→嫁→娘へという受け継ぎ。
・ 個人の利益のみでなく、地域を考えている人がいること←ボランティア的な側面大きい（農業祭など）。

⑦その他

・ カラモジアの受け入れ農家は、農業研修受け入れについて積極的である。
・ 最近は、農家数が少なくなってきたため、地域内での農家が点の存在になってきた。そのため、より広域での指導が必要となっている。

以上。

【鹿児島－１２－４】
場　所：農村婦人の家
日　時：平成１３月７日（金）
面会者：Ｋ－Ｃさん、Ｋ－Ｄさん、Ｋ－Ｅさん
調査者：池野、山崎
担　当：山崎照美

【Ｋ－Ｃさんについて】
・親は鹿児島市内の商売人。小学校の時に向田邦子と同級生。先生に勧められて第一高女に行った。女学校は当たり前に受験した。女子工業は制服が素敵だったので「行きたい」と言ったら叱られた。
・高等女学校四年の時には勤労動員で入来の被服（軍服）工場に行かされ、借り上げてきたミシンで作業した（Ｋ－Ｔさんは長崎の工場）。四年生の８月に終戦。市内は空襲で焼け出された。叔父が西市来（にしちき）にいたので、疎開。他の人は市内に通って受験勉強したが、Ｋ－Ｃさんはしなかった。
・短大への昇格運動を熱心にした（生徒がした）。授業を受ける組と、運動して回る組みに分かれて。ビデオの花嫁役のＫ－Ｅさんが短大の一期生。
・鹿児島市内で赤痢が大流行して、市内が遮断された。入来から歩いて行ったが、やはり入れずに歩いて帰った（Ｋ－Ｃさん）
・活動の波及
　新生活学級＝最初は夜の会合ばかり（Ｋ－Ｃさん）
　農談会＝農改と一緒に行き、時間をもらって話をする。
　　→話すだけでは魅力がない。→昼の実習へ。
　ただし、最初は昼の実習をしたいと言っても集まらない。会場になる所にミカン箱二つ並べ、その上に戸板をおいて料理実習。家にあるモノを持ってきて、目先の変わったモノを作る。→夜は主人にも食べさせる。→理解を得て昼の会に持っていく。
　出水では隠居所を借りて自炊していた。料理を作っておばあさんにあげると宣伝してくれた。味噌を造ればおばあさんにあげる。ちょっと離れた親戚に飛び火。「私たちも昼の会持ちたい（婦人会）」との希望→行ってグループ作り。（Ｋ－Ｃさん）
　グループが多くなりすぎて対応できない。→ネットワーク作り、協力員制度の導入。
・初期の頃、夜の会合が多く、バラスの道を自転車で帰ると、後ろから誰かが追いかけてくるような気がして一目さんでこいだ。
　転けて怪我しても、二ヶ月の間バラスの道を片足でこいで回った。
　農繁期の雨期などは、ゴム草履でこいだ。共同炊事が沢山出来て、回らなければならない。

共同保育は青年団女子職員に教えた。
出水の農改のちゅうさん（？）三つの町を担当。オオカワチから呼ばれたので、登っていった。自転車を降りてウサギ道を上場（うわば）まで。Ｋ－Ｃさんはスクーターには乗っていない（もう県庁に転勤になっていたので）。
・グループは新しい会長を立てて援助するようにすると続く（Ｋ－Ｃさん）
・今は技術的なこと（企業化）に対する依頼が多い
・村岡さん（昭和 63 年にＫ－Ｃさんと一緒に退職）の所が販売（？）
　鹿児島の商家の食事～Ｋ－Ｃさんが担当
・Ｋ－Ｃさん　２年くらい前にＭＢＣ（『どんと鹿児島』という企画。ＭＢＣが当時のフィルム「明日は明るく」を見つけて、市町村を巡回して登場人物を捜す。枕崎台風の時。）と現地に行った。川上さんの家に行ったら、いつのまにか連絡が届いて、５、６人が集まった。
・普及員である傍ら、米ノ津町立学校（商業科と建築科）の家庭科の非常勤講師（週に一回）もしていた（昭和 25 年の 10 月から 31 年の８月に県庁にもどるまで）。県の給料とは別に町からも 500 円の手当。当時の普及所と学校のアレンジ。学校使って料理コンクールもした。家庭科でホームプロジェクトもした。問題点を持って研究課題を選ぶ。当時の生徒が覚えていることもある。高校との連携は農業高校が多かった。

【Ｋ－Ｄさんについて】
昭和 26 年から生改・普及方法の専技・愛媛の高岡さんと知り合い。
枕崎の出身。父は教育者。終戦の年は四年生。（小学校６年＋５年（４年）の中学）で女専を受ける。鹿屋の児島さんは五年のあとに女専を受けた。
疎開して帰ってきた。
昭和 18 年卒。先生になった。鶴田に３年、川内市の女子校（現在の純心高校）に勤務。父が高江の学校に勤務していたので、２時間歩いて通った。自転車はなかった。主人の弟は自転車のリングにワラを巻き付けて乗っていた。
当時は風呂はあったが、燃料を節約する為にもらい風呂を代わり番にしていた。
嫁ぎ先は高江村峰下部落。今は星ヶ峯に住んでおり、週に一回墓参りに行く。家はある。
生改として川内担当が 10 年。Ｋ－Ｃさんは出水（米の津町、出水町、大河原町が合併して出水市）を担当。
・カマドは農業試験場の中で左官屋さんに習った。
・Ｋ－Ｔさんは阿久根にいた（まだ川内には普及員がいなかった）が、所長と一緒に来て「手伝ってくれて」と言われた（川内の高江にいたので？）。当時行くには汽車かバス。
・高江の婦人会をしていたが、生活改善の話を聞きに行った。「生活改善とはなんだろう」という意味。

自分の家も既にレンガのカマドがあったが、率先して改善カマドにした。
・青年師範の恩師が国家試験を受けることを勧めた。
・姑（未亡人・夫は軍人・住友の籍が残っていた）が反対した（既に結婚していた・まだ子供はいなかった）。「嫁に来てまで働かんでいい」
・夫は長男。郵便局に通っていたが、食糧難で農業もしていた。
・国家試験に受かった（昭和 26 年）。試験場２～３ヶ月間研修（単身で）。
・川内市の最初の普及員となる～10 年間。その後姶良郡（カシキ）→県庁（鹿児島に家を買った）。子供は市内の学校に通った。20 年前に星ヶ峯の開発で家を買った。
・川内の身内は「帰ってこい」と言うが。週に一回の墓参りと家の手入れ。屋敷地内に水田・畑がある。今年の２月に夫婦共々免許の書き換えがあった。しかし、夫は脳梗塞をしたので、運転が危険。免許を書き換えることをしなかった。それまでは車庫２台分あったが、今は移動が不自由。畑は隣人（町内会長）にやってもらっている。

【生改になるまで】
Ｋ－Ｃさん：
鹿児島高等女学校の専攻科に入り、２年生から女専（３年制）になった。四回生の時に「県立短大（2 年生）」になった。女専の生活科食物専攻。当時生活科には被服専攻と食物専攻があった。栄養士資格は、学校とは関係なく、別にとった。また学校の課程を済ませれば、中学と高校の家政の教員資格がもらえた。
卒業後、生改として出水地区に赴任するに当たり、町立米ノ津商業学校で家政と保健の教員も合わせて依頼された。生改と兼業していた。学校に勤めることで、親と親しくなり、地域に入りやすくなった（家庭訪問について行った）。
季節保育が始まると、保母の資格もとった。（仕事に対する責任があるから）

Ｋ－Ｄさん：
青年師範学校卒。青年学校に 5 年勤めた。昔は小学校を卒業して、その後中学・高校にいけない人は青年学校へ行った。そこでは全教科を教えた。
Ｋ－Ｅさん：
高校と短大（旧女専）生活科食物専攻。栄養士資格、生改（国家資格）、教員の資格という３つの国家資格を持っている。
先生であり、栄養士でもあるということで、住民に対して説明するときに、押しがきいた。
Ｋ－ＥさんはＫ－Ｄさんの所へ、トイレ改善を見に行ったことがある。
27 年から生改活動

【生改になったきっかけ】

Ｋ－Ｄさん：
師範学校の恩師である村田先生（鹿児島県専技１号）から勧められた。その時は生改を増員しようという動きがあった。
Ｋ－Ｃさん：
第１回目の試験があった時だった。先生に受験を進められた。でも生徒の３分の１しか受けなかった。Ｋ－Ａさん・Ｋ－Ｔさん（同期）は多分５月に赴任したが、Ｋ－Ｃさんは生改受験と同時に話が持ち上がっていた研究所の方に行きたかったので、その返事を待って半年家にいた。でも半年家にいたらうんざりした。そこで先に返事をくれた生改の方になることにした。
Ｋ－Ｅさん：
父が教師なので、先生にだけはなりたくなかった。生改へ。すればするほど効果が上がり喜んでくれる仕事＝やめられない。

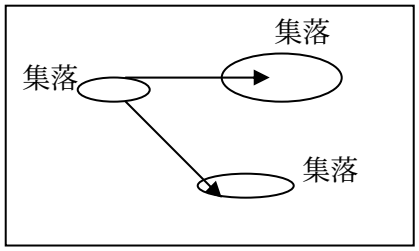
【生改活動の進め方】
Ｋ－Ｄさん：
26 年から生改。そこの出身じゃないから色々出来た面もあった。生改として活動したのは嫁ぎ先の土地。実は父親が嫁ぎ先の土地の校長をしていた。まず婚家先を変えることから始めた。台所。すると改善グループが見学にきた。地域のリーダー（男）にアクセスし、活動を開始した。（校長の娘だったということで活動がしやすかったのかもしれない、とＫ－Ｅさん）
農改が、市の農業課長になり、かけだしのＫ－Ｄさんも（派手な）宴会に呼ばれた（そしてかなり上座に座らされた）。すると市のかなりえらい人から「これが生活改善ですか？」といやみを言われた。しかしその後は市の職員にも「川内出身だから」ということで県職員という身分でも仲良くしてくれた。「地の人」という利点あった。
Ｋ－Ｃさん：
赴任した日は 10 月 13 日、稲刈りの打ち上げの日だった。そこに呼ばれて出て行った。その場でその地域のリーダーを把握し、そういう人を拠点に活動を展開した。
Ｋ－Ｅさん：
酒が入ると本音。夜の集まりで男を説得する。農業改良委員の人を中心に。すると「うちのかあちゃんにも言っておく」と言ってくれた。農談会というものには、婦人会会長も参加していた。女性も参加することが出来たので、特に問題はなかった。
Ｋ－Ｄさん：
私の場合は、女性のリーダーに働きかけた。よその県から来ている人で、最長老の女性だった。グループを作ったとき、Ｋ－Ｄさんは 20 代。70 代の女性にアクセス。実は役場の女性職員（海外引き上げ者経験者）も婦人会を作る為にその女性に声をかけていた。その

時、海外引き上げ者経験者も多かった。
Ｋ－Ｅさん：
それぞれの村に「その人が」ということはあった。農村の中には、「このままではいけない」と思う人は多かった。特に海外から引き上げて来た人が、そういうことを言うことが多かった。
Ｋ－Ｄさん：
生活に困っている人の方が積極的だった。
Ｋ－Ｅさん：
明日会うＫ－ｃさんのように「ただの農村婦人では終わりたくない」という人もいて、そういう人を掘り起こすのが、生改の仕事だった。
Ｋ－Ｄさん：
生活技術を武器に農村に入っていった。
Ｋ－Ｃさん：
生活に何かプラスするものが大事だった。
Ｋ－Ｅさん：
しかし生改としては、「技術を売る人じゃない、技術で人を変えるのが大事」といつも言われていた。
Ｋ－Ｄさん：
時代もあった。まず貧しさからの脱却が目的になっていた。それは手段でしかないのだけれど。
Ｋ－Ｅさん：
豊かさは経済だけではなく心の豊かさも意味しているというのが生改のあり方だった。例えば、共同炊事の当初の目的は栄養不足と労働過多を解消する為だったが、最近では労力が足りないので共同炊事というふうに、目的が変化している。

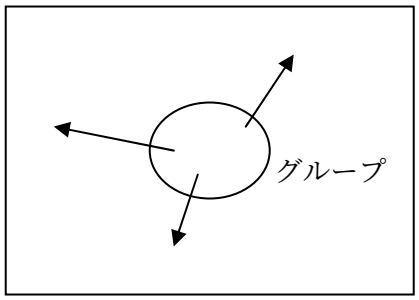
【質問】
池野：
途上国だと、とても貧しい人は時間的余裕がなくて参加出来ないのですが、日本では貧しい人も参加したのでしょうか？
Ｋ－Ｅさん：
途上国ではえらい人がやっていても真似ないのはどうしてかと思う。
Ｋ－Ｃさん、Ｋ－Ｄさん、Ｋ－Ｅさん：
まったく貧しい人は参加しないかもしれない。真ん中くらいの生活レベルの人から初めて、貧しい人も活動を「のぞこう」という気持ちにさせるような。グループ活動に参加できない貧しい人達にも普及していく方法、グループという事例を作る。

Ｋ－Ｄさん：
集まらせることが大事。例えば、布団を干した方がいいと言っても、干せないという集落があった。なぜかというと、その集落はバスが通る道のそばにあって、自分たちの布団があまりにもみすぼらしいので恥ずかしくて干せないと言う。そこで頼母子講をして、生地を買い布団を作った。長崎地区。
Ｋ－Ｅさん：
対象地区の中の幾つかの集落が展示圃のような役割になり、親戚や地縁で広がっていくという感じ。

＜モデル図＞



担当地区



集落・・・・・・ということではない。

【生改活動のとっかかり】
Ｋ－Ｃさん：
カマド（衛生という側面で取り上げた)、保存食をエントリー（とっかかり）にすることが多かった。しかし、いつもそれではなく、あれもしたり、これもしたりということが多かった。カマドはお金がないと出来ないので、やはりお金を工面できる中くらいの人から始めた。
Ｋ－Ｄさん：
卵を売って、カマドの為の資金を作ったこともある。
Ｋ－Ｃさん：

自分で講習を受けてカマドづくりをやっていたけど、間に合わないので左官屋さんに教えた。土地によって、新しい事を受け入れる素地が違うと思う。出水は進取の気性で、いいというとばっとやる感じだった。
阿久根は米が少なく、漁村があった。
Ｋ－Ｄさん：
「高江は三千石、火の地獄」と言われた。水田が多かったが、川内川のそばで水害も多かった。

【その他の情報：佐藤】
・地域婦人会と改善グループ
　地域婦人会は全入。農協婦人部はあとから。
　当時川内市の婦人会長は全県の会長であり、強かった。
　グループ活動は婦人会には歓迎されなかった。＝婦人会に離反していく、と見なされた。
　婦人会の人をとられ、弱くなってしまう、と言う懸念（Ｋ－Ｃさん）。ただし、協力的になったところもある。必ず婦人会長の所と部落の自治会長の所に挨拶に行く。
・１年目は「人を知り、道を知る」。３年目になってようやく「実際の活動」。
　社会教育の先生（場所を分けてもらう）。保健所、保健婦、栄養士とも協力。
　こういう他のセクターとの調整は普及所レベルと言うより、生改レベルで行った。
　みんな自分の組織がかわいいので、幾分かはライバル意識がある（Ｋ－Ｄさん）。
・栄養などすれば、「これは保健所の領分ではないか」と言われる。
　出水郡内には、保健所の栄養士は一人、生改は二人（出水と阿久根）。
　同じ栄養でも、ニュアンスが違う。生改は「無駄・無理を省く」「家にあるモノで」「手近にある材料を使って、自分たちでできるもの」。栄養士は、買う材料もあるので金がかかる。
・共同保育で預かっていた子がぐったりしていたのに気づき、医者に運んだ。赤痢か疫痢だった。「共同保育していなければ気づかなかった。預けていてよかった」と言われた。
・農繁期には共同炊事、共同保育であちらこちら回るが、川内川があふれて帰れなくなることもあった。そういう時は近くの普及員の家に泊まるが、その普及員も出かけて帰れずに、一人で泊まったこともあった。
・高江の長崎部落
　スエヨシのおばあさんが「集まれ」と声をかける。行けば役に立つことを教えてくれる。
　Ｋ－Ｄさんとしては、リーダーの松田フミＫ－ｃさんを指導すれば他の人に伝わる。
　長崎部落では金を使ったカマド改善が出来ない時期は、へっついで粘土とワラこねて（三和土）一緒に作った。その後次の段階に。（Ｋ－Ｄさん）
・漁家の気風　生き魚を扱うのでうろちょろしていてはだめ。パッパと展開（Ｋ－Ｄさん）

遠洋漁業の方がサラリーマン的。生活はいいし。
近海は時間帯が違う。生活の形態が違う。
・調査方法
家庭訪問、生活水準調査
・ホームプロジェクト（家庭科）
郡ごとのホームプロジェクトの審査員に選ばれて、審査したことある。（「おこがましいという気持ち」Ｋ－Ｄさん。）
・東京に研修に行っている時「川内川が氾濫したので帰れ」と言われたこともあった。　養殖ウナギが田圃に流れ出てしまった。川内川沿いはしばしばあふれた。
・川内は水田地帯。一カ所だけ開拓地があった。昭和 33 年にスクーターで川内川に落ちかけたことがある（途中まで落ちた）。通りがかりの人に上げてもらった。
加治木で人気のない所でスクーターが故障して、雨に濡れて帰った。所長が心配して待っていた。
・毎床Ｋ－Ｉさんが昨日Ｋ－Ｃさんに電話してきたという。資料の「鹿屋、知覧、入来の字がちがうとの指摘」。Ｋ－Ｃさんが一時生改を離れて「消費者行政」を担当し、生改に戻ってきた時に毎床Ｋ－Ｉさんが会長だった。
・Ｋ－Ｄさんと毎床Ｋ－Ｉさん
毎床Ｋ－Ｉさん（ご主人が先生）は同じ高江の長崎集落のことは知らなかった。毎床Ｋ－Ｉさんは昭和 29 年まで高江にいた。毎床Ｋ－Ｉさんの「カタノ」集落は通り道だが、働きかけはしていない。Ｋ－Ｉさんが活躍する頃はＫ－Ｄさんは県庁勤め。
・高江の峰下部落では部落出身の普及員もいたが、生活改善グループ作りをしたことはない。声がかかったこともない。（Ｋ－Ｄさん）

【Ｋ－Ｃさんに啓蒙ビデオの製作について】
上の原地区は、当時モデル地区というわけではなかった。当時典型的な生改活動をしており、かつ出演・衣装などの協力を得られたから。特に成功をしていたわけではない。畑作だったことも理由だった。伊勢山のほうが活動は成功していた。
現在上の原は美原町に名前が変更し、新幹線が来るらしく村の様子もすっかり変わってしまったようだ。また改善活動についてもその後続いているかどうかは不明。

【周辺情報】
【高尾野町のビデオに関して】
そこはＫ－Ｄさんではなく、別の人が担当していた。田中さんという方。２，３年で生改をやめてしまった。池山さんという広報課技師さんが詳しいのではないか？
啓蒙ビデオを撮影した技師さん　池山弥市（やいち）さん

【鹿児島－１３－５】
場　所：知覧町民会館（鹿児島県知覧町）
日　時：平成１３年１２月８日午前９:５０～１２：００
面会者：Ｋ－Ｉ（大正 9 年生れ）
調査者：小笠原、水野
担　当：水野正己

生改の職歴と経緯
・実家は、薩摩塩谷（薩摩半島の南端）。屋久島の後は、加世田などで生改勤務をした。この時、昔の食事の聞き取り調査もした。『鹿児島の聞き書き日本の食事』で、南薩の部分を担当した。
・満州に行きたかった。李香蘭の「支那の夜」の歌に憧れていた。終戦後、引き上げ者であり、子どもが 4 人いた。屋久島に夫の兄がいたので、それを頼って島に渡った。ミカン園のそばの小屋に住み、後に古屋に移り住んだ。カマドは改良型だったが、台所は土間だった。主人は上屋久町の建設課に入る。教職に就けないか訊き合わせていたところ、生活改良普及員の試験のあることを知る。３回目の試験でやっと合格できた。37 歳だった。生改になったところ、屋久島に赴任する者が誰もいないので、進んで引き受けた。町長、助役さんは大切にしてくれた。当時のお金で、月 4,000 円の補助を出してくれた。主人は、4 人の子供の躾をしてくれ、3 年（生改になってから？）で死去。その後、実家のある薩摩に転勤を希望し、川辺、加世田で退職を迎えた。停年で止めてから、22 年が経つ。先頃、主人の 42 回忌を済ませた。長男は、県知事秘書課長を歴任した。今は、実家のある塩谷の部落に戻り、一人暮しをしながら、菜園を作っている。娘の命日に子どもや孫が 10 数人集まってくれる。生改をしていたお陰で、20 年来のつきあいのある農家の主婦が、野菜を届けてくれたりする。4 年前に屋久島を訪問したことがある。それから、ポンカンが１箱届いた。その人も、（私が島で生改をしていた頃）悩みを聞いてあげたことがある。人間関係が大切です、技術以外の。生改を退いても、生改時代に築いた様々な関係が続いていて、それが生きがいになっている。がね（芋を使った伝統料理）と呼ぶイモの天ぷらがあり、農繁期の差し入れにもなった。5、6 年前、青森県の小木と知覧町とが姉妹提携し、その時に「がね」を作って振る舞った。イモ、ニンジン、玉ネギを入れると美味しい。

島の人情
・終戦になって、身体一つで日本に帰ってきた。農家の惨状を見かねて島に渡ったが、屋久島はもっとひどかった。小瀬田の長峰の干拓入植地では、家も馬小屋みたいだった。そこの人で後に県の要職につく人が出た。一所懸命ふんばるところがある。しかし、人は優しかった。あったかい。ミカンを売れば金になるのに私にくれた。バナナが出来ていたら、

内地に帰ると言えば、バナナを持たせてくれた。魚取りは、鯖つり、飛魚で新鮮だった。刺身、鯖のすき焼き（砂糖と醤油で味付けする）、薩摩揚げが主なもの。屋久島は「本土」から、どれくらいか遅れていた。（以前、中国を旅行したことがあるが、やっぱり開発されていない。日本より 20 年遅れていると感じた。）
・安房は半農半漁で、当時は婦人学級が盛んだった。
・生改グループができて、交流会をやり、握り飯を持って「浜あそび」をして楽しんだ（上屋久の砂浜）。
・今は、交通事情が各段に良くなった。鹿児島の病院に行くのが普通のことになった。

屋久島での生改
・屋久島では、1958 年（昭和 33）年から 1964（昭和 39）年まで生改をしていた。
・屋久島は、上屋久町と屋久町とが対抗的、対立的関係にある。上屋久は兼業（漁業、営林署）、屋久は純朴で、農業的で、営農に熱心だ。
・昭和 33 年に着任した当時は、交通が便利でなく、両町に半分づつ勤務した。普及所は、最初、上屋久町にあった。だから、屋久町では、役場のあった尾之間に下宿していた。生改と警察署だけは２町を合わせ受け持っていた。その他は、各町に人が配置されていた。農改は上屋久町に普及所があり、屋久町には駐在員が置かれた。
・島では、町役場の人も、興味関心があり、生改の仕事に協力的だった。農改の協力があった。当時の屋久町の農改（戸床はじめ氏）は助役になっている。奄美と屋久とでは、大きな違いがあり、奄美には、振興基金がある。しかし、屋久にはそれがない。鹿児島に出張に行くのにも、奄美からは旅費にゆとりがあるが、屋久島からはそうはいかない。
・生改活動は最初ポンカン農家を対象にしていたが、夜しか座談会の機会がなかった。座談会が終わると夜の 11 時になることがあったが、超勤（超過勤務手当）をもらうのでなく、土日も無く農家を廻った。カメラ、写真は自費で賄った。開拓部落を訪問し終えて、農改２人と私とで、10 キロの真っ暗な道のりを歩いて帰ったこともあった。サトウキビをかじりながら歩いて帰った。今からは、考えられないことだ。昼間は道端で話をし、皆さんのところを探って状況を把握した。その上で、農業改良普及のグループの奥さんたちから夜の座談会の時に詳しい調査をした。食事のこと、布団干しのこと（人前に出せるような布団でなかった）、台所のこと（台所は暗いが、まず仕事、お金を取らねばならなかった）。
・最初は、料理講習から始めた。主婦達は子連れで参加してきた。料理講習は参加者の意欲をかきたてた。10 人分の食材費で講習会を開いた。この材料費は普及所で用意していた。野菜と米（１人分１合）だけは持参してもらった。母親達は喜んで参加した。また、小杉谷（営林署の作業小屋があった所）までトロッコに乗せてもらい、３泊で料理講習に行った。喜んでもらった。試食も魅力だった。団子汁に野菜を入れるよう指導した。実地にやると効果があった。

・野菜を味噌汁にいれて、栄養のバランスを取ることを指導した。まず、味噌と醤油を作らなければならなかった。鹿児島大学の先生の指導を受けて、麹のことを婦人学級で教えたことを、今でも記憶している。町から婦人学級に講演に来てくれというので行った。講演の手当ては普及所の一般活動費に入れていた。
・村祭りなどの晴れの時には、ご馳走を食べるが、日常は、ご飯と塩づけのらっきょうばかり食べていた。
・作業着も、自分で作った。少しでも、自分たちでできる防除用の服にした。農家は、無防備で防除をしていた。そこで、マスク、帽子、きゃはんを普及させた。

藁布団作り
・県で研修を受けた後、自分で作ってみて、確信が持てるようになってから、普及させた。
・病気で死ぬ前の人しか藁布団で寝られなかった。ツヅラ原町長婦人を説得して、見本を作った。

生改の普及のやり方
・一つ、一つ、実績を積んで行くこと、そうしないと農家は言うことを聞いてくれない（こちらの言うことに対して、耳を傾けてくれない)。料理も自分で作ってみて、その上で、自分でプリントを必ず作って講習をした。今の人は、本（に書いてあるとおり）のまま指導する。
・習慣づけるようにした。30 品目食べたかどうかを数える数え方は、寝る時にいく種類食べたか数えてみることだ。そして、少なかったら、明日はどうしようかと考えること。今でも、これが癖になっている。また、私は日記をつけて 10 年になる。

グループ作り
・グループを作るのが目的だった。１部落に１グループとした。グループ作りには、まずリーダーを見つけることが大切だ。リーダーとは、「行こうか」という人のこと。婦人会の組織とは別立てで作った。農業をしていることをリーダーの条件にした。
・グループに対して、年間の集まり、学習計画などの活動計画作りを指導した。

生改グループのリーダー
・グループが決めるリーダーと生改が選んだリーダーが、自然と一致するものだ。人望のある人、皆が慕ってくれる人がリーダーに選ばれる。例えば、和子さんは、自然にリーダーになった人で、和子さんの自宅でグループの集まりもやっている。
・リーダーは、その部落の特色を身につけており、また反映させている。開拓地の長峰も、最初はリーダーはいなかった。リーダーになるような人は、生活改良普及員に（部落や集

まりに）来てくれ、来てくれとせがむ。（こういうグループになると）生改がいなくなっても、グループは壊れない。（そのグループに）人間的な付き合いと技術を残したので、40年たってもグループは残っている。
・（4年前に屋久島を訪問した時に）平内部落では、当時もっと生改さんのいうことを聞いて（生活改善して）おいたらよかったと、農家の婦人が述懐していた。当時、余り熱心になっていなかったがことを後悔している、という。

六本木の研修
・研修で２週間、六本木へ行ったことがある。山本松代課長時代のこと。課長は、毎日、研修館にやってきて、色々指導した。（皆で買出しをして料理を作った時のこと）あなたたち、300 円でこれだけしか食べられないの、と叱られた。体重計に乗せられて、身長と体重との関係から、体重に見合ったご飯を減らす分量をお茶碗にいれて差し出された。東京タワーまで歩かされた。こうした教育の仕方はアメリカ流で、アメリカでは栄養士の学校に入るのは簡単だが、卒業するのはとても難しいのだそうだ。

生活改善協力員と食改づくり（加世田時代？）
・各町に 1 名置かれている。町が研修費を出して、県で研修を受ける。県と町が、協力員に手当てを年間 10 万円程度出している。
・保健所、農協、普及所が一緒になって、食生活改善推進員を育成した。

無人売り場（野菜の）のこと
・Ｋ－Ａさんが一所懸命になって、無人売り場を作った。
・この無人売り場や農産加工場の運営の下地は、生活改善グループの活動の下積みのお蔭だ。

追記
①インタビューの最中、「こんな話しで良いのか。何かに役に立つのか、と何度も訊かれた。」
②Ｋ－Ｉさんからは、後に丁寧な礼状を頂いた。インタビューした元生改さんにこちらから毎回お礼状を出しているが、その返礼を頂いたことは今回が２回目である。（１回目は、岩手県のＩ－Ａ氏である。）また、鹿児島県庁農村生活係長の後藤真喜子係長からは絵葉書で返礼が届いた。また、根占町のカラモジアのホームステイ農家の主婦のＫ－Ｏさんからも絵葉書で返礼が届いた。全く、このようなことはいずれも珍しく驚いている。鹿児島の人は、人情に厚いのか。

以上。

【鹿児島－１３－６】
場　所：Ｋ－Ｊさん自宅（鹿児島県薩摩郡入来町）
日　時：１２月８日（土）午前１０時
面会者：Ｋ－Ｊさん、Ｋ－Ｋさん（両名とも生改ＯＧ）
調査者：佐藤（寛）、池野、山崎
担　当：山崎照美

【生改になるきっかけ】
深町さん（農改・畜産の人）が隣に住んでいて、その人が緑の自転車に乗っていて、ああいいなあと思った。当時、学校がいやだったし（伊佐郡の小学校に 2 年ほど教師として勤めていた時の話）、書きたいことがあった。

【Ｋ－Ｊさんの経歴】
・父親は先生で各地を転々としていた。
・大正１１年生まれ（13 年生まれ？）頂いた短歌集の略歴を参照
・昭和 14 年、高等小学校を卒業して満州へ。当時 16 歳。
・満鉄、奉天の建設事務所へ。姉がいとこと結婚してそこに勤めていた。当時の勤め先は張作霖の第 18 号夫人の家だった。仮切符などの統計をしていた。給料が非常によかった。日本と満州を行ったりきたりしていたが、派手な生活をしている娘を父は快く思わなかった。そこで帰って来いという話になり、昭和 16 年帰国。その後戦争が勃発。
・おじが朝鮮の農林省で勤務していた。
・旧姓は、祁答院町に多い名前。
・家族はかなり高い教育を受けており、女性も高い教育を受けた家系だった。
・帰国後、家で暇にしていると、父親がもったいないといって、先生になることを勧められ、受験して先生になった。福山町のフクザワ、牧園小学校に勤めた。2 ヶ月くらいでやめた。（前述、2 年勤めたという説明との整合性は？）
・昭和 23 年。親に言わないで勝手に生改の試験を受けた。生改のテストを受験したときは、豚や鳥の品種を聞く問題もあり、全くわからなかった。当時の試験受験資格は、短大卒か、学校に 5 年以上つめたものというものだったので、Ｋ－Ｌさんは後者の資格で受験をした。（前述 2 年勤めたという説明との整合性は？）
・昭和 24 年 4 月、採用。同期は 12 名。福田チチブさん、ナガノさん、カワバタさんなども同期。当時の同期の中にはＫ－Ｊさんの様に、先生をしていた人が多かった。それは、村田しめのさん（初代係長であり、鹿児島県専技１号。生改ＯＧのＫ－Ｄさんの師範学校の恩師でもある）が教え子を集めたという背景もある。
・研修を受けている間に一人脱落。その人は、青少年顧問官になってしまった。

・研修では、たおしぐるま（除草機）の練習もあった。そのほか瀬川式カマドの製作や自転車に乗る稽古もあった。
・農業をそれまでにしたことはなかった。でも人の農業の手伝いをした経験があり、そのとき、祖母がＫ－Ｊさんをみて「この人は『にんごろ』になる」といった。（「にんごろ」の意味要確認。むいている？）
・まずは県庁で勉強し、その後初めての赴任先である入来の普及所へ。今村町長。入来は「思想的な村（共産系だと思われる）」だと、配属する前に説明を受けた。
・当時は採用（配属）には地元の農業委員会の許可が必要であった。
・入来は始めての土地で大変だった。麓（ふもと）と呼ばれる所で生活を始めたが、そこはもと武士階級の人が多く、座って洗濯している後ろ姿を見ては、「それは違う」と注意されたことがある。麓の人達は歩き方でわかるとも言われていた。

【仕事の始め方】
・仕事のはじめはグループ作りから始めた。しかし既存の組織である婦人会が非常に強く、そこで改善グループを作るのは大変だった。でもまずは婦人会の中で活動を始めた。野菜を作って売ったり、家計簿をつけるグループなど、活動が進むにつれてグループが出来てきた。当時、女性は家のお金に触れることができなかった。
・料理講習の前日には、参加を促すために、一軒一軒歩いて回った。
・専技は、油一日 10 グラムとか、そういうことを言ったが、「そんなつまらんことを」と思っていた。私達は、どうやったら伝わるのか、ということが知りたかった。

Ｋ－Ｋさん：
生改の活動、生活改善とは何かを知ってもらうために、知らない土地へいろんな展示品を持っていって示した。作業着、マヨネーズ、三角パンツなど。池端さん（同僚、現在吹上に住んでいる）も一緒に活動した。大体は公民館や学校などで、そういう説明会をした。沢山の展示品、そして道具を自分たち自らが背負って、バスに乗って現地へいった。それは昭和 32 年頃。

・農改の課題は、「生産をあげる」というような大きなレベルの目標、そして生改の課題は油 10 グラムを摂取するというような小課題だったので、一緒に並べると、「一体何をやっているのか」と農改に言われた。生改の課題も、油 10 グラムというようなものではなく、もっとその先の「健康」などという大課題が必要だと思ったし、もっとほかに行動の課題があるのではないか、と考えていた。
・Ｋ－Ｐさんの所には、空いていた土地があったので、彼女の所を展示農家にした。高菜を作って出荷しようと呼びかけ、出荷の際には、実際に商売をしている人に話を聞き、ど

れくらいの大きさに成長した高菜が売れるのか、ということを事前に調査した。Ｋ－Ｐさんには「先生のおかげじゃ」と会うたびに言われる。
【生改活動の悩み】
・研修で専技さんは、中央から理論を持ってきた。私が知りたかったのは、どう土地の人に教えればいいのかということ、どうやればわかってもらえるのかということだった。中央から持ってくる理論などというのは、もう既にわかっていたことだった。
・Ｋ－Ｌさんやイケハタさんが、男性に文句をいうと、「ぎをいう（こざかしいの意）」を言われた。これは、女性に対しては決定的な常套句だった。どう打開すればいいのかその「隘路（あいろ＝狭い道）を知りたいと思っていた。

Ｋ－Ｋさん：
普及所には予算がなく、役場に行って、活動に使う鉛筆一本から紙１枚までお願いしてもらわなければならなかった。しかし、役場は協力的だった。
共同炊事をするときの課題は、蛋白源がないことだった。野菜も同じようなものばかりだった。
下出部落では、共同炊事と共同保育、共同作業の３つが行われていた。「結い」が元々存在していた。

・共同作業で一番助かった人は、1 町くらい田を持っていて、水が来なくて一番植えるのが遅くて（つまり下流にあって）、温泉場から雇った（植えるのが下手な）人がやっていたところだった。「結い」をやると人手が得られて、助かった。水が早く来る所と遅く来る所で、出す人もらう人がいたということ。
（ちょっと意味が不明。計算上でないけれども、一番不便だった人が得をしたということか？）

Ｋ－Ｋさん：
共同炊事では、野菜が少なかった。そこの土地は雨が多く、ジャガイモや玉ネギ、インゲンぐらいしかなかった。田植えの後のご馳走ふるまい「さなぼり（池野によると岩手では「さなぶり」）のときに、各家から野菜を持ち寄ってもらうと、よくない野菜を持って来る人もいて、そういう人は反省会のときに指摘されていた。鶏を生きたまま持って来る人もいて、それをさばくのが大変だった。

・昭和 50 年ごろ、農業の機械化に伴って「結い」は自然消滅した。タバコ農家は給料制を導入した。
・黒木の生活設計事業では、家計簿をつけさせた。当時それをやろうとした時、住民に「役

人のやることは『しっぽぎれ』が多い。最後までやれるのか？」と聞かれたので「やります」と答えた。最後までやりとげてヨネヅミさんに誉められた。家計簿をつけていたグループの一人が東京で発表をした。しかし、標準語が出来ず、発表で言いたいことが言えず損をした。新しい靴を履いていったが、途中でまめができてしまい、東京駅でスリッパを買った。
黒木の南方（みなみかた）部落は昭和 34 年から 39 年くらいに入った。

【Ｋ－Ｊさんはどうして異動できなかったのか】＝Ｋ－Ｊさんは川内に 10 年ほど勤務。
・異動の時は課長のヒアリングがあった。当時、県議にウラさんという女性議員がいた。体育大出身の豪傑で、活動を見に来た時に藁布団を「何だそんなもの」とけちをつけた。それだけではなく、ある時、婦人会会長の集まりで、「グループは、農協婦人部と同じく、婦人会活動の下部組織として存在すべきであり、突出すれば婦人会をつぶしてしまう」と改善グループ活動を批判。そこでＫ－Ｊさんは、「ではここにいる婦人会長さんの内、生活改善グループの会長さんは手を挙げてください」と言ったところ、半数以上がグループ長だった。そういうこともあり、「ウラさんに対抗できるのは、Ｋ－Ｌさんしかいない」ということになり、課長には「ウラさんのもりをしていなさい」と言われた。結局異動が出来なかった。
ちなみに、若妻グループは婦人会とは別にあった。

【生改活動のとっかかり】
・婦人会で料理講習をすることが多かった。

Ｋ－Ｋさん：
自分は料理が得意だったので、食中心のとっかかりだった。得意なところで入っていかないと、質問にも答えられないし。

・年寄りの中には、グループ活動をうるさく言う人がいたが、後から活動が上手くいくとうるさくいわなくなった。例えば、野菜を売りに行って、その売り上げの 30 円を農協に貯金するという活動をした。

Ｋ－Ｋさん：
Ｋ－Ｊさんは先生だったので話が上手く、大きな婦人会や PTA 総会といった大きな会合に行って、なぜ生活改善が必要なのかということを啓蒙した。それが生活改善のとっかかりだったと思う。

・種子島の女王と言われた、コトブキさんの話をよく引用した。それは三大栄養素の説明で「人間だって、下着と、着物と、帯がなければまともな格好ができないでしょう。栄養も同じです」と説明するもの。
・ＰＴＡ総会でも話した。男性がいる所で説明することが大事だった。
・「女性でそういう活動をしている人がいる」ということで、珍しいがられたし、有名だった。中学生に「さすが貫禄がある」と言われたこともある。自転車に乗るのも珍しかったし、スクーターはよけいだった。当時スクーター（１２５ｃｃ）自体が珍しかったのに、それに女性が乗っているとよけい目立った。

Ｋ－Ｋさん：
先生をしていた人は話が上手だったので、啓蒙が上手かった。Ｋ－Ｋさんはそういう人が啓蒙の話をした後で、それとセットで料理講習をした。頭と技術のセット。啓蒙の話をするには、Ｋ－Ｋさんのように学校終わってすぐの生改にとっては難しかった。
そういう啓蒙の場で男が納得しなければ、グループ活動はだめだった。男の人達は、協力的だった。
県では普及方法を学ぶだけで精一杯だった。実践の部分は、先輩生改であるＫ－Ｄさん、Ｋ－Ｊさんに助けられた。
男の人も家のことをちゃんとやれば、グループ活動に行ってもいいと言ってくれるまでになった。
蛋白源がないので、せしからという油、スルメなどを勧めた。Ｋ－Ｊさんに、仕事が終わってから泊りがけで料理を教えてもらい、朝バスで仕事に戻るということを何度もした。

・料理なんて知らなかった。でも、教えてくれと言われれば、学んで、教えた。技術は自分でどんどん学んで身に着けていった。だんだん賢くなった。

【一般女性とのへだたり】
・「先生達はよかね、給料がよくて」と言われることがあった。そういう時は「ここまでくるのだって、ただじゃない。あなたも何か技術を一つ持ちなさい」と言った。そう言ったら発奮してラーメン屋になった人もいた。

【栄養士との軋轢】
Ｋ－Ｋさん：
お給料をもらいながら、学ばせてもらったと思う。
色々加工（工夫）した。農繁期は暇がないので、田んぼで試食会をし、レシピを渡すという青空教室もした。

雨戸の戸板をはずして調理代にし、七輪を持って行って教えたこともあった。
保健所の栄養士は、材料を持って来させて、えらそうに教えていた。教室を持っていた。しかし、生改は全部持って行った。

・高江では、Ｋ－Ｂさんが新米時代、栄養推進員（栄養士の下にいる）と生改を同じように扱った栄養士がいて、Ｋ－Ｊさんは「生改は栄養士と同じ身分。うちにも協力員という制度があって、それは栄養推進員と同じ身分。生改と栄養推進員を同じように扱うなんて」と抗議の電話をしたことがある。

Ｋ－Ｋさん：
栄養士の場合は、役場に頼んで、人を集めてもらう。半命令で人は集まる。しかし、生改はやりたい人を集める。婦人会に頼んで周知してもらったこともある。また栄養士は栄養ばかりをしたが、生改はあくまでも料理は手段でしかなく、その料理を通じて生活をどう変えるかという視点で指導をしていた。例えば、当時フライパン自体が少なく、同時に薪では料理が作れなかった。そこで「薪以外の燃料はどういうものがあるか、そして熱効率のいいカマドはどういうものか」などを紹介した。

・宮之城という所に、台所改善を見に行った。そこの台所は外にあって、排水がそばの池に溜まっていた。池をなくして、台所を部屋の中に入れ、排水を出したい、と思った。しかし、「よく（池から）水を吐き出しているのですが」と住民は説明する。その他にも、八重山のトイレは、わだでつくった塀垣が、しゃがんだときの目の高さくらいしかなく、人が通れば丸見えだった。その他にも、下の畑にしたものが落ちるように、トイレが崖っぷちにある所もあった。畑の隣に落ちるので、とても便利だ、と住民。あっちにはあっちの理屈がある。

【どうやってトイレの改善をしたのですか？】
・寄生虫の問題からはいったんでしょうかねえ。たぶん、説明して、モデルでやってみる。50 年代の焼却炉も同じような方法でやった。男の人は見せないと納得しない。見せて、納得すると先導する。
・女性の先生ということで、珍しく、冷やかしで見に来る人もいた。

【普及所のなかでの男女関係】
・苦労したのは普及所の中。男女差別があった。
・当時男性は給料順に席が決まった。しかし、男性より女性の給料が高くても、常に女性は男性の下座に座った。

Ｋ－Ｋさん：
Ｋ－Ｊさんは所長になってもおかしくない人だった。企画力も生改の方が農改よりも上だという自信があった。

・農改は農業が先だといって、お金があればすぐに生産のために使ってしまう。しかし、生改は、平均的に生活出来るようにお金を貯めた方がいいと思う。松下がんちゃんという農改さんは特に男女差別的だった。「ちなみに」というと「『ちなみに』なんて言葉はない」と言われた。
・今はＫ－Ｂさんが所長ですが、マキさんというのが生改出身第一号の所長。それが 10 年前。
・生改は家の庭のくぼみや石の場所も知っていた。農家だけではなく、婦人学級で一般の人とも接していた。農家だけではなく、「地域全体」を見ていた。（現在の普及活動と比べて）
・男の人とは常に喧嘩。普及所には女性である生改は 1 人。男は大勢いた。女性解放がまずないとだめだと思う。ビンラディンは女性蔑視。彼女達がブルカをとる事がまず必要。

Ｋ－Ｋさん：
昔は、農家は生改が頼りだった。普及所は何でも聞ける。生改は何でも聞ける存在だった。今は頼る所が無いという。そこで、農協の生活指導員に聞く。（池野によると、生活指導員とは、昭和 33 年くらいから存在するが、最近力を入れている制度。文化、カルーチャースクールもやっている）

【生改さんの仕事と私生活】
・「忠ならんとすれば、私は忘れられる」。生改の子育ては大変だった。当時昭和 20 年代から 30 年代は給料がびっくりする程上がった。でも、生活はそれでは楽にならなかった。当時は、残業分の賃金が出たので、5 時になってから急に仕事をする人（男性）もいた。それに比べると生改は・・・

Ｋ－Ｋさん：
泊まりで仕事をしても、その分のお金は出なかった。
育児は保育所に助けてもらった。

・母親に手伝ってもらった。生改は、転勤しても夫も仕事があるので、家族で転勤することは出来ない。結局は長距離通勤をすることになった。それが大変でやめていく生改もいた。Ｋ－Ｋさんもそうだった。

Ｋ－Ｋさん：
当時の局長の方針として、夫が管理職になるときは、妻が仕事をやめなければならないということがあって、Ｋ－Ｋさんは生改をやめなければならなかった。
産休も、産前 42 日、お産当日が 1 日、産後が 42 日で合計 85 日しか取れなかった。例え、産前休暇をとってから 2 週間で子供を生んだとしても、結果的に残った分を産後に回すことは出来なかったので、85 日以下で仕事に復帰しなければならなかった。
生改は社会的評価がないのでは？地域に入って、農家とともに活動したにもかかわらず、叙勲に名前が挙がったことがない。保健婦などの名前はあがるが。（生改ＯＧのＫ－Ａさんは叙勲されたらしい）

【女性の解放という使命感があったのか？】
・理想はあったが、どう住民に伝えればいいのかと思った。
・自分としては「出会（しゅっかい）の仕方」に注目した。人間関係を重視した。会に自由に出て来られるか？誰に許しを請わなければいけないのか？もし出席出来ないなら、その理由は何か？
・会では、まず若妻に色々愚痴を言わせた。そこでの話しは外では言わないというのが鉄則だった。実際、愚痴を言わせていると、その内の誰かが「それはあなたも悪い」と言うこともあり、自分のこと、家のことを客観的に見ることができる場でもあった。会の名目である「料理」は手段にすぎなかった。

【姑が理由の時はどうするのか？】
・姑がだめだという場合は、姑にアタックした。何食わぬ顔で遊びにいって、会ではどういうことをやっているのかを説明したりした。会に参加した女性達にも、家に帰ったらかならず何をしたのかを報告し、料理を作れば作ったものを持って帰るように言った。
・そうすれば、主人の方が「行ってくれば？」と言うようになったり、姑が喜んだりした。
・参加する女性だけではなく、バックの家族を大事にすることが大事だった。そうしないと指導者（リーダー？それとも生改？）が恨まれる。忙しい時に嫁を連れ出して、と。

【どうしても貧しくて参加できない人はどうするのか？】
・グループ員が入っていない人に教えてあげたこともある。焼却炉など「目に見えるもの」を示し、「グループに入らないと損だ」と思わせる。
・活動が村の中で認められるようになるには２、３年かかる。年配の人も説得する。技術を伝えたかどうかよりも、どう出会ったかを重視した。
・農改さんとセットでもやった。もちろん頭にくることは沢山あったが、彼らを利用した。
・個別訪問で来られない人に情報を提供した。

Ｋ－Ｋさん：
虚栄心を煽ることもした。同じくらいのレベルの家を例に出し、「あの人は来ていたよ」というと、「あそこが行くなら、うちも負けていられない」ということで、嫁を参加させるという事もあった。また葉書で通知すると、家族全員が集まりの日時と内容を知るので、そういう方法も使った。

・家族と仲良くなることが大事だった。遊びがてら家に行って、一番難しい人と仲良くなった。そしてそういう人にアタックした。何かの集まりで説明しても、「横着な顔をしている人」は必ずいる。そういう人は、説得すれば一番いい協力者になる。

Ｋ－Ｋさん：
地域濃密指導では、男性に理解してもらうことが大事だった。でもそれまでは女性を活動の対象としていたので、戸惑った。短大卒すぐでは、男性に働きかけるのは難しかった。また、地域によっては、生改に知られないように、都合の悪いことは方言で話すところもあった。信頼してもらえるようになると、わかる言葉で話てくれた。

【信頼とは、何で作られるか？】
・１、人柄。２、技術では？

【幸せ号】
Ｋ－Ｋさん：
昭和 43 年には、幸せ号というライトバン（1,300ｃｃ）が普及所にはいった。14 台。それには調理代、調理道具、ガスコンロなど全てを積み込むことができた。当時はプロパンガスもなく、それが運べることで料理のレパートリーが増えた。それだけではなく、これまでは行けなかった所に行けるようになった。県から 1 万円の補助が出て、生改は免許を取るようになった。

【Ｋ－Ｋさんの周辺情報】
・県立短大（旧女専）卒。母親が婦人会役員をしていた。その婦人会にＫ－Ｅさんがかかわっていた。短大の先生に生改を勧められた。話が上手くないので、心配だった。現場も見学に行った。
・昭和 10 年生まれ。31 年に生改になった。
・仕事を始めてから、話が上手くなく、つらくて係長にやめたいと言ったこともある。
・ **「クシキノ」に住んでいた。一応農家だった。父は市内の病院で薬剤師をしていた。しかし、戦争で病院が焼けて川内に帰り、そこに土地を持っていたので農業をしていた。**

【鹿児島－１３－７】
場　　所：Ｋ－Ｌさん宅（鹿児島県姶良郡）
日　　時：平成１３年１２月８日（土）午前１０時０５分～午後１時
面 会 者：元生活改良普及員　　Ｋ－Ｌ氏、Ｋ－M氏、Ｋ－Ｎ氏、 Ｋ－Ｃ氏、Ｋ－Ａ氏
調 査 者：宗像、服部、矢敷
担　　当：矢敷裕子

インタビューの周辺状況：
　鹿児島市内から、Ｋ－Ｃさんの車で、Ｋ－ＣさんとＫ－Ａさんが先導してくれて、20分程でＫ－Ｌさん宅に到着。インタビューには、お二人も同席していただいた。既に、Ｋ－Ｍさん、Ｋ－Ｎさん両氏はＫ－Ｌさん宅に到着されていた。
　Ｋ－Ｌさん宅は、平屋でお庭も手入れが行き届いており、玄関の手前に水琴屈があしらってある。屋内には茶室もあり、その隣の居間でお話を伺った。この居間には、世界各地の民芸品や土産物が所狭しと飾られている。（カラモジア交流で、タイのアカ族の村にホームステイをしに行ったのが初めての海外旅行。）
　Ｋ－Ｎさんお手製のアンダーギー、Ｋ－Ｍさんお手製のごませんべい、そしてＫ－Ｌさんからは鹿児島特産のいこもち等をだしていただきながらのインタビューであった。
　生活改善グループの女性がお一人、朝から手伝いに来てくれていて、そのグループで加工販売していると言う蕎麦（初蕎麦）をお昼にはご馳走になった。

【Ｋ－Ｍさん】
- 昭和 24（1949）年 5 月 10 日付けで採用された、鹿児島県の第 1 期生活改良普及員であった[i]。
- 鹿児島の専門学校で被服を専攻していた。生活改良普及員の試験は、この専門学校の卒業資格として受験した。鹿児島県では第 1 期生活改良普及員を 5 名採用したが、全員、Ｋ－Ｍさんの同級生だった。Ｋ－Ｍさんは、この学校で教員免許も取得した。
- 曽於郡（当時 8 ヵ村）松山村に 4 年間、その後、県の生活改善係に 4 年間で、合計 8 年間、生活改良普及員をした。
- 出身は姶良で、生活改良普及員になるまで日豊線で霧島より先に行ったことが無かった。両親は生活改良普及員になることに反対していたが、松山村の村長が来て全てを引き受けると言ったので、両親からも許しが出た。
- 松山村の村長さんは、生活改良普及員制度ができると聞いて、他村に先駆けて熱心に普及員の村への誘致を進めた人だった。Ｋ－Ｍさんの赴任のときは、Ｋ－Ｍさんを迎えに来てくれた。Ｋ－Ｍさんに“ムシがつかないように”と、村長さんの家の離れ座敷にＫ－Ｍさんを住まわせてくれた。

- Ｋ－Ｍさんは県での第一期の生活改良普及員だったため、松山村に着任したときは、（村長以外）誰も生活改良普及員のことを知らなかった。まずは、村の人を知ること、村に溶け込むこと、生活改良普及員の仕事を村の人たちに知ってもらうことが大切だと思い、村内の会合をハシゴして回った。Ｋ－Ｍさんより１年早く村に着任していた農業改良普及員について、農談会にも出席した。幻灯機を持っていって生活改善の映像を流すこともあったが、“ 出番 ” はなかなか来なかった。
- 夜の会合にも出て行った。どの会合も出席者は男性ばかりだった。夜の会合では、よく「薩摩ナンコ」[ii]が行われていた。最初のうちはうまくできなかったが、何度もやっているうちにうまくなった。
- 当時は女性も男性と一緒に、鍬を一本担いで朝から田畑へ出ていた。その為、女性たちが集まれるのは雨の日ぐらいだった。
- 生活改善に興味を持ってくれそうな所には、作業衣や肌着の試作品を大風呂敷に包んで緑の自転車で出かけて行った。小縁に腰掛けて、“ 土間談義 ”で女性たちと話をした。技術をひけらかさないようにすること、他の女性たちと同じように黒っぽい服装にすることに気をつけた。この “ 土間談義 ” が後の台所改善に結びついた。
- 当時の農家の土間にはへっついがあり、火吹き竹を使っていた。水は、井戸から汲んで桶に溜めたものを使っていた。作業動線は流れていなかった。土間で豚を飼っていて、ご飯を炊いている隣では大鍋で豚飯目（ぶたはんもく：豚の餌）を炊いていた。
- カマド改善に理解を示してくれた人の家には、瀬川式カマドを左官さんと一緒に造った。
- ある家に、テーブルを作って土間におくことを提案した。次に行ってみると、脚にコロを取り付けて自由に移動できるテーブルが置いてあって、農家の器用さに驚いた。
- 被服が専門なので、作業衣のファッションショーもやった。
- 農業改良普及員が対応していた 4H クラブの女子青年対象に、料理講習会も実施した。刈り取った田んぼで、イナゴの佃煮や大豆のカレーを作った。お菓子作りにも取り組み、Ｋ－２さんは宣伝のために常に試食品を持ち歩いていた。
- 濃密指導期の前までは製材所がたくさんあったので、そこで出る切りくずに色を塗って、子供用のつみきを作ったこともある。
- ミナモトさんという生活改良普及員と、田畑で使える簡易トイレの普及にも努めた。
- 普及員としての活動の広報には、村の親子電話[iii]を利用した。次の訪問日等連絡事項も、この親子電話で女性たちにまわしてもらった。
- 戸別訪問と会合とで忙しく、不眠 “ 不休 ” のフキュウ員と言われていた。
- 結婚のため生活改善普及員を辞めてからも、普及員だから、何でも知っていると思われることがあった。普及員に求められたのは、浅く、広い知識だったので、何にでも答えられるわけではなかった。しかし、元普及員だったから、その後も頑張ってこら

れたと思う。（Ｋ－Ｍさん＋Ｋ－Ｌさん）

【Ｋ－Ｎさん】

- 奄美大島出身。小学校 6 年生のとき東京へ移り、その後東京の中を転々とした。父親は早稲田大学で教える国文学者だった。
- 奄美高等女学校の補習科で裁縫を学び、卒業後は医療の勉強もした。
- 昭和 29 年に鹿児島県の農業試験所に就職し、種子島の西之表分場に配属になった。30 人の職場で、女性は 4 人だけだった（その後、女性は 10 人まで増えた）。
- 分場では、農家の後継者育成として中学校、高校を卒業した人たちへ農業等を教えていた。Ｋ－Ｎさんは家庭管理（子供服作り等）の指導を行っていた。分場の卒業生で、補助として職員と共に働いていた人が、後に職員になることもあった。
- Ｋ－Ｎさんは生徒たちの宿舎の舎監も務めた。宿舎では自給した生産物で炊事していた。種子島でよく食べられるお菓子、アンダーギー[iv]の作り方も、この時覚えた。
- 西之表分場は買い物の出来る場所から離れていた。よく荷馬車に乗せてもらって買い物に行ったが、荷馬車に乗っていると警官に怒られたので、町につくと荷馬車を降りて歩いていった。
- 農家の後継者たちは、親から「車を買ってやるから家に残れ」と言われていた。
- 受験資格である家庭科教員免許を持っていたので、生活改良普及員の試験を受け、合格した。昭和 36 年に普及員になったが、その配属先も種子島だった。種子島には合計 15 年住んだ。
- Ｋ－Ｎさんの前任者の普及員は馬で移動していたそうだが、Ｋ－Ｎさんが普及員になった時には普及員はスクーターで移動するようになっていた。Ｋ－Ｎさんは原付 I 種に続いて II 種の免許も取得した。6 年間スクーターに乗った後、車に乗るようになった。
- 昭和 40 年から、市役所の人と協力して保育所を始めた（『燎原の灯は消えず』参照）。種子島は 2 期作を行っていて農繁期は共同炊事が行われていたので、保育所もやろうということになった。学校連携事業として、実業高校で保育の授業を受けている女学生 3 人に来てもらって、生活改善推進員とともに 20 人ぐらいの子供たちの世話をしてもらうことにした。「怖いもの知らずだったから出来た。」

【Ｋ－Ｌさん】

- 鹿児島市内で生まれ育ったが、戦災で焼け出され川辺郡に引っ越した。引っ越して、2、3 年して教育委員会の図書連絡係として勤めだした。当時は生活改良普及員の受験資格を持っている人が少なく、資格のあったＫ－Ｌさんにも声がかかった。
- 昭和 35 年に生活改良普及員の試験に合格し、曽於郡高鍋村に配属になった。ここは、

宮崎県との県境の村で都城から近い。同じ鹿児島県内でも、北と南で農業も生活も異なり、一人で赴任すると寂しかった。

- 生活改良普及員になってから“勉強”を始めたが、農家の人から学んだことが多かった。農家の人たちは原理は知らなくても、“ちゃんと”やっておられた。
- 当時は、農繁期の共同炊事、共同保育（季節保育所）をまだ行っていた。
- 生活改善推進員の協力を得て、農家の庭で黒板を作り、行事予定表を書き込んだ。農家では、ミカン箱の上に雨戸を置いてテーブルの代わりにし講習会を行った。
- 講習会は“食”に関するものが多かった。奥さんたちが料理を習えば、だんなさんたちもその料理を食べられたので、奥さんたちが講習会へ出ることへの反対はなかった。
- トマトがたくさん取れた年には、二つの集落で、トマトケチャップ作りをした。また、当時の農家では手間がかからないと冷や素麺ばかりが食べられていたが、素麺の上にいろんな具をのせる「ジャージャー麺」を指導すると評判がよかった。
- クリスマス・ケーキが流行り始めた頃、県がケーキ屋さんを頼んでくれて、生活改良普及員はケーキ作りの講習を受けた。その後、村でクリスマス・ケーキを作るというと、女性たちは七厘と大鍋を持って来た。「蓋が使えなくなっても、いいですか？」と女性に尋ねると、「構わない」と言ったので鍋蓋の上にも炭をおいてケーキを焼いた。（それぐらい、女性たちはケーキを作りたがっていた。）焼きあがると、女性たちは大喜びだった。他に箱がなかったので、お餅をとっておく箱にケーキを入れていた。
- 当時の農家は雑然としていた。洗濯物は水につけっぱなしになっており、玄関には靴が散らかり、家の中には花の一本も飾っていなかった。床の間には焼酎が飾られ、掛け軸は煤けていた。鶏は放し飼いだった。一方で、同じ集落でも洗濯物をきれいにさおに干している家もあったので、両方を比較できるスライドを、もう一人の生活改良普及員と協力して撮影した。各スライドのスクリプトも自分たちで考え、夜にスライドにナレーションを入れた。BGM にはベートーヴェンの「田園」を使った。
- スライド上映会をすると言うと、男性も女性も映画会だと思ってやって来た。白いシーツのスクリーンに、その集落の中で撮ったスライドを映した。みんな「あ、これは〇〇のとこだ」と撮影した家がわかったようで、靴の散らかった玄関を映し出された家の女性は俯いてしまっていた。傷つけてしまったかと心配したが、次から村に行くと「靴はちゃんとそろえちょる。」、「鶏小屋造ったよ。」等と住民の方から声をかけてくれるようになった。うまくいくか不安だったが、集落への啓蒙になったようだ。このようにして 3 年ぐらい経つと、ようやく村の人たちと仲良くなれ、村の人も家の悩みを話してくれるようになった[v]。
- “ソト”に出たことのない女性が多く、彼女たちは花もどのように飾ればいいのか知らなかった。本当の生け花を習いたいという女性たちの希望を受け、夜に生け花講習会を開いた。（たまたまお花を習っていたのが役立った。）材料は何でもいいから持っ

てきてというと、何がいいか分からなかったからと枝をなたで切って引っ張って来た人もいて、会場の公民会の庭が一杯になるぐらいの材料が集まった。「とにかく三角形になるようにいけて。」と指導したが、一人ずつ指導していると気が付いたら朝になっていた。

- 高鍋のあとは甑島に赴任した。甑島は大小二つの島からなり、なかなか皆で集まれなかったが、年に 2 回は泊りがけで交換会を持った。
- 甑島では村と村が離れていて頻繁に訪問できなかったので、回覧ノートを始めた。村のメンバーの中で順番にノートを回して、それぞれが何でもいいからノートに書き込むようにした。メンバー間を一通りノートが回ると村岡さんがノートを見て、コメントを書き込んだ。この回覧ノートが 10 年になったので、昨年「素風１」（タイトルはＫ－Ｌさんが考案）として冊子にまとめた[vi]。
- 活動のキャッチフレーズは大事である。例えば、「一日一回は、鉛筆を握ろう。」等。
- 生活改良普及事業には、その時代に合わせて、国の事業が導入された。それらと生活改善活動をうまく組み合わせることが重要だった。

【Ｋ－Ｃさん】

- 生活改良普及員になった頃は、教科書もなかったので、村田シメノ・ハニトモコの両氏が作っていた「婦人の友」が、活動の参考になった。
- 寸劇の脚本を書いたこと、指導者講習会に婦人会・青年会・4H クラブの女子を招いて皆でキャンプファイヤーをしたこと等、生活改良普及員になってから、とにかく、それまでしたことのないことを全部やった。

【Ｋ－Ａさん】

- （４H クラブの）女子青年に対し、婦人の家の向かいの施設で、花嫁研修を一週間の合宿形式で行った。参加者で家族を作ってもらい、お母さん役、お父さん役、子ども役を決めてもらう。そして、それぞれの役に合わせて家事等の分担を決めてもらい、一週間をその役割になって過ごすというものであった。例えば、お母さん役の人は、決められた食費で家族の一日の食事メニューを考えなければならなかった。
- これは、六本木の生活技術研修間で行われた同様の研修[vii]を受けたＫ－Ａさん達が、鹿児島県版として工夫して実施したもの。

【生活改善推進員について】（Ｋ－Ａさん・Ｋ－Ｃさん・Ｋ－Ｌさんの話）

- 鹿児島県には昭和 35 年から、県の独自の制度として各町に一人ずつ生活改善推進員という人達がいた。生活改善推進員は、普及員のパートナーとしてその活動をあらゆる面から助けた。
- １．普及員に協力してくれること、２．地域の人たちからの信望が厚いこと、の 2 つ

が推進員になる条件だった。

- 県や市、町の役場の人や、婦人会会長や小組合長（現在の自治会長）が推進員になってくれそうな人を普及員に推薦してくれた。もちろん、推薦してもらった人と普及員の相性が合わないこともあったが、何人かの候補者に会ううちに相性の合う人が見つかるものだった。
- 推進員には、必ずしも生活改善グループのリーダーや婦人会の会長がなったわけではない。例えば助産婦がなっていた。
- 推進員の任期は 3 年間で、その間、彼女たちに県から“何がしか”の支給はあったと思うが基本的にボランティアだった。
- 普及員は、1 年目は地域と道路を覚え、2 年目は人を覚え、3 年目になってようやく実態に触れて仕事ができるようになる。だから、地域に詳しい推進員の協力は貴重だった。

【Ｋ－ｍさん】

- 生活改善グループのメンバーだった隈元氏が、当時の生活の様子を基に小説を自費出版したらしいというので、Ｋ－Ｌ家からＫ－４家へ電話。
- 「本はあります。“先生方”（生活改良普及員）の分もあるのですが、お配りしたら気を使ってくださる方もいて…。負担を感じずにもらっていただければね…。」「今の私があるのは“先生方”のお蔭ですから…。」

（後で、改めて送り先の住所をお知らせして、本を譲っていただくということになったのだが、先にＫ－ｍさんの方からご本を送ってくださった。萩元洸 『春を待つ村』）

---

[i] **Ｋ－Ｃ氏、Ｋ－Ａ氏は第2期採用で、同じ昭和24年の9月30日付の採用だった。このときは、コトブキさんという人も合わせて、3名採用された。**

[ii] **現物をＫ－Ｍさんから頂いた。掌の下にナンコ（木の棒）を隠し、互いに相手が何本のナンコを隠しているか当てあう。村の“のんかた”（飲み会）では、負ける（掌の下のナンコの本数を相手に当てられる）と、焼酎を一気飲みしなければならない。Ｋ－Ｍさんの　負けが込むと村長が見かねて代わりに一気飲みをしてくれることもあった。**

[iii] **村の中専用の有線電話。普通の電話のように外部の電話とコミュニケーションの取れる親機が役場をはじめ村の中に何台かあり、各世帯に置かれた子機はこれらの親機と繋がっている。**

子機は村内しか話せない。

[iv] このアンダーギーをはじめ、鹿児島の郷土料理をまとめたのが下記の本。K－Lさんたち元生活改良普及員も作成に携わった。K－Mさんたちが活動していた当時、村で食べられていた料理を知る参考になるという。

「日本の食生活全集鹿児島」編集委員会 『日本の食生活全集46 鹿児島の食事』 1989年 (社) 農山漁村文化協会 (ISBN4-540-89005-0)

[v] このとき、K－Lさんたちが作成したスライドは、スクリプトもテープも合わせて普及所に置いてきたため、K－Lさんたちの手元には残っていないと言う。

[vi] 甑島地区生活研究グループ連絡協議会・甑島地区農業改良普及事業協議会 「素風1」平成12年

[vii] 六本木生活技術研修館訪問議事録 (矢敷作成) 参照。山本松代氏の発案で、生活そのものをいかに工夫できるかの体験研修が実施されていた。これには、当時、生活技術研修館ぐらいにしかなかった洋式トイレやベッドに慣れるという意味合いも込められていた。

Ⅱ．生活改良普及員の研修等に関する調査

【研修－１３－１】
場　　所：青年海外協力隊事務局技術顧問室（休憩スペース）
　　〒151-8558　東京都渋谷区代々木 2－1－1　新宿マインズタワー６F
日　　時：平成１４年 1 月１８日（金）午前１１：２０～１２：２０
面 会 者：家政・栄養士・保育・食品加工・料理技術顧問　河村フジ子氏（70 歳）
東京家政大学家政学部学部長
調 査 者：矢敷裕子（議事録担当）

場　　所：青年海外協力隊事務局
　　〒151-8558　東京都渋谷区代々木 2－1－1　新宿マインズタワー６F
日　　時：平成１４年 1 月１８日（金）午後２：１０～２：５０
面 会 者：青年海外協力隊事務局国内課　三ッ林紀子職員
調 査 者：矢敷裕子（議事録担当）

【家政隊員候補生の補完研修について】

河村：
以前は、（社）農山漁村女性・生活活動支援協会（当時）の堀家欣子氏に研修を依頼していた。堀家氏が研修を担当していた頃は、六本木の生活技術研修館で座学を行うとともに、秩父に現場研修にも出かけた。しかしながら、協力隊事務局とトラブルがあったようで、現在は、家政隊員に対する補完研修は実施していない。各訓練所の派遣前訓練で、河村氏が生活改善普及事業に触れているが、訓練生たちは生活改良普及員のことを知らないし、現場を見ていないので、実感が湧かない様子だという。

三ッ林：
以前は、（社）農山漁村女性・生活活動支援協会に研修を依頼していた。秩父改良普及所にも赴き普及員さんたちの生の声を聞けたので、候補生たちにも好評であった。しかしながら、経費の面で（社）農山漁村と折り合いがつかず平成 11 年度いっぱいで契約できなくなった。研修で“外”に出るときは（会計などの担当者として）“人”をつけなければならないのだが、この“人”の経費の問題があった。その後、平成 12 年度からは、村落開発分野の技術顧問である亘氏が企画・実施している村落開発普及員の隊員候補生の補完研修に、地域巡回型の職種の隊員候補生は組み込まれている。（ただし、村落型の家政隊員候補生は含まれるが、保健婦など地域保健の職種は含まれない。）

【保健婦隊員候補生の補完研修について】

三ッ林：
地域看護分野の職種（看護婦・士及び保健婦、助産婦）の隊員候補生には全員、補完研修（「地域看護講座」）が義務付けられている。この補完研修の企画・実施は、技術顧問の戸塚氏と技術専門委員の奥野氏（静岡県立大学看護学部講師）が担当している。研修講師には、当研究会メンバーの小山氏、和田氏も含まれている。

【補完研修カリキュラム作成のメカニズム】

三ッ林：
協力隊試験の技術面接を担当する技術専門委員[vii]が、隊員候補生の技術力と要請内容に望まれる技術力を比較して、補完研修の必要性の有無を査定する。補完研修が必要だと判定された隊員候補生に対し、国内課が技術顧問と相談しながら、補完研修先や講師を探す。生活改善関連職種の補完研修の担当は三ッ林氏だが、募集要項に出てくる職種の“後ろ半分”は、もう一人の職員が担当している。
広尾、駒ヶ根、二本松の各訓練所には JICA 職員である所長、所長代理、及び２～３名の職員（協力隊 OB/OG 中心）がおり、派遣前訓練のカリキュラム作成はこれら職員が担うことになっているが、実際はカリキュラム作成から訓練の運営まで、各訓練所に配置されている（社）青年海外協力協会（JOCA）職員が実施している。国内課と各訓練所の間で、隊員候補生に対する訓練･研修に関する情報交換はあまり実施されていない。（補完研修と派遣前訓練の間の連携は今のところあまり考えられていないようである。）

以　上

【研修－１３－２】
場　　所：青年海外協力隊事務局技術顧問室（休憩スペース）
　　〒151-8558　東京都渋谷区代々木 2－1－1　新宿マインズタワー６F
日　　時：平成１４年1月２２日（火）１４：００～１６：００
面 会 者：村落開発普及員技術顧問　亘純吉氏（駒女子大学教授）
同 席 者：協力隊事務局海外第二課　新谷職員
調 査 者：渡辺雅夫(議事録担当)

場　　所：青年海外協力隊事務局技術顧問室（休憩スペース）
　　〒151-8558　東京都渋谷区代々木 2－1－1　新宿マインズタワー６F
日　　時：平成１４年1月２２日（火）１５：００～１５：３０
面 会 者：保健婦・助産婦・看護士・栄養士技術顧問　戸塚氏（静岡県病院局がんセンター開設総室技監）
同 席 者：協力隊事務局海外第二課　新谷職員、村落開発分野技術顧問　亘氏
調 査 者：渡辺雅夫（議事録担当）

【村落開発普及員候補生の補完研修について】

亘氏：
以前は、（社）農山漁村女性・生活活動支援協会（当時）の堀家欣子氏に研修を依頼していた。しかしながら、協力隊事務局とトラブルがあったようで、現在は、補完研修は実施していない。よって平成 13 年度 2 次隊以降の補完研修の企画を亘氏が急遽頼依頼を受けた。以前のカリキュラムを見ると、堀家氏の頃は秩父農業改良普及所の見学をカリキュラムに入れていたものの、座学が中心であったため、ディスカッション、シミュレーション、KJ 法、グループワークのような参加型のワークショップ的な教授法をたくさん採り入れるように工夫した。例えば、「未開人のイメージを描きなさい」というような切り口でファシリテーションをはじめ、（候補生は決まってジャングルの未開人を描き、イヌイットは描かないという）、そこからなぜそのようなイメージがあるのか、というようなワークショップ形式のものもやっている。また、村落における開発を仮想して、どのような活動枠組みを作るかということを考えられるように訓練している。ただ、農業改良普及員について知らない人がいるのは問題なので、初めの段階ではそのことについて説明している。

【村落開発普及員等研修カリキュラム】

【1日目】
＊亘　純吉　氏
オリエンテーション
農業改良普及活動の歴史と展開
（レジュメを見る限り、農改さんの活動に重点をおいた構成だが、生改さんの活動にも触れてある。農改さんと生改さんとはひとまとめで教えていて、分けて教えてはいないということなので、連携については触れていない模様。）
農業改良普及の検証と再考
開発手法（概論）

【2日目】
＊石原　邦　氏（青年海外協力隊技術顧問）
自然と農業
＊石原氏・亘氏・JOCV-OV
「農業を基盤とした普及活動の視点」に関するグループ活動と発表、討議

【3日目】
＊丹野　かほる氏（新潟大学医学部教授）
「PHCを取り入れた活動の留意点」に関するグループ活動と発表、討議
（これは本当に基礎レベルのものを教えているとのこと）

【4日目】
＊青柳　茂　氏（ユネスコアジア文化センター識字協力課課長）
女性・エンパワーメント・識字
識字教育教材作成の実際と普及活動

【5日目】
＊青柳氏
教材開発（講義及び実習）
＊青柳氏・亘氏・JOCV-OV（草刈氏）
教材発表及び講評

　今後の方向性として、村落型の講師陣をもっとふやし、JOCV-OV に加わってもらうようにする。

尚、村落開発普及員の補完研修にはその他の職種も混ざっているが、今度 3 月 12 日（火）～3 月 16 日（土）に行う補完研修は本部で３日間、国際総合研修所で２日間行う予定。

【保健婦・助産婦・看護士・栄養士候補生の補完研修について】

戸塚：
地域看護技術補完研修は、東京だけで５日間やっている。研修内容は基礎的なことも教えるが、途上国で働く場合にどういう視点を身につけていったらいいのか、という観点から研修カリキュラムを作成している。例えば、家族の絆が強い国で、看護婦隊員が面会謝絶のシステムを作ってしまうということも実際にあったので、専門家だった人の経験を通じて異文化に適応した活動の仕方について学んでもらうことにしている。だいたい、隊員 0Ｖは任期を終えて戻った後は、枠にはめようとしない人になって戻ってきてくれている。

以　上

平成 13 年度補完研修参加人数実績

１．村落開発普及員補完研修

[単位：人]

職種名	**平成 13 年度 1 次隊**	**平成 13 年度 2 次隊**	**平成 13 年度 3 次隊**
	平成 13 年 3 月 5 日～3 月 9 日	平成 13 年 8 月 20 日～8 月 24 日	平成 13 年 12 月 11 日～12 月 15 日
村落開発普及員	19	11	17
家政	7	3	
手工芸	1	1	
婦人子供服			1
ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑｵﾌｨｻｰ		1	
識字教育		1（２回目のみ）	
合計	27	17	18

２．地域看護補完研修

[単位：人]

職種名	**平成 13 年度 1 次隊**	**平成 13 年度 2 次隊**	**平成 13 年度 3 次隊**
	平成 13 年 3 月 12 日～3 月 16 日	平成 13 年 8 月 20 日～8 月 24 日	平成 13 年 12 月 10 日～12 月 14 日
保健婦	9	2	4
助産婦	5	1	7
看護婦・士	5	5	4
栄養士	1	4	
合計	20	12	15

場　所：内之浦町漁村センター、移動車中、宿泊所、面会者のご自宅等
（Ｋ－ｊ氏・Ｋ－ｋ氏：鹿児島県肝属郡内之浦町／Ｋ－ｌ氏：日置郡日吉町）
日　時：平成１３年１２月８日～１０日
面会者：カラモジア関係者
１．　Ｋ－ｊ氏（20 年に亘り、からいも交流を取材してきた南日本放送記者）
２．　Ｋ－ｋ氏（財団法人カラモジア現常任理事/総務局長）
３．　Ｋ－ｌ氏（からいも交流初期からの受け入れ農家）
調査者：内田、矢敷、小國
担　当：内田（1）、矢敷（2，3）、小國（1，2，3）
内　容：からいも交流からカラモジアへの歩みと地域活性化、カラモジアにおける研修について

１．　Ｋ－ｊ氏（報道政策本部報道部記者）
（1）カラモジアの活動とのかかわりと、記者の目から見るカラモジアとは
1）かかわりについて
・　からいも交流５回目の頃。
・　第一回少年交流の頃からかかわってきた。タイに同行。
2）からいも交流
・　からいも交流から始まる。「筋書きがない」運動。運動体。
・　当時、地方農村部にあった「外人は人間じゃない」という認識に対し、「同じ人としてのかかわり」を言及。
・　20 年前の 30 歳世代（大久保、Ｋ－ｌ氏等）が、農家として独立できる頃に運動が始まった。
・　留学生の受け入れを通じて、鹿児島のよさを再発見する機会となった。
・　受け入れた留学生の国への視点→アジアへの視点→交流へ。
3）カラモジア交流（からいも＋アジアの交流）
・　脱穀機のエピソード：現地を訪問した農家が、より便利にと思い、自宅で眠っていた足踏み脱穀機を送ったところ、「うるさくて、会話が出来ない」という理由で使われなかった。→文化と文明について学ぶ。便利さだけではだめ。文化を学ぶには、集落など、小規模単位まで、マス目を小さくしていかねばわからない。そこに合わせられるかどうかが協力の決め手になるのではないか。→ＯＤＡへの疑問。
・　モノじゃなくて人を育てる「学び」で回転していく→カラモジア大学構想へ。
・　失ったものを学ぶ。思い出す。一緒の部分を見つける→手をつなぐ→交流へ。
・　長期研修生の受け入れ（交流受け入れ農家での生活＋アジア太平洋研修センターで

の研修)。

- ミャンマーでのプロジェクト：交流方式。農家と農家、地域と地域を結び、「何が必要か」ということをやる。⇔近隣地域で事業を行っていたＵＮ支援内容と現地状況の不一致（何百馬力のトラクターを導入し、段々畑を地ならししたが、普及に失敗)。

（２）第三者の目から見るカラモジアの問題点

- 創っては壊し、の繰り返し。→「継続しない」「組織力が弱い」。
- 理念が末端まで伝わらない。言い出しっぺである加藤氏との距離感が近い人は皆ついていくが、その下が育たない。50～60 歳世代が中心となり、年を取っていっている。現在は、流れがとまっているようにも見える。第一ステージの終わりを感じる。30～40 歳代世代が目立たないのは何故か。→運動体へのかかわりの農密度の差異があるのではないか。

（３）今後への期待

- 親世代を見つめてきた子供世代への期待：ＭＢＣ少年交流などの経験。大久保氏、Ｋ－ｌ氏など、中心になって受け入れてきた世代の子供世代が地元に戻ってくることを選択している。→2010 年頃になれば、動き出すのでは。

２．　Ｋ－ｋ氏（財団法人カラモジア　現常任理事／総務局長）

（１）プロフィール

- 現在 38 歳。5 年前までは川辺町の事務局長をしていた。もともと役場職員であったが、公務員を辞めて、からいも財団スタッフとなった。

（２）からいも交流と地域の活性化

- 地域から見れば、生活改善もからいも交流もイコール。
- 経済自立化運動、三作運動から昭和 49 年の農村振興運動への流れ。昭和 40 年代までは、生活改善プラス所得を上げるための生産活動運動がメインであった。昭和 40 年以降は、よりトータルな農村開発へと展開してきた。→環境、生活全般に亘る新農村振興運動。
- それまでは、鹿児島をはじめ日本の農村では東京にしか目が向いていなかった。“勝ち組み、負け組み”の考え方で東京と比べるとき、鹿児島の農村は常に東京に負ける。そこで、東京にこだわらず「直接、鹿児島の村を世界に向けて開こう。アジアとどう関わるかを考えればよい。」と考えたことが「からいも交流」の始まり

であった。

- 視点の変化である。比較優位の視点を取り除くこと。東京と比べる思考の延長戦では、どこまでいっても「負ける」。勝ち負けを考えれば勝者は一人。しかし、多様な文化は決して勝ち負けではない。回れ右すると、無限のアジアが広がり、東京に目をやる必要はないということである。
- 「からいも交流」は、環境に負荷を与えないようライフスタイルそのものを見直し、生活そのものを豊かにするための交流である。国際交流は、“ たいそうな ” ことではない。生活者にわかる言葉で国際交流を語ることが大事。地域の住民組織との連携し、地域で一体となって事業に取り組んできた。最初は理解が得られなかったが、留学生や研修生たちの未知の考え方に接し、多様な生き方があることに鹿児島の農村の人たちが気づきはじめ、地域に生きることへの motivation が上がってきた。
- 既存の支援プログラムのわかりにくさ：縦割り行政。厚生省、農政、教育委員会等のプログラムが別々に来る。受け手となるコアパーソンは同じ。→からいも交流は既存の支援とは全く違う視点で地域が「刺激を受ける機会」となってきた。
- →意識の啓発が最も重要。常にやらないといけない。いくら技術を持ち込んでもだめ。目的やビジョンがあってはじめて、技術や知識を欲する。からいもの運動は、意識啓発運動であり、壮大な教育改革運動である。
- →地域に生きるモチベーションが上昇すれば、リーダーが育っていく。多様な面でのリーダーの存在。
- 生活を豊かにするための新しい取り組み：「いつか終わるイベントではない、未来永劫続かねばいけない」。1 年に二週間のからいも交流（留学生受け入れ）経験が、365 日の残りの日数を過ごす原動力となっていく。やっている地域それぞれの形。

（3）からいもで用いられた「手法」とは

- 常にやさしい言葉に置き換える。親近感。「自分のことだ、自分の人生にかかわってくる」、と思えるようなやり方。
- 「国際化はすごいことではなく、誰でも出来ることだ」という思いを伝えたのがからいもの功績である。
- からいも交流≠ホームステイや国際交流。400 年以上前に琉球から来た「からいも」が地元の産物となって飢饉を逃れられた。どんな土地でも出来、加工品となって鹿児島の「文化」を生んだ。→新しいものがやってきて、そこの土と融合して、新たな風土が出来ることの象徴としての「からいも」。
- 地域は土だけでは何も起こらない。常に外の新しいものに対して地域を開き、“ 風 ” を呼び込むことで新たな文化が起こっていく。そうしなければ、“ 風土 ” はできな

い。薩摩はその昔、サツマイモを導入し、後にサツマイモを全国に広めた実績がある。これも“風”を呼び込んで“風土”を作った例である。

（4）カラモジア（からいも＋アジア）交流と国際協力

- 都市で国際協力に興味があるといっても、言葉、知識の壁があってなかなかアクセスできない。カラモジアは時間も金もなく、あまり知識もない農家から始めたことによって、「誰でも出来る」と受け入れられた。これをロータリークラブから始めたのではだめ。「国際協力は知識がないとやっていけないよ」という壁を超えた。
- 他方で、知識人はそれを生かす場でもある。例えば日高理事は宮崎大獣医学科卒業、明治乳業勤務の後、脱サラして参加している。特定の専門知識だけではなく、味噌も、米も作れる。
- →国際協力の場で、「専門家ばか」が多すぎる。稲のことしかわからない稲専門家では、途上国のニーズと合わないのでは。「知識」は、ある部分では途上国で生かせるが、それだけではない。むしろ、専門化していない知識で、使える知識がたくさんある。トータルとして、浅くてもたくさんのことを知っている人が必要。更に必要であれば、そういう専門家へと「結んで」ゆけばよい。だから「広く浅くいろんな事を学び」、色々なことを知っているジェネラリストがまず入って問題を探し出し、特化していくにつれスペシャリストの登場となる。鹿児島大学からも出張ベースで人を派遣できることになっているし、地域で知恵のある人も派遣する。

  例）和田さん：74 歳の炭焼き職人。座学はできないが、炭作りなどは、一緒に作ってみないとわからない。「煙の色の変化で火をとめる時期を判断する」といった技。こういう人をスペシャリストと呼ぶ。これだけの専門家は日本にもなかなかいないが、JICA ではこういう人は専門家とは呼ばれない。

（5）「カラモジア・アカデミー」

- カラモジア・アカデミーで日本に来る人は、カラモジアの海外のスタッフが、現地の村人の中からリーダーの素質のある人、日本での研修に意欲のある人を見つけてくる。
- 日本に来てからはまず、カラモジア郷で日本語研修をし、その後ホームステイをし、研修に入る。公民館等で地域の交流事業への参加も研修の一環である。

（6）質疑応答

Q.　二代目が目立たないという話を聞いたが。

A.　トップリーダーの交代は徐々に進んでいる。受け入れ農家はどんどん若返っている。第一世代が目立ちすぎた。また、地域自体にやはり若い世代の人数は全般的に少なく、

熱気が薄くなっている。昔は、青年団、４Ｈクラブ等の経験がある人たちで、組織の運営ということについてある程度わかって活動にかかわってきたが、そうではなくなってきた。

Q.　行政との結びつきはどうか。
A.　自分自身の素地は県の青年団での経験。鹿児島県の県青年団メンバー数は６千人に及ぶ。自分はその青年団長をやっていた。からいもだけやっていても他行政事業と結びついていかないが、自分含め、行政とつながっている人間が、ネットワークを結び付けていく役割を担う。「サーバー機能としてのカラモジア」。

Q.　青年団など、既存の組織をからいも交流でどのようにからめていけたのか。
A.　商工会、婦人会、農協婦人部など、既存の行政組織は全て、目的、性別の縦割り限定組織である。「誰でもきていいよ」という組織は実はなかなかない。それに対して、からいもでは、横断的に地域を切り、職も性別も関係なく、意識さえあれば参加できる。意識だけでつながっていく。目的集団から生活集団へ。

Q.　大学の先生は専門家などで長く出るには所属機関の規定が壁になる場合が多いが、鹿児島大の場合はなぜ可能となっているか。
A.　大学全体で連携できる協力枠組みが作られている。「出張ベース」で出られる。

Q.　地域から理解を得られないために修正したことはないか。
A.　もちろん、常にトライアル＆エラーだった。間違っていてもいい。常に修正していければいい。「下意横達」でいく。上意下達になってはだめ。

Q.　農業改良普及員を絡めていった理由は。
A.　行政のリーダーと地域のリーダーは同じではない。農業改良普及員は、誰が地域リーダーであるかを知っているので、相談して教えてもらった。ただ、今は普及員もリーダーのことを知らなかったりする。農改に限らず、「膨大な応援団をどうやって作るか」がポイント。

Q.　横の連携をどうやって作っていけるのか。
A.　「村、地域をなんとかしたい」という意欲、理念の共有さえできれば、漁村、農村、都市化した町などでいろいろやり方はある。多様な可能性がある。一銭にもならないことをやりつづけるには、「学ぼうという意識」が必須。「あんなことして」という反

発もある。しかし、戦後日本の集大成が、「金とモノが欲しい」という価値観を作り上げてきたが、今はそれだけではだめ、という意識が育ってきている。

Q. 精神的豊かさが育ち、それを求めているところでなら合致するアプローチかもしれないが、現在の途上国や、貧困地域ではどうすべきか。

A. 同じアプローチでは全然だめ。まず知恵を出し合って、①「腹いっぱい飯を食えるように」農業収量を上げることが必要（最終的には地域循環型の生活を目指す）。他方で、②教育が重要。日本がどうやって、今の閉塞感に苛まれてきたか、問題を明らかにする。一年に 3 万人の自殺者数や、ハウスシックなど。そして、同じ道を辿るのではなく、独自の方向性を目指してもらう。明確に、現状の課題に対応しつつ、意識啓発を行う。

Q. 交流から協力へという流れの有効性と特徴について。

A. 交流したい、という思いのある人じゃないと続かない。例えば長期研修で受け入れた際に、研修センターでの研修は最低限のみで、残りは「地域の受け入れ」で、公民館などで学んだり、農家ホームステイで時間を過ごすことになる。だから、研修生の場合は交流と異なり、選抜が非常に重要。現地で必ず我々が選ぶ。第三者機関に任せることはない。重要要素としては、意欲、一緒にやろうという意識、そしてその後、地域リーダーとなっていける可能性を有していること。選抜にそれだけ時間をかけると、受け入れるこちら側の方のモチベーションも違ってくる。

Q. キング女史について

A. ＧＨＱの教育担当者で、民主化、営農などにかかわっていたと聞いている。南日本新聞社から、キング氏、戦後の民主化について書かれた本が出ている。

Q. JICA の研修員を受け入れるおつもりは？

A. JICA は技術協力を行っているが、どういう村をつくるのかというビジョンのない中に技術だけ持ってきても意味がない。JICA の研修員を受け入れることは不可能ではないが、カラモジアの方針は JICA の方針と異なる部分がある。

３． Ｋ－１氏（日置郡日吉町在住。からいも交流受け入れ農家、生活改善グループリーダー）

（1）プロフィール

・ 第三回受け入れ農家。日置農業改良普及所の現生活改善グループリーダー。夫は集

落長、日吉を世界にひらく会の中心人物。

（２）生活改善とのかかわり

- 夫がかかわりをもっていた吹上農業普及所の「先生」が来られて、話をしに来た。生活改善実行グループについて、その存在と「楽しいですよ」という説明を受けた。同地にはまだグループがなく、自分が他の人に働きかけてグループを作った。「忙しいから作りっこないだろう」という反応があったが、根気よく続けた。→うちかど酪農グループ結成。記帳を行った。「一人ではなく、皆で勉強しよう」それで相乗効果を得る。
- その後、趣味、婦人会、生活改善研究グループなど、様々なグループに加入。
- 生活改善の研究グループは、生活改善実行グループ中のリーダーの集まりで、婦人の家に集まって技術を習得したりする。他の町を見に行って、グループの必要性を近所の人にみせたりもした。
- グループを作ると、喜ばれる活動が出来る。→「農村をつくっていく」。

（３）からいも交流とのかかわり

1）からいも交流以前

- 最初は、からいも交流ではなく、県からの要請で、外国人を 21 年位前に受け入れた。農業改良普及所の「先生」が来て、そういう要請があるといわれた。Ｋ－１さん自身は「外人さんに見られるなんて出来ない、どうしよう」の一点張りだったが、「案ずるより生むが易し」で前向きにやってみようという気持ちになった。来た人は、日本が少しだけわかった。受け入れてみたら、思っていたより難しくなかった。「よかった」「同じなんだ」「人間いっしょだ」と思い、語りやすくなった。
- 決断については、家族皆の話だった。といっても当時は姑が別居していて、子供は保育園だったので、夫婦間で相談した。二人一緒に、例えば何を食べられないかといった説明を受けた。

2）からいも交流への参加

- その後、吹上農業改良普及所長の先生から、「してみるね」といってからいも交流の青年（留学生）受け入れの話が来た。４Ｈクラブに加藤憲一さんが来て、お話があった。「東京だけを見てそれが日本だと思って帰国していくような人たちに、地方色豊かなふれあいをさせたい」と言われた。加藤さんはそのときに初めて会った。そのとき初耳だった。夫からＫ－１さんに話をし、４Ｈクラブが中心となって受け入れを行った。Ｋ－１さんは「留学生との交流」っていうのもあるんだなあと、浅くしか知らなかった。最初にデビさんという人が来た。それ以降は毎年受け入れて

いる。

- 一年に二回、春と夏とある。大体春は、日本に既に来ている、日本語が出来る留学生の受け入れで、夏は、香港、韓国、マカオなど、日本語を向こうで習っている留学生達。春組みと夏組みで違う。夏組みは観光気味だが、春組みの方が苦労しているようで、気持ちがわかる。それぞれ二週間。
- 受け入れ期間は、農家と一緒に汗水たらして働いた中に理解が広がるという生活を送る。遊びの感覚ではない。その辺りが夏組みとは違う。
- 「汗と土と潮（うしお）の交流」と加藤さんがいった。汗（働くこと）、土（農民）、潮（海の近い日吉町）。
- 2 年目以降（20 年前）、各市町村の受け入れに向けて、実行委員会という小さな団体をつくった。

3）様々な経験

- 他の受け入れ家庭の例：受け入れたフィリピンの留学生が、「よか靴履いて、家に船があって、メイドもいるような家庭の子」だった。「自家用車のハイエースで家に連れてくる途中で、後部座席から背もたれに足を乗せていた」。「食事が食べられないからといって、外食にいった」。→その人は、それで受け入れを終え、二度と受け入れなかった。
- 鳩野家では絶対にお客さん扱いはしない。

担当者所感：

カラモジア訪問によって得られた情報は、本調査の主眼である戦後農村生活改善運動とは、関係者的にも時代的にも異なっている。よって、上記はあくまでも参考のために記述したものである。また上記は、（財）カラモジア代表である加藤憲一氏の二冊の著書に記載されている同財団の活動についての説明を基礎情報として踏まえ、それを前提に聞き取ったものであり、カラモジアの活動内容について詳細を改めて聞くことはしていない。

今回、肝属郡内之浦町という特定地域の戦前から戦後へ、そして現在まで続く総合的な「村づくり」について考える貴重な機会となった。そのひとつは、時代の変化に基づく生活改善ニーズの変化と、それに対して時代が変わっても有効だと思われる介入アプローチとその目的の再認識である。それは端的にいえば、「外部者の持ち込む新しさを取り込み、それを通じて自分の生活を見つめ直すまなざしを養い、そして意識変革→社会変化を呼び起こし、村社会の活性化につなげていく」という農村開発の外部介入アプローチである。ここで最も重要なのは「自分の生活を見つめなおすまなざしを養う」こと、そしてそれを行動につなげていくことであろう。

戦後農村の生活改善において、生活改良普及員は、女性達に考え、話し、行動する

機会を与えた。そしてその機会を経てやる気になった女性達に対して、具体的な活動のオプションとして、様々なコンポーネントや科学的裏づけを有していた。現在の農村活性化を目指すからいも交流は、外国人という「異なるもの」を取り込むことによって自らの生活を見つめなおし、再評価する機会を得る。あるいは途上国に赴き、自らが「異なるもの」となって、現地農村の人々が自分達の生活を見つめなおす機会を与える。これはいずれも、農村開発におけるアウトサイダー効果の非常に基本的な部分にあたるのではないかと考える。

ただ、敗戦の経験を経て、既存の社会体制や価値観に懐疑的な視点を持つ素地を得ており、且つ全国的な貧困からの脱却という緊急課題を抱えていた戦後の日本農村社会に対して戦勝国アメリカから価値が「輸入」されたという当時の日本独自の状況と異なり、地方間格差、地域内格差を孕む現在の途上国農村への支援を想定した場合、求められる「異質性」は単に欧米的な民主性、合理性ではないであろう。また、その先にどのような行動のオプションが妥当であるかについての適切な判断が、より困難であるといえよう。カラモジアのプロジェクトでは、少なくとも、どの地域においても、その地域を見つめなおし、自分達の生活を再評価する所から思考を始めている。しかし、その先に何を見るかという点では、現在のＯＤＡが抱える問題から脱却できているとはいえないようである。「交流によって意識が高まった人々に対して何が出来るのか」という点は、カラモジアが現状として抱える問題でもあるのだろうと感じた。（小國）。

以上

【研修－１３－４】
場　所：オイスカ四国研修センター（香川県綾歌郡陵南町）
日　時：平成１４年2月１５日（土）１６：３０～
面会者：Ｏ－Ａ氏（四国研修センター　顧問）　Ｏ－Ｂ氏（四国研修センター副所長）
Ｏ－Ｃ氏（研修主任、日本語・農業生産指導）
調査者：内田、服部
担　当：服部朋子

● （財）オイスカ概略

・ 1961 年 10 月「物質と精神が調和した繁栄を築く」という基本理念を揚げ、オイスカ・インターナショナル（国連諮問資格・最上位格ジェネラル認定、総裁：中野良子）が日本で発足し、1969 年基本理念を具体的な活動によって推進する機関と

して当該法人設立（外務・農林水産・経済産業・厚生労働の４省共管　特定公益増進法人認定、理事長：山口信夫日本商工会議所特別顧問）。

・ オイスカ名称： オ（Organization／機構）
イ（Industrial／産業）
ス（Spiritual／精神）
カ（Cultural& Advancement／文化・促進）

・ 機構：本部（東京）
国内研修センター（中部日本、関西、四国、西日本の 4 ヶ所）
国内組織（北海道、宮城、埼玉、東京、神奈川、富山、静岡、愛知、長野、岐阜、関西、西日本、佐賀の 14 ヶ所）

・ 専従員：411 名
国内：122 名（職員 97 名・ボランティア職員 25 名）
海外開発指導員：48 名（海外プロジェクトの責任指導者）
現地採用：241 名（11 ヶ国・研修生 OB）
ボランティア：東京本部年間累計約 1,000 名）

・ 活動：発展途上諸国に置ける地球環境保全のための植林や人づくり、国づくりに協力する国際ボランティア団体として次のような活動を実施
１．人材育成
２．技術協力
３．海外地域開発プロジェクト
４．環境保護
５．国際会議（青年育成と環境教育）
６．調査研究、国際交流、後援会・広報等の啓発

・ 関連機関：学校法人中野学園（オイスカ開発教育専門学校、オイスカ高等学校）
（財）国際文化交友会
オイスカ日本語幼稚園（香港、上海、広州、マニラ）
アジア太平洋青年連合

● オイスカ四国研修センター訪問の経緯

途上国開発の協力において女性の積極的参加による開発が大きなキーポイントとなっているが、本財団は、女性に経済主体としての帰国後の活躍を支援すべく途上国の農村生活の現状に合った生活改善に関する知識や技能を習得してもらうことを主眼に置いた研修を実施している。

JICA 四国支部との連携によって研修コースを開設していることがわかり、当該事業

に深く関るものとして訪問を希望したところ、快諾して頂いたものである。

生活改善の普及活動に必要な農産物の生産や加工、保健衛生、調理技術、栄養学等に関する基礎的かつ実用的な知識・技術等を習得しつつ、地域開発における指導者としての人材育成のノウハウを身につけてもらうことが目的とされている。

● 研修コース概略

１．コース名：オイスカ農村女性のための生活改善と地域開発研修コース
（OISCA Rural Life Improvement and Community Development for Women）

２．研修期間：第 1 回（平成 12 年 1 月 23 日～12 月 22 日　335 日間）
第２回（平成 13 年 1 月 21 日～12 月 20 日　335 日間）
第 3 回（平成 14 年 1 月 22 日～12 月 21 日　334 日間）

３．定員：15 名

４．参加要件：地域社会生活改善普及員又は生活改善ボランティアとして２ケ年以上の実務経験者、高校卒業した者又は同等以上の学力を有するもの、年齢は 20 歳～30 歳以下、等

５．研修生出身国状況：インドネシア、フィリピン、フィジー、マレーシア、ミャンマー、パプア・ニューギニア

● 内容

第 3 回研修生や職員の方々とともに寝食を共にし、活動状況・施設を見学させて頂く一方でお話を伺い、大変手厚くもてなしてもらった。研修に関しては、本部に聞いてもらった方がよいことも多いとのことだったが、官民一体でお互いに補完し合うものとしていいという考えのもと、当方の質問に一つ一つ丁寧に答えて頂いた。

●質問

１．日本語研修が 3 ヶ月間あるが…。

→50 音、平仮名くらいはわかっていて欲しい。日本語がわかることは重要視している。

２．研修生は貴財団海外支部に関係する人達が多いようですね。

→現地に研修センターがあり（現地のオイスカ組織の後ろ盾で出来た）、日本人技術者が指導にあたっている。例えば、インドネシアなどは既に 6 ヶ月半の長期スパンの研修も実施しており、現地のセンターで既に研修を受けて中でも優秀な人を選んで呼んでいる。基本的規律があり、団体生活を知っている人がよい（オイスカでは効果的な方法と考えている）。研修後（帰国後）、現地研修センターで働く人や自分の村で生活改善活動をす

る者もいる。例えば、女性の生活改善コースを現地研修センター（インドネシア等）に作り、そこで活躍してもらいたいとも考える。指導をする任務としてのポストもある。

３．陵南町生活改善グループと関る経緯について教えてください。

→オイスカから働きかけた。一番近い生活改善グループは陵南町だということがわかり、会長は誰かを調べて頼みに行った。あくまで交流であり、講師ではない。町の人との交流も大切に考えている。町長自体（町自体と町長個人も）がオイスカ会員で協力的であり、様々な行事（綱引き等）にも声がかかるようになってきた。

陶（スエ）小学校の子ども達と一緒に稲刈りや田植え、おむすび交流をしている。子ども達にとってもよいことだし、喜んでもらっている。小学校の発表会に呼ばれたりするようになった。研修という大きな目標があるが、その合間をぬって交流している。数年前は研修センターを建設する際など拒絶されたこともあったが、現在はお互いに楽しんで喜んでいる。

地域定着で進めている。地域社会の協力は重要で、ここは皆協力的で大変有難いと思っている。

これまでのオイスカの積み重ねの結果だと思う。県の教育委員会からも注目をされている。例えば、10 年在職職員研修（高校の教職員を受け入れて欲しいという申し込み）の問い合わせや農作業・交流を希望する人達もいる。その際、初めて来る人にはオイスカ全般を理解してもらうよう概略を説明している。

４．女性の生活改善コース以外の研修はどのような感じですか？

→農業指導コースがあり、この研修生はＯＢ，つまり、来日 2 回目の人達である。また、2 年目の人を対象として「ボランティア研修」がある。これは、オイスカの組織化の一環として子どもへの環境教育、子ども達に自国の紹介等の役割とともに、マネージメントに役立つように事務の手伝いをする、ミーティングに参加する、ということが研修内容にはいってくるものである。指示や指導をある部分こなしてもらい、帰国後に役立つように、又現地オイスカの人間として（ボランティアとして）即、雇用が可能であり、戦力になる。

５．職員の方々の専門等はどのような感じですか？

→農業関係がバックグランドの者がほとんどである。北大、農大、信大等であとからあわてて勉強をしているという面もある。ＮＧＯとしては、すぐに専門家を集められないのが難点である。

しかし、研修生にとっては、なかなかキツイ研修だと思う。

６．日本語指導担当のＯ－Ｃさん、日本語授業の様子や課題点等を教えてください。
→以前は、日本語学校の先生をしており、この研修センターは 8 年目。農業に関しては、ベテランの人に指導をしてもらいながら養鶏を勉強して、ここで養鶏も担当している。

3 ヶ月間の日本語研修で教えることは、自分の意思を伝える基礎（テキスト：日本語の基礎１）のみである。日本語ができることは必須ではないので、平仮名が読めない状態で来る人もいてスタートラインが個人によって違う。しかし、農業をやってきているから言葉がわからなくてもやっていることがわかる。理論よりも実習に重きを置いているから、大丈夫である。例えば、料理も見ればわかるし、「きもち、もうチョイ」といった単語を覚える。

日本語能力試験（１～4 級まである）があるが、韓国や中国の人だと 2 級をとれるが、この研修生の場合、せいぜい 3 級である。ただし、会話能力は韓国・中国の人達よりも上だと感じる。１国から 2 名来日している場合もお互いに日本語で話すなどを決めて頑張っている（本施設内の公用語は日本語）。

むしろ、作物に手をかけない位置にいた人（種を蒔いたら自然に生えている、または生えてくると思っている人）が課題である。実際にやるようになるが。

７．授業のやり方やテキストはどのようなものを用いていらっしゃいますか？
→海外技術者協会のものを使用しているが、そこは工業研修生が主なので、平仮名の書いてあるカードでカルタをしたり、名詞、動詞、挨拶の仕方などを説明するものが一式で売っているのでそれを購入している。数字は 10 万単位まで教える。コミュニケーション能力を高めるために直説法、つまり日本語だけで教えている。

８．日本語で研修をする意図は何ですか？
→日本語で話すということは日本語で考えるということ。文化を知るには言葉は基本中の基本である。日本文化を知る鍵は日本語であり、概念を知る、理解するには日本語が必要である。「郷に入ったら郷に従え」という思いもある。

日本語習得において男女差はなく、むしろ年齢差ではないか。だいたいインド、ミャンマー、バングラデッシュ、スリランカは早い。日本語と語順が同じ、文法が似ているとかなり早い。

９．JICA は英語で授業をする方がよいと思っているのではないでしょうか？
→日本人の考え方を理解して欲しいので、日本語は必須であり、オイスカとしてはこの日本語に関しては、ゆずれない。だいたい、3 ヶ月で苦しい時期を越えるから大丈夫。今

は、質問が好きな時期であり、スタッフに楽しそうに色々質問している。

10．1 月の受け入れ時期に関してですが・・・。
→冬の間農作業が少なく、やることの無い時期に受け入れをして日本語を学ぶという形をとることにしている。普通は 4 月が年度始めではあるが、1 月に受け入れる方がちょうどよい。

11．朝早いですね。朝礼とかも毎日あって研修生の方々はどうでしょう。
→6 時 15 分に起きなくてもいいのではと JICA の方がもらしたことがあるが、これがオイスカ流であり、変えるつもりは無い。海外でも日本以上に規律の厳しい所はある。時間にルーズな国であってもオイスカのある所だけ違う空間で厳しかったりする。衛生観念など日本人の感覚も理解して欲しい。3 ヶ月間の間には、掃除も教えて（雑巾は絞って拭く等）日本人にとって汚いという感覚がわかってもらえる。

12．女性と生活改善と１セットという感じですが、男性に関してはどうでしょうか。
→家族計画に関しては、男性にもするし、課外授業なども行っている。女性の場合、帰国後、現金収入が狙えるようにしたい。今は、道の駅やバザーで卵 10 個で 100 円とかで販売したりしている。今後は、東京で JICA とも相談することになるだろう。JICA での評価会や研修センター内でも中間評価会などを開いて研修生から意見を聞くようにしている。

13．大変広く、浅い感じのプログラムになっていると感じましたが、専修コースを設けて特に学びたいものを選択可能にするとかはいかがでしょう。
→今後の検討事項だと思っている。ただ、予算が全て 15 人で動くようになっていることと例えば、加工をやりたい人と裁縫では経費が異なり、公平性の問題とかが出てくるかもしれない。

14．おこづかい等はどのようになっていますか？
→月 3 万円である。このお小遣いからテレカを購入して自国に電話とかをしているようだ。

15．現時点で何か研修生に問題とか起こっていますか。
→言葉の問題と体中が痒いと言っている人がいることぐらいか。また、寒さに驚いているようだ。また、我々職員ではなく、気軽に話やすい農業ボランティアの人に相談したりしている様で、重要事項はこちらにも報告して貰っている。

16. 研修後のフォローアップはどうでしょう。
→ミャンマーとかに関しては、追跡調査をしている。年に 1 回、1 週間から 10 日間の間で帰国後の状況を調査している。昨年は、タイでオイスカ研修生に集合をかけたら、多数集まったが、可能な限り連絡をとり続けることにしている。

【研修－１３－５】
場　所：オイスカ四国研修センター
日　時：平成１４年２月１６日（金）～１７日（土）
面会者：研修生及びスタッフ
同席者：Ｏ－Ｂ氏　　Ｏ－Ｃ氏
調査者：内田久美子、服部朋子
担　当：服部朋子

２月 16 日（金）夕食後、研修生と懇親会という形で気軽に話をする時間を頂くことが出来た。センターでは公用語は日本語で我々が英語を使用するのははばかられた。しかし、来日したばかりで日本語だけでの意思疎通は困難であり（英語もわからない研修生も多い）、Ｏ－Ｃ氏の協力を得ながら、日英の両方を用いて話をした。
２月 17 日（土）は朝礼（国旗掲揚、ラジオ体操、ランニング）から一緒に参加し、養鶏、農作業の見学をした。

●面会者属性
・ マレーシア：サバ州から３名。オイスカ研修センター（日本人の先生はいない）所属。フードプレッサーの工場で働きたいと思っている。
・ インドネシア：２名。スカブミ（西ジャワ）にある研修センターにいる人とカラマリナルセンター（中部ジャワ）にいる人。後者の地域は、生活改善が上手くいって生活状況が向上し、成功していると言われている。特にメロンと唐辛子が有名である。
・ フィリピン：３名。一人は幼稚園の保母さんをしている。園芸、料理、フラワーアレンジメントに関心があって特に学びたい。
・ パプア・ニューギニア：２名。有機農業、稲作を学びたい。
・ ミャンマー：３名。２人とも農家である。
・ フィジー：１名。YWCA におり、主婦や若者に裁縫やクラフトを２年間教えている。

●内容

- 日本の印象を聞くと、口々に「寒い」という答えが返ってきた。
- フィジーは一般に女性を研修に参加させないので政府とオイスカで相談して決めたという。
- 15 人の研修生は皆仲がよく、お互いを尊重し合う様子が伺えた。研修生の中でも年長者のフィリピン人女性が、自然とリーダー格になっているようであった。
- 食事はセンター内でとれる（全て自然）ものが中心で、後かたずけ等生活面でも役割分担がきちんとなされており、合理的効率的にスケジュールがこなされていく様子が伺えた。
- 雪を初めて見たこと休日に小豆島に行った事が印象深いようである。現在のところ、体中が痒くなったり、日本語に苦労していること（宿題が多いと言う）が一番の課題である。
- ゴミの分別処理が難しく、そのような習慣がないことや分別の仕方がわからない場合がある。
- 基本的に有機農業。宿舎のすぐ近くに作業所と養鶏所があり、そこから徒歩数分の所に畑がある。行く途中にはビニールハウス（きのこや野菜）や溜池があった。作業所の横にはミカンの皮が沢山干してあり、ネギを植える際に根につけると虫除けになるとのことであった。
- 養鶏が 400 羽いて、全て自然に育てている。70%が産卵可能で、それら卵はセンター内で食されている。作業は一日 3 回、朝晩に餌を与え、昼に卵を取りに行くこと。
- だいたい一羽が一日 1 個卵を産むが、有精卵（有精卵の資格：雄が 10%以上いること）である。無精卵と栄養素の違いは無い。雌のみの場合、統制力がなく、雄がいるとケンカをしない。
- 餌は、トウモロコシ（20kg：購入）、米ぬか（7kg：購入）、おから（10kg：もらう）、魚（10kg：スーパーから魚のアラをもらい、煮て餌に混ぜて発酵）、カキガラ（3kg：もらう。貝殻はカルシウム豊富）、もみがら（バケツ 2 杯：もらう）を混ぜてヤクルトからもらう天然の乳酸菌をプラスして作る。籾殻を燻製にしたクンタンも餌にしている。
- ミャンマーでは養鶏が盛んで、力仕事ではないことを考えると女性向きである。近い将来はより力を入れることを考えており、研修センターでは資金を貸し付けることを検討中である。
- 有機肥料は、木酢液、唐辛子焼酎、あせび焼酎、ニンニク木酢等である。
- 元々、センターの土地はブドウ畑であった。

・ 畑からとれた春菊をきれいに束ねてビニールに入れ、ダンボールにつめる作業を行った。農協に出すため、商品として出せるように規程に従い作業を進める。この規程のとおりに行うこと（揃える、テープの方向や結び方、ホチキスのとめ方等）がなかなか難しいという。
・ 農作業は単純作業だが、それらの意味や全体の中での位置付けをわかるようになって欲しいとスタッフが語った。

【研修－１３－６】
場　所：オイスカ四国研修センター
日　時：平成１４年2月１６日（金）１０：３０～
面会者：Ｏ－Ｄ氏（栄養食品調理、農産加工）
調査者：内田久美子、服部朋子
担　当：服部朋子

●面会者属性
・ 父親がこのセンターの第 2 回目の所長。
・ 香川県の坂出出身、結婚して綾歌の方へ。結婚前は姉と二人で喫茶店（実家の坂出の方で）をしていた。食べることと作ることが好きで調理師免許を取得した。
・ 車で 15 分の所に住んでいて､娘は母親の影響を受けたのか(研修生とのふれあいの中、英語が話せるようになりたいようである）関西外大 2 年で今オーストラリアに留学中である。
・ 通いをいれて 10 年以上このセンターに来ている。1988 年から料理の手伝いに来ていて、子どもの手が離れたので徐々に回数が増え、今はここに入って（研修生が増え、可愛くてやめられなくなった）料理部門の責任者になった。センターでは自分達で野菜を作ってそれを調理することも魅力的であった。

●研修に関して
・ 2 年前から生活改善の研修生に教えている。
・ 国により食生活は異なるし、研修生は初めは味が薄いとかダメみたいですが、帰国する頃にはラッキョウや味噌を持って帰りたいと言う（日本食びいきになって帰国する)。
・ 口内炎ができたり、皮膚がカサカサになる研修生が多い。ここで取れるヨモギで漢方薬を作っており、これを活用している。

- 麺類をはじめ、パンを焼き、豆腐を作り（ニガリがあれば大丈夫で大豆は作っている）、うどんの打ち方も学ぶ（小麦粉もセンターで作る）。オープンを使い、シュークリーム等お菓子（柏餅、餡子等）の作り方も学ぶ。付近でとれるドジョウを使い味噌煮込みにして近所の方々もよんで食べたりすることもしている。
- 調味料及び材料が異なる為、最初は何を教えたらいいのか、自国で役立つかどうかということを考えた。日本食を教えているが、中華、洋食、お菓子も教えている。
- 日本食は広さがある。日本人は、外国のものを真似するだけではなく、日本人好みに味を変化させ、上手く取り入れている（パンが入ってくると中に餡子を入れてアンパンにする等）。例えば、バングラデッシュは朝から晩までカレー（野菜カレー、肉カレー等）で味がずっと同じである。味や組み合わせを変えるようにすることが必要である。これは、栄養の問題だけではなく、味や文化の広がりが生まれる。色々勉強して受け入れて少し変えるだけで研修生にとっては大きいことである。
- 調理の工夫の仕方を１つでも多く学んで欲しい。これだけで栄養が違ってくる。
- お金を使わずに食が豊かになる技を学んで、バラエティに富ませて欲しい。
- 自国にもケチャップやマヨネーズがあるが、使い方がわからないために活用していない。
- 何かプラスになる、「プラスアルファ」が出来ればいいのであり、これだけで栄養が違う。
- 切り方も名前もきちんと覚えて貰い、同じ様に作り同じ様に味付けをすることを学ぶ。覚えるのには時間がかかるが、日本の文化のようなものも理解して欲しいと思う（無駄にしない、感謝の気持ち、日本の食文化の細かさ等）。米糠で油物料理のもののかたずけをし、あとは堆肥にするなど全て活用する。
- 英語では料理は教えられない。日本における料理の思いや感じが伝わらない。「一番だし、寿司、こんにゃく」等の英語は無いし、英語が出来ない国の人もいる。洋食でも日本のやり方でお惣菜的に伝える。
- どこで作ったかわからないような材料ではなく、全て自然であり、それが一番贅沢であろう。
- 一人の女性が異なる味や料理法を自国に持ち帰ることにより、その後の普及が期待される。実際、各地域で教えたり、料理の責任者になっていたりする。
- カースト制のある国の人達もいるが、全てそれを除いてここでは実習を行う（床掃除、あとかたずけも皆一緒。お金の有無、身分の上下による差別排除）。以前、畑に入らないインド人がいたが、センターの職員が皆平等で草取りをし、泥だらけの様子を見て徐々に入るようになった。
- 自分のプロジェクト（レストランやお菓子屋をやりたい）を持つ人もいて、自国で日

本の味を加えたり、アレンジしながらのものにしたいと言っている。

- 同じ物を使って種類を多く作る。30～40 日間は同じメニューにならないようにする。
- 栄養の概念がないのか考える必要がないのか、おなかが一杯になればよいという感じにしなければいけない時もあるのかもしれないが、説明すると理解してくれる。自国では、毎週月曜日はこのメニューという感じで固定しており、食べられればよいという考え方なのではないかと推測する。安価で色々作れること、栄養も難しいことではなく５大栄養素とか基礎的なことをわかるだけでも大きいので、それを一緒に実践し教えるようにしている。
- 日本食は自然と本当に上手くバランスがとれている素晴らしいものである。先人からの知恵、地域や気候にあったものであり、例えば小麦は一度そこに植えるとそこに再び植えることが不可能で別の場所に植えないと出来ないが、お米は同じ場所で毎年毎年作ることが出来、二期作も可能である。日本はアメリカのように広い土地は無いしし、田植えが出来るまでに水をずっとためてそれがダムのような役割を果たし、環境にもよい。
- お米だけではなく、少しでも空いた土地にパセリ、レモングラス、ネギ等を家庭で植えたりしている日本女性はすごい、働き者であると研修生が言っている。自国には空いた土地が一杯あっても何も植えていないのでもったいないと言っている。帰国後は、見習って色々植えて、それを用いて栄養面でも料理の種類も向上させたいと言っている。ちょっとしたことでも伝わっていくことが大切であり、近所の人を集めて教えるなどして欲しい。
- 自分達はこの料理だけというように初めは硬いが、帰国する頃はあれもこれもやってみようと意欲的になる。
- 個人個人に教える必要がある。一人にある注意をすれば日本人の場合はそれが周囲に伝わるが、研修生の場合は伝わらず、一人一人に同じ様に言っていかなければならないので根気がいる。
- 帰国 1 ヶ月前には、帰国後に何をするかというプロジェクト発表会を行う。これまでの事例では、マレーシア・パプアニューギニアの有機農法や日本料理・お菓子等のレストラン計画がある。スタッフは発表内容に関して指導をする。資本金をどのようにするかも考えて発表している。
- ２年目の研修生としてフィリピンとフィジーの二人の女性が学んでいる。この女性達は黒板に平仮名でメニューを書き、献立を自ら考えるようにさせている。

●質問

１．調理実習のプランのたて方はどのようにしていますか（服部）。

→家政分野で来日している研修生との兼ね合いを考える。研修主任と相談しながら進めるが、内容については私がだいたいが決める。

２．参考にしていることや教え方で影響を受けた人・テキスト等はありますか（服部）。

→2 年前の最初は、教えることは大変で図書館に行って調べたり、新聞等も参考にしたり、インターネット等で教え方なども勉強した。「適宜」と言うように家で教えられてもここの講義ではそうはいかない。計り方を教える必要があり、ベースを教えた後は自分のオリジナルの味を作っていって欲しいと考えている。教材は特に決めていない。例えば、酢豚にしても地域、コック、本、店、味の感じ方、調味料の量等によって味は異なる。最初は手探りで大変であった。ジュニア向けの本などは平仮名がふってあるものがあり、研修生は帰国の際に持って帰りたがる。

３．現在、新しい調理場を工事中ですね（内田）

→新しい調理場と自国の調理場を比較して色々段取りを考えるようにもなって欲しい。台所は動線を考える、日当たりをよくするなど衛生面（雑巾と台布巾を一緒にしていたりする）及び包丁の研ぎ方など道具の手入れも指導する。包丁は帰国する際に皆持って帰る。今度の調理場はさらに効率的な動きを可能にするように私が考えたし、設備もよい。しかし、オーブンのない国もあるからきちんと代替できる方法を教えているし、以前はカマドも活用していた。

【研修－１３－７】

場　所：オイスカ四国研修センター

日　時：平成１４年2月１６日（金）１１：３０～

面会者：Ｏ‐Ｅ氏（保健衛生、日本語、農産加工担当）　Ｏ－Ｆ氏（栄養食品学、農産加工、日本語担当）

調査者：内田、服部

担　当：服部朋子

●面会者属性

・　Ｏ－Ｅさん：大阪出身の看護婦。職場は幾つか変わってきたが、泉大津周辺の伝染病（赤痢、コレラ等）病院等にいた。

・　Ｏ－Ｆさん：農家育ちで以前は新聞記者。

●保健衛生講習（Ｏ－Ｅさん担当）に関して

・　保健衛生、健康管理全般を担当。

・ 専門的技術は無理なので、手をきれいに洗いましょう、つめを短く切りましょうというところからスタートし、生活一般関係（ゴミはゴミ箱へ、かたづけをする等）を指導する。寄生虫、伝染病の感染経路及び注意点の説明、エイズの感染・差別の現状を教える。救急処置は日赤の方に 4 日間（実習）お願いしている。
・ 教材は、ユニセフが使用しているミャンマーのテキスト（図解説・ミャンマー語）や資料及びアメリカのバークレーの図書を活用している。配布するテキストは自分で作成。
・ 病院へ車で行くのに時間がかかり且つ車を調達できないような地域に住む人達を念頭に考えて基本的なことを教える方向性である。
・ 薬関係は特に教えていない。保健衛生は病気になる前の予防が中心であり、病気になってから治療をする場合は病院に行かないと無理というスタンスである。
・ ゴミ処理場や缶プレス向上向上の見学、衛生面も指導。
・ 女性の身体の仕組みを全く知らないので妊娠から出産までの話もする。NHK で放映されたものをビデオ教材として使用し、ディスカッションを行ったりする。
・ 毎月自分達で体重や血圧をはかってチェックすることを学んだり、爪を切ることの意識付けを行う。

●生活改善運動について
・ Ｏ－Ｆさん自身は生活改善運動をしていないが、身近でずっとあったし、農村暮らしだった為に触れる機会があった。以前、新聞記者であった時は、農村女性がテーマであった。
・ 母親、地域の人達等周囲の人達が生活合理化運動を実施していた。加工所をつくったり、農村女性は元気で活躍していたと思う。女性が元気な所は地域が元気であり、その辺りを伝えたい。特に地域の女性から行政に色々アイディアや意思を挙げて自分達で手に入れていたし、勉強会（栄養や保健関係、今でも林さんの母親はやっている）もしていた。自分達からの働きかけのものは発展しやすいと思う。上から与えられたものは先細りしやすいが、自発的である場合は責任もあり、やる気も違うので持続する。たとえ、最初に知識の無い状態の女性であっても企業的なことも実施しており、それに対して行政の支援がある。研修生の国では、それが困難である。行政がお金が無いということもあるが、女性達が自分達で管理（共同の物を大切に使う等）・運営することが弱い。ここで見せたいのは、いかに行政の力を借りずに自分達で加工場を大切に利用するか、活動を自立して進めていくかと言う部分である。
・ 生活改善グループは一頃に比べて停滞しているが、お母さん達のパワーは確実にあり、それを研修生達に伝えたいし、陵南町のグループの方々との交流は大切に考えている。

●食品加工、食品・栄養学について（Ｏ－Ｆさん）

・ カリキュラムでは私の担当は食品栄養だが、地域がどうだったら女性の手で元気になっていくかを私はみてきているので、それを出来るだけ伝えたい。よって、私は、むしろ食教育、食を通じてしつけや環境及び地域を見るということを指導してきている。私は、栄養や食品学の専門ではない。
・ 小学校で話をしたり、給食の体験して学校ではどのような栄養指導をしているかを知るということも行っている。小学校では英語は使われていないわけで研修生がある程度日本語を理解できなければならない。
・ 日本語の問題（漢字や専門用語）及び英語でも半数の研修生が英語が出来ないので市販のテキストは使えない。言葉で説明するとすれば小学生でも理解可能な程度のものになり、自分で教材を作成する。
・ 日本で学習するので地域の方々との交流、日本の母親達が歩んできた生活改善の道のりが大切な要素なので、その母親達の会話が出来るようにするのも私の役目であり、易しい日本語を大事にしながら、授業することを心がけている。
・ 帰国前に自分の帰国後のプランを日本語で発表する機会があるが、企業的なプランも多い。しかし、自分だけお金持ちになるというのではなく、地域の人達と協力する、女性の就労・勉強の機会を増やす、生産物を通じて学校等に栄養の話が出来るような環境をつくっていきたいという気持ちを持ったものである。少しでもそのようなプランを持って帰国することを望んでいる。
・ その他生け花体験もあり、7 月頃になると研修生も日本語がだいぶ話せるようになり、自分で課題をインタビューしたりするようになる。
・ 我々のカリキュラムや地域住民との交流は通訳を介していたら不可能である。本当に理解しようと思ったり、その国の文化のよさや自国を振り返える際は、研修する地域の語学が話せることは絶対必要。
・ 広島の原爆ドームや小豆島などに足を運ぶことも取り入れている。

●質問

１．Ｏ－Ｄ先生とコンビを組んで食品栄養学を教えてらっしゃるということですね(内田)。

→私が講義でＯ－Ｄ先生が調理という感じで、特に私は余剰生産物を商品加工する、天然酵母、長期保存食の担当である。

２．商品加工したものは、JA や道の駅で販売しているのですか（服部）

→今工事している所に加工場を作る予定だが、営業許可がない。営業許可を取得しないとジャムなどは売れない。漬物や殻付きゆで卵は販売している（無許可で大丈夫)。漬物は

野菜等と一緒にだしているが、ジャム、パン、お菓子は試食は OK だが、加工場が出来た上で営業許可を取りたい。今までのところは、沢山作っても自己消費。

３．講義の時、そのような質問が研修生からでますか（服部）

→色々あるが、例えば妊娠して出産までは通常 10 ヶ月くらいだが「私の国では 8 ヶ月なのはなぜか、あるいは爪を短く切るのは日本の文化なのか」といった質問がある。

４．洋裁実習ではどのようなものを作っているのですか？　生活改善運動においては三角巾、オムツ及び動きやすい作業服を作成しているが、ここではブラウスを作っているとお聞きした（内田）。

→エプロンとか実用的なものも作成している。結構、研修のカリキュラムは実用的なことを意識して選択して実施するようにしている。

５．専修コースなどがあればいいのではと思いますが･･･（内田）。

→それはそう思う。研修生それぞれが興味のあるところを深くやりたいという考えはある。

６．研修後それをどれだけ生かせるか、需要や職場の確保は課題ですね（内田）。

→我々が日々思うことは、オイスカで学んだということがあると何かを話したり行動をする際に、よらば大樹ではないが、自分の位置関係が言いやすく明確になる、人が集まりやすくなる等のメリットがある。

７．国旗掲揚とかは神道との関連ですか（内田）。

→皆さんその辺を誤解なされるのだが、日本の国旗をあげるのではなく自国のものをあげており、神道とは無関係である。国旗掲揚を軽んじるのは日本ぐらい。自国を背負って地域を代表して来ている研修生が自分の国を大事にする気持ちが無かったら何の勉強にもならないと思う。外国に行けば、国旗を粗末に扱うことは非常識であり、国際感覚のある人はここへ来て国旗掲揚が宗教的とか戦争を思い出すとかは言わないと思う。又、自分の国と同時に全ての国を大切に思う気持ちを重んじるものであると考えている。朝も早く規律もあるが、これは非常に大事だと思う。個性の尊重と言うがただのわがままや協調性がないだけの場合もあり、好き勝手にやることが自由だとはきちがえている。

【研修－１３－８】

場　所：リーガホテルゼスト高松

日　時：平成１４年2月１６日（土）１４：００～

面会者：Ｏ－Ｇ氏（国際協力事業団）

調査者：内田、服部

担　当：服部朋子

●対象者についての情報

・ 大阪出身、１年前に四国に赴任。
・ 平成 5 年に民間会社に入社し、出向で外務省無償資金協力課へ。約 8 年勤務後、平成 12 年 JICA の社会人採用枠にて入団。現在、四国支部勤務。
・ 援助や ODA のことは何も知らなかったが、出向に行ってから関心を持ったということである。

●我々の研究及び調査の主旨を説明すると

・高知も保健医療関係はかなり普及員的な活動を今だにしている。診療所とかないし、集落をまわっているらしいと聞いている。

●研修をオイスカに委託した経緯について

・ オイスカさんは力のある団体だし、平成 10 年、11 年頃くらいだったと思うが、政治的な判断で上からきたという感じで開始された。
・ 九州、名古屋、大阪、四国の４つにオイスカは支部があった。名古屋にベースがあって例えば、農業育成研修があって、1 年間の研修の内、その中の一部、特定期間を四国が引き受けていた。
・ 四国研修センターで引き受けているオイスカ独自の研修生が少なかったので、ボリュームを増やしたい、オイスカも四国で１つ研修コースを作りたいという意向はあったのだろうと思う。
・ 研修内容も含めてオイスカの方から積極的に JICA への働きかけがあった。
・ 農業関係育成研修であっても WID の流れをくんだものとして提案してきた。
・ この研修が出来た時には、JICA が NGO と連携して出来るプロジェクトは無かった。開発パートナー事業（NGO と一緒にやるスキーム）はあるが、これは海外でやっているプロジェクトにファンディングするもの。その一環としてのカウンターパート研修のスキームはあるが、この研修とは趣旨が違うのではないかという議論がある。
・ 選考も一般の JICA 研修とは異なる。オイスカは自分達の関係者、研修センターのある国から選ぶ。オイスカのプロジェクトを支える人材育成研修といえる。
・ 幾つかの在外事務所からは、再考の必要な研修という声がある。

●現状

・ ９時から 16 時までオイスカに委託し、それ以外の時間及び生活面は JICA で行うという形式もあるが、今は 24 時間オイスカ委託である。通常、この様な形式はなく、珍しい。

・ 危機管理という面では安心である。
・ オイスカさんは一生懸命やって頂いていると思う。職員の方も泊まりこみですし、これほど安心できることはない。健康面もオイスカさんが全部やってくれているわけでJICA としては甘えている部分もあるのかもしれない。
・ JICA の職員でもそれぞれの考え方の違いがあり、いい人が育てば色々なことは気にしないという人もいる。この研修が実質オイスカさんの研修の様になっているが、現在の状態を続ける限り、JICA の名前が残らない・知らないというのも仕方ないかもしれないが、それを気にしない人もいる。
・ JICA はモニタリングは実施している。積極的な改善はできないが、ネガティブチェック（「こうした方がよい」という形ではなく、「まずい所、問題はないか」という形）をしている。
・ 月に１回か２月に１回は研修所に行って、話は伺っている。研修内容の変更がある際は報告をしてもらっている。
・ JICA が採用している PCM 手法を使った評価をオイスカさんは認めていない。JICA とオイスカさんの研修は部分的に合わない所があるようである。
・ 研修員のターゲットも異なる。JICA は 25 歳～40 歳が中心で中堅公務員・中堅指導者以上であり、そこの人が帰国してからどのくらい指導的立場にたてるかが重要。これに対してオイスカさんの対象は 20 歳～25 歳で現場の指導者を呼ぼうとしているものであり、来る人の社会的ランクは JICA よりは下である。研修評価の方法や評価システムも異なる。講師もオイスカの方か地元の人達で（裁縫の講師だけほかから呼んでいるが）ある。
・ オイスカさんにはお世話になっているし、JICA が学ばなければならないこともあるし、あれだけ地元に愛されている研修もそんなに無い、我々が進めようとしている国民参加型協力という意味では我々より上である。
・ ほとんどがオイスカさんに任せっきりでお金のチェックをする程度で JICA のグリップがきかない。暗黙の了解のようなものでここはオイスカさん、ここは JICA でやるという感じである。
・ JICA 四国支部とオイスカ四国支部、研修所は良好な関係である。
・ JICA の研修生とオイスカさんの研修生の交流は困難である。JICA の場合はホテル住いであり、手当てがよい。オイスカは土日もない。通常、地域ベース研修の目的を JICA の在外事務所に出し、その国の開発計画に基づいて在外事務所が「この研修コースにここから出したい」という要望を出し、皆の要望に基づき JICA が研修生を選ぶ。オイスカさんの場合、予期しない国から出てくる。オイスカは自分達の活動している国から自分達の関係している人を選ぶ。選考の段階から通常のプロセスと異なる。本来逆

のプロセスをとらなければならないのではないか。

●この研修の位置付けについて

・　この研修は特殊な位置付けである。
・　JICA がオイスカさんに委託したプロジェクトの中の研修事業でやっていってもらってもいいのではないかという議論もある。
・　良い研修かどうかは JICA とオイスカさんとの基準は異なる。この研修を他の研修と同列に位置付けてよいかは議論がある。円滑に実施出来、成果も出たという意味では良い研修であったと言える。JICA のイニシアティブが十分に発揮出来ないと言うのは１職員として残念なところではあるが、これも１つの研修の形とわりきっている。
・ これからオイスカさんと本音で話をつめていく必要があると思うが、個人的には JICA に無い、よい所もある研修だと思っている。
・ 研修員の地元における評価、地元への浸透は高いく、JICA の研修では達成されないよいものが達成されている研修とも言える。

●課題

・ 研修生の人数は 15 人では多過ぎるということで、規模縮小（15 人→11 人）の話があったが、復活折衝で元に戻った。ただし、今後は減らされる可能性がある。
・ 講師は、オイスカさんの人脈がほとんどなのでオイスカさん仕様の知識しか得られない危惧がある。講師と呼ぶからには、公的な資格、大学の先生や学会で発表している人など知識の幅が必要であり、広いリソースを使っての講習が求められる。
・ 当該国のリーダーとして役割を担ってもらうためには知日家を育てるのは大切であるが、３ヶ月間もの間日本語研修を行うのは他の JICA の研修とは大きく異なる。技術研修をきっちりやってもらって本来の専門分野での技術研修を最優先しなければならないと思う。専門技術を教える研修内容をもう少し増やしてもよいのではと思う。
・ 改善して欲しい所はある。JICA の研修事業として受け入れるには総論として無理がある。オイスカさんには研修生を受け入れて欲しいが、開発パートナー事業の一部として受け入れをした方が JICA の考えている本来の目的は達成されるのではないか。

●質問

１．現在、JICA 四国支部さんが受け入れている研修生はありますか？（服部）
→ラオスの地方行政官育成コースが今こちらの東急ホテルにいる。香川県国際交流協会、香川県、香川大学が研修をやらせてくださいと言ってきた為。NGO の香川国際ボラン

ティアセンター（ラオス赴任青年海外協力隊員ＯＢ中心にできた）がラオスで小学校や職業訓練センターをつくったりしている。香川県も自らラオスからの受け入れをしている（果樹栽培、畜産）。香川県出身の協力隊員がラオスへ赴任する場合が多いためだと思う。香川国際ボランティアセンターは「まるよし」という香川県第２位のスーパーのオーナーが会長で私財を提供しており、お金がある。

２．どうやって研修場所をふりわけるのか？（内田）
→基本的には主たる研修実施期間がある地域を所管している国内機関が振り分ける。

３．WID の流れの研修ということで全員研修生が女性だが、生活改善という意味では男性も必要だと考えられますが、今後はどうでしょう（服部）
→それは協議次第でしょう。オイスカさんと JICA は擦り合わせが必要であり、今後は提案してもよいと思う。

[研修－１３－９]

・ 場　所：国際協力銀行（JBIC）
　　〒１００‐８１４４　東京都千代田区大手町１－４－１
・ 日　時：平成１４年1月１６（水）１９:３０～
・ 面会者：Ｊ－Ａ（ＪＶＣ）
・ 調査者：内田、服部
・ 担　当：服部朋子

国外の事例ではあるが、村作り委員会のお話及びＪＶＣの研修に関するお話を伺いたかった為、ベトナムから帰国直後のＪ－Ａ氏にＪＢＩＣでインタビューを行うことが実現した。以下は、Ｊ－Ａ氏のレジュメを参考にインタビュー結果をまとめている。

●面会者属性

・ 北海道出身で専門は農業及び園芸。農業大学出身後、普及員をしていた。普及員制度有り。25、6 年前、協力隊でラオス（稲作専門）に行った。
・ 12､3 年たって再び途上国関係へ。有機農産物の流通にかかわり（友人を手伝う）、茨城で友人と一緒に有機農業を 3 年。タイへ農業技術者として 2 年。次に民間会社。　ＪＶＣのプロジェクトにより、植林トレーニング（Food　for work）で内戦のエチオピアへ 3 年半。ベトナムには合計 8 年（1993 年 5 月からで農業開発フエのプロジェクト）になる。
・ ＪＶＣ現場スタッフとして行ったが、最初は 5 年くらいのつもりだった。ハノイに引

継ぎのために半年いた。一方、タイ、ラオス、カンボジアに、１～２ヶ月、時間をもらって入った。獣医のトレーニング等、ここからのヒントは大きい。

・ ハイホンという町では、帰還難民のプロジェクト（ＪＶＣ、技術関連プロジェクト　１人のスタッフが都市だけでなく農村でも実施）をやっていて、まだ、農村に入れない時期だったが徐々に入れる感じになってきていた。たまたま調査に行く機会があったが、ここで農村をみたことが役立ったと感じている。

●プロジェクトについて

・ プロジェクト名：フエ省における参加型農村開発
・ プロジェクト地：白砂地、山岳地（少数民族が３／４）等
・ 対象者：ベトナム人、アルイ郡、農民、農村女性
・ カウンターパート：Vacvina（1986 年設立の複合農業‐農業の各生産部門を結合させた伝統的農業システム‐の普及を目的とする大衆組織）、フエ省農業農村開発局
・ 活動期間：約７年半（１つのプロジェクト地に対して３～６年）
・ スタッフ：４名（日本人２名、ベトナム人２名・男女各１名で英語での意思疎通可能な人達）　妻も一緒にまかないをしていた。
・ 活動のタイプ：農村開発（村落開発＋農業普及）＋緊急救援
・ プロジェクトの推移：都市から農村へ、北部＋南部＋中部。1992 年に調査開始、1993 年にプロジェクトが開始され、2000 年に終了。
・ 方向性：主体的な住民参加や農業関係機関の協力により、農業が持続的に発展し、公平な村づくりが行われること。
・ プロジェクトの主な目的：

①貧困対策：要請があった。ベトナム政府の意向であり、住民のニーズもあった。
地図の右側：白い砂地　安定農業を確立→農業の多様化
左側：少数民族　山の方は統一後、1976 年あたりから人が定着。
定着農業という意味では、不安定。定着・安定へと向かっている。

②村の出来る範囲でインフラ整備

③「村作り委員会」をつくる

・ 長期目標：村人の生計安定、基本的社会インフラ整備、村づくり委員会が農村開発に貢献すること、農業関係機関の機能が強化されること。
・ 中期目標：村人が持続的農業を行い、十分な食料と生産・入手出来、所得が増加すること。道路が改善され、きれいな飲み水が確保され、小学校・託児所が改善されること。村づくり委員会が機能し、村人の問題解決能力が高まり、村内の女性が活動に参加すること。優良な種苗・家畜が農民に提供されて適正な農業モデルが確立され、研

修を受けた関係機関スタッフが農業改善を支援すること。

・ フエ省をプロジェクト地にした理由：自然災害が多く、地形的に多様で農業の困難さや生活条件の厳しさが明白で、且つ農村開発プロジェクトに取り組むＮＧＯがほとんどなかった為。

●活動内容

・ 緊急支援：1999 年の洪水被害に対する活動で種籾、落花生種子、母豚、水利補修等
・ アヒル水稲同時作：環境保全型農業。水田とアヒルはベトナム農村の一風景となっている。
・ 傾斜地農業の改善：等高線農法による土壌流出の防止。作物の多様化、共同事業を行った。
・ 草の根獣医の養成：１ヶ月の研修を実施し、基本道具や薬品の供与。
・ 白砂地農業：畑の周囲に植林（防風林・マキ、モクマオやアカシアは防風林になり、６，７年で薪として売れる。沖縄にあるようなものならば、砂地でも育つ）・有機物を多投する作物栽培・キャッサバとサツマイモ（家畜の餌）・落花生（搾油、搾り粕は家畜の餌）・豚飼育（糞尿の利用）
・ トレーニング：農業技術・視察研修（スタディツアー）・資料作成提供
・ 回転資金の供与：ルール作り、家畜銀行（山の方）、苗木生産販売（白砂地は現金収入のある場所でクレジットファイナンスが可能、女性同盟があり、自分達で苗木を生産して村の中で販売）
・ 社会インフラ：学校託児所建設や補修、村内道路整備、共同井戸、小規模水利施設
・ ＰＲＡ手法による対象地の問題とニーズの把握を行った。
・ ＪＶＣはスタディツアーのようなものをやっている。例えば、秋田のレイボープラン。循環型社会地域とコンタクトをとっている。ＪＶＣのローカルスタッフを呼んで視察を実施。プロジェクトの参考にしてもらう。カウンターパートや行政の人、農民のケースもある。
・ 日本でも似たようなプロジェクトもあるし、現地ではイメージできないことも見ることが可能になる。イメージを膨らませるには、実際を見るのがよい。

●村落開発プロジェクトの手法・手順

１．村のリーダーに会いＪＶＣの活動目的等を伝えると同時に村の概要説明を受けた。ＰＲＡ（参加型簡易農村調査）手法等を活用。農家訪問やリーダーとの話し合いを行い、村の現状や抱える問題、ニーズの把握につとめた。
２．活動の計画・実施・評価を担う「村作り委員会」を作る一方、委員会メンバーはトレ

ーニングやスタディツアー等を通じ住民主体の開発手法を学んだ。

３．月例会（毎月開催。モニタリングをかねて活動結果の報告。信頼関係構築も目的。を実施し)、村作り委員会と合同で活動計画案を作成した。集落でも会合は実施していた（さらに下の人間達の声を吸い上げる様にした)。

●村作り委員会について

・ 村長や副村長、役場の農業担当者等の 15、6 人で作ってもらい、持続している。２、３割が女性（30、40、50 代)。
・ 各村にある行政、大衆組織（女性同盟、農民同盟、難民同盟、青年同盟)、「社」という各町村にあるものの下に集落があり、その集落の長も委員会メンバーである。こちらが、女性同盟や集落の長の参加を促した。
・ 委員会は、委員長、副委員長、監査等の運営委員を選ぶ。選び方は投票でだいたい行政の人々や地位の高い人がなる。基本的にずっと同じ人が続けており、任期無し。会計担当者が精神的にまいって、計算がわからなくなった人がいて交代したケースがある。メンバーには月額数ドル程度（回転資金からの利子の一部を充当）が手当てとして支払われる。
・ 地域差（山川と白砂地側）があるが、現段階では同数。
・ 村長、副村長、幹部（男性）が呼びかけて、村の問題を聞き、簡単な計画書を作成する。申請書が書けるくらいのものにし、次の会でその内容を修正する。
・ 会議では、例えば、前半は話し合いをして（カードを使用。プロブレムツリーを後からスタッフが作成し、まとめたものを提示)、何をしたいかリストアップ作業を行う。ＪＶＣと村人の両方の負担を考えるようにしている。後半はＰＲＡマッピングをするという具合である。

●普及する上で重要だと思われるもの

・ 適応力、疑り深い人またはお人よし過ぎるのも両方不向きで中庸がいい。
・ プロジェクト全体を知る人、プロジェクトをする時に知らなくてはいけないこと等基本的手法は、ある程度知っていた方がよい。
・ 信頼関係を築ける人。労使交渉もあったりするが、同志関係。チームワークが普通に出来る人。
・ 専門のある人はつい色々言いたくなるし、教えたがるが最初は学ぶ、向こうから学ぶ姿勢が大切。
・ 自分が自信を持ってできる分野、得意分野があった方が良い。
・ 「仕事に追いかけられる人」ではなく、「追っかけられる人」がいい。

・ トップダウン型のベトナムは限界をわかっている人もいるし、自助努力を促すこと。
・ 公平さを考えることが大切だが、焦点がぼやけると思う。平等というのは別な枠組みで捉えた方がいいのかもしれない。
・ 空からお金が降ってくるという感覚でいるが、そうではないことを知ってもらう。
・ 金の回りや意思決定を知らないので村の仕組みを知る重要さを伝えること。日本の村を知ってもらうのもよい。我々は、村の生活に欠かせないものを知っておく必要がある（入会地とか)。
・ 勝負できるもの、知識、仲間を勇気付けられる能力がないと村人がついてこない。

●信頼関係を築く上で重要なこと
・ 直接話をする。
・ 出来ないことは出来ないと明確にし、期待を持たせない。ドナー支援を得られることがわかってから、話をする。
・ メンバーの意見をよくきく。
・ 押し付けず、いいなりにもならず。
・ 情報を彼らに伝えられること。
・ 間に挟まるのはローカルスタッフであることを忘れないこと。
●課題
・ 最初は我々の言うこともわかりにくかったのではないか。それはローカルスタッフにとって負担であったろう。
・ 行政にインフラの維持管理を任せた。今は、コアの運営委員が残っていない。
・ 村作り委員会のメンバーは極貧層に対してお金を貸したがらない。

●質問
１．フエでは他に活動しているＮＧＯはどのようなものがありますか（服部）
→フエには幾つかのグループ（医療保健や難民関係）がある。以前は、北欧が農村開発でいたことがある。
２．農民との意思疎通はどのようになさっていましたか（服部）
→英語の出来るローカルスタッフが間にたっていた。
３．ＪＶＣさんとして、活動に関する何か特別な意向はありますか（服部）
→化学肥料や農薬を使用しないことなどである。住民からすれば、なかなか育たないので使用したいし、沢山支援が欲しいという面はあると思う。しかし、我々は行政のかわりをやっているわけではない。私としては、利益になるようにひっぱりたいと考えている。例えば、道路を直す等自分の地区を直したいというようなことが活発になってうまくい

けばよいと思う。

４．1993 年頃は資金供与をなさっていた話がありましたが、どういう人が借りることが出来るのですか（内田）。

→委員会が中心である。5 段階、つまり収入、収穫量、労働力（利用可能な家族が何人か？）等で検討する。極貧→貧困→中間層という観点もある。

５．託児所に預ける場合、費用などはかかりますか（内田）

→子どもを預ける人が払う。若い女性が先生である。委員会と話し合い、委託所を作成し、作った人が少し負担した。

６．その他の様々な活動経費の負担状況はどのような感じですか（服部）

→例えば、山から赤土をとってきて砂地にまく場合、赤土の購入費・運搬費は日本側負担で村づくり委員会が業者と話をつける（村外村内）。井戸の場合、セメント代は主に山の方が払うなどというようになっていた。出来れば、若い人のボランタリーで湯水を確保したいと思っている。

７．様々な活動をなさったが、どこまでが改善なのか？という線引きのようなものはありますか（内田）

→特に決めていない。最後の方では村では決めていた。

Ⅲ．関連施設見学

【関連施設訪問－１３－１】

場　　所：農林水産省農林水産研修所生活技術研修館　応接スペース及び図書室にて

日　　時：平成１３年５月２日（水）午前１１時２５分～午後２時３０分

面 会 者：川合　千鶴子　館長

訪 問 者：水野、矢敷

担　　当：矢敷裕子

目　　的：生改活動資料収集

＊まず、水野さんより、研究会の趣旨と訪問目的の説明。

館長：　生活改善の分野は農林行政の中で何かにつけて後回しにされてきた分野。「生活の“改善”なんて（ムズカシイ？オコガマシイ？）」という雰囲気があった。他の省庁も「国民生活センター」や「消費者センター」など、生活に関わる機関を持つが、生活をトータルに扱う研修所を持っているのは農水省だけなのだから、農水省はもっとそれを誇ってよいのではないか。戦後の生活改善は既に一段落したとされているが、今後も“より良い暮らし”とは何かを考えていく機関は必要と考える。

この研修館は昭和 33 年にロックフェラー財団からの寄付で設置された。海外援助は研修館の範疇ではないし、生活改善普及事業と協力隊などの援助事業とでは背景が異なるが、生改事業の手法は援助でも使えるかもしれない。

水野：　ここにはどんな種類の資料があるのか。文書の他に、例えば、幻燈やテープ、記録映画などもあるのか。

館長：　先日、（千葉県）松戸(市)の歴史館の戦後の生活展の為に、当時の生活のスライドを貸し出した。映画としては、普及員の一日を撮った「みどりの自転車」というのがあったと思う。現在までのところ、資料整理にまで手が回っていないが、研修館の歴史をまとめたいと考えている。

水野：　ここでは普及員研修を実施されているそうだが、普及員も同じメンバーが毎年来て研修を受けたのか。それとも専技だけが毎年来たのか。

館長：　普及員の最初の研修は全てここで行なわれた。昭和 40 年代から専技は毎年ここで研修するようになった。

研修館は開所当時は技術館といった。生活に関する試験場を農林省は持たなかったので、ここは試験場の機能も兼ねていた。すなわち、ここでの生活全てが訓練で体験しつつ学ぶ実践重視の研修が実施された。これは山本松代さんの考え。アメリカナイズの暮らしで、ここには洋式トイレもあったし、寝るのはベッドだった。それを非難する人もいた。

水野：　何人ぐらいが一遍に研修を受けたのか。

館長：　当初は２階建てだったので、20 人しか無理だった。その 20 年で１ヶ月、３ヶ月、半年と一緒に暮らしながら研修した。昭和 39 年に３階建てに増築されたので、その後、40 人まで受け入れ可能になった。集団生活の中で、限られた時間内で、全ての生活を自分達でやりくりしながら、レポートなども書かなければならなかったのでかなり厳しかったと思う。

水野：　20 人で何ヶ月も一緒に暮らしたら、さぞかし、横の連携も強まったのではない

か。

館長：　おそらく。何故、実践重視だったのか理由はよくわからないが、山本松代さんは「まず、生活に対する考え方がなっていない。」「アメリカの Housekeeping や management」といったものを身に付けなければならないと言っていた。

広島大学のシバ先生が「山本松代氏がワシントンのラジオ番組に出演された時のテープを入手したからダビングしたければどうぞ」と言ってくれている。昭和 25 年に出演されたそうで、日本の生活改善普及事業に関して、カマド改善と食生活改善の２本柱で進めていると語っておられるそうだ。シバ先生がラジオ局に問い合わせたら、テープを送ってくれたらしい。よく残っていたものだ。

＊その後、図書室へ案内され、資料検索を始める。途中で館長が気遣って様子を見に来てくれる。

館長：　農家の発表も昔と今では全然違う。昔は、発表するだけで大変だった。代々木の青少年会館で発表会をした時には亡くなった方もでた。東京へ出てくる前日など夜なべで準備していたようで、代々木でお風呂に入って亡くなられた。寝不足がたたったようだ。今の人たちは堂々と発表するが。

以　上

矢敷所感：整理整頓は中途半端だが、よく探せばオタカラモノの資料が研修館図書室には眠っていそうである。研究会のメンバー各々が一度は訪れてもよい。卒論執筆のとき以来お目にかかっていない懐かしい資料もあった。
余談だが、山本松代さんのご主人は彫刻家だったことが判明。既に広島大学のシバ先生が山本松代さんのライフヒストリーを研究しておられるようだが、山本さんの一生は面白そうである。

【関連施設訪問－１３－２】

場　所：昭和館

〒102-0074　東京都千代田区九段南 1-6-1

TEL ： 03-3222-2577　FAX ： 03-3222-2575

［地下鉄東西線・新宿線・半蔵門線〈九段下駅/３番または６番出口〉、JR 飯田橋駅から徒歩約 10 分］　URL ： http//www.showakan.go.jp/

日　時：平成１３年１１月２日（金）　午後１時００分～４時００分
調査者：矢敷裕子（議事録担当）

１．「昭和館」利用案内
昭和館は、戦中・戦後の国民生活上の労苦を後世代に伝えることを目的とし、厚生労働省から委託を受けた財団法人日本遺族会によって運営されている。

建物は地上7階建てで、１階：入り口・総合案内、２階：広場（館内からは出られない）、３階：研修室、４階：図書室、５階：映像・音響室、６・７階：常設陳列室になっている。常設陳列室のみ利用料大人300円が必要（その他の階の利用は無料）。

年に3回、3階で特別企画展があるらしい（今はやっていない）。また、隔週土曜日に当時の映画上映があり、事前に申込み、抽選に当たれば無料で鑑賞できる（本年中のプログラムは生改には関係なさそう）。また、１階では戦中・戦後のニュース映画が毎日上映されている。

映像（記録映画、写真）資料、音響資料、デジタルライブラリー、関連資料はデータベース化されており、検索が容易。しかしながら、「生活」、「生活改善」、「生活改良普及員」、「保健」、「キッチンカー」、「栄養」、「かまど」等で検索してみたが、関連資料は多くない。

図書室は開架、閉架両方。閉架の資料は検索端末で「請求票」を出力してカウンターへ申し出る。「利用カード」も必要だが、カウンター前の利用申込書に記入すれば、その場で発行してもらえる。図書室の隅にコピー機があり、一枚３０円で資料複写が可能。

２．閲覧した資料
①映像資料
企画：静岡県婦人団体連絡会・静岡県教育委員会
製作：母と子の櫻映画社
昭和33年、20分、モノクロ、音声付
＊新生活運動について

　当時（５年目）、静岡には新生活学校教室が中央に一つ、地方に25あり、6,500人が学んでいた。その年の目標は「明るい人間関係」。例として、「このままでは時代に取り残される」と思ったある村の女性たちが、集まって活動を始めるまでの様子が紹介される。
　集まるのに家を空ける了承を家族から得るのが難しいことから、まず自分たちが「家の中で

誰にも良く理解され愛される主婦」になることを目指し「自分を磨きましょう。」というテーマを設ける。しかし、そこで、『テーマって何のことでしょう？』という質問が
一人の女性から上がり、「グループ」や「テーマ」といった新しい言葉の意味から勉強することにする。（『新語百科辞典』の大写し）
　そして、「正しい言葉遣い」として夫のことを「あなた」と呼ぶことにする。『あなた、なんて今まで一度も呼んだことがないよ。』『だんな様も嬉しがってかわいがってくれるかもしんないよ。』「あなた」と呼びながら逃げていくだんなさんを追いかける
奥さんとそれを見ている村人・・・「あなたと言ったとか、言わないとかで村中が陽気になり、村の生活にも少しは明るい光がさしてきた。」という。
　その後、婦人会の活動は「天下御免の新しい習慣」として村内から認められ、集まる場所も個人の家から公民館へと移った。蚊・ハエの駆除、溝の清掃、「花いっぱい運動」への参加も活動に加わっていった。
　また「明るい人間関係」を築くためには、社会環境をよくすることが大事なので、働く女性の問題にも目を向けようと、当時の（三島の）赤線・青線で働く女性たちの実態調査も実施し、警察などにも出かけた（具体的にどのような調査結果が出たのか、その結果からどのような活動をしたのかは不明）。
　場所は変わって漁村。イルカが大量に捕れている。しかし、収獲の有無で生活レベルが変動する不安定な生活であったため、女性たちは「やさしい家計簿」を付けることにする。海からだけでなく、山からも収入を得ようと農改さんを呼んできて、レタスの作り方をならう。潮風の被害など失敗を繰り返しながら、お互い助け合って、レタスの産地として
県内で確固たる地位をえるまでになり、村全体が活気付いた。

｛その後、様々な活動に打ちこむ女性たちの姿が写り、着物姿か洋服姿の女性たちがビーチでバレーボールに興じているところで、映画は終わり。）

②図書資料
朝日新聞学芸部『台所から戦後が見える』　1995　朝日新聞社

台所改善のことも載っているので買ってもよければ買いたい資料。（吉田佐柄子氏も東芝電気釜の山田さん？も登場）
その中に「ナトコ映画」についての記述あり。日本の民主化を進めるためにGHQが1947～51年の５年間、日本国中を巡回して見せた啓発映画の総称。”豊かなアメリカ”をテーマにアメリカの生活紹介ものが多かったが、『明るい家庭生活』、『腰のまがる話』、『この妻の願いを』といった日本製映画もあった。上記の５年間でのべ12億人の日本人がこの映画を見たといわれ

ている。
”ナトコ”とは上映に使われた映写機の製作会社の名前。大阪大学の阿部彰教授（現在58歳ぐらい）が30年近くナトコ映画を収集している。

【東京－１３－３】
場　所：昭和の暮らし博物館
（東京都大田区南久が原 2－26－19　電話･ﾌｧｯｸｽ　03－3750－1808）
日　時：平成 13 年 11 月 3 日（土曜日）　雨
概　略：1999 年 2 月　開設
最寄り駅：東急池上線久が原、東急多摩川線下丸子　徒歩８分
午前十時～午後五時　月曜休　入館料　500 円　学芸員　谷口こずえ氏
解説ボランティア（輪番制）　第一、第三土曜日　山川進康氏
調査者：佐藤寛（議事録担当）

【概要】
昭和 26 年に建設された木造住宅「小泉家」を「再現」ではなく、そのまま展示している。住宅地の中にあるふつうの民家であり、生活用具も当時から使っていたものが良好な保存状態で残っていたので、そのまま展示してある。昭和 20 年代の民家木造建築物はもうほとんど残っていないので、貴重な民俗資料と言えよう。
【建築の背景】
昭和 25 年に住宅金融公庫からの融資が開始された。当時の住宅不足・東京の人口増加に対応する施策（なお住宅公団の創設は昭和 30 年）。この長期低利融資を受けて建てられた住宅は「公庫住宅」と呼ばれる。小泉家も公庫融資を受けて昭和 26 年に建設された。
融資を受ける条件は申請者が 80 坪の土地を用意し（借地でも可）、設計図を添えて申し込む。これを審査官が審査して融資が受けられる（要返済）。建築単価は坪当たり２万円と決められていた。しかしながら、昭和 25 年当時の単価を基準としているため、朝鮮戦争（25 年）以後の物価高騰等の中で建設資材の不足、建設コストの高騰があり、当時建設されたモノはいわゆるバラック的な住宅が多い。小泉家は 18 坪（融資対象は９～18 坪の間）の建物であるから融資額は 36 万円、この金でいかに安い材料で住みよい家を造るかが鍵であった。自身が建築技師であった家主の小泉孝氏は、様々な工夫を凝らして２階建て、５部屋（一階に玄関、洋間、和室二間、台所、二階に和室二間）の建物を設計した。小泉氏は「この家は 100 年持つ」と言っていたという。
参考・山川氏解説＋『小泉住宅建物調査報告書』昭和の暮らし博物館　2001

【生活資料の保存】

小泉氏の妻スズさんは横浜・鶴見の農家の出身（明治 43 年生まれ）で、四人の娘と二階の下宿人二人（公庫融資を返済するために二階の二間は下宿人に貸していた）の炊事洗濯の世話をし、庭には野菜などを栽培していた。モノを大変に大切にする人で、昭和 26 年以来の生活用具が大変良好な状態で保存されていたことが、この建物の良好な保存状態と共に「昭和のくらし博物館」の基礎となった。

【博物館化】

四人の娘のうち、次女（小泉知代・ろうけつ染めをしていた）が母親とともに暮らしていた。しかし平成７年に次女が医療事故で死亡したために、目黒に住んでいた長女が母を引き取ったため、家は主を失うことになった。長女（小泉和子・東大工学博士、生活史研究家）は、昭和の建物と生活を保存し、展示するため博物館にすることにした。

博物館化にあたって、サッシの窓をもとのガラス窓に戻したり、もともとの重たいセメント瓦を日本瓦に変えたりした。小泉和子氏は現館長。『昭和の暮らし博物館』『台所道具いまむかし』（平凡社）等の著書がある。

【見所と内部の紹介】

<u>当時のインフラ、電気・水など</u>

建築当時から電気はあった。

水は、井戸であったが公庫融資の資金では井戸を掘ることが出来ず、しばらくは隣家（地主）からもらい水をしていた。

煮炊きの燃料はたき木であった。入居当初はへっついがあった。

電気冷蔵庫、電気洗濯機などは当初なかった。

周囲に家は少なく、ほとんど畑であった。

電車は東急池上線、目蒲線（現多摩川線）があって、交通の便は比較的良かった。

<u>玄関と洋間</u>

玄関の上がり框（がまち）の下に靴箱のスペースがある（見所③）。

玄関を入ってすぐのスペースは杉板張りの洋間（書斎兼応接間）になっている。通常この時期の木造家屋では一畳ほどの板の間が上がり框（がまち）としてあるだけで、すぐに襖などで仕切られて和室になっていることが多い（都営住宅など）が、小泉家ではそのまま主人の書斎兼応接間として使われていた。当時このような洋間のある建物は「文化住宅」と呼ばれた（「新宿歴史博物館」地下展示室参照）。

玄関を入って右はすぐに二階への階段になっている。階段下に便所がある。階段下のスペースは外から利用できる物置になっている（見所⑥）。

洋間と居間の間はかつて引き戸で仕切られており、そこを閉めれば客人に生活を見せることなく応接することができた。洋間の事務机、イスなどは小泉氏自身が設計した。洋間

の壁に作りつけてある本棚の最上段は文庫本などの奥行きの浅い本を入れる棚になっており、その背面を利用して設計図など長尺物を本棚の横から差し入れることが出来るようなっている。

天井は当時まだ新建材がなかったために安価な建材としてベニヤ板を使っている。しかし、安っぽくならないように、板の並び目に桟を打ち、板の継ぎ目には割り竹を配して茶室風にするなどの工夫をしている（見所⑤）。

便所

居間に向かう途中に便所がある。「汽車便所」（和式だが便器のついているところが一段高くなっている階段式）で汲み取り式だった（現在は水洗に改造されている）。

汲み取り式の便所といえば、臭いやハエなどの問題があり、当時のたいていの木造家屋では廊下の突き当たりなどに配置され、玄関のすぐ近くには作らないものだった。現在のマンションなどでは普通の配置であるが、こうした点で小泉氏は生活スタイルの変化を先取りしていたと言える。

二階子供部屋

狭くて急な階段を上って二階に上がる。当時、住宅金融公庫の融資返済の為に、二階の二間は間借り（下宿）させていた。そしてその間借り人の洗濯、掃除、食事はすべて母が行っていた。しかし、娘たちが大きくなったので、階段に近いほうの部屋は長女、次女、三女の子供部屋になった。

畳部分は四畳半の部屋だが、板敷きの部分があって広く使えるようになっていた。勉強机などをおいてもフトンを二つ敷くことが出来たという（見所②）。

また、その広くした部分の天井は数寄屋造りのように斜め天井なっている。茶室でもなく、当時は珍しかったこのやり方は、四囲の柱の長さを十五尺の通し柱とすることで短くして材料費を安くあげるための知恵だった。通常二階建ての家では柱は九尺のもの（十尺もの？）を二本つないで使用する。また、半端な柱を利用して九尺にたりない部分があり、そこは半端な木でつぎはぎしてある。（見所①）。

子供部屋のタンスには当時の家庭医学の本や薬などが展示されている（蒸気吸入のための機械もあり）。【第一回企画展『家庭看護』】母親は特に医学の心得があるわけではなかった。娘たちが大きくなったら、母親を助けていたのではないかということ。

子供部屋の壁には館長が作った当時の生活の移り変わりを示すパネル。衣食住、家事、政治経済の移り変わりなど。主婦の友社の付録すごろく（昭和 4 年）は字が右から書いてある。

二階もうひとつの部屋【現在ちゃぶ台の特別展中】

下宿人の部屋だった。

「ちゃぶ台」というのは日本語ではない。文明開化以後の語源。横浜本牧にちゃぶ屋と

いうのがあった。つまり売春宿。英語のチョップッストア（一膳飯屋？）からきているらしい。「ちゃぶ台」は明治時代から日本の食事シーンに登場した。江戸時代などは箱膳で、家の中の位によって膳の高さが違っていた。しかし、明治になってちゃぶ台が庶民の生活にはいった。身分制度が崩壊したことの一端といえるのではないか、との解説。

普段この部屋には服飾の展示がされている。ミシンも 4 台展示されている。

小泉家にあったミシンは「シンガー」ミシン。ミシンは昭和初年から国産品も生産を開始したが、昭和 10 年で日本の国産ミシン生産は 1 万 2300 台に対して、輸入は 7 万 5200 台であったという。しかし、昭和 18 年には戦争のため家庭用ミシンの生産が停止される。

【第一回企画展「洋裁の時代」】

この部屋には、パン焼き器などが展示されている。銅版 2 枚を使った簡単なもの。パンの生地はフスマなど雑穀を含んだもの。水分を含んでいる間だけ電気を通し、焼ける。焼き上がって水分がなくなると電気が通らなくなって自動的に止まる。簡単な仕組みなので、解説ボランティアの山川さん（昭和９年生まれ？）も自分で作ったことがあるとのこと。

一階台所

流し台付き台所が最初からあった。しかし、建設当初は水道もなく、ガス台もなかった。炊事は台所裏側の土間に「カマド＝へっつい」を据えて行った。水は隣の地主（小泉家は借地だった）。昭和 27 年に井戸を掘り手押しポンプをつけた（手押しポンプは入り口門柱の裏側にあり）。その後モーターを使って台所の流しまで引いた。水道の来る以前から水道を見越して流しをつけていた所にも小泉氏の先見性がうかがわれる。

台所の床は「上げ板」になっていて、床下に漬け物などの貯蔵が出来るようになっていた（見所④＝これは当時の木造住宅が江戸時代からの伝統を継承していた部分である）。

当時は食事をする居間よりも低い所にカマドを置くように台所を作るのが一般的だったが。主人は 50 年先をみこして、建設当時から居間の同じ高さのスペースに、立って炊事できる水場を作った。当初の流しは人造石の研ぎ出しだったが、現在はステンレスのものが展示されている。昭和 33 年に公団住宅が２DK でステンレスの流しを始めた時代。

台所の右側には作りつけの食器戸棚。氷冷蔵庫も展示されている。氷冷蔵庫（江戸東京博物館にもあります）は、上の段に氷屋から買った氷を入れ、下の段に貯蔵する物を入れる。小泉家の氷冷蔵庫は電気冷蔵庫を買った人からもらって、実際に使っていたという。

電気釜が普及し始めたのは昭和 23 年くらい（プロジェクト X）。

台所の柱にぶら下がっている子供用水筒（アルミあるいはジェラルミン？）のフタには方位磁石がついている（軍用水筒の模倣）。

なお、当初内風呂はなく、銭湯に通っていた。風呂場は昭和４１年にへっついのあった土間をつぶして作った。

茶の間

茶の間にはちゃぶ台の上に６人分の食器が配置されている。各自が箸箱を持っていたようだ。主人の席の箸箱には夫婦箸が入っていた。茶の間は四畳半だが、壁のくぼみを利用してタンスがおさまっており、その上にラジオが置いてある。真空管ラジオだが、修理して現在でもちゃんと受信できている（NHK が流れている）。タンスの上には天井から神棚が吊してある。主人の座はタンスの横、柱を背にする所であろう。その柱には状差しがかけてある。

台所側の壁には振り子の柱時計、その下には寒暖計（なぜ日本の家屋には寒暖計があるのだろう）。

ちゃぶ台横にはおひつと火鉢。火鉢の上には鉄瓶がある。ガスが来るまではへっついで、ガスが来てからもガスの上でお釜を使ってご飯を炊いていた。

この部屋には鏡台も置いてあり、増築した廊下の部分にはミシンが置いてあった。もともとこの部分は縁側であった。

電灯の傘は当時のモノに近い。二階廊下の電灯の傘だけは当時のままだという。

座敷

六畳で床の間がない。狭い書院棚があり、その下は窓であった。ここも、壁のくぼみにタンスを配置して部屋を広く使っている。また、観音開きの据え付けの洋服ダンスも作りつけてある。この部屋には和裁の道具と横長の和裁机が置いてある。袖の型板には金漆で模様がはいっている。金持ちではなかったが、少しだけ贅沢なものを持つことで、ものを大事にすることが出来るという思想があったのではないか、と解説ガイドの山川氏。小泉家の母は、内職のような形で和裁をしていたらしい。

この部屋には、炭ごてを初めとして歴代のアイロンが展示してある。

解説の山川さんは現代の死語として「床の間」をあげていた。

【増築部分】

もともとの家屋の西側に昭和 41 年に増築した。さらに平成４年にこの部分を二階建てに改築した。一階部分は「談話室」、二階部分は「小泉知代記念館」となっている。

【小泉家の人】

主人の小泉孝（1901-82）氏は明治 34 年有楽町に生まれた人で、その父は物差し職人。職人らしく工夫の好きな人であったという。小泉孝氏は働きながら小石川工業高校の前身を卒業し、東京市役所に奉職して建設畑を歩む。当初の仕事は学校建設の設計・監督、学校家具の規準規格づくりなどであった。なお、小泉氏は昭和 26 年当時東京都で金融公庫の融資審査部門に勤めており、このことも競争力の高かった融資獲得に有利にはたらいたのではないか（本来融資条件は 80 坪の土地だが、小泉家は 50 坪の借地しかなかった）。

昭和の木造建築の平均寿命は 26 年程度といわれているが、この建物はすでに 50 年以上

もっている。建設同時主人は「100 年持たせる」という意気込みで設計、建築を行った。現在昭和初期の建物は 2%くらいしか残っていない。

妻スズ氏は横浜の鶴見の農家の生まれ。今年 90 歳。農家出身だったので家で家庭菜園をしていた。来客があると大変なもてなしをした。また鶏小屋があり、卵をとったり、時にはしめて肉も食べた。

長女和子氏は生活史研究家。家具の変遷なども研究している。自分の生まれ育った家の意義についても早い段階から意識していたのではないか。保存・展示についてのノウハウも持っており、その知識とネットワークが「昭和のくらし博物館」の実現に大きく寄与していると思われる。ボランティアも和子氏の教え子などが多いという。学芸員の谷口こずえさんも教え子。

次女知代さんは、女子美でデザインなどを学び、後にろうけつ染めの作家となった。増築部 2 階に展示室。そこに次女がデザインした『小泉付記』の装丁デッサンあり。『小泉付記』は、和子氏の研究カード（日本の家具・道具・建築の文献索引カード）に父孝氏が自身の経験などを踏まえて付記を書き連ねたものを加えて一冊の本にしたもの。

父親の建築家としての発想、母親の堅実な生活態度、そしてそうした環境に育てられた娘たち、これらの要因が結びついてこの「小泉家」の木造建築は残ったのであるが、博物館となるべく建てられた家であったとも言えよう。

【入手資料】

「小泉家住宅調査報告書」　昭和のくらし博物館　2001

「昭和のくらし博物館」　2000

「昭和のくらし博物館　第一回企画展　家庭看護」（1999/2～2000/2）

「昭和のくらし博物館　第二階企画展　洋裁の時代」（2000/3～2001/9）

『銀座育ち』小泉孝　小泉和子　朝日選書　1996

『台所道具いまむかし』　小泉和子　平凡社　1994

【解説ボランティア・山川氏】第一、第三土曜日はここでボランティア

・学徒出陣の写真に解説をしてくださっていた山川さんの思い出話。昭和 18 年 12 月 22 日。当日彼は神宮球場のその場にいた。東京の小学校 5 年生以上は各学校から 2 人ずつ選ばれて壮行会に動員参加。彼はその一人だった。最初に入場してきたのは東大の学生。その最後尾に、汚れたコートを着た男性が一人いた。山川氏自身も「おや」と思った。すぐに山川氏の目の前で憲兵に取り押さえられた。反戦学生で、即日最前線に送り出されたことを後に知った。

・山川氏はその後沼津に疎開して、高校も沼津に行った。朝鮮戦争の時反戦運動をして放校になった。

・現在雅叙園の歴史建造物のガイドをしている

・社会思想史を教えていたこともある。
【テレビのロケ】
ＮＨＫのプロジェクトＸ等では、戦後期の「貧しい家庭」のシーンを取るときにこの家を使う。電気釜の話の時にも使った。

Ⅳ．その他

【その他－１３－１】
場　所：農林水産政策研究所
日　時：平成１３年６月９日（土）午後２：００～８：３０
設営担当：水野正己
参加者：内田、大井、小笠原、佐藤、服部、姫野、水野、宗像、矢敷、山崎、渡邉
担　当：水野正己
内　容：第７回生活改善研究会

（１）研究会
14:30　　報告１　「生活改善研究の視座」　水野正己
（休憩）
16:00　報告２「生活改善運動と主体形成－七郷一色婦人会の運動を中心にして」（吉田豊『経済開発と生活改善－幸せのなかに生きる－』所収、つくば書房、1992 年）
宗像　朗
17:15　　情勢報告および研究打ち合わせ　佐藤　寛
①平 12 年度の研究活動記
佐藤寛・安藤和雄編『戦後日本の生活改善運動と途上国の農村開発　研究基礎

資料（１）』（2001 年 3 月）の印刷完了と配布

②JICA「農村生活改善協力のあり方に関する検討会」とそれへの対応

③今年度の調査研究計画（岩手県下、西日本、個別調査）

④トヨタ財団研究助成申請書を提出した件

⑤キッチンカー関係スライド映写

17:45　終了

研究資料の複写（希望者のみ）

（２）「キッチンカーの献立に挑む」

11:30　食事作りボランティア集合、買出し、仕込み

19:00　夕食会

①蒸しパン

②インデアンソテー（鯨肉使用）

③マカロニ（うどん）イタリア風

④餃子

⑤野菜スティック

22:30　散会

第７回生改研究会報告メモ　　2001 年 6 月 9 日

水野正己

「第 1 報告」　　生活改善研究の視座

１　生改とは何かー日本の経験からー

・幕末（商品経済の浸透と幕藩体制の弛緩）：尊徳の仕法

・松方デフレ：前田正名『興業意見』

・日露戦争後の戦費処理：戦後国家体制の基盤としての農村再構築（地方改良運動）

・昭和恐慌：農村経済更正運動

・戦後改革期：生活改善事業を始めとする各種の政策介入

①　生改をめぐる社会経済環境：社会変動、経済恐慌、経済不況の台頭

②　運動：政策・上から：下からの受け皿

③　生産消費（収入支出）の両立・相互補完関係

２　生産構造ー生活構造：対照性と相互補完関係

・生産（収入）　　消費（支出）

・供給　　需要（ニーズ）

・物質的	精神的（禁制・禁止的）
・増加的	減少・削減的
・画一性	個性
・集団・規模	個別
・縦型命令系統	グループによる横の連携
・農業改良普及	生活改良普及
・家・男性	個人・女性

（補論）ラテンアメリカとアジアーIDB(米州開発銀行)地方（農村）における貧困ワークショップに参加して

ラテンアメリカ	アジア
・停滞・失業	成長・雇用
・分裂・分解	統合
・農業の低落	農業の増進
・農業および農村の断絶・切断	農業および農村からの脱却・脱出（連続性の保持）
・政府・政策の不信	政府・政策への信頼
・GO/NGO/LG 間の切断・分散・不連続性・不安定性	GO/NGO/LG 間の連携・安定性
・開発の現場	開発の現場　　開発の研究の場（アメリカ等）

(コメント)

（佐藤）生改の歴史をたどり、その端緒を求めている。このタテにみる見方と、戦後の生改運動を広くヨコに広げてみる見方とが、補完されると良い。現在、「やまびこ学校」に注目している。

農改：男性＝生改：女性という図式は、生改を女性のエンパワーメントの面からしか捉えなくなる恐れがあり、ここに JICA の過去 10 年余りの生改プロの限界があると考えている。

「第 2 報告」

「生活改善運動と主体形成－七郷一色婦人会の運動を中心にして」（吉田豊『経済開発と生活改善－幸せのなかに生きる－』所収、つくば書房、1992 年）

宗像　朗

（１）内容の要約

１．はじめに

地域の経済開発において「参加型開発」と「女性の参加」が 1990 年代の開発政策の重要な課題になっている。
経済発展の主体形成を 1950 年代の日本の農山村（愛知県八名郡七郷一色村）で展開された生活改善運動を具体的な事例として検討する。山村における女性の主体形成を再構築し、地域社会の開発のあり方を検討する。

論点・疑問点
「参加型開発」「女性の参加」と「主体形成」の関係
主体形成とは何か？
新しいリーダー＝経済発展の主体なのか
加納啓良『東南アジアの農村発展の主体と組織：近代日本との比較から』アジア経済研究所、1998

七郷一色という村
七つの集落と一色地区（バスの終点）からなる。現在は、愛知県南設楽郡鳳来町の一部。
愛知県と静岡県の県境。豊橋から飯田線で１時間の三河大野駅から 10ｋｍ程度の山間地。
昭和 28 年（1953 年）には 97 戸。明治 9 年（1876 年）の 80 戸からほぼ安定的に推移。
主な生業は、田畑と山の仕事。主婦は冬期には燃料作り。
家は傾斜の南側斜面に建てられることが多く、その山側（ボタ）に位置することが多い台所は日当たり、風通しが悪く、非衛生的。

過疎のなかの七郷一色（現地調査から）
＜見たもの・聞いたこと＞
タイル作りの台所。三和式のタイルカマド、明かり取り、整理棚、タイル張りの風呂と便所（請井みさ、善一宅）
タイルカマド、講習会の思い出（請井キノ）
カマド（請井ます江）

＜感じたこと＞
「一色婦人会の活動を担ってきた人たちの中には、40 年後の今も生活の向上と人生を楽しむという心が生きていることを感じた。たしかに、過疎化の進行によって、他の山村と同様に村は静かになっており、田畑や山林の維持も困難になっている。しかも、「あきらめ」を超えて「よりよく」を描いた自主的な生活改善の心は、次の世代に引き継がれたとはいえないようだ。しかし、戦後の時期に一つの世代が部落の歴史を変え、時代を作ったこと

を確かな手ごたえとして感じ取ることができた。」

戦前の生活改善運動―東三河を中心に
（七郷一色村での戦後の生活改善運動に至る歴史的な背景を述べている）

（１）全国の状況
1932 年（昭和７年)、農村経済更生運動。「隣保共助の精神を活用し（略）産業及び経済の計画的組織的刷新を図る…」という精神主義に基づく「自力更生」運動。「指定村」では、百円の補助金を得て、村長を中心とする経済更正計画委員会による計画策定を行なった。1936 年（昭和 11 年）からは優良村である「特別指定村」には１万円の補助金が出た。

（２）東三河の状況
1920 年代の繭価格の暴落による昭和恐慌。農村経済更生運動では、養蚕依存から多角化の道が探られた。但し、全体的な資金不足。農村経済更生運動のねらいは、農村不況の原因をただし、過去の欠点を改め、農村の特質と伝統的な美風をふるいおこすことにあった。そのため、徹底的に生産計画を立て、消費経済に極端な節約を加えた。その結果、購買力の不振と生産品の値下がりが起こった。
↓
戦時色も強まり、統制経済へ。産業組合、米穀統制、処女会、婦人会　→　国防婦人会

戦前戦中の「上からの官主導の生活改善」の導入

1932 国防婦人会
1937 全戸の婦人を国防婦人会へという運動（後の大日本婦人会へ）
一色婦人会が創立（請井雪子が会長)。
1945 一色婦人会は敗戦とともに解散するが、戦後すぐに再発足。

戦争によって農村女性が家の外に出ざるを得なくなり、また婦人会等のネットワークが出来上がった。戦争による山村の文明開化。

（３）生活改善運動と報徳思想
農漁山村の生活改善運動の思想的な背景には、東海道地域に大きな影響を与えた二宮尊徳の「報徳」思想がある。二宮尊徳は、農民の自立の方向を求めた実践的な指導者像であった。彼は、人の力では動かしえない「天道」に対して、人の勤労や知恵で自然の条件を利

用・改善する「人道」を説く。「人道」をまっとうするためには「分度」と「推譲」が求められる。この自分の経済力に応じた合理的な生活設計を立てる「分度」という考えが、生活改善につながっている。「報徳会とは 30 戸位の家が会員で、回り番で宿をして二宮先生の教えを唱えたり、会長さんのお話を聞いたり…」　→　報徳会＝勉強会

分度（ぶんど）：（分限度合の意）二宮尊徳の創始した報徳仕法で、自己の社会的・経済的実力を知り、それに応じて生活の限度を決めること。
推譲（すいじょう）：人を推薦して自らは譲ること。

一色婦人会の生活改善運動
（１）戦後の出発（1945 年から 50 年まで）
1946 年 一月に一色婦人会の再建。請井雪子が会長。
物不足の中の工夫。より豊かな食生活＝家庭生活を作ろうという取り組み。
「パン食の研究」「豆腐作り」「コンニャク作り」「石鹸作り」「クリーム作り」
1949 年 3 月に総会で料理講習会の実施による食生活改善を婦人会の決定とした。
東京に卒業旅行で出かけた一色の中学生が、「割り箸」「コロッケ」等を知らなかったことがきっかけに。栄養バランスと常識。
第 1 回：新城保健所の栄養士による「ばっかり食」の問題に関する講習。
第 2 回：栄養士が作った献立表に沿って料理を作る実習
結局、1949 年は新城保健所の栄養士によって３回実施
講習会のあと、主任、副主任、記録、会計等の次回の役割が会長の指導もあって決められていった。(Cognitive form から Structural form へ)

1950 年 新城高校の家庭科の先生を中心に２回実施。
農協厚生連からも２回。
その後、中村とめ子栄養士は 15 回も村を訪れた。
この時期まで普及員はまだ村に来ていない。
料理講習会は、老人達を中心に支持され、家庭の中で市民権を得ていった。
農業改良普及員が七郷村に常駐するようになり、部落巡回指導が始まった。
11 月　保健衛生の取り組みとして青年団を中心に、回虫の駆除・鼠退治が行われた。

雪子は、婦人会活動のなかに「頭を働かせる」活動が必要と考え、一色婦人会の活動の中に教養を高める一つの方法として本（雑誌など）の回覧を行った。

また、雪子は会合の度に「みんなが幸せになれる事を考えよう」と呼びかけた。
七郷一色小学校の先生に婦人会で子供の様子を話して貰った。
七郷一色小学校の先生と協力した母子のバス旅行を実施。他との交流。
年２回のバス旅行によって、子供の世界が広がり、また明るくなった。
ただし、村の中には、このような活動を生意気、道楽、暇つぶしと批判するものもあったが、先生と子供の支持を得て継続できた。

（２）婦人会活動の目標（生活改善）の獲得（1951 年から）
1951 年　　昭和 26 年３月の婦人会総会から一色婦人会は組織的な生活改善運動を開始した。このきっかけは同年２月の生活改善八樂地区大会に参加して他村の活動に刺激を受けたこと。婦人会による調査の結果、七郷一色では 93%（88 戸中 64 戸）が不衛生な台所で生活していることが明らかになった。（問題・課題の特定）

雪子の小学校校長への働きかけの結果、村の生活改善への村の男性の理解を得るため、小学校で村の男性を対象とした社会学級が開催されるようになった。

（３）改善運動の草創期の困難（広島県の山村の場合）
昭和 25－28 年（1953 年）啓蒙期―煙たいカマドの改善から
昭和 29－33 年（1958 年）実践活動初期（料理講習会ブーム）
昭和 34－41 年（1966 年）農業近代化促進期（要望課題中心活動）
昭和 42－45 年（1970 年）選択的拡大期（健康管理活動）
昭和 45－現在山地育成活動期（生活全般の見直し）
（『日本の農業―明日へのあゆみ』、「ある生活改良普及員の記録」から）

1950－53（昭和 25－28）年当時、生活改善運動に対する部落の人々の反応は、「補助金もくれないのに実験部落になることはない」「今までモデル村だと言ってさんざん改善されられたから、もうこれ以上することはない」「視察者が多くて困る」「もう何もしたくない」等、一定の「物の改善」はされても、生活・地域改善の主体が育っていない。これに対し、七郷一色ではそうした困難を女性達が主体的に克服して生活改善を前進されている。

（４）成長する女性達（1951 年の出発の記録から）

昭和 26 年 3 月の新年度の事業計画を討議する総会で、女性達が自ら考えて自然に台所改

善が決められた。「わたくしたちの生活が暗いのも、わたくしたちの顔がヘンなのも、みんな台所が暗いから」

この頃には、それまでの婦人会の活動を通じて一色婦人会の会員は、記録係りがきっちり記録を取るといった集団の中でのそれぞれの役割を自覚し、責務を果たすといった社会性を獲得していた。

この社会性の確立に裏打ちされた活動実践の積み重ねから、上のように雪子の「私達の生活が暗いのは台所が暗く、生活が惨めなのは考える時間がないからで、生活が進歩しないのは封建思想に縛られているからである」という考えを自らの問題として会員が受け入れる下地ができていた。

（５）台所改善の進展

1951 年 3 月。一色婦人会の定期総会で台所改善が新年度の事業計画として決議された。
９名を委員として選んだ。

パンフレットによる改良カマドの利点の宣伝。講習会。
一色小学校の校長が生活改善を社会科の授業に取り入れ、夜間の社会学級を開いて新生活の考え方を啓蒙した。（学校教育、成人教育、識字クラスとの関連）

11，12 月。夫婦で先進地域（新城市千郷村・額田郡幸田村）を視察。

1952 年 １月。会員６名が「三和式カマド」を導入。
２ヶ月間経過を見ると、薪の量は３分の１、明るく衛生的、家事時間の短縮等のメリットが明らかになった。

２月。第３回生活改善八楽地区大会で、婦人会で考案した道具（調理台、鍋ふたかけ、包丁かけ等）の展示と台所改善の成果発表がなされ、共に１位となって注目を集めた。

３月。上のような調査、研究、視察、試験的な導入、試験結果の分析を経て、具体的な台所改善の目標と行動計画が打ち立てられた。

資金は、外部の資金が使えなかったので、会員の兎飼育による「兎貯金」を始めた。また、

薪運びを行った。これに対し、農協も無利子融資による支援を行った。改善の前進は目覚しかった。1953 年にはかまどの改善率は 69%、明かり窓の改善率は 82%に上った。

1953 年 ３月。農林省主催第１回農家生活改善発表全国大会の愛知県代表。

1953 年末　読売新聞主催、第３回新生活モデル町村で総理大臣賞受賞。

1954 年～　　その後、全国からの視察、見学者を受け入れる。視察受け入れによって問題が生じることもあったが、外部からの風を積極的に受け入れて、一色の婦人達の意識はさらに高まった。「生活改善見学の方々へ」という外に向けたルールも作成している。

一色村での生活改善運動では次の点が留意された。

１）改善の最も必要な中産層以下を主目的にする
２）実施に当たっては個々の家庭の実状を重視し、形式的な統一的標準化を避ける
３）資金計画については最も貧しい家庭への配慮を十分に
４）台所改善は[婦人の手で、婦人の力で]をモットーとする
５）会員全員がお互いに助け合い、落伍者の出ないように
６）婦人会運営の民主化を図り、全員が責任と仕事を分かち合う
７）夫をはじめ家庭内の理解をたかめ、全員の協調協力を得るように努める
８）部落内・村内他における各種機関・団体の協力を求める

生活改善と主体形成
一色婦人会の請井雪子がめざしたのは、生活の合理的な改善だけではなく、封建性の抑圧からの女性の開放であり、地域社会と家庭の改善であった。その点で、一色村の生活改善運動は、台所改善で終わってしまった他地域の運動とは違っている。
（１）専門家による一色村の生活改善運動の評価（家の光協会、１９５６年）
「一色部落では、極めて限られた領域においてではあるが、さらに運動の内包発展の様相が見受けられる。それは山村特有の古い殻の中で、ただ一個の忠実な働き手としてしか評価されなかった婦人達の発言力が、最近かなり高まってきたことに現れている。このような発展は、台所改善運動の過程で男子達の抵抗や傍観を克服し、老人達に合理的な生活の考え方を納得させるなど、一方では部落の問題として、他方では家庭内の課題として解決を推進した結果である。一色部落に隣接し、その刺激もあって戸別農家が自主的に台所改善を全面的に実施した巣山部落では、家相・方角などの迷信が未だに根強く支配し、婦人

の発言力も極めて弱く、台所改善ももっぱら男子の発意で一方的に実施されているのと対照的である。」
↓
台所改善の意義。一色部落では台所改善は、農村生活、女性のあり方の象徴であった。この問題を自分達で解決することによって自信を持ち、次のステップに進む契機になった。一方、巣山部落では解決されるべき物理的な課題として対処されたため、次のステップに繋がらなかった。
一色では、自分達の経験を通じて、やる気にさえなれば経済問題その他の障害は何とか打開できるとの確信を持っている。また、改善の進め方についても、みんなが力を合わせてやればやっていけるという新しい自負心を植え付けられている。これは、自分達の台所改善が、組織的運動として推進されたからこそ網羅的にやれたという自負心に基づく。
村有数の山林地主婦人という背景を持つ請井雪子という偉大なリーダーの存在。

（２）一色部落の女性による自己評価
婦人会活動に参加するようになって時間をより有効に使い計画性を持つようになった。
二度とない人生を有効に使って楽しい暮らしを…という勇気が湧いてきた。
台所が合理的になって…作業も計画して働くようになった。家族の絆が強まった。
目覚めるように明るくなりました。希望が湧いてきました。
（３）他村からの見学者による一色部落の評価（岐阜県白鳥村の田中さん）
（４）一色小学校校長による評価
婦人会活動によって婦人達は工夫する生活を身に付けた。自覚によって、他人を思いやることができるようになった。
母親からの良い感化によって、子供達も封建的気風に発する利己主義を克服し、協調、自己犠牲、奉仕の精神を身につけた。

まとめ：七郷一色村の生活改善運動、婦人会活動の意義に関する筆者の総括
かまどから明かり窓、流し台、台所から風呂場、井戸等へと生活の合理的な改善という点では、一色婦人の取り組みは引き続き進展していった。また、食生活の改善でも家庭菜園での野菜の自給やたんぱく質、脂肪の摂取量の増加などに意を尽くしている。また、文化娯楽活動にも力を入れている。（活動が継続的で広がりを持っている）
雪子の言う「第二段階」すなわち経営の拡大・安定という生産の面では成功しなかった。（農村開発での所得向上のあり方。結構難しいことに挑戦しているのかも）
昭和 30 年代の経済成長に伴って農村生活が商品経済化するにしたがって、出稼ぎが拡大し、生活改善運動は停滞していく。（東南アジアにおける経済成長、都市化と農村開発との

関連）
一色婦人会の生活改善運動は、他地域と比べてかなり長期にわたって継続された。これは、組織的な取り組みの経験が定着していたからであり、自主的・自覚的な取り組みとして展開されていたからである。
請井雪子というリーダーの下、単なる生活の利便の追及ではなく、常に女性の解放と地域、家庭の改革と言う視点を持って生活改善に取り組んだ。
「生活者の主体形成→生産者としての自覚→地域自治の主権者としての意識形成」の萌芽が見られる。
「カマド改善は手段であり目的ではない」ということを暗黙のうちに理解していた。
（多くの農村開発プロジェクトで、「カマド」的なものに拘りすぎているのではないか）

考察する点
セマウル、サルボダヤとの比較。
今まで見てきた事例との共通点と相違点は何か？
途上国の農村開発、生活改善と共通する部分はどこか？

（２）コメント
（宗像）この論文の特徴は、生改の運動を村人の側から捉えた記録であること、長期的な取り組みとして生改が行われてきたこと、女性のリーダーの存在とその大きさなどが窺われる。
　ムラ、集落、部落、行政村などのタームを整理しておく必要がある。また、著者は生改運動が婦人の主体形成に大きな役割を果たして、この主体形成によって一色婦人会が地域開発事業を継続的に実施するとこができたとしているが、この場合の主体及び主体形成とは何か？主体形成＝地域開発と捉えていいのか？　開発プロジェクトで、自助努力や、自力更正、オーナーシップなどが強調されるようになっているが、主体の形成とはこれらにつながるものなのか？等についてより深く考えていきたい。また、「かまど改善は手段であり目的ではない」という指摘は、多くの農村開発プロジェクトでどうし
ても「かまど」的なものを探してしまっている現実に対する興味深い示唆でもある。
（矢敷）台所改善が取り上げられている。山本松代によれば、アメリカの生改の端緒は取れすぎて余ったトマトの加工であった。日本場合のトマトに相当するものとして、カマドを取り上げたという。（手段が、いつのまにか目的になって行ったが）
（内田）戦後日本の生改は、現在の途上国をめぐる環境と違いが大きすぎるので、参考にするには戦前に遡る必要があるという議論がある。

（佐藤）戦前の先進国から戦後に再び途上国に戻った瞬間の日本であることは確かだが、「やまびこ学校」を読むと、外からの価値観とそれに対する対応がみられ、途上国の構図として捉えられる。

「子どもに恥をかかせられません」（p.137）といったくだりに身のほどをわきまえた（分度）姿が感じられる。開発は、身のほどを超えることではないか。

学校、保健所などがヨコの連携をもって事業を行っている点も興味深い。リーダーは山林地主の娘であり、リーダーの発掘の可能性として示唆的である。（特定の社会階層に限定してリーダーを発掘する必要はない。）

ケニアの改良かまどの普及は、燃料問題よりも、生活利便性（使い勝手のよさ）が効いている。

（小笠原）姓が２種しかなく、緊密な社会関係で結ばれた村だから、それだけ結束力も強く、事業が成功裡に行われたのではないか。

（水野）リーダーの請井雪子自身が、生改普及員機能を果たしていた。

（佐藤）今回の一色村の事例もそうであるが、生活改善は必ずしも生活改良普及員等による外部者の働きかけによって行われたわけではない。従来の研究は農林水産省等の働きかけを行った側からの資料を元に生活改善を見ることが多かったので、外部からの働きかけに呼応した事例が中心になり、また外部からの働きかけの役割が強調される傾向が強かったと思う。この意味から、今回の一色婦人会の例や、昨年来、生改研究会が行ってきた住民主導によって行われた生活改善運動の発掘、住民主体による生活改善運動のあり方と外部からの働きかけの関係を相対的に捉える努力の意義は大きいのではないかと思う。これまでは農林省関係の資料から手繰ってきたので、普及員や、生改グループの組織化云々ということにいつもなっていたが、そこには資料のバイアスがある。新生活運動、キッチンカー、生改、更正運動など広く捉える姿勢が求められる。

以上